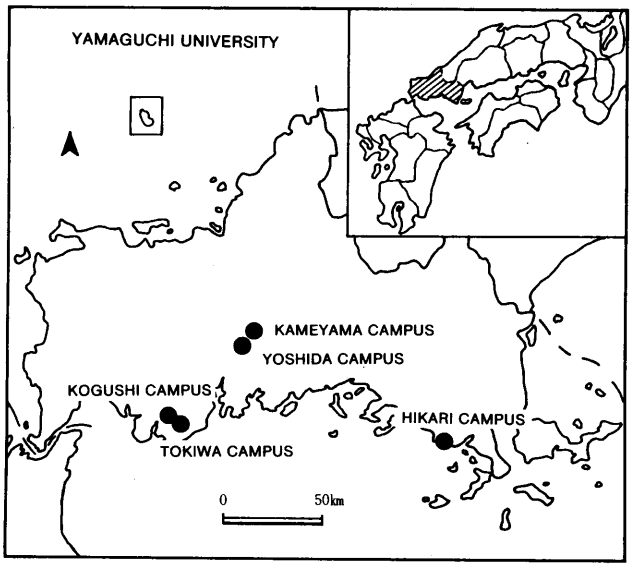
山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ

1988

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ



1988

山口大学埋蔵文化財資料館

発刊にあたって

山口大学構内遺跡調査研究年報は昭和57年度以来すでに第Ⅰ～Ⅵ集が発刊されています。今回の第Ⅶ集は昭和62年度に実施された発掘調査の報告書であります。

研究年報（Ⅰ～Ⅶ）の吉田遺跡に関する記述をみますと、その内容は科学的であって、推測は比較的少ないことがわかります。私たちはこの報告によって縄文後期の先史時代から近世江戸時代にかけて、この地域に居住した人々の生活様態を、断片的とはいえ、或程度うかがうことができます。慾をいえば、こういった各時代の文化の担い手であった人びとの人骨の出土があればいいのですが、それは今のところ無理というものでしょう。とはいえ、この研究報告はこの地域で生活していたと想定される後期縄文時代人が日本人の起源とどうかかわっていくか、これが弥生時代の住人とどうつながっていくのかというような考古学上、あるいは人類学上の重要な課題の解決にいささかの手掛かりを与えることになりましょう。このことはやがて日本民族の源流という古くて新しい研究課題の解明にも役立つことになると思われます。

また、本年報にみる如く、昭和62年度の調査でも小串地区からは旧石器時代の遺物が出土しました。これは上流の宇部台地から流れてきたもののようですが、それにしても考古学上興味のもたれるところであります。

この稿を書くに当たって机上に第Ⅰ～Ⅵ集を並べてみますと、その学問的重厚さに改めて心を打たれます。これらの年報は山口大学の吉田、小串、常盤地区など全構内の発掘調査に当られた研究者及びその協力者の努力の成果の集積であります。第Ⅶ集の刊行に当たりこれらの方々の労苦に深く敬意を表します。本研究年報は今後も続刊される予定であります。これが今後本邦の関係学界の進歩発展に大きく貢献することを祈って止みません。

平成元年３月

山口大学

学長　粟屋和彦

序　　文

埋蔵文化財資料館による発掘調査の年報Ⅶが発刊になりました。本報は昭和62年度調査分で、吉田構内調査10件（事前２件、試掘１件、立会７件)、小串構内調査２件（試掘１件、立会１件)、その他亀山、光構内調査（各々立会１件）計14件の調査概要である。

吉田構内の教育学部附属教育実践研究指導センター新営予定地の発掘調査では、吉田遺跡保存地区に近接しているが削平が著しいためか、予想された遺構は殆どみられない。しかし、縄文時代晩期の石器類包含層を確認することができた。これは山口盆地内で初めての発見であることがわかった。それに出土石器は姫島産の黒曜石製であり、その製法の手がかりも判明し、極めて重要な資料となった。またこの層の下位にみられた河川跡では、自然木、種子類がみられ、当時の植生が推定され興味ある知見となった。

また教養部複合棟新営予定地の発掘調査では、縄文、弥生時代から古墳時代さらに江戸時代に至るまでの遺構があり、集落の規模、その展開課程を解明する上で貴重な資料である。これらからわかることは竪穴住居が吉田遺跡保存地区と同時代のものであり、当時この吉田構内南西部から中央部にかけ大規模な集落が長期間存在したことを物語っている。

なお立会調査では農学部附属農場近くで土壙を検出し、土質の化学分析により、リン酸カルシュームを多量に含むことが明らかとなり、土壙墓の可能性が示唆された。

一方小串構内調査では新営病棟の北側、南側で土質が異なっているが、いずれも削平が著明で新たに遺構を発見することにはならなかったものの、南側トレンチでは旧石器時代遺物のみを含む遺物包含層が発見されたことは、大きな収穫であった。

ほかに光中学校グラウンドでは遺物包含層は確認出来ないが、多くの土器が発見されている。

なお、昭和60･61年度に調査した吉田構内遺跡保存地区の報告は諸般の事情から次回にゆずりました。

平成元年３月

山口大学埋蔵文化財資料館
館長　黄　　基雄

例　　言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、昭和62年度に山口大学構内で実施した調査の報告書であり、第５章第１節７は山口県教育委員会の調査を補助したものである。
2. 現地における調査・研究は資料館員河村吉行・木村元浩が担当した。また、出土遺物の整理は主に河村･木村が行ない、同館員杉原和恵が援助した。
3. 調査・研究における事務一般は事務局庶務課庶務係が統括し、実施面においては各関係部局の事務部があたった。
4. 遺構の実測は、河村・木村および作業員が行ない、遺物の実測は、第２・４章を木村、第３・５章を河村が行なった。

   製図は、第２・４章を木村、第３・５章を河村、付篇Ⅱを杉原が行なった。本文の執筆は、第２・４章を木村、第３・５章を河村、付篇Ⅱを杉原が分担して行なった。
5. 現地における写真撮影は主に河村が行ない、遺物写真の撮影は主に木村が行なった。
6. 下記の各氏に本書のための分析・鑑定を依頼し、御教示・玉稿を得た。記して感謝の意を表したい。

石器の石質	山口大学理学部教授	松本　徨夫
植物遺体、木製品の樹種	山口大学農学部講師	宇都宮　宏
土壌中の花粉分析	九州大学理学部地質学教室	野井　英明
土壌中のリン・カルシウム分折	山口県農業試験場	平田　俊昭

   なお、炭化物の^{14}C年代測定は広島大学文学部中田高、川越哲志両氏に依頼中である。測定結果は「山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ」に掲載を予定している。
7. 本書の編集は館員が協力して行なった。
8. 調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物とあわせ埋蔵文化財資料館が保管している。広く活用されることを希望したい。
9. 調査組織は次のとおりである（昭和62・63年度）

調査主体	埋蔵文化財資料館	館　長	黄　基雄	〔昭和62年４月３日～〕
		館　員	河村　吉行	
		〃	木村　元浩	
		〃	杉原　和恵	
事務局		事務局長	大谷　巌	〔～昭和63年３月30日〕
		〃	有地　成光	〔昭和63年４月１日～〕

本部庶務部		部　長	田中　武雄
	庶務課	課　長	竹下　寛美
		課長補佐	大多和泰則
	庶務係	係　長	野村　宗成
			本田　正春
			岩佐　厚子
			深町　洋二〔～昭和63年３月30日〕
			三浦　勝弘〔昭和63年４月１日～〕
			中川イクミ〔～昭和63年３月30日〕
			山下　京子〔昭和63年５月20日～〕

10.　調査・研究にあたって下記の方々の多大な御協力と援助を受けた（官職は昭和62年度）。

山口大学事務局庶務部　人事課長　村上昭生、同課長補佐　増谷　泰、同係長　有吉　明、同係　松本胤明、池本誠也

経理部　部長　何木　亘、主計課長　伊藤良昭、同課長補佐　本間　健、経理課長　丹澤　満、同課長補佐　廣石輝男、総務係長　田中善人、監査係長　石崎啓介、管財係長　小林和生、用度係長　野沢章三、用度主任　谷本信之、管理主任　正司三喜男、同係　浜田千春

施設部　部長　笠井宏悦、企画課長　比嘉真義、建築課長　竹田忠文、同課長補佐　萩尾次男、設備課長　久芳　稔、総務係長　松永次郎、総務主任　三村文雄、第一工営係長　藤井　幸、同係　小川賀津夫、澤谷弘美、第二工営係長　稲垣實造、同係　河田徹也、電気係長　吉永峯生、同係　松田清司、機械係長　鈴木輝美、同係　鹿嶋正則、板垣健一

学生部　部長　青木秀夫、次長　中山昭成、学生課長　吉村　學、同課長補佐　嶋本拓司、学生係長　佐藤正治、学生主任　五嶋幸生、同係　角井隆志、金重達也

教育学部　事務長　西澤喜昭、同補佐　柳　等、庶務係長　松本正史、三浦勝弘、会計係長　森本茂雄、附属幼稚園長　川口政宏、同副園長　志熊淑子　附属光中学校長　徳冨正義、同副校長　水上義昭、附属光学校係長　長谷知之

経済学部　事務長　原田晃威、庶務係長　廣政　登、会計係長　中島岩弘

農学部　事務長　原田政明、会計係長　木村賢治、附属農場事務長　宇山隆造、同係長　山本直行、同係　寺山幸夫、尾崎恵雄

教養部　事務長　梅原儀助、庶務係長　野中章彦、会計係長　伊藤敏穂、同係　三原秀脇、櫻井健二

医学部　事務部長　宮崎敬一、同次長　宮脇照男、総務課長　坂井友造、
同課長補佐　竹腰直道、管理課長　井上隆次、同課長補佐　河野繁之、
西野雅博、庶務係長　原　和男、管理係長　末次敏男、
経理係長　野澤章三、施設係長　三浦幸一、設備係長　山本安雄、
環境係長　藤井良雄

人文学部考古学研究室

山口県教育委員会

山口シルバー人材センター

宇部市シルバー人材センター

末広産業

作業員

岡屋知子、西見利子、峯重つや子、宮家静代、中司郁子、重富惇子、石川好江、光永スミ江、花田智都子、東亀代、金子朝江、胡美和子、杉山玲子、秋枝幸子、阿部恭子、須子光子、芳西恒忠、長田三男、木村実、近江喜助、小山博行、市川二郎、山根萬年、河上正弘、奥英子、岡村サ'一、山崎兵馬、有田久義、河村忠悟、原田喜一、佐々木誠、前好国、谷口喜久男、佐上哲郎、安藤義雄、田村時夫、財満孝典、三井広孝、小林シメ子、谷川アサヲ、福隈愛子、縄田美代子、中村シズエ

凡　　例

1．吉田構内における調査地区および層位、遺構の位置は国土座標を基準として北から南へ１～24、西から東へＡ～Ｚの番号を付して50ｍ方眼に区画した構内地区割のＡ－24区南西隅を起点（構内座標ｘ＝０，ｙ＝０）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値（Ｘ，Ｙ）と構内座標値（ｘ，ｙ）とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 206{,}000$$

$$y = Y + 64{,}750$$

2．各遺構は下記の記号で表記することがある。

竪穴住居跡……ＳＢ，掘立柱建物跡……Ｔ，土壙……ＳＫ，井戸……DW，溝……ＳＤ，河川跡……ＮＲ，埋甕土壙……ＵＧ，谷……Ｖ，暗渠……Ａ

3．本書に使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他構内では磁北を示す。

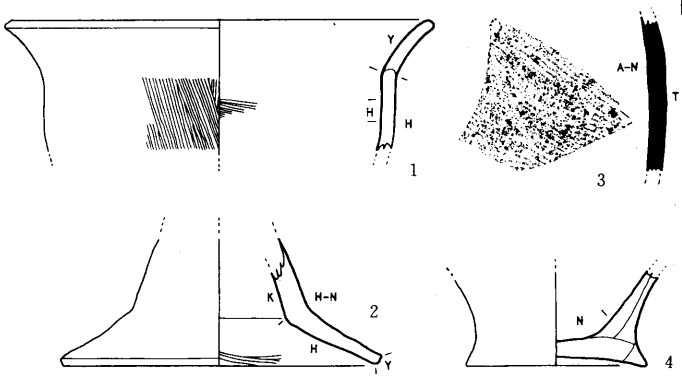
4．標高数値は海抜標高を示す。

5．遺物・土層の色調は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1976) に準拠した。

6．土器の実測図は下記のように器種分類した。

断面黒ぬり……須恵器、須恵質土器，断面白ぬり……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、瓦，断面網目……陶磁器

7．土器の器面調整については、断面周囲に調整の境界を記し、境界間に下記の略記号により明示した。ただし、風化等による不明部分は無記入とした。



【土器実測図の調整凡例】

〔種類〕

Ｎ……ナデ（Ｎｈヘラナデ）、
Ｙ……横ナデ（Ｙｈヘラ横ナデ）
Ｈ……刷毛目、Ｍ……ミガキ、
Ｋ……ケズリ、Ｔ……タタキ、
Ａ……タタキ当て具痕、Ｃ……カキ目、
Ｊ……条痕、Ｕ……施釉、Ｘ……条線、
HK……底部ヘラ切り、IK……底部糸切り
Ｉ……板目圧痕

〔先後関係〕

Ｈ-Ｎ……刷毛目のちナデ

１：口縁部内外面横ナデ。胴部は外面縦刷毛目、内面は横刷毛目が一部にみられるが調整不明。

２：外面刷毛目のちナデ。裾端部は横ナデする。内面は、脚柱部ヘラケズリ、裾部横刷毛目。

３：外面平行タタキ、内面はのち当て具痕をナデ消す。

４：底部内面のみナデが観察できるが、あとは内外面とも調整不明。

本　文　目　次

第１章　昭和62年度山口大学構内遺跡調査の概要……（河村・木村）… 1

第２章　吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査…（木村）

1　調査の経過…… 5
2　層位…… 6
3　遺構・遺物…… 9
4　小結…… 17

第３章　吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査……（河村）

1　調査の経過…… 23
2　層位…… 24
3　遺構・遺物…… 27
4　小結…… 60

第４章　小串構内医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査……（木村）

1　調査区周辺の地形…… 67
2　調査に至る経緯と調査方法…… 67
3　層位…… 69
4　遺構・遺物…… 73
5　小結…… 74

第５章　昭和62年度山口大学構内の立会調査……（河村）

第１節　吉田構内の立会調査

1　教養部複合棟新営に伴う立会調査…… 85
2　国際交流会館新営に伴う立会調査…… 86
3　教育学部附属養護学校自転車置場移設に伴う立会調査…… 87
4　農学部附属農場Ｅ７圃場排水管埋設及びＥ６圃場進入路拡幅に伴う立会調査…… 88

5　農学部植栽に伴う立会調査…… 91
6　経済学部集水桝取設に伴う立会調査…… 92
7　九田川河川改修に伴う立会調査…… 93
第2節　小串構内の立会調査
医学部附属病院東駐車場改修に伴う立会調査…… 94
第3節　亀山構内の立会調査
教育学部附属幼稚園遊戯室拡張に伴う立会調査…… 95
第4節　光構内の立会調査
教育学部附属光中学校グラウンド防球ネット設置に伴う立会調査…… 96

付篇

付篇　I

吉田遺跡の花粉分析……野井英明…… 97
山口大学構内出土の植物遺体……宇都宮宏……103

付篇　II

墨で文字を書きこんだうつわ　―既刊の報告　補訂―……杉原和恵……107

山口大学構内遺跡調査要項
山口大学埋蔵文化財資料館規則……124
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則……125
山口大学構内の主な調査……127

Summary……133

図　版　目　次

〈吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査〉　本文対応頁

ＰＬ．１　吉田構内全景（北西から）

ＰＬ．２　(1)　調査区全景（東から）

(2)　１グリッド北壁土層断面（南から）…… 6～8

(3)　４グリッド西壁土層断面（東から）…… 6～8

ＰＬ．３　(1)　２グリッド南壁土層断面（北から）…… 6～8

(2)　３グリッド南壁土層断面（北から）…… 6～8

(3)　１グリッド遺物出土状況全景（東から）…… 12～14

(4)　１グリッド遺物出土状況（南から）…… 12～14

ＰＬ．４　(1)　１グリッド植物遺体出土状況（西から）…… 12･13

(2)　１グリッド植物遺体出土状況（西から）…… 12･13

(3)　１グリッド植物遺体出土状況（西から）…… 12･13

(4)　調査風景

ＰＬ．５　(1)　出土遺物…… 11･13～17

(2)　接合資料…… 14

〈吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査〉

ＰＬ．６　(1)　調査区西半部（北から）…… 27～64

(2)　調査区東半部（北から）…… 27～64

ＰＬ．７　(1)　調査区北端部（北から）…… 27～64

(2)　Ａトレンチ河川跡（西から）…… 29

ＰＬ．８　(1)　Ａ－Ｂ壁土層断面（東から）…… 24～27

(2)　Ｃ－Ｄ壁土層断面（北から）…… 24～27

ＰＬ．９　(1)　落し穴検出状況（西から）…… 27～29

(2)　落し穴全景（西から）…… 27～29

ＰＬ．10　(1)　Ａトレンチ遺物出土状況（東から）…… 34～36

(2)　Ａトレンチ遺物出土状況（東から）…… 34～36

ＰＬ．11　(1)　Ｂトレンチ全景（北から）…… 34～36

(2)　Ｃトレンチ全景（西から）…… 34～36

(3) Aトレンチ石斧出土状況（北から） …… 34～36
(4) 包含層石匙出土状況 …… 34～36
PL. 12 (1) 第1～3号竪穴住居跡検出状況（北西から） …… 36・39・40
(2) 第1・3号竪穴住居跡（西から） …… 36・39・40
PL. 13 (1) 第4号竪穴住居跡検出状況（北から） …… 40
(2) 第4号竪穴住居跡（西から） …… 40
PL. 14 (1) 第1号河川跡土層断面（東から） …… 40
(2) 第2号河川跡土層断面（北から） …… 43・44
(3) 第1号河川跡石斧出土状況（南西から） …… 40・43
(4) 第2号河川跡石鏃出土状況（南から） …… 44
PL. 15 (1) 第1号掘立柱建物跡（北から） …… 45
(2) 第2号掘立柱建物跡（西から） …… 45・46
PL. 16 (1) 第1号井戸（東から） …… 46
(2) 第2号井戸（東から） …… 48
PL. 17 (1) 第2号埋甕土壙（西から） …… 50・51
(2) 第3号埋甕土壙（西から） …… 51
PL. 18 出土遺物(1) …… 29～60
PL. 19 出土遺物(2) …… 29～60
PL. 20 出土遺物(3) …… 29～60
PL. 21 出土遺物(4) …… 29～60
PL. 22 出土遺物(5) …… 29～60
PL. 23 出土遺物(6) …… 29～60
PL. 24 出土遺物(7) …… 29～60
PL. 25 出土遺物(8) …… 29～60
〈小串構内医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査〉
PL. 26 小串構内全景（南西から）
PL. 27 (1) Aトレンチ全景（西から） …… 73
(2) Bトレンチ全景（東から） …… 74
PL. 28 (1) Aトレンチ中央全景（西から） …… 73
(2) Aトレンチ溝（東から） …… 73

(3) Aトレンチ北壁土層断面（南から） …… 69
(4) B̀トレンチ東壁土層断面（西から） …… 69～70
PL. 29 (1) Bトレンチ遺物出土状況全景（南から） …… 74～79
(2) Bトレンチ遺物出土状況（南から） …… 74～79
(3) Bトレンチ遺物出土状況（東から） …… 74～79
PL. 30 (1) 出土遺物（石器・表） …… 73～79
(2) 出土遺物（石器・裏） …… 73～79
PL. 31 (1) 出土遺物（石器） …… 73～79
(2) 出土遺物（土器） …… 73～79
(3) 出土遺物（サメの歯） …… 73～79
〈昭和62年度山口大学構内の立会調査〉
PL. 32 (1) 農学部附属農場E7圃場A地点土層断面（東から） …… 88
(2) 農学部附属農場E6圃場B地点土壙（西から） …… 88～90
(3) 出土遺物 …… 90

付篇Ⅱ

〈墨で文字を書きこんだうつわ〉
PL. 33 (1) 吉田遺跡出土の墨書土器「冨」 …… 110～113
(2) 平城京跡「冨」 …… 109・113
(3) 郡家今城遺跡「冨饒」 …… 113
(4) 谷内遺跡「冨」 …… 113
(5) 黒河尺目遺跡「大冨」 …… 113
PL. 34 (1) 周防国衙跡発見の墨書土器「国厨」 …… 113～115
(2) 周防鋳銭司跡発見の墨書土器 …… 113～115

挿　図　目　次

〈昭和62年度山口大学構内遺跡調査の概要〉
Fig. 1 山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図 …… 2

Fig. 2　山口大学小串・常盤両キャンパス位置図…… 3
Fig. 3　山口大学光キャンパス位置図…… 4
〈吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査〉
Fig. 4　調査区位置図 …… 5
Fig. 5　基本土層柱状図 …… 6
Fig. 6　土層断面図…… 7・8
Fig. 7　遺構配置・グリッド設定図 …… 9
Fig. 8　第1号土壙実測図 …… 10
Fig. 9　第2号土壙実測図 …… 10
Fig. 10　第3号土壙実測図 …… 11
Fig. 11　出土遺物の平面分布図（1グリッド） …… 12
Fig. 12　出土遺物の垂直分布図（1グリッド） …… 12
Fig. 13　出土遺物の平面分布図（2グリッド） …… 13
Fig. 14　出土遺物の垂直分布図（2グリッド） …… 13
Fig. 15　出土遺物実測図 …… 15・16
〈吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査〉
Fig. 16　調査区位置図 …… 23
Fig. 17　試掘調査トレンチ設定図 …… 24
Fig. 18　土層断面図…… 25・26
Fig. 19　トレンチ設定図 …… 27
Fig. 20　縄文時代の遺構配置図…… 28
Fig. 21　落し穴実測図 …… 29
Fig. 22　落し穴出土遺物実測図…… 29
Fig. 23　河川跡出土遺物実測図…… 30
Fig. 24　谷状遺構土層断面図…… 31
Fig. 25　谷状遺構出土遺物実測図 …… 32
Fig. 26　Aトレンチ河川跡・包含層遺物出土状況…… 33
Fig. 27　包含層出土遺物実測図（土器） …… 34
Fig. 28　包含層出土遺物実測図（石器） …… 35
Fig. 29　弥生時代以降の遺構配置図…… 37・38

Fig. 30　竪穴住居跡実測図…… 39
Fig. 31　第１・２号河川跡実測図…… 41
Fig. 32　第１・２号河川跡出土遺物実測図…… 42
Fig. 33　掘立柱建物跡実測図…… 44
Fig. 34　第１号井戸実測図…… 45
Fig. 35　第２号井戸実測図…… 46
Fig. 36　井戸出土遺物実測図（１・２－第１号井戸　３～６－第２号井戸）…… 47
Fig. 37　第１号井戸出土遺物実測図…… 48
Fig. 38　第２号井戸出土遺物実測図…… 49
Fig. 39　第２・３号埋甕土壙実測図…… 50
Fig. 40　第２・３号埋甕および出土遺物実測図…… 51
Fig. 41　溝・暗渠出土遺物実測図…… 53
Fig. 42　第４・５層およびその他の出土遺物実測図…… 55
Fig. 43　出土銭貨拓影（１－第２号井戸　２－第５号暗渠　３－第５層）…… 55
〈小串構内医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査〉
Fig. 44　病棟新営地位置図…… 67
Fig. 45　トレンチの位置と遺構分布図…… 68
Fig. 46　土層断面図…… 71・72
Fig. 47　Ａトレンチ第１・２号溝実測図…… 73
Fig. 48　Ａトレンチ旧丘陵の地形…… 74
Fig. 49　Ｂトレンチ石器群の出土状況（上・平面、下・垂直）…… 75
Fig. 50　出土遺物実測図(1)…… 77
Fig. 51　出土遺物実測図(2)…… 78
〈昭和62年度山口大学構内の立会調査〉
吉田構内の立会調査
Fig. 52　調査区位置図…… 85
Fig. 53　調査区位置図…… 86
Fig. 54　調査区位置図…… 87
Fig. 55　調査区位置図…… 88
Fig. 56　Ａ地点土層断面図…… 89

Fig. 57　B地点土壙実測図 …… 89
Fig. 58　A地点出土遺物実測図 …… 90
Fig. 59　調査区位置図 …… 91
Fig. 60　調査区位置図 …… 92
Fig. 61　調査区位置図 …… 93
小串構内の立会調査
Fig. 62　調査区位置図 …… 94
亀山構内の立会調査
Fig. 63　調査区位置図 …… 95
光構内の立会調査
Fig. 64　調査区位置図 …… 96
Fig. 65　出土遺物実測図 …… 96

付篇Ⅰ

〈吉田遺跡の花粉分析〉

Fig. 66　B壁セクションおよび試料採取層準 …… 100
Fig. 67　C壁セクションおよび試料採取層準 …… 100
Fig. 68　B壁から採取した試料の花粉ダイアグラム　1 …… 101
Fig. 69　B壁から採取した試料の花粉ダイアグラム　2 …… 101

付篇Ⅱ

〈墨で文字を書きこんだうつわ〉

Fig. 70　「冨」の須恵器　発見場所 …… 107
Fig. 71　さまざまな墨書文字（平城京） …… 109
Fig. 72　「冨」の須恵器実測図 …… 110
Fig. 73　吉田遺跡周辺の須恵器窯跡 …… 111
Fig. 74　律令時代の墨書土器が見つかった遺跡（山口県内） …… 114
Fig. 75　律令時代の墨書土器　実測図 …… 115
Fig. 76　大学会館周辺の地下の状況 …… 117

Fig. 77　山口大学吉田構内地区割および調査区位置図 …… 135・136

Fig. 78　山口大学小串構内調査区位置図……137・138
Fig. 79　山口大学常盤構内調査区位置図……139・140
Fig. 80　山口大学亀山構内（幼稚園・小学校部分）調査区位置図……141・142
Fig. 81　山口大学亀山構内（中学校部分）調査区位置図……143・144
Fig. 82　山口大学光構内調査区位置図……145・146

表　目　次

〈昭和62年度山口大学構内遺跡調査の概要〉
Tab. 1　昭和62年度山口大学構内遺跡調査一覧表…… 1
〈吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査〉
Tab. 2　出土遺物観察表 …… 20～22
〈吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査〉
Tab. 3　土壙一覧表…… 54
Tab. 4　出土遺物観察表 …… 56～59
〈小串構内医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査〉
Tab. 5　出土遺物観察表 …… 80～84
〈昭和62年度山口大学構内の立会調査〉
Tab. 6　A地点出土遺物観察表…… 90

付篇Ⅰ
〈吉田遺跡の花粉分析〉
Tab. 7　中国地方の晩氷期以降の植生変遷（三好，1983を一部改変）…… 99
〈山口大学構内出土の植物遺体〉
Tab. 8　山口大学構内出土の植物遺体……104・105

付篇Ⅱ
〈墨で文字を書きこんだうつわ〉
Tab. 9　律令時代の墨書土器一覧（山口県内）……115

Tab. 10　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員……126
Tab. 11　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員……126
Tab. 12　山口大学構内の主な調査一覧表……127～132

第１章　昭和62年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は山口・宇部・光の県内各市内に分散している。各構内には、縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての複合集落遺跡として著名な吉田構内をはじめとして、周知の遺跡が埋存している。山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各構内において現状変更を伴う諸工事に対し、埋蔵文化財保護の観点から調査・研究を行っている。すなわち、埋蔵文化財の調査を必要とする場合は、工事地域周辺における既往の調査結果や工事の内容、埋蔵文化財に対する影響の度合等を勘案し、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、立会、試掘、事前の三種の調査方法によって調査を実施している。

昭和62年度は事前調査２件、試掘調査２件、立会調査10件の計14件の調査を実施した。

Tab. 1　昭和62年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	調査面積 (m²)	調査期間	挿図番号
事前	教育学部附属教育実践研究指導センター新営	吉田構内	K－18	240	6月22日～8月11日	Fig. 77－91
	教養部複合棟新営	吉田構内	J・K-17・18	900	9月14日～12月12日	Fig. 77－94
試掘	教養部複合棟新営	吉田構内	J・K-17・18	35	7月21日～7月27日	Fig. 77－92
	医学部附属病院病棟新営	小串構内		104	1月19日 2月15日～3月4日	Fig. 78－16
立会	教養部複合棟新営	吉田構内	I・J－16	30	9月8日 2月24日 3月12・17日	Fig. 77－93
	国際交流会館新営	吉田構内	M-23 N-22・23	195	11月9日～11日 3月28日	Fig. 77－96
	教育学部附属養護学校自転車置場移設	吉田構内	B－21	1	11月20日	Fig. 77－97
	農学部附属農場E7圃場排水管埋設及びE6圃場進入路拡幅	吉田構内	L・N-12	45	12月14日 3月7日～9日	Fig. 77－98
	農学部植栽	吉田構内	N-17	3	3月17日	Fig. 77－99
	経済学部集水桝取設	吉田構内	K－20	0.5	3月20日	Fig. 77－100
	九田川改修	吉田構内	B・C-17	20	10月20日	Fig. 77－95
	医学部附属病院東駐車場改修	小串構内		6	9月7日	Fig. 78－15
	教育学部附属幼稚園遊戯室拡張	亀山構内		40	11月26日	Fig. 80－6
	教育学部附属光中学校グラウンド防球ネット設置	光構内	V-15・16	2	3月28日	Fig. 82－5

吉田構内の調査

事前調査２件、試掘調査１件、立会調査７件の計10件の調査を実施した。

教育学部附属教育実践研究指導センター新営予定地では、弥生時代から古墳時代にかけての土壙１基、柱穴、江戸時代の土壙２基、および近・現代の溝５条を検出した。これらは上部の削平も著しく、良好な残り方はしていない。調査区は遺跡保存地区に近接するが、検出した遺構は少なく、後世の攪乱よりは、本来の地形そのものに影響されていると考えられる。当調査では、縄文時代晩期の石器類の抽出に成功し、吉田構内において、また山口盆地内で初めて当期の包含層を確認した。これに伴って、水洗選別による微細遺物の有無を確認した結果、若干の砕片類が検出された。周辺地域での今後の調査に期待される。出土石器には姫島産黒曜石製のブランクなどがあり、現在、県内での報告例はなく、石器製作法を究明する手がかりとして、重要な資料となった。また、この包含層下位で検出された河川跡からは自然木・種子等の植物遺体が発見された。分析の結果、当期の植生が明らかとなり、環境復元の上で貴重な資料を提示することとなった。なお、攪乱層から黒曜石製の細石刃？が出土したが、これまで細石器文化期遺物の発見はなく、形状からは積極的に肯定できるものではない。

Fig. 1　山口大学吉田・亀山キャンバス位置図

教養部複合棟新営予定地では、縄文時代、弥生時代から古墳時代、江戸時代の遺構を検出した。縄文時代のものには晩期の河川跡、落し穴、溝、谷状遺構のほ

か遺物包含層がある。県内では縄文時代の遺跡の調査例が乏しく、しかも、沿岸部に集中しており、貴重な調査例となった。落し穴と思われる遺構は、幅29m以上の規模をもつ河川跡と同一面で検出された。県内では極めて類例が少なく、古環境、生業形態を解明する資料として注目される。遺物包含層は晩期中頃のもので、本構内では初例である。後述する弥生時代以降の遺跡は、遺物包含層を掘り込んでいることが明らかになり、火山灰の分析結果などから今後、同時期さらにはそれを遡る時期の遺構、遺物包含層が検出される可能性がある。弥生時代から古墳時代のものには竪穴住居跡4基、河川跡2条等がある。竪穴住居跡は遺跡保存地区と同時期のもので、吉田構内南西部から中央部付近にかけて大規模な集落が存在していたことを窺わせ、本構内における集落の時期的な立地、規模、展開過程を解明する好資料となった。江戸時代は掘立柱建物跡2棟、井戸2基、埋甕土壙3基等の集落関連遺構がある。両建物は棟方向がほぼ直交し、井戸、埋甕土壙を付設する屋敷内の一連の建物と考えられ、屋敷構造、集落および構成員の性格を知る良好な遺構である。

出土遺物には縄文時代から平安時代および江戸時代の土器、縄文時代の石器などがあり、須恵器模倣土師器、墨書のある須恵質土器は注目に値する。

立会調査では7件のうち3件の調査で、遺物包含層あるいは遺構が認められた。

教養部複合棟新営に伴う調査では、時期は明かでないが溝状遺構を、国際交流会館新営に伴う調査では、弥生時代から古墳時代およびそれより時期的に遡る可能性のある2条の

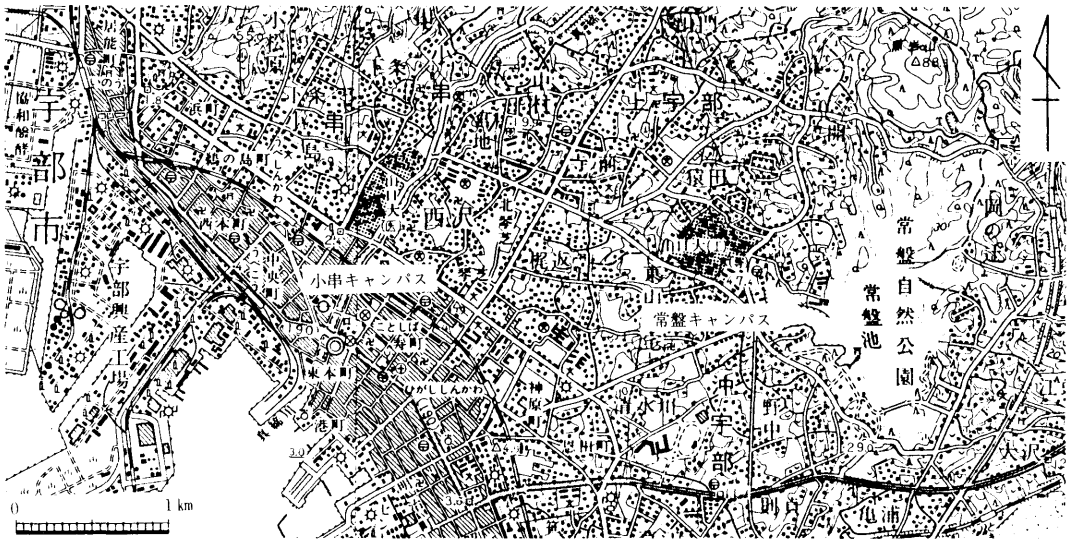


Fig. 2　山口大学小串・常盤両キャンパス位置図

河川跡を検出した。また、農学部附属農場Ｅ６圃場進入路拡幅に伴う調査では、全リン酸・全カルシウム量の定量分析結果から、土壙墓と考えられる土壙が検出された。遺物包含層は同Ｅ７圃場での排水管埋設工事で認められ、古代から近世の各時期の遺物が混在する。

小串構内の調査

試掘調査１件、立会調査１件の計２件の調査を実施した。

医学部附属病院棟新営に伴う試掘調査では、北側と南側にトレンチを設定したが、両者の土層は著しく異なっていた。北側では初めて山土を検出し、旧地形の北東方向への傾斜を確認した。また遺構では、近・現代の所産と考えられる溝２条が発見された。削平が著しく、これまで検出されている遺構に新たな知見を加えるものではないが、このように遺構自体は確実に残存しており、今後の調査によっては古い時期の遺構の見つかる可能性はある。こうした中で、南側トレンチ内での数枚の遺物包含層の発見は大きな成果であった。特に、旧石器時代遺物のみを含むと考えられる層からは、姫島産玻璃質安産岩製のナイフ形石器など多量の石器類が出土し、剥片剥離法などの石器製作に係わる貴重な資料を提示した。また、黒曜石・チャート・凝灰岩など使用石材の多様性から、当期の交易・行動範囲の類推に際して極めて重要な資料であると言える。石材に関しては、蛇紋岩？が多く見られた。当期に石器石材として使用にたえ得るものかどうかの判別はし難いが、二次的な加工と思われる痕跡を持つものもあり、蛇紋岩系の石材がこのように多量に見られること自体、はなはだ珍しいと言える。

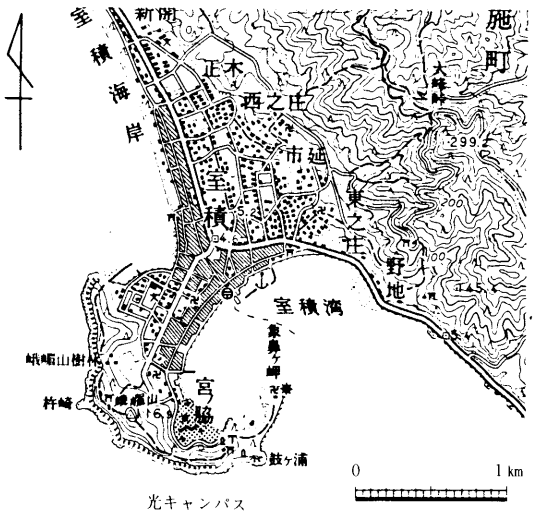


Fig. 3　山口大学光キャンパス位置図

同病院東駐車場整備に伴う立会調査では、過去の調査で認められた遺物包含層を検出したが、遺物は出土しなかった。

亀山構内の調査

教育学部附属幼稚園遊戯室拡張に伴い立会調査を行ったが、顕著な遺構、遺物包含層は認められなかった。

光構内の調査

教育学部附属光中学校グラウンドでの防球ネット取設に伴い立会調査を行った。明確な遺物包含層は確認していないが、土師器、瓦質土器、陶器、瓦が出土した。

第２章　吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査

１　調査の経過

調査地区は教育学部研究実習棟の北東部にあり、構内地区割ではＫ－18南東隅に当る。今回、教育学部附属教育実践研究指導センター（以下、実践センターと略称）が新営されることを受けた資料館では、この地区が以前より、弥生土器・土師器等の遺物散布地点として知られていたことを考慮した上、遺構・遺物の埋存状況、土層の堆積状況を把握する目的をもって実施した。

調査期間は昭和62年６月22日から８月11日までで、調査面積は約240㎡である。実践センター新営の件は昭和61年度からの案件であったが、62年度に入って急拠具体的となった経緯をもつ。試掘調査の後、改めて調査方法の検討を行なう予定をたてたが、期間が切迫していたこともあり、調査面積を考慮して全面調査に切替えた。なお、梅雨の時期に当った為、調査期間が延びたことを付け加えておく。

調査区内においては、既設配管の為、見かけ上Ａ・Ｂ・Ｃの三区に分かれた（Fig. 7）。Ａ区では約½が現代の共同溝敷設工事の際にすでに攪乱を受けており、実際の調査面積は新営予定地全体の約⅔となった。調査方法は、第１層である埋め土を重機によって除去したのち、２層以下は手掘りによる分層発掘をおこなった。その結果、弥生～古墳時代にかけての土壙・柱穴、近世以降の土壙・溝、それに近・現代の暗渠５条が検出されたが、顕著な遺物は見られなかった。なお、第３層については遺物包含層であることが判明し、４個所のグリッドを設けて掘削したところ、縄文時代の所産と考えられる土器片・石器類が出土した。また、自然木、木の実等が見られ、縄文時代を含めそれ以前の自然環境を知るうえで貴重な発見となった。

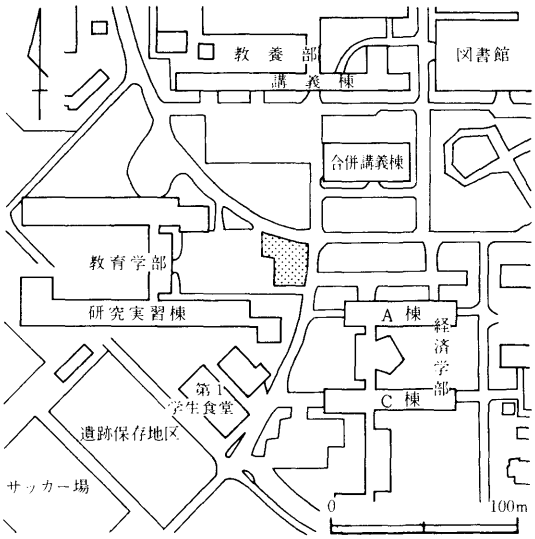


Fig. 4　調査区位置図

2 層 位

調査前の地表面はほぼ水平で、標高18.85mを計る。遺構を検出し得る層までには造成土、旧水田耕作土がある。造成土は本学統合移転時の埋め土で、C区、A区の西部において40～60cmで、厚い。旧水田耕作土は灰黄色を呈する近世以降の水田耕作土で、C区、A区の西部において厚い。以下、第3層目として、粘性を帯びた浅黄色土が堆積し、この上面で弥生～古墳時代、近世以降の遺構を検出した。本層は縄文時代の遺物包含層である。第4層として赤灰色粘質土、第5層として灰オリーブ粘質土と続く。第4層以下においては遺構・遺物の発見はない。第3層は2～3つに細分可能な状況にあり、下部に向かい小礫を多く含み、粘性も強くなる。この状況を合わせて旧地形の復元を試みると、A区南側では、削平の度合いから凸部であった可能性も高く、逆にA区中央付近では第3層上部に灰色土の堆積があり、ここが落ち込んでいたことを推測させる。微妙な凹凸が存在したことは、遺構の残り具合からも求められる。元来、希薄である可能性も否定出来ないが、ここでは、削平によるものと思われる。当調査区内においては、微高地あるいは谷部といった旧地形の起伏を考え得るが、これは決して平面的な広がりを持つものではなく、垂直的に幅を持った起伏の存在が浮かび上がる。

基本層序の各土質は次のとおりである。

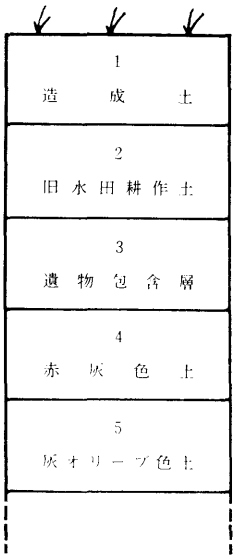


Fig. 5 基本土層柱状図

第1層　埋め土　20～60cm

第2層　灰黄色土　よくひきしまる。構成粒子は細かいが、不純物を多く含む。旧耕作土。5～35cm。

第3層　浅黄色土　砂質である。不純物はほとんど含まない。5～30cm。遺物包含層。

第4層　赤灰色土　硬くひきしまる。0.2～0.5cm程度の小礫を多く含む。5～30cm以上。

第5層　灰オリーブ色土　粘性が強く、0.3cm程度の小礫・炭を多く含む。5～30cm。

第5層以下は未掘である。

基本層序としてこれらの5層を確認しておきたい。ただ、Fig. 6に示したように、接近した地点でも堆積の在り方は微妙に違っており、無理に比定することは避けた。

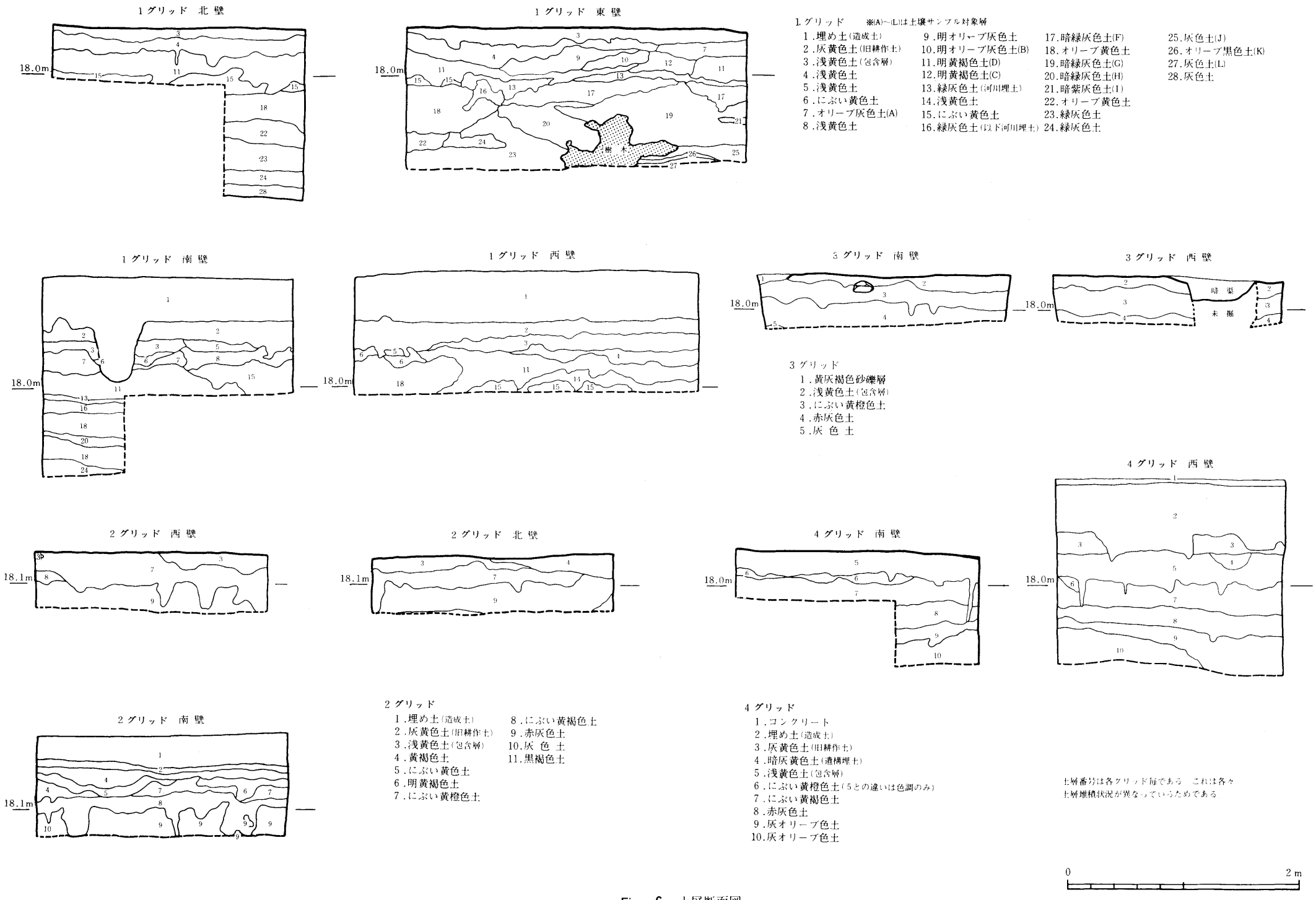

1グリッド 北壁
1グリッド 東壁
1グリッド 南壁
1グリッド 西壁
3グリッド 南壁
3グリッド 西壁
暗渠
未掘
2グリッド 西壁
2グリッド 北壁
2グリッド 南壁
4グリッド 西壁
4グリッド 南壁
樹木
18.0m
18.1m
1.グリッド ※(A)〜(L)は土壌サンプル対象層
1.埋め土(造成土)
2.灰黄色土(旧耕作土)
3.浅黄色土(包含層)
4.浅黄色土
5.浅黄色土
6.にぶい黄色土
7.オリーブ灰色土(A)
8.浅黄色土
9.明オリーブ灰色土
10.明オリーブ灰色土(B)
11.明黄褐色土(D)
12.明黄褐色土(C)
13.緑灰色土(河川埋土)
14.浅黄色土
15.にぶい黄色土
16.緑灰色土(以下河川埋土)
17.暗緑灰色土(F)
18.オリーブ黄色土
19.暗緑灰色土(G)
20.暗緑灰色土(H)
21.暗紫灰色土(I)
22.オリーブ黄色土
23.緑灰色土
24.緑灰色土
25.灰色土(J)
26.オリーブ黒色土(K)
27.灰色土(L)
28.灰色土
3グリッド
1.黄灰褐色砂礫層
2.浅黄色土(包含層)
3.にぶい黄橙色土
4.赤灰色土
5.灰色土
2グリッド
1.埋め土(造成土)
2.灰黄色土(旧耕作土)
3.浅黄色土(包含層)
4.黄褐色土
5.にぶい黄色土
6.明黄褐色土
7.にぶい黄橙色土
8.にぶい黄褐色土
9.赤灰色土
10.灰色土
11.黒褐色土
4グリッド
1.コンクリート
2.埋め土(造成土)
3.灰黄色土(旧耕作土)
4.暗灰黄色土(遺構埋土)
5.浅黄色土(包含層)
6.にぶい黄橙色土(5との違いは色調のみ)
7.にぶい黄褐色土
8.赤灰色土
9.灰オリーブ色土
10.灰オリーブ色土
土層番号は各グリッド毎である。これは各々土層堆積状況が異なっているためである
0
2m

Fig. 6 土層断面図

3　遺構・遺物

(1)　弥生～古墳時代、江戸時代以降の遺構・遺物

検出した遺構には、土壙・溝・柱穴がある。弥生～古墳時代のものはＡ区の西部・東部、Ｃ区の東側に、江戸時代以降のものは、Ｃ区の北東部と南西部に偏ってみられた。

土壙　Ａ区においてのみ３基検出した。

第１号土壙　ＳＫ１(Fig. 8)

Ａ区の西部、構内座標 x ＝304, y ＝498付近で検出された不整楕円形のもので、北東－南西方向に長軸を持つと考える。南東部は溝（暗渠２）によって切られており、最低、長軸で1.4ｍ、短軸では0.8ｍの規模を持つ。深さは検出面より11cmを最深部として平均６cm程で浅い。壙底は最深部で標高18.14ｍ。中央部がやや窪む。内部からの出土遺物はない

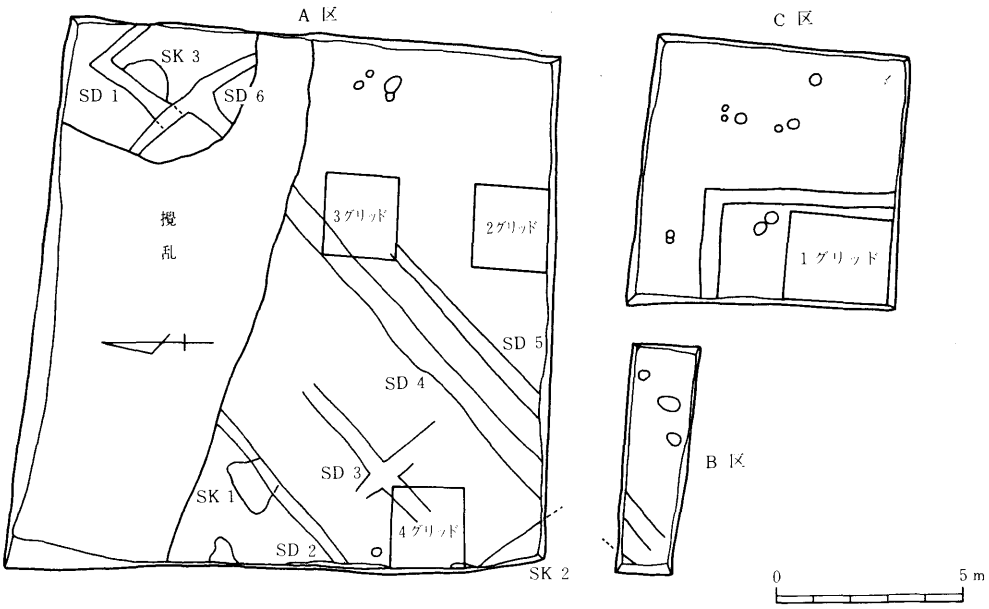


Fig. 7　遺構配置・グリッド設定図

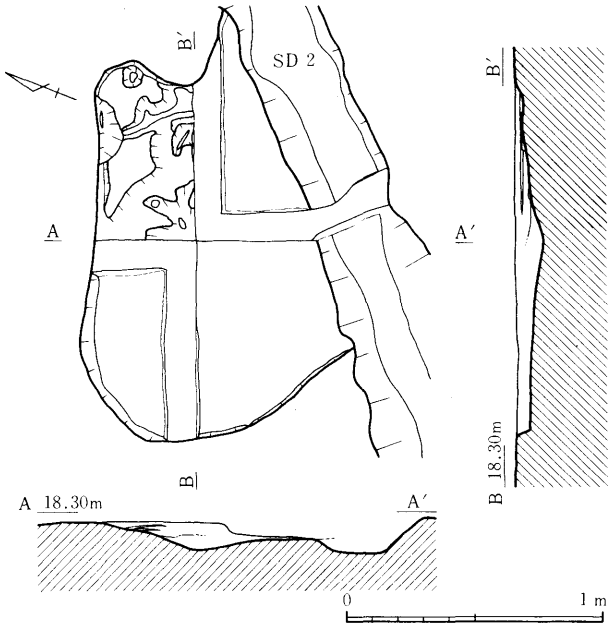


Fig. 8　第1号土壙実測図

が、埋土の状況等から弥生～古墳時代にかけてのものと考えられる。

第2号土壙　SK2 (Fig. 9)

A区の南西隅、B区の西隅において検出した。構内座標 x ＝295, y ＝496付近のもので、方形を呈すると思われる。一辺は少なくとも2.5mはあると考えられる。壙底は平で、その標高は18.23mを計る。検出面からの深さは17cm程である。出土遺物はないが、埋土等から江戸時代以降のものと考えられる。

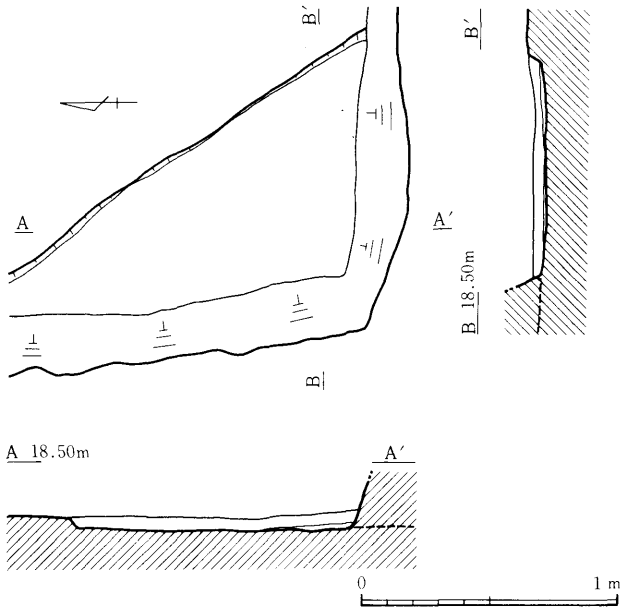


Fig. 9　第2号土壙実測図

第3号土壙　SK3 (Fig.10)

A区北東隅、構内座標 x ＝306, y ＝509付近で検出された、不整楕円形のもので、やや北東－南西方向に幅が広いようである。これを長軸とみると1.5m、短軸0.6mの規模を持つことになる。壙底は平で、検出面からの深さは約20cmである。出土遺物はないが埋土の状況等からSK2同様、江戸時代以降の所産と考えられる。なお、溝1との切り合いは明確にし得なかった。

溝　A区においてのみ6条検出した。

溝　ＳＤ１

土壙ＳＫ３に隣接するもので、Ａ区の北東隅でほぼ直角に曲がる部分を検出した。既述のとおり、土壙ＳＫ３との切り合いは不明である。また、南西側は溝（暗渠５）によって切られている。幅は約40cm、断面形は逆台形状を呈する。溝底にはかなりの凹凸があり、検出面からの深さは最深部で約55cm程ある。出土遺物はなかったが、埋土の状況等から江戸時代以降の所産と考えられる。

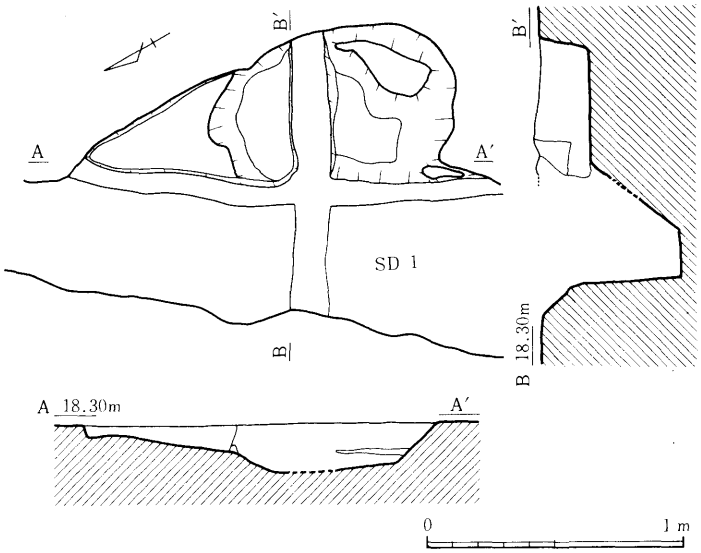


Fig. 10　第３号土壙実測図

溝　ＳＤ２～ＳＤ６

ほかに、溝５条が検出されている。これらはすべて近世以降の水田耕作に伴う排水用施設（暗渠）である。ほとんどが北東－南東方向に流路をもっているが、一部これと直交するものもある。検出面からの深さでは多くが10～15cm前後であるが、場所によってはかなり異なる。幅は40cm程度のものが多い。出土遺物（Fig. 15, PL. 5）について、ＳＤ２では、土師質土器の甕・須恵器の坏蓋・瓦質土器・磁器・瓦が出土している。ＳＤ４からは、須恵器・瓦質土器・陶器・磁器・管玉の未製品と考えられるものが出土した。このうち18は表・裏両面に施釉し、貫入がみられる陶器の破片である。外面にはヘラによる２条の沈線とスタンプによる菊花文を施している。１の管玉の未製品と考えられるものは、一部を欠損し縦方向に擦痕（磨き痕）が見られる滑石製のものである。ＳＤ６からは弥生土器・磁器が出土している。なお、当調査における遺構出土の遺物は、これら近・現代の暗渠からのみで、すべて細片である。

柱穴　Ａ・Ｃ区において22穴検出した。

埋土の状況等から、弥生～古墳時代の所産と考え得るものを14検出した。A区の中央部東端とC区の中央やや東寄りに集中しており、直径10～40cmのものである。検出面からの深さは3～15cmであり、10cm前後のものが多い。外に、近・現代の所産と考えられるものを8つ検出した。

(2) 縄文時代の遺構・遺物

弥生時代以降の調査を完了した時点で、第3層上面に多くの炭が入っていることを確認した。これらが人為的なものか自然的なものか、また、下層にも続くのか、ということに注意を払い、炭が集中して見られた部分に、4個所のグリッド設けて掘削を行なった。その結果、第3層の上部で縄文土器片、縄文時代のものと考えられる石器類が出土し、炭に関しては、人為的である可能性が大きくなった。しかし、遺構は全く検出されなかった。

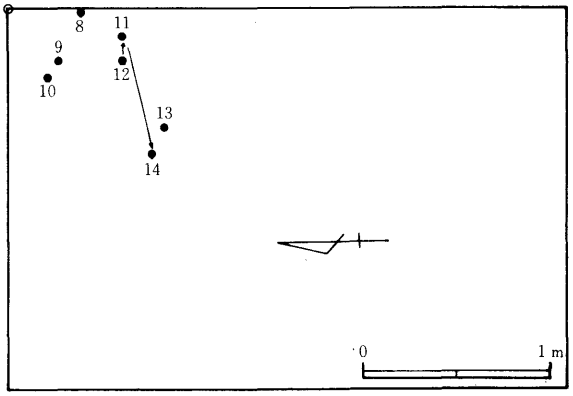


Fig. 11 出土遺物の平面分布図(1グリッド)

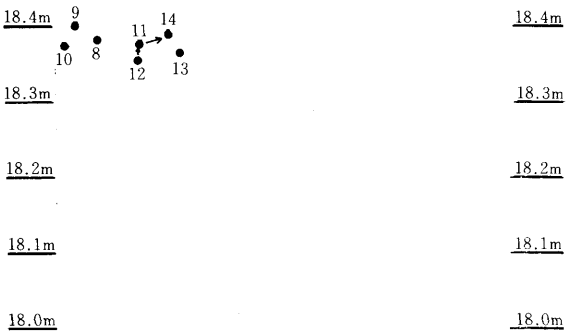


Fig. 12 出土遺物の垂直分布図(1グリッド)

以下、各Gridの説明を行なうことにする。出土遺物については後に一括して述べたい。

1 Grid (C区)

C区西壁に沿って設けた南北2.5×東西2mのグリッドであるが、すぐに北東隅で大形剝片の出土を見たため、この時点でグリッドを北へ50cm拡張した。実際の掘削は南北3×東西2mである。掘削方法は、移植ゴテ・手鍬によって、5cm程度づつ全面同一レベルで掘り進めていった。第3層上面より約30cmまでの中で、土器片・剝片・貝片・木片が出土したが、それ以上はこれらの遺物の出土はなかった。ところが土壌サンプリングの為、グリッド東壁から西へ70cmの幅をとってスコップにより掘り下げを行なったところ、湧

水をみた、第3層上面から深さ0.7～1.5mのところで自然木・木の実が出土した。出土層位は旧(縄文時代)河川跡の堆積土内である。

2 Grid（A区）

A区南壁の中央に設定した2×2mのグリッドで、1グリッドとの距離は最低6.5mある。北西部にのみ第3層上部が見られ、外は第2層直下に小礫混じりの層が堆積する。これは河川の堆積土と考えられ、この上面から約40cmの深さまでの内から水晶製の削器・貝片等が出土した。掘削方法は1グリッドと同様である。第4層以下では、遺物の出土はなかったが、炭については数は少ないものの入ることを確認した。

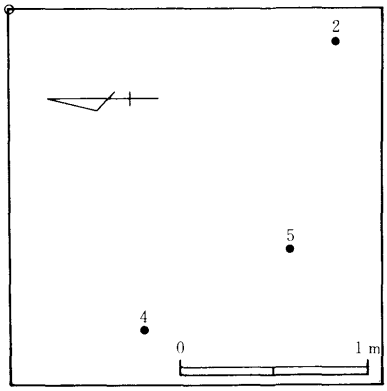


Fig. 13 出土遺物の平面分布図(2グリッド)

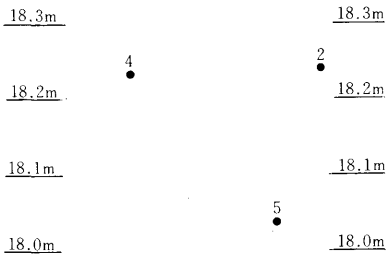


Fig. 14 出土遺物の垂直分布図(2グリッド)

3 Grid（A区）

A区の中央部に設定した2×2mのグリッドで、2グリッドの距離は最低2mある。掘削方法は1･2グリッドと同様である。第3層上面より5～15cmの深さで大形の礫が1点出土した。

4 Grid（A区）

A区西壁に沿った2×2mのグリッドである。2･3グリッドの土層堆積状況が悪かった為、それを補う形で他グリッドの掘削途中で設定した。2･3グリッドとの最短距離は、約6mである。第4層までは他グリッド同様の掘削方法で、第5層以下は西壁土壌サンプリングの為の掘削で西壁から東へ80cmの幅をとってスコップにより掘り下げた。遺物の出土はなかった。

遺　物（Fig. 15, PL. 5）

縄文土器片、削器・礫・剥片・砕片、貝片がある。出土層位は河川の埋土内のものを除き第3層であり、その上面に中心をもつ。

1 Grid では姫島産黒曜石を用いた剝片等を見ていきたい。計8点のうち4点は微細なものであるのでここでは触れない。11と12は非常に大形のもので、コアーブランクとして捉えておきたい。両者とも節理面と考えられる面をもっており、形態も類似する。調製痕も方向をほぼ同じくすることから接合作業を行った結果、欠損による2分割が判明した。剝離による分割ではないものの、器種認定に当たり、原形の非常な不定形・不安定さにやや疑問が残るものである。14は片側を欠損するもので、原形は薄手の横長の剝片であろう。打面・打点は欠損により残らない。前述の11・12に接合する。11・12がコアーブランクであると見るならば、その調整剝片として認定されるものであろう。13はやや縦長で厚みのある剝片である。打面・打点は残すが、下端と一側縁は欠損する。背面には原礫面と考えられる面を持つが、これは著しい剝離風化面かもしれない。1 Grid では外に縄文土器片、黒曜石の砕片、貝片があるが、これらはあまりに微細であり、検討にたえない。

2 Grid では河川の埋土内から、削器・砕片・貝片が出土している。2は水晶製のやや横長の剝片を素材とするもので、二次加工は腹面から緻密に入る。側面に見られる背面からの加工は何らかのアクシデントであろう。腹面上部には剝落痕と考えられる微細な痕を見るが、これはリタッチを入れる際のものか、あるいは使用による際のものという2つが考えられる。素材上部は欠損する。

3 Grid では大形の礫のみ、1点出土した。これは自然の礫である。出土層位は第3層からであるが、第3層を細分して見た場合、二つの層にわたっての出土である。

4 Grid では掘削中による遺物の出土はない。

ほかに、細石刃？・土師質土器片・陶器片といった遺物が攪乱土中から出土している。このうち18の細石刃？は黒曜石製のもので、両端（上部・下部）を欠損（折断）し、縦長の剝片を素材にしている。細石刃としての認定に躊躇するのは背・腹両面に見られる剝離の方向が一定しないことと、背面側の微細剝離痕の存在である。なお、風化がかなり進んでいる。

水洗選別作業検出の遺物

今回、水洗選別作業を行なったグリッドは1･4グリッドであり、対象土層は第3層上部を中心に第3層全体に、また一部第4・5層に及ぶ。1グリッドについては、包含層の残りの良さと遺物の出土状況を踏まえ対象区とした。4グリッドは、遺物の出土こそなかったが、包含層の残りの良さから、また1 Grid との距離・その位置関係を考慮し、対象区

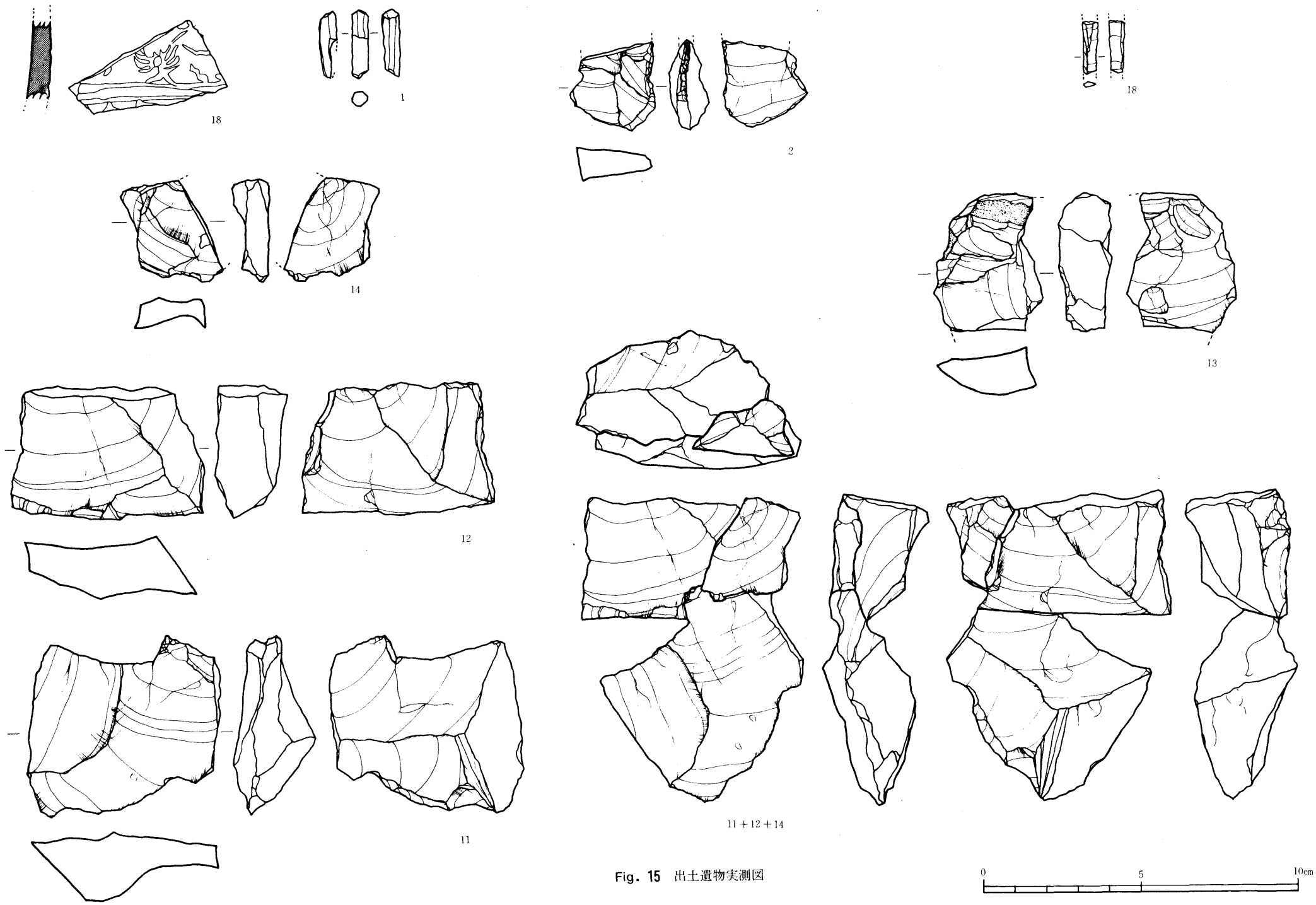


Fig. 15 出土遺物実測図

とした。水洗選別作業の目的は吉田構内において、これまで掘削したことのない層から縄文時代の遺物が初めて出土したことを契機として、遺物の平面的・垂直的な広がりを把握する中の一環として行ない、今回どれほどの微細遺物が包含されているのか、特にその量の把握に主眼を置いた。

その結果、1グリッドでは二次加工のある剝片・加工痕(使用痕)のある砕片・剝片・砕片・炭・貝片・水晶片が検出できた。石器類の石材に関しては、チャート・姫島産黒曜石・水晶がある。4グリッドでは、貝片・炭・水晶片があるが、いわゆる石器類はなかった。また、両グリッドに見られる水晶片は、石器・剝片・砕片に区分できるものではないが、水晶製の石器類が出土していることから、単に石片として片付けられないものもあると考える。両グリッドとも第3層から遺物が検出された訳であるが、層の堆積がよりしっかりしており、出土した遺物も多い1グリッドにおいて検出した微細遺物も多かった。

4　小　結

(1)　遺構・遺物について

今回検出した遺構は、土壙3・溝6・柱穴22である。残り具合は非常に悪く、調査面積の割には希薄な残存状況であった。各遺構について時期・性格などを追及でき得る資料はほとんどなかったと言える。また、自然木等を含む旧河川と考えるものについても、検出面積の少なさと、人工遺物の未検出で、その詳細は分からなかった。

当調査区は、北東から延びる姫山(ひめやま)・今山(いまやま)の洪積丘陵地と、椹野(ふしの)川左岸の沖積段丘に在る吉田遺跡のほぼ中央部に位置し、周辺の既往調査から見て、今回の遺構埋存状況は全くの予測外であった。これはもともと足跡のない地域であった可能性はあるものの、残存遺構の状況、さらにその偏り方から見て、ここでは大きく削平を受けた結果であると考えておきたい。しかしながら、その時期・内容・方法についての詳細は不明である。また、旧地形は微妙な起伏をもって存在していた可能性が高い。

今回、縄文時代の遺物包含層を確認したことは大きな成果であった。出土遺物は黒曜石製の剝片等、土器細片・貝片が若干で、出土層位は第3層上面であった。石器に関してはその接合関係から明らかであるが、これらの遺物はその出土層位から同一時期とみなすことができよう。すなわち、当調査区において、第3層上面を中心とした一文化層が確認できた。そして、これらの所属時期についての判断資料として、土器もあるが、細片のため時期を特定することはできなかった。

とした。水洗選別作業の目的は吉田構内において、これまで掘削したことのない層から縄文時代の遺物が初めて出土したことを契機として、遺物の平面的・垂直的な広がりを把握する中の一環として行ない、今回どれほどの微細遺物が包含されているのか、特にその量の把握に主眼を置いた。

その結果、1グリッドでは二次加工のある剝片・加工痕(使用痕)のある砕片・剝片・砕片・炭・貝片・水晶片が検出できた。石器類の石材に関しては、チャート・姫島産黒曜石・水晶がある。4グリッドでは、貝片・炭・水晶片があるが、いわゆる石器類はなかった。また、両グリッドに見られる水晶片は、石器・剝片・砕片に区分できるものではないが、水晶製の石器類が出土していることから、単に石片として片付けられないものもあると考える。両グリッドとも第3層から遺物が検出された訳であるが、層の堆積がよりしっかりしており、出土した遺物も多い1グリッドにおいて検出した微細遺物も多かった。

4　小　結

(1)　遺構・遺物について

今回検出した遺構は、土壙3・溝6・柱穴22である。残り具合は非常に悪く、調査面積の割には希薄な残存状況であった。各遺構について時期・性格などを追及でき得る資料はほとんどなかったと言える。また、自然木等を含む旧河川と考えるものについても、検出面積の少なさと、人工遺物の未検出で、その詳細は分からなかった。

当調査区は、北東から延びる姫山(ひめやま)・今山(いまやま)の洪積丘陵地と、椹野(ふしの)川左岸の沖積段丘に在る吉田遺跡のほぼ中央部に位置し、周辺の既往調査から見て、今回の遺構埋存状況は全くの予測外であった。これはもともと足跡のない地域であった可能性はあるものの、残存遺構の状況、さらにその偏り方から見て、ここでは大きく削平を受けた結果であると考えておきたい。しかしながら、その時期・内容・方法についての詳細は不明である。また、旧地形は微妙な起伏をもって存在していた可能性が高い。

今回、縄文時代の遺物包含層を確認したことは大きな成果であった。出土遺物は黒曜石製の剝片等、土器細片・貝片が若干で、出土層位は第3層上面であった。石器に関してはその接合関係から明らかであるが、これらの遺物はその出土層位から同一時期とみなすことができよう。すなわち、当調査区において、第3層上面を中心とした一文化層が確認できた。そして、これらの所属時期についての判断資料として、土器もあるが、細片のため時期を特定することはできなかった。

ただ隣接地の教養部教養複合棟新営に伴う調査（第３章参照）では、この第３層の相当層上面から縄文時代の遺物が多数出土している。土器片については、良好な残り方はしていないが、岩田Ⅳ類・月崎上層Ⅲ式に併行するものと考えられる。実践センター第３層上面出土の遺物は、その層位的事実からこれらに比定でき、よって、その時期は縄文時代晩期中頃と捉えられる。

山口県において、縄文時代の石器を層位的発掘によって検出した遺跡は、ほんのわずかであり、多くが表採・不明といった時間軸にあてはめられないもので、包含層出土のものにしてもその多くはかなりの時間的幅をもっているという状況にある。その意味で今回出土した資料は貴重である。また、県内におけるその体系的な研究を行なう上でも今しばらくの時間は必要となろう。

土層について若干述べておきたい。

実践センター新営予定地内での土層は、造成土・旧耕作土・浅黄色土・赤灰色土・灰オリーブ色土と続く。このうち、第３層目の浅黄色土の最上面で遺物が出土し、縄文時代晩期中頃の一文化層として認識された。また、浅黄色土は、細分が可能な状況にあり、今後の調査を待って検討したい。

吉田遺跡（山口大学構内遺跡）の南西約２㎞に位置する小路（しょうじ）遺跡では、小路層[1)]と呼ばれる沖積低地の堆積物が確認されている。このうち小路層下部はアカホヤ火山灰に由来する砂質粘土の二次堆積層で、吉田遺跡で見られる、縄文時代晩期中頃の遺物を含む層（第３層）は、これに相当するものと思われる。

アカホヤ火山灰の降下年代は、今から、約6300年前と考えられており、よって、小路層下部はこれ以後、縄文時代晩期中頃（今から2500年くらい前）にかけて堆積したものであろう、との推測が可能である。

第３層のみが、小路遺跡で発表されている砂質粘土の二次堆積層に相当するものかと言えば、そうではなさそうである。教養複合棟区の調査においては、Ｂ・Ｃ壁のⅥ層（実践センターの第３層）基底面下、約30㎝のところにある暗褐色粘質土（Ｃ壁のⅨ層）上面から掘り込んでいる落し穴と考える遺構があり、隣接して検出された河川跡（落し穴とほぼ同時期と考えられる）からは、縄文時代晩期の土器片などが多量に出土している。すなわち、暗褐色粘質土（Ｃ壁のⅨ層）は一時期にせよ、縄文時代晩期の人々の生活面（地面）であったことになり、小路遺跡で発表された砂質粘土の二次堆積層は、縄文時代晩期中頃の遺物を含む第３層（教養複合棟区の調査ではＢ・Ｃ壁のⅥ層）以下、少なくとも、教養

複合棟区の調査でのC壁のⅨ層までの範囲を示すことになる。このように縄文時代晩期中頃に砂質粘土の二次堆積層の活動が行なわれたと考えられるが、果してこれが、その二次堆積活動の全てなのか、あるいは、断続的な活動のうちの一サイクルなのかは判断できず、小路層下部の始源は教養複合棟区の調査でのC壁で見るならば、Ⅸ層以下に求められる可能性も出てくる。

また、土層の色調・性質は教養複合棟区の調査でのB・C壁のⅥ層（実践センターの第3層）と教養複合棟区でのC壁のⅨ層では、大きく異なっており、これを同一層としては捉え難く、環境なり何らかの変化がここに求められるのではないだろうか。

なお、当調査では土壌のサンプリングを行なっており、現在、花粉分析中である。また、植物遺体の分析から、当期の環境を推察いただいている（付篇Ⅰ　山口大学構内出土の植物遺体）。今後とも学際的研究による古環境の解明に全力を注ぎたい。

(2)　埋蔵文化財遺存状況と今後の方針

当調査区では、削平の度合いが大きいと考えられ、遺構の残り具合が非常に悪かった。この結果をもとに調査終了後の取扱について、埋蔵文化財資料館運営委員会では工事に際して特に支障はない、との結論が出された。

当調査区は「遺跡保存地区」に近く、遺構の集中する範囲内と予想されたが、結果は全くその逆であった。これは削平の有無もあるだろうが、そればかりの問題とも言い切れず、多くの問題が残されたというのが実情である。周辺地域では今後まず、綿密な試掘調査が必要となるもので、さらに縄文時代晩期中頃以前の相当層は削平の手を免れており、この層以下では特に注意を払う必要がある。

〔注〕

1）松尾征二　「小路遺跡周辺の第四系」『小路遺跡』（山口市埋蔵文化財調査報告第27集、山口市教育委員会、1988年）

Tab. 2　出土遺物観察表　　実践センター(1)

No	器種	石材	出土位置 (Grid)	出土層位	北→南 (cm)	東→西 (cm)	出土高 (m)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	打面の形状 形態	打面の形状 傾き	原礫面の有無	接合関係	備考
1	管玉	滑石	暗渠 (SD 4)	埋土				2.1	0.5	0.5	0.6					未製品か
2	削器	水晶	2 G	河川埋土	172.0	17.5	18.240	2.8	2.7	1.1	8.2					
3	貝片		2 G	河川埋土	94.2	179.0	18.170									
4	砕片	水晶	2 G	河川埋土	71.0	170.2	18.231				0.01					
5	砕片	水晶	2 G	河川埋土	147.2	128.2	18.037				0.01					
6	礫	安山岩	3 G	2·3	272.0～285.0	84.0～101.0	上18.244 下18.154									自然礫
7	砕片	姫島産黒曜石	1 G	3				1.7	0.5	0.2	0.1					
8	砕片	姫島産黒曜石	1 G	3	38.7	0	18.374				0.01					
9	砕片	姫島産黒曜石	1 G	3	27.0	27.2	18.393				0.01					
10	砕片	姫島産黒曜石	1 G	3	21.7	36.0	18.367	0.8	0.3	0.1	0.02					
11	コアーブランク	姫島産黒曜石	1 G	3	62.0	16.0	上18.392 下18.367	5.6	5.1	2.1	61.8				12·14	
12	コアーブランク	姫島産黒曜石	1 G	3	62.3	23.5	上18.387 下18.349	4.2	6.1	1.9	55.2				11·14	
13	剥片	姫島産黒曜石	1 G	3	83.1	62.3	上18.372 下18.356	4.3	3.4	1.5	23.4	平坦	腹面へ約45°	○		
14	剥片	姫島産黒曜石	1 G	3	77.5	76.2	上18.393 下18.381	3.2	3.2	1.0	7.0				11·12	
15	貝片		1 G	3	67.0	188.5	18.094	0.7	0.5	0.1						
16	砕片	黒曜石	1 G	3							0.03					
17	砕片	水晶 (石英)	2 G	不明				0.4	0.2	0.1	0.01					
18	細石刃?	黒曜石	攪乱坑					1.6	0.5	0.15	0.1					

実践センター(2)

No	器種 器形	出土位置	出土層位	胎土						色調		残存程度	形態・成形・調整等の特徴
				石英	長石	角閃石	雲母	砂礫	その他	外面（素地）	内面（釉）		
1	瓦	暗渠 (SD 2)	埋土内	極小 a						オリーブ黒色 (7.5Y 3/2)	オリーブ灰色 (2.5GY 6/1)	不明	ヨコナデ。
2	土師質土器 甕形土器	暗渠 (SD 2)	埋土内	極小 c	極小 b					淡黄色 (2.5Y 8/3)	浅黄色 (2.5Y 7/3)	不明	内面に同心円文。肥料だめ用の甕。近世。
3	欠												
4	瓦	暗渠 (SD 2)	埋土内	極小 a						灰色 (10Y 4/1)	灰白色 (5Y 7/2)	不明	
5	瓦質土器	暗渠 (SD 2)	埋土内	極小 d	極小 b					灰オリーブ色（5Y 6/2） 灰白色（2.5Y 8/2）		不明	片面にヨコナデ。
6	瓦	暗渠 (SD))	埋土内	極小 a						灰色 (7.5Y 4/1)	灰色 (7.5 6/1)	不明	
7	磁器	暗渠 (SD 2)	埋土内							(淡黄色) (5Y 8/3)	(透明)	不明	口縁部片。内・外面に貫入。
8	磁器	暗渠 (SD 2)	埋土内							(灰白色) (7.5Y 8/2)	(緑がかった透明)	不明	内面のみ釉・貫入。
9	磁器	暗渠 (SD 2)	埋土内							明オリーブ灰色 (5GY 7/1)	(青色)	不明	内・外面釉、貫入なし。
10	磁器	暗渠 (SD 2)	埋土内							淡黄色 (5Y 8/3)	(透明)	不明	内・外面貫入。
11	須恵器 坏蓋	暗渠 (SD 2)	埋土内							灰色 (7.5Y 6/1)	灰色 (7.5Y 6/1)	不明	内・外面とも回転ユビナデ。
12	瓦	暗渠 (SD 2)	埋土内	極小 a				極小 a				不明	
13	瓦質土器	暗渠 (SD 4)	埋土内	極小c ～小a				極小 a		灰色（10Y 5/1）		不明	内・外面ともナデ。
14	須恵器	暗渠 (SD 4)	埋土内	極小 c						緑灰色 (7.5GY 6/1)	緑灰色 (10GY 5/1)	不明	内・外面とも回転ユビナデ。
15	瓦質土器	暗渠 (SD 4)	埋土内							灰色 (10Y 4/1)	灰色 (10Y 4/1)	不明	内面ヨコナデ。工具による可能性あり。
16	陶器	暗渠 (SD 4)	埋土内							にぶい黄色 (2.5Y 6/3)	浅黄色 (2.5Y 7/3)	不明	風化の為、素地の色調はよく分らない。内・外面に施釉あるが発色は不良であり、光沢はない。貫入なし。
17	陶器	暗渠 (SD 4)	埋土内							(にぶい黄橙色) (10YR 7/3)	(茶がかった透明)	不明	内・外面に施釉、貫入あり。
18	陶器	暗渠 (SD 4)	埋土内					極小 a		(にぶい橙色) (2.5YR 6/3)	(灰色がかった透明)	不明	外面に工具による2条の沈線と菊花文。内外面に施釉、貫入あり。
19	磁器	暗渠 (SD 4)	埋土内							(灰白色) (10Y 8/1)	(透明) 施文－(鮮青色)	不明	染付。内・外面に文様、施釉。貫入はない。

実践センター(3)

No	器種 器形	出土位置	出土層位	胎土 石英	長石	角閃石	雲母	砂礫	その他	色調 外面（素地）	内面（釉）	残存程度	形態・成形・調整等の特徴
20	磁器	暗渠 (SD4)	埋土内							(灰白色) (2.5GY 8/1)	(透明) 施文－(鮮青色)	不明	染付。内面にのみ文様。内・外面に施釉、貫入なし。
21	磁器	暗渠 (SD4)	埋土内							(灰白色) (10Y 7/1)	(灰色がかった透明)	不明	外面に施釉、内面には一部施釉、貫入なし。
22	磁器	暗渠 (SD4)	埋土内					極小 a		(淡黄色) (5Y 8/3)	(透明) 施文－(鮮青色)	不明	染付。外面に文様あり。内・外面に施釉、貫入あり。
23	磁器	暗渠 (SD4)	埋土内							(灰白色) (5Y 7/1)	(灰白色) (5Y 8/1)	不明	内・外面に施釉、貫入はない。釉は発色はなく光沢もみられない。
24	弥生土器	暗渠 (SD6)	埋土内	極小 c	極小 c					淡橙色 (5Y 8/3)	灰色 (10Y 4/1)	不明	
25	磁器	暗渠 (SD6)	埋土内							(淡黄色) (2.5Y 8/4)	内面(黄がかった透明) 外面―口縁部含む― (青がかった透明)	不明	口縁部片。外面にヨコナデ顕著。内・外面に施釉、貫入はない 内・外面では釉色が異なる。
26	磁器	暗渠 (SD6)	埋土内							(灰白色) (10Y 8/1)	内面(青がかった透明) 外面(緑がかった透明)	不明	内・外面に施釉するが、色調は異なる。貫入と考えられるひび割れが内・外面に走る。
27	磁器	暗渠 (SD6)	埋土内							(灰白色) (7.5Y 8/1)	おそらく外面になると思われる (鮮青色)	不明	貫入はない。
28	土師質土器	B区	1	極小 b	極小 a					灰色 (10Y 6/1)	灰白色 (2.5Y 8/2)	不明	
29	不明	B区	1	極小 a								不明	
30	陶器	B区	1					極小 a		にぶい黄橙色 (10YR 6/3)	にぶい黄橙色 (10YR 6/3)	不明	
31	陶器	B区	1							(浅黄橙色) (10YR 8/3)	(透明)	不明	外面のみ施釉、貫入あり。
32	縄文土器	C区	3					極小 b		にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	不明	風化著しく小破片の為、表裏の区別、部位も不明。胎土にはあまり不純物を含まない。
33	陶器	A区	表採	極小 a						(灰色) (N 6/0)	内面(灰赤色) 外面(灰赤色)	不明	内・外面に施釉するが、発色が不良であり、光沢がない。

※　空白欄は該当事項のないもの。但し、法量については石器類では計測不可能なものの意味。

※　土器の胎土については、含まれる粒の大きさを、農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1976) に処って、便宜的に分類した。

極小－径1㎜以下

小　－径1～2㎜で、各々4段階、細かい方から順にa、b…とした。

第3章　吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査

1　調査の経過

教養部の敷地は吉田構内のほぼ中央部に位置し、複合棟新営予定地は同敷地の南西部分に計画された。昭和62年度当初には、事前の発掘調査を必要とする案件として複合棟の新営工事計画が埋蔵文化財資料館運営委員会に諮られたが、予算措置が未定であったため調査は先送りとなった。しかし、7月に至って、急遽新営計画が具体化したため同委員会は対応を協議した。

予定地は遺跡保存地区[1]と弥生時代から鎌倉時代の遺物が多量に出土した図書館増築地域[2]のほぼ中間にあたり、両地域から直線距離でわずか約150mである。こうした周辺地域における過去の調査結果および立地から、同予定地でも埋蔵文化財の存在が充分に予想された。そこで、同委員会はまず、試掘調査によって遺構、遺物包含層の有無、分布状況を把握し、調査結果を踏まえて再度同委員会において協議し、新営工事計画との調和をはかることとした。この時期、埋蔵文化財資料館は第2章で述べた教育学部教育実践研究指導センター新営予定地での発掘調査中であったが、工事計画日程から早急に試掘調査を行うことになった。

試掘調査は新営予定地内北半部に存在する既設の自転車置場間に、東西に幅約0.6m、長さ約32m（Aトレンチ）、26m（Bトレンチ）の2本の試掘坑を設定し、昭和62年7月21日から27日にかけて実施した。

Aトレンチ東半部は構内造成時の埋め土の下が耕作土で、その直下が地山であるが、後世の削平により遺構、遺物包含層は消失していた。地山は西に向うにつれて下降し、西半部では茶褐色および黒褐色粘質土の遺物包含層3枚に加え溝、柱穴を検出した。吉田構内での過去の調査による土層、埋土の色調から、弥生時代から古墳時代のものと考えられた。

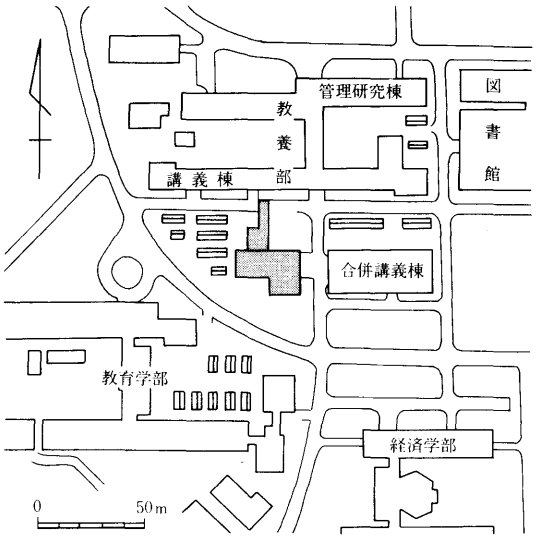


Fig. 16　調査区位置図

Bトレンチではほぼ全面に遺構埋土な

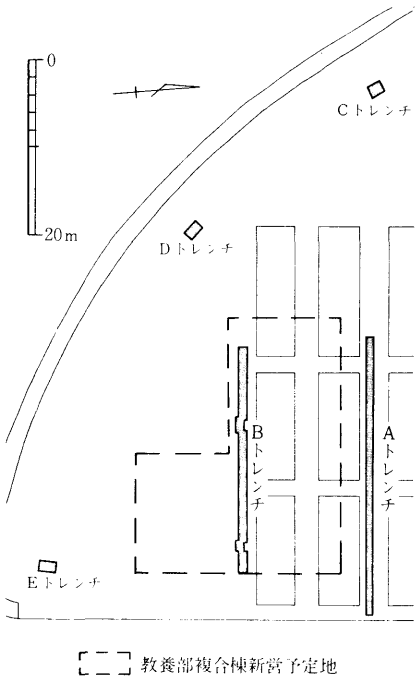


Fig. 17　試掘調査トレンチ設定図

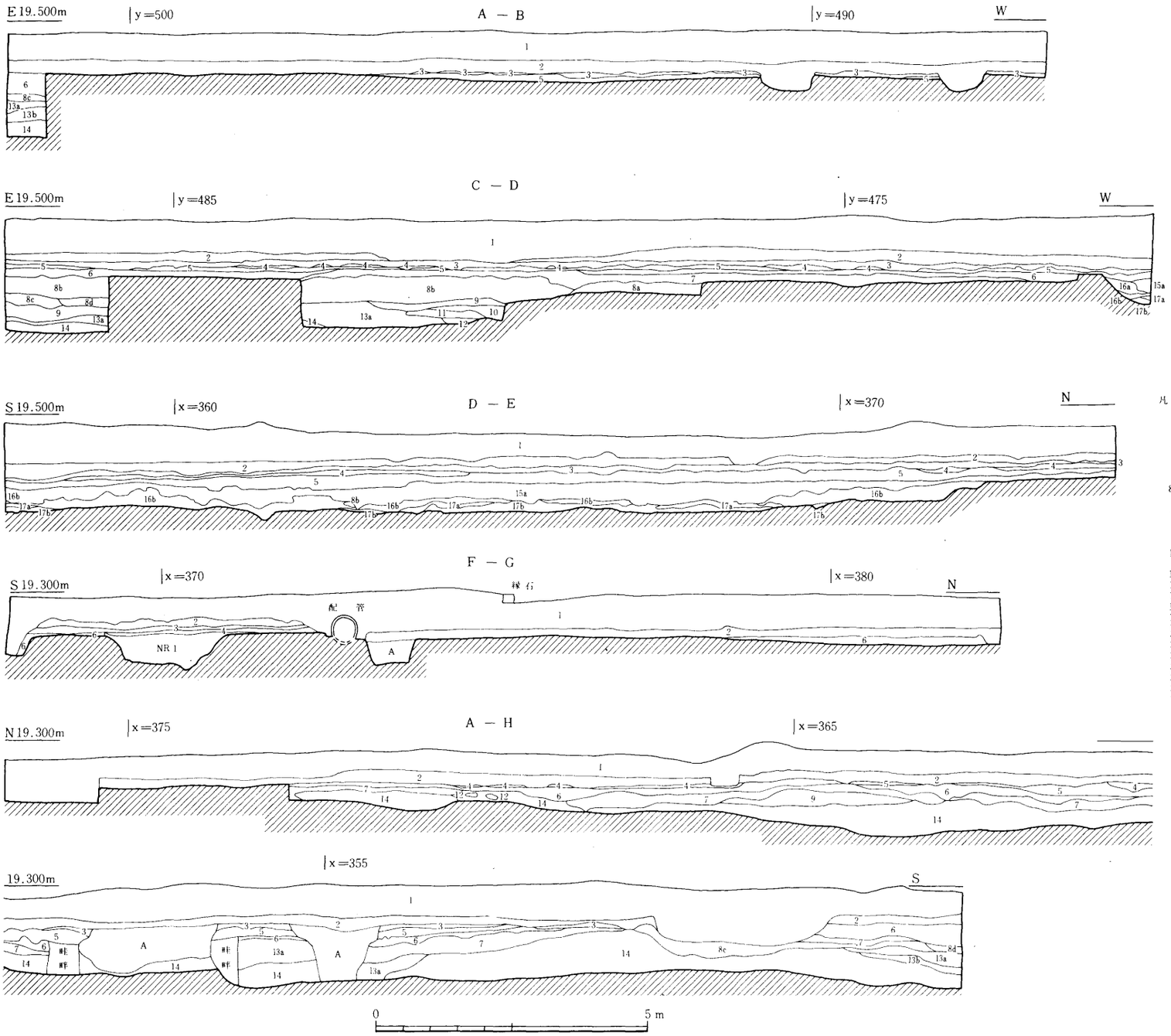
いしは遺物包含層が認められ、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。また、この層を掘り込んで近世の埋甕土壙1基が検出された。既設の自転車置場の基礎部分が同層に達していないことから、新営予定地では後世の削平が著しい北東部を除いてほぼ全面に遺構、遺物包含層が埋存していることが明らかとなった。試掘調査の結果を受けて埋蔵文化財資料館運営委員会は、新営工事の際には予定地内における事前の発掘調査が必要であるとし、その後の取扱いは調査結果を踏まえて協議することにした。

発掘調査は、自転車置場解体、撤去後の昭和62年9月14日から12月12日にかけて実施した。建物一階部分の面積は約500㎡であるが、教養部棟とをつなぐ共同溝および新営建物の周囲を巡る汚・排水管等の付随工事部分も調査対象となり、調査総面積は約900㎡となった。

なお、12月11日には現地説明会を開催し、調査の成果を公表した。

2　層位（Fig. 18, PL. 8）

現地表面の標高は約19.20～19.30mで、西側がわずかに高いものの、調査区全体ではほぼ平坦に近い。表土（構内造成時の埋め土）の層厚は約30～80cm、平均40～50cmである。表土の下位には基本的に耕作土、床土が認められるが、北・南東両端部では床土を欠く。4層：オリーブ褐色粘質土より下位が非人為的な堆積層であるが、同層は後世の削平により部分的にしか残存しておらず、遺物もほとんど出土していない。4層上面の標高は約18.60mである。5層：黒褐色粘質土は最大20cmの層厚をもち、南半部を中心に堆積する。古墳時代から平安時代および江戸時代の遺物を包含する。6層：オリーブ灰色粘質土は層厚約10cmで弥生時代から江戸時代の遺構の検出面である。同層が木炭を多く含んでいたことから部分的にトレンチを設定して調査したところ、層厚約10～20cmの7層：オリーブ灰色土とともに縄文時代晩期中頃の遺物包含層であることが明かとなった。両層とも不連続に堆積しており、遺物は南端部に設定したA・Bトレンチを中心に出土した。なお、北・南東両端部では耕作土の直下が6層である。7層の下位は木炭を若干含む層厚約20cmの灰オリー



凡例

1	表土	
2	耕作土	
3	床土	
4	オリーブ褐色粘質土	(2.5Y 4/4)
5	黒褐色粘質土	(2.5Y 3/2)
6	オリーブ灰色粘質土	(10 Y 5/2)
7	オリーブ灰色土	(10 Y 6/2)
8 a	灰オリーブ色粘質土	(7.5Y 5/2)
8 b	灰オリーブ色砂礫	(7.5Y 4/2)
8 c	暗緑灰色砂	(10GY 4/1)
8 d	暗緑灰色砂（8bに比べ粒度小）	(10GY 4/1)
9	暗緑灰色砂	(7.5GY 4/1)
10	暗緑灰色砂（9に比べ粒度小）	(7.5GY 4/1)
11	緑灰色砂	(7.5GY 5/1)
12	暗緑灰色砂礫	(10GY 4/1)
13a	緑灰色砂礫	(10GY 5/1)
13b	灰色砂	(10Y 4/1)
14	緑灰色礫	(10GY 5/1)
15a	黒褐色土	(2.5Y 3/2)
15b	黒褐色土	(2.5Y 3/1)
15c	黒褐色砂礫混じり土	(2.5Y 3/2)
16a	黒褐色土	(10YR 2/3)
16b	黒褐色粘質土	(10YR 3/2)
17a	黒褐色粘質土	(2.5Y 3/2)
17b	オリーブ黒色土	(5 Y 3/1)

Fig. 18　土層断面図

ブ色粘質土で、縄文土器が若干量出土したが、調査範囲内では時期を決定する資料には恵まれなかった。

C－D壁のy＝479付近の深掘りではその下に落し穴、河川跡の検出面である層厚約10～20cm暗褐色土が認められた。検出面の標高は約18.30mである。9a～14層は縄文時代の河川跡の埋積土で暗緑灰色ないしは緑灰色を基調とした砂、礫の互層である。15a～17bは第2号河川跡の埋積土で、黒褐色土および黒褐色粘質土、オリーブ黒色土の堆積が認められる。

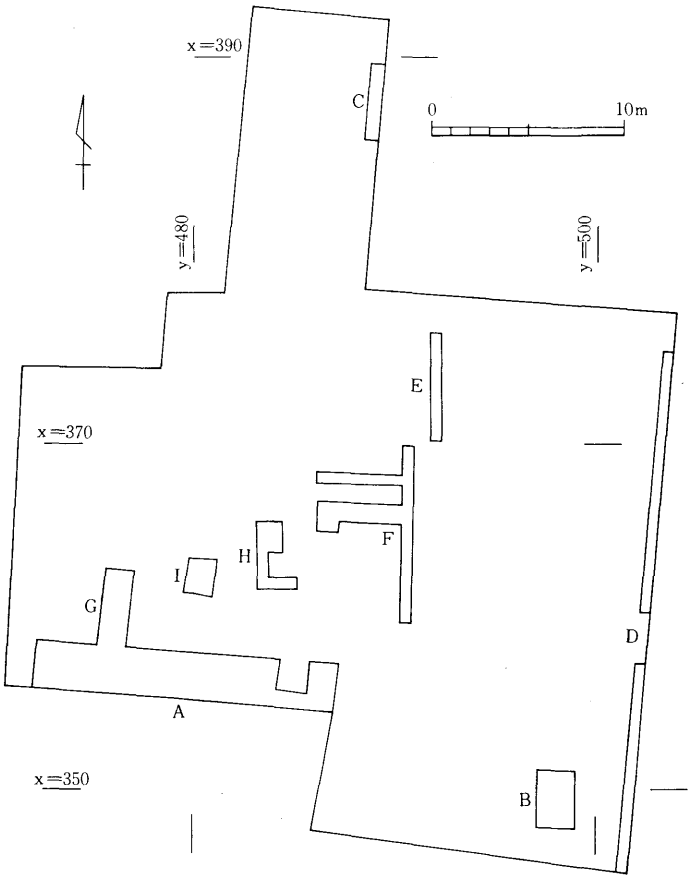


Fig. 19 トレンチ設定図

3 遺構・遺物

(1) 縄文時代の遺構・遺物

弥生時代以降の遺構検出の際、検出面の6層から縄文土器が出土した。そのため、木炭とともに土器が集中して分布していた調査区南端部にA（2.5×16m）・B（2×3m）二本のトレンチを設定し、遺物包含層の掘削を行った。6～8層の三枚の包含層を掘削した段階で、Aトレンチから河川跡が検出され、遺構検出の発端となった。また、その規模を調べるため、流路にあたると考えられた地域に設定した四本のトレンチのうち、Hトレンチから落し穴が検出された。なお、6層を検出面とするものには溝、浅い谷状の落ち込みがある。

落し穴（Fig. 21, PL. 9）

調査区中央部のHトレンチで検出した。当初はAトレンチで認められた河川跡の流路方向を調べるために設定したトレンチであったが、西端部分が検出されたためトレンチを拡

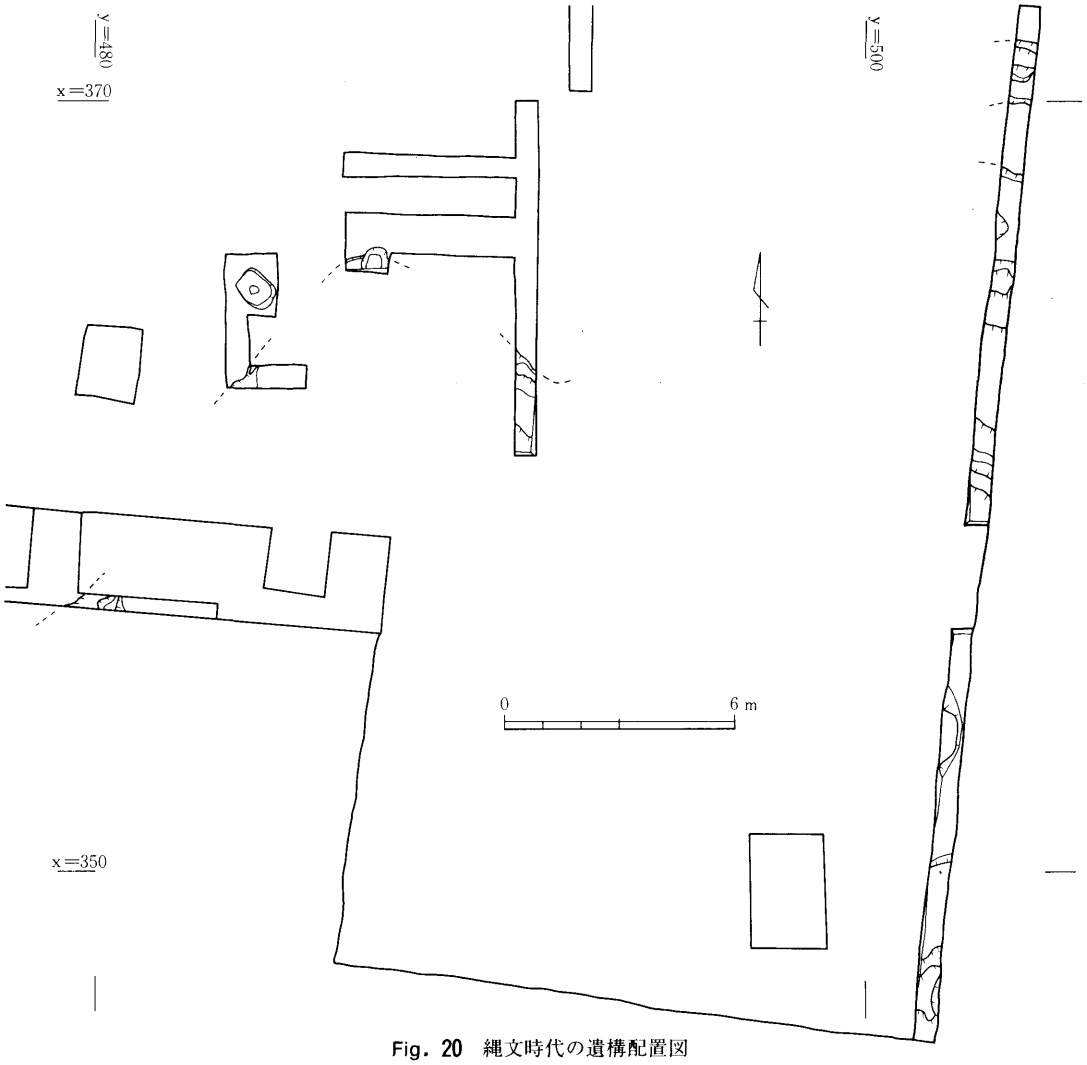


Fig. 20 縄文時代の遺構配置図

張した。平面形態は底面と同じく隅丸長方形で、長軸105cm、短軸78cm、検出面からの深さ25cmの規模をもつ。壁面は外方へ傾斜しながら立ち上がる。底面は中央部に向ってわずかに下降しており、長軸90cm、短軸72cmである。底面中央部には上面25cm×22cm、下面12cm×14cm、深さ58cmの円形のピットが存在する。ピット内には底面から10cm～49cmの範囲内に6個の板石状の自然石が縦位に詰められており、中央部には間隙が認められる。埋土は灰オリーブ色土（Hue10YR 6/2）である。検出面の標高は約18.25m。遺構の性格上、さらに同種の落し穴が存在する可能性があったため、F・Hトレンチを拡張後、さらにIトレンチを設定して調査したが検出できなかった。

内部からの出土遺物には縄文土器片および剝片1点がある。時期はにわかに決定しがたいが、検出面の直上層が晩期中頃の遺物包含層であること、同一面で同時期の河川跡が検出されていることおよび ^{14}C の測定結果から晩期中頃をそれほど遡るものではないであろう。

出土遺物（Fig. 22, PL. 18･23）

1は粗製の縄文土器で、小破片のため器形はわからない。外面ナデ、内面は荒い条痕を施す。2は剝片で上端部を欠損する。正面は左・右および上方向からの加撃による3枚の剝離面によって構成される。正面左側縁はヒンジフラクチャーをおこしている。

河川跡（Fig. 20, PL. 7(2)）

調査区南西部に設定したAトレンチで、東への落ち込みが確認された。そのため、さらに4本のトレンチを追加し、流路方向を調査した。その結果、調査区東壁に沿って設定したDトレンチのほぼ全面および調査区中央部のF、H両トレンチの南端部で落ち込みが検出された。F、Hトレンチ付近でやや蛇行しており北東から南西に向かって流れる。試掘調査の際、E地区でも検出していることから、幅約29m以上の規模をもつものと考えられ、検出面からの深さは最深部で約80cmである。検出面の標高は約18.20～18.40m。なお、Dトレンチ北端部で同一面で支流と考えられる幅約1.7m、深さ約40cmの河川跡が検出された。出土遺物には縄文土器深鉢、浅鉢および剝片がある。晩期中頃。

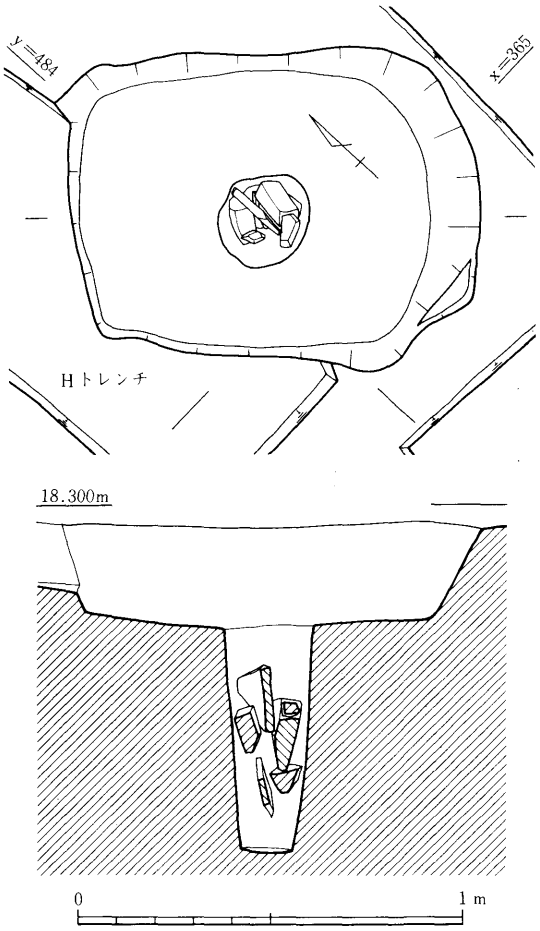


Fig. 21 落し穴実測図

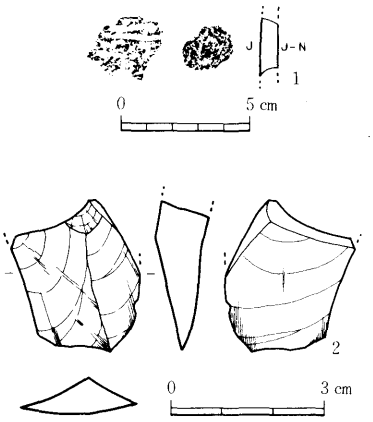


Fig. 22 落し穴出土遺物実測図

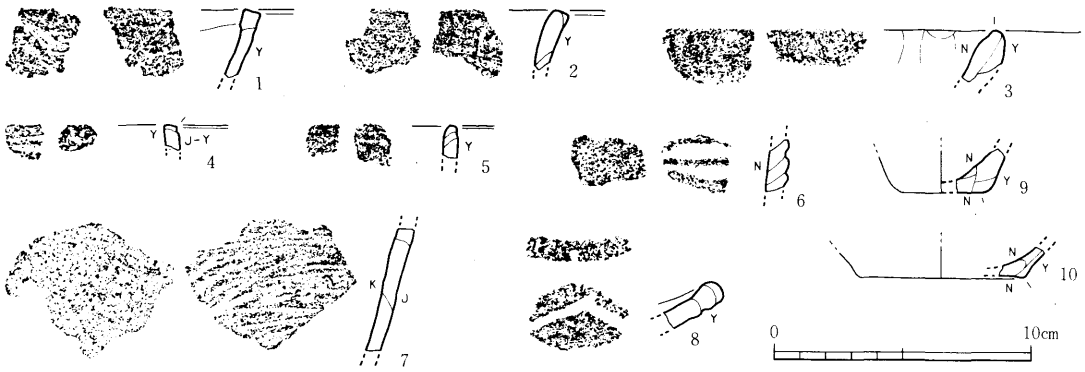


Fig. 23 河川跡出土遺物実測図

出土遺物（Fig. 23, PL. 18）

いずれも粗製で、風化、磨滅によって器面調整の観察が困難なものが多い。1～7は深鉢ないしは浅鉢。口縁部が内湾ぎみに立ち上がり内面に段をもつもの（1）、外傾するもの（2・3）、直立するもの（4・5）がある。端部は平坦なもの（1・2・4）と丸いもの（3・5）がある。内外面とも横ナデが多いが、3は内面ナデ、4は外面横条痕ののち横ナデ。6・7は胴部で7は外面横、斜め条痕、内面へラケズリを施す。8は波状口縁をなす浅鉢で、肥厚する口縁端部に刻み目、口縁下外面に1条の沈線を施す。端部は丸い。内外面横ナデ。9・10は底部。9は小形品で浅鉢であろう。

第3号溝

調査区中央部を北西から南東に走り、第1・3号竪穴住居跡を切っている。谷状の落ち込みに流れ込んでおり、検出した長さは約7mである。幅約40～60cm、検出面からの深さ3～4cmを残す。検出面の標高は約18.65m。出土遺物には石鏃1点がある。

出土遺物（Fig. 41－12）

凹基無茎式の石鏃で、先端部、脚部の片方を欠損する。抉りは浅く脚端部は平坦に近い。正面基部・左脚部側には樋状の調整加工が施される。

谷状遺構（Fig. 24・29, PL. 6）

調査区中央部から南東および南西に「U」字形に開く浅い谷状の落ち込みで、幅約2.5～5mの規模をもつ。深さは検出面から平均約10～15cmで、谷底へは緩やかに落ち込む。南東へは蛇行しながら北へ大きく開くが、深さは2～3cmと極めて浅い。検出面の標高は約18.55～18.65m。埋土は上層が黒褐色粘質土、下層が黒褐粘質土を含む砂礫である。

遺物は「U」字形に開く落ち込みの奥部付近に集中して、上層から古墳時代後期、下層か

ら縄文時代晩期の二時期のものが出土した。古墳時代の遺物は上層から若干出土し、量的には後者の方が多い。

出土遺物には縄文土器、土師器、須恵器、石器にほか比較的多量の剥片がある。縄文時代晩期終末の一時期に谷状の落ち込みが埋積し、埋まりきらなかった窪みに古墳時代の遺物が混入したものと考えられる。

出土遺物（Fig. 25, PL. 18･23）

土器（1～12）

1～9は縄文土器。1～5は突帯文の甕。1・2・4は口縁部が内傾する。1は口縁端部が短く外反し、突帯のやや下位に煤が付着する。刻目の有無は不明。2は刻目をもたない突帯の下位に2個の穿孔を有する。3は外反する口縁部をもち、端部よりやや下位の突帯にやや大きめの刻目をもつ。6～9は底部。6は浅鉢、7～9は甕ないしは深鉢。6～8は平底、9は窪み底。10・11は土師器。10は甕で、頸部内面に稜をもち、口縁部は短く外湾しながら開く。端部は丸い。11は高坏の脚部。12は須恵器の甕。口縁部は直線的に外反し、端部内面に断面三角形の低い貼付突帯をもつ。

石器（13～26）

13は磨製石斧の頭部。正面はほぼ平坦であるが、裏面は凸レンズ状に湾曲し、断面形はいびつな楕円形を呈する。正面右側面には縦方向の研磨が観察される。正面の3枚の剥離面は荒い成形段階のもの。14は砥石で、正・裏両面を研砥面とする中砥。下面に比べ上面の摩滅が著しい。研砥方向は不明。15～18は石鏃。15は凹基無茎式、16～18

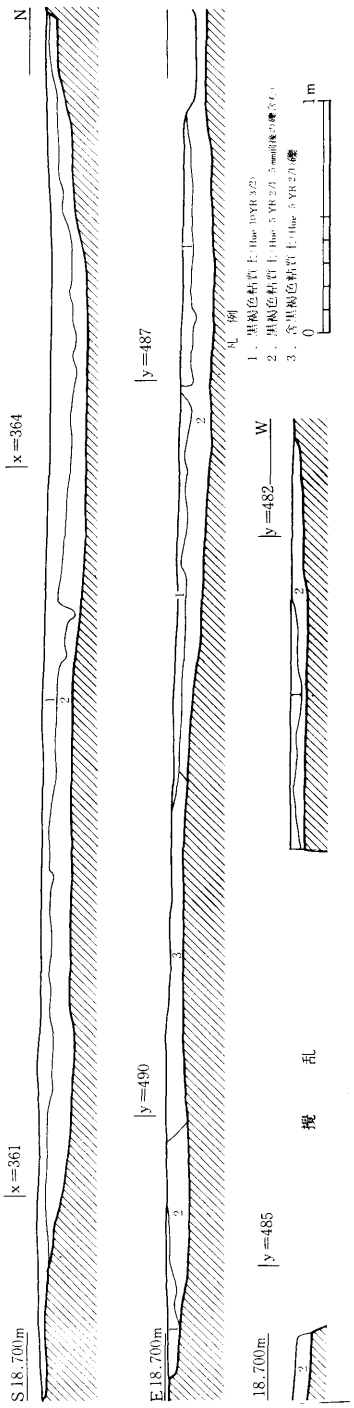


Fig. 24 谷状遺構土層断面図

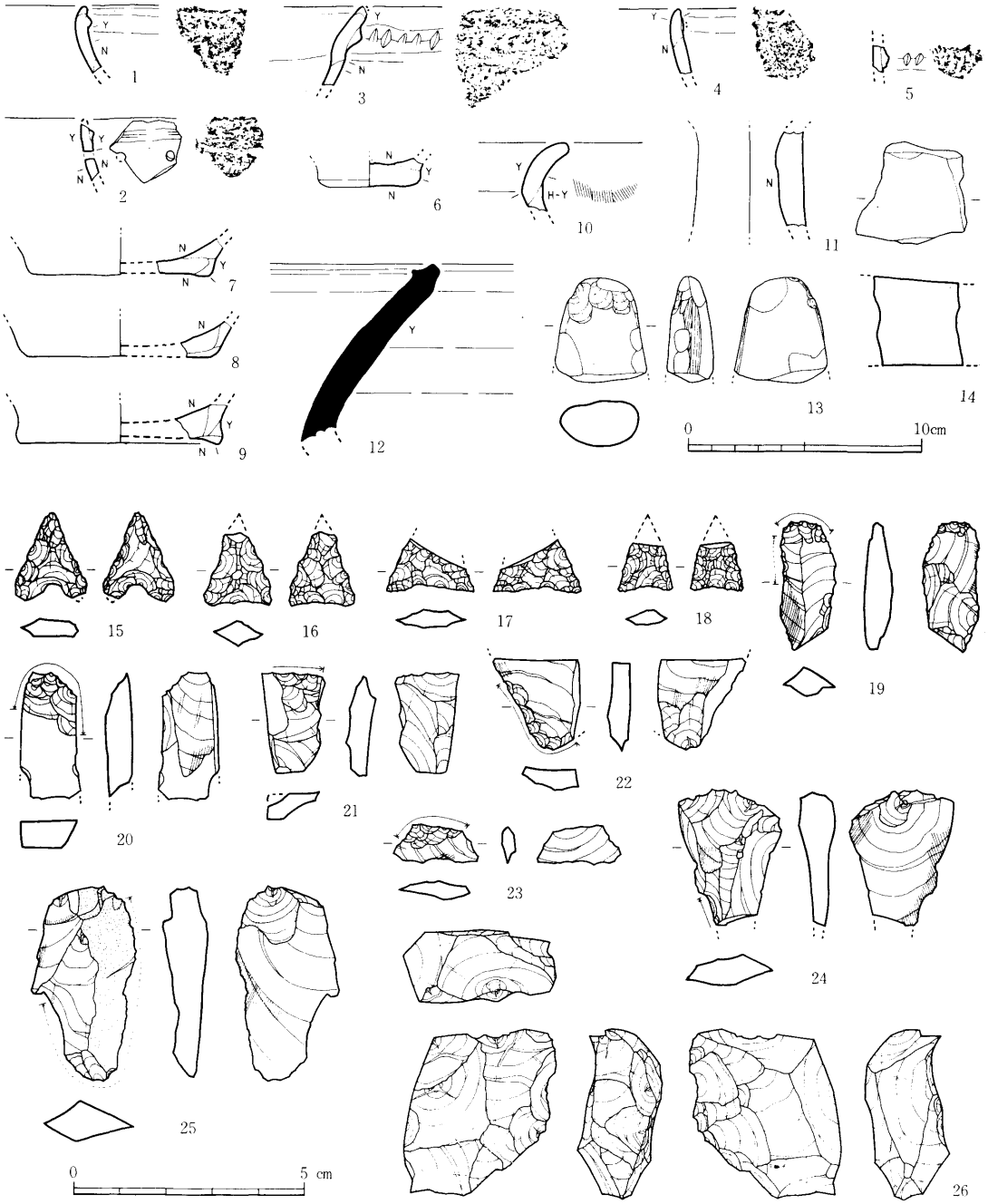


Fig. 25　谷状遺構出土遺物実測図

は平基無茎式。15は剝片鏃で、身部の中央には素材面を残す。脚端部が丸く、抉りは正面が1枚、裏面が2枚の剝離によって作り出される。16は左右対称で、二次加工も荒く、

やや厚手に仕上がっている。17は裾部が鋭く尖る。18は整った二等辺三角形を呈する小形のもので、基部はわずかに内湾する。19～24は加工痕のある剥片。19は正裏両面の上縁に二次加工が施され、スクレイパーとしての機能をもつものであろう。断面形は菱形を呈する。正面左側縁には使用痕と思われる微細な剥落痕が認められる。20・21は縦長剥片を素材とし、正面上縁部に荒い二次加工を施す。22は縦長剥片を素材とし、正面左側縁、下縁に連続する二次加工を施す。裏面下縁にも荒い二次加工がみられる。23は寸づまりの横長剥片を素材とし、主要剥離面である正面側には打点、打面を除去するように二次加工が施される。24は縦長剥片を素材とし、正面左側縁下半にノッチ状の二次加工を施す。正面上半部には自然面を若干残す。裏面側が主要剥離面で、ネガティブバルブを除去している。25は使用痕のある剥片。縦長剥片を素材とし、正面右側縁および左側縁下半に微細な剥落痕が認められる。正面右半には自然面を残す。裏面側はネガティブバルブを除去している。26は石核。剥片剥離作業はおのおのの作業面を打面として全周から行われており、打面

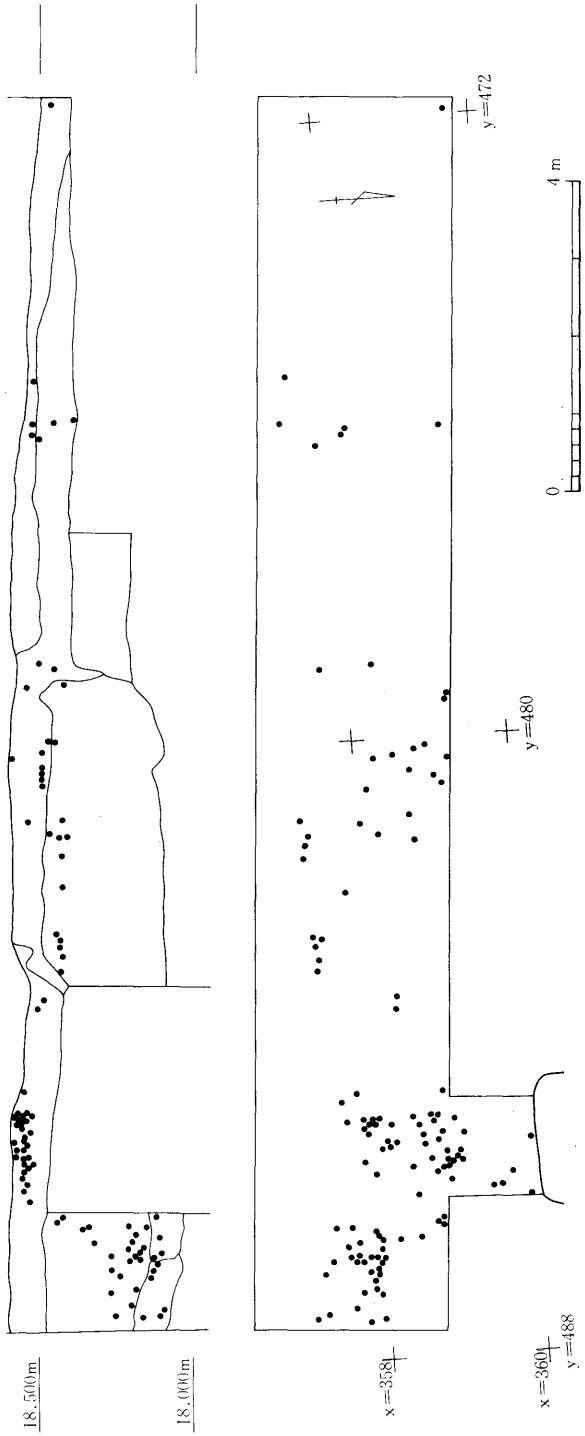


Fig. 26　Aトレンチ河川跡・包含層遺物出土状況

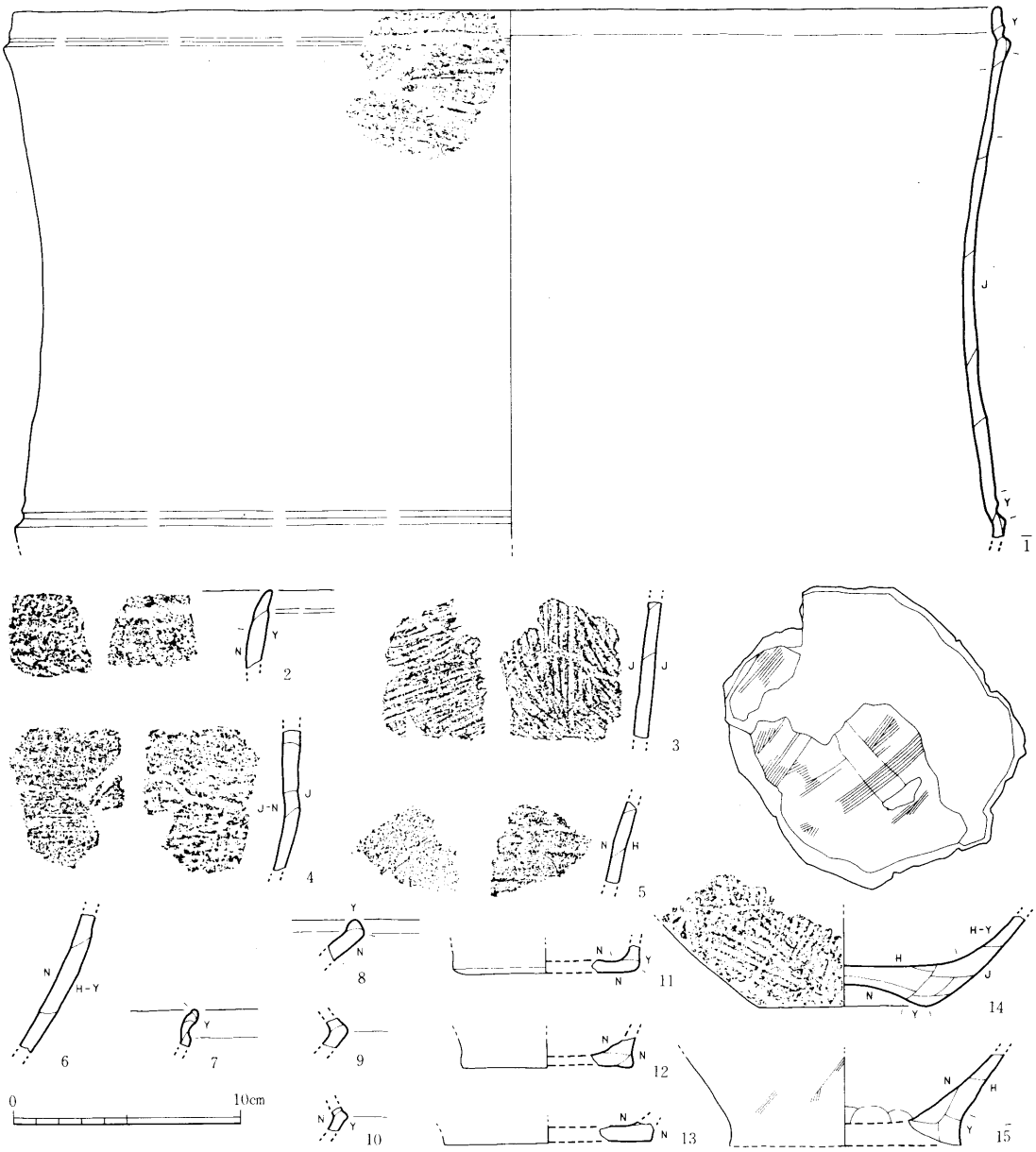


Fig. 27 包含層出土遺物実測図（土器）

の転移が著しい。目的剝片は寸づまりの小ぶりな縦長剝片であろう。

包含層出土遺物（Fig. 27・28, PL. 19・23・24）

遺物はA～Dトレンチで約140点出土した。C・D両トレンチではきわめて少量で、大

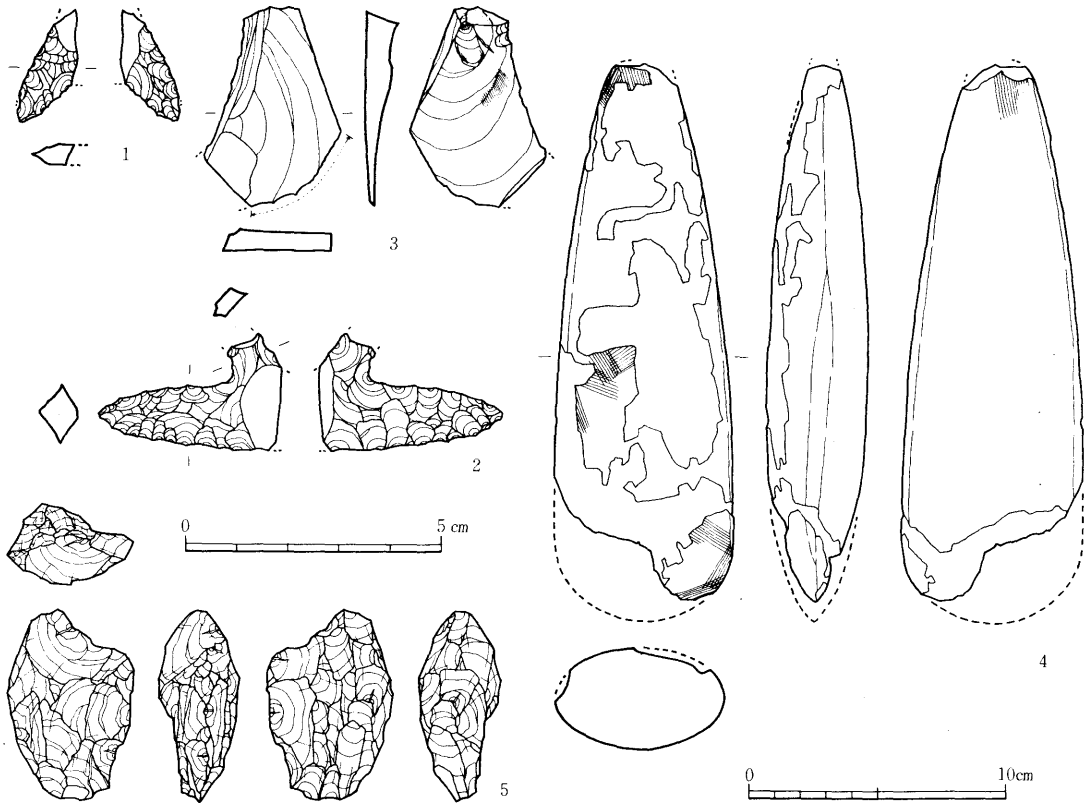


Fig. 28 包含層出土遺物実測図（石器）

半はＡトレンチ東端部、Ｂトレンチの６層に集中して出土した。土器は小破片が多く、図化しうるものは少ない。石器は剥片を含めて11点ある。

土器（Fig. 27）

粗製の深鉢、浅鉢がある。１～６は深鉢。１は大形品で、屈曲部から外湾しながら直立ぎみに立ち上がる胴部をもち、口縁部は短く内傾する。口縁部下、胴屈曲部の突帯および口縁部に刻み目はない。２は直立ぎみにわずかに外反する口縁部をもつ。３～６は胴部。４は屈曲部に稜をもたない。３・４は内外面条痕、４はそののち内面をナデている。５は外面横刷毛目、６はそののちナデている。３・６は外面に煤が付着する。７～10は浅鉢。７は口縁部が胴部から屈曲して外側に短く開く。８は口縁端部に断面三角形の肥厚帯をもつ。９・10は胴部の屈曲部で、10は外面に明瞭な稜が認められる。11～14は底部。11はほぼ直立して立ち上がる。14はくぼみ底で、外面は荒い縦、斜め条痕、内面刷毛ののちナデで指頭圧痕が残る。岩田Ⅳ類[3]・月崎上層Ⅲ式[4]併行と思われ晩期中頃に位置づけられる。

石器（Fig. 28）

石鏃、石匙、使用痕のある剥片、磨製石斧、石核、剥片がある。1はやや大形の凹基無茎式の石鏃の脚部片端。基部の抉りは比較的深く、脚端部は尖る。2は横形の石匙で、つまみ部上端、正面右半分を欠損する。素材の長軸とつまみ部の長軸とが斜交し、上下両側辺に刃部をもつ。端部は尖る。正面に比べ裏面の加工は荒い。3は使用痕のある剥片で、打面には自然面を残す。正面左端部を欠損するが、下縁には微細な剥落痕が認められる。4はAトレンチと試掘調査A地区との接合資料である。刃部幅が基部幅の約3倍近くになる平面形態が撥形を呈する磨製石斧で、刃部の大半と基部を欠損する。正面の剥落が著しいが研磨は丁寧。5は石核。打面、打点は一定しておらず、剥片剥離作業面を打面とする。剥片剥離作業はほぼ全周から行われ、目的剥片は寸づまりの小形の縦、横長剥片である。

2　弥生時代以降の遺構・遺物

調査区北東端部を除いてほぼ全面に分布するが、後世の削平によって北端部の遺存度はよくない。検出遺構には弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡4基、古墳時代の河川跡、江戸時代の井戸2基、埋甕3基、掘立柱建物跡2棟のほか、土壙13基、溝2条、柱穴多数がある。

竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（Fig. 30, PL. 12）

調査区北西部で検出された住居跡で、第2・3号竪穴住居跡を切っており、第1号溝に切られている。北辺部は後世の削平によって消失している。平面形態は方形で、南北軸214cm以上、東西軸208cmの規模をもつが、検出面からの深さは4cmを残すにすぎない。検出面の標高は約18.60m。ほぼ平坦な床面には9個の柱穴が認められるが、床面からの深さが10cm前後で本住居跡に伴うものとは考えられない。西半中央部には平面形態が不整楕円形の66×42cm、床面からの深さ15cmの掘り込みが検出された。

内部からの出土遺物はないが、埋土の色調、椹野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷[5]および切り合い関係から古墳時代のものと考えられる。

第2号竪穴住居跡（Fig. 30）

第1号竪穴住居跡の西に近接する住居跡で、同住居跡に切られているが、第3号竪穴住居跡との切り合い関係は明かでない。南半部は後世の削平によって消失している。平面形態は不整円形ないしは不整楕円形で、上面径340cm以上の規模をもつ。残存状態はきわめて悪く、検出面からの深さは2cmである。検出面の標高は約18.60m。床面は平坦で、少なくとも7個の柱穴が認められる。しかし、主柱穴と考えられるのはP1ぐらいで、他

Fig. 29　弥生時代以降の遺構配置図

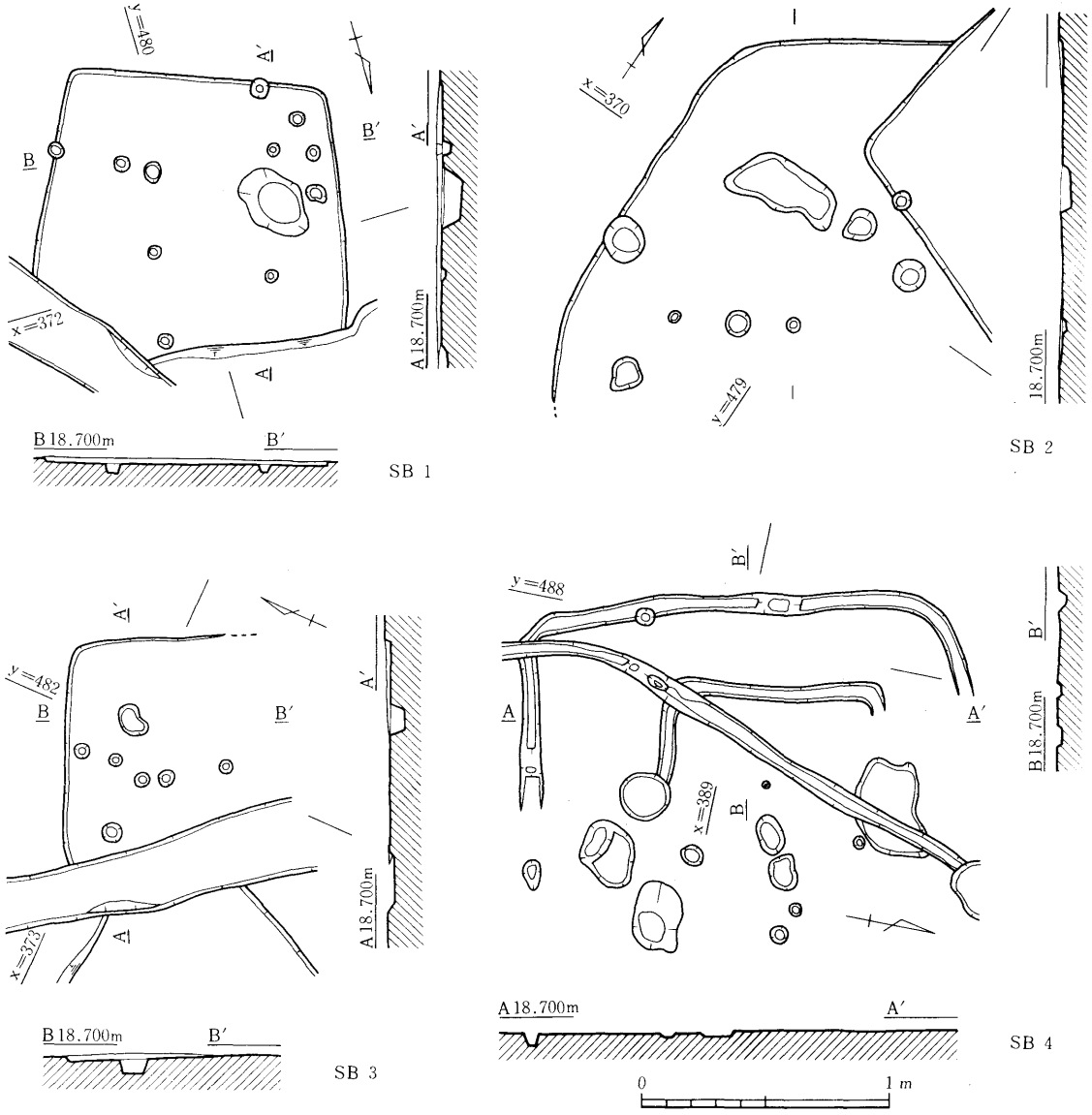


Fig. 30 竪穴住居跡実測図

は床面からの深さが10cmに以下で本住居跡に伴うものとは考えられない。

内部からの出土遺物はないが、埋土の色調、平面形態および上面径6.5m前後、床面積約30m²の規模をもつことから、椹野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷および切り合い関係から弥生時代中期から後期のものと考えられる。

第3号竪穴住居跡（Fig. 30, PL. 12）

第1号竪穴住居跡の東に近接する住居跡で、同住居跡に切られている。南半部は後世の

削平によって消失している。平面形態は方形ないしは長方形で、南北軸172cm以上、東西軸170cm以上の規模をもち、検出面からの深さは5cmを残す。検出面の標高は約18.60m。やや北に向かって下降する床面には8個の柱穴が認められるが、第1・2号竪穴住居跡同様、床面からの深さが10cm以下で本住居跡に伴うものとは考えられない。

内部からの出土遺物はないが、埋土の色調、椹野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷および切り合い関係から弥生時代後期から古墳時代のものと考えられる。

第4号竪穴住居跡（Fig. 30, PL. 13）

調査区北端部で検出された住居跡で、第3号溝に切られている。後世の削平によって西半部が消失しており、壁溝のみが東半部に残存する。平面形態は方形ないしは長方形と思われ、東辺350cmの規模をもつ。壁溝の深さは検出面から5～6cmである。検出面の標高は約18.60m。また、住居内には各周壁に沿って「コ」の字状に巡る1条の溝が検出された。建て替えに伴うものと考えられ、東辺180cmの規模をもち、深さは検出面から2～3cmである。主柱穴の配置は明かではない。

内部からの出土遺物はないが、埋土の色調および椹野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷から弥生時代後期から古墳時代のものと考えられる。

河川跡

第1号河川跡（Fig. 31, PL. 14(1)）

調査区北部で検出した。中央部付近は配水管、暗渠が貫通し消失している。北東から南西に貫流し、検出した流路長は約9mである。幅約2m、検出面からの深さ約50cmの規模をもつ。検出面の標高は約18.60m。右岸側は川床まで急傾斜に落ち込むが、左岸側は川床から緩やかに立ち上がり、川岸付近に部分的に存在する狭い平坦面から急激に立ち上がる。断面形は基本的には「V」字形である。

左岸南西部には同一の流路方向をもつ幅20～30cm、深さ5～6cmの溝が検出された。攪乱坑による消失および調査区外のため一部未調査であるが、一連のものと思われ、長さは約13mである。切り合いが認められず、同河川跡の支流もしくは取水溝と考えられるが、合流点付近にはなんら取水施設は認められなかった。

埋積土は基本的に上層が粘質土ないし砂で、下層は砂と礫の互層である。

出土遺物には土師器甕、高坏、器台、手捏土器、須恵器短頸壺蓋、須恵器模倣土師器坏、打製石斧、石鏃、加工痕のある剝片がある。河川跡が縄文時代の遺物包含層を削って流れているため一部時期の遡る遺物が含まれるが、おおむね5～6世紀に機能していたものと

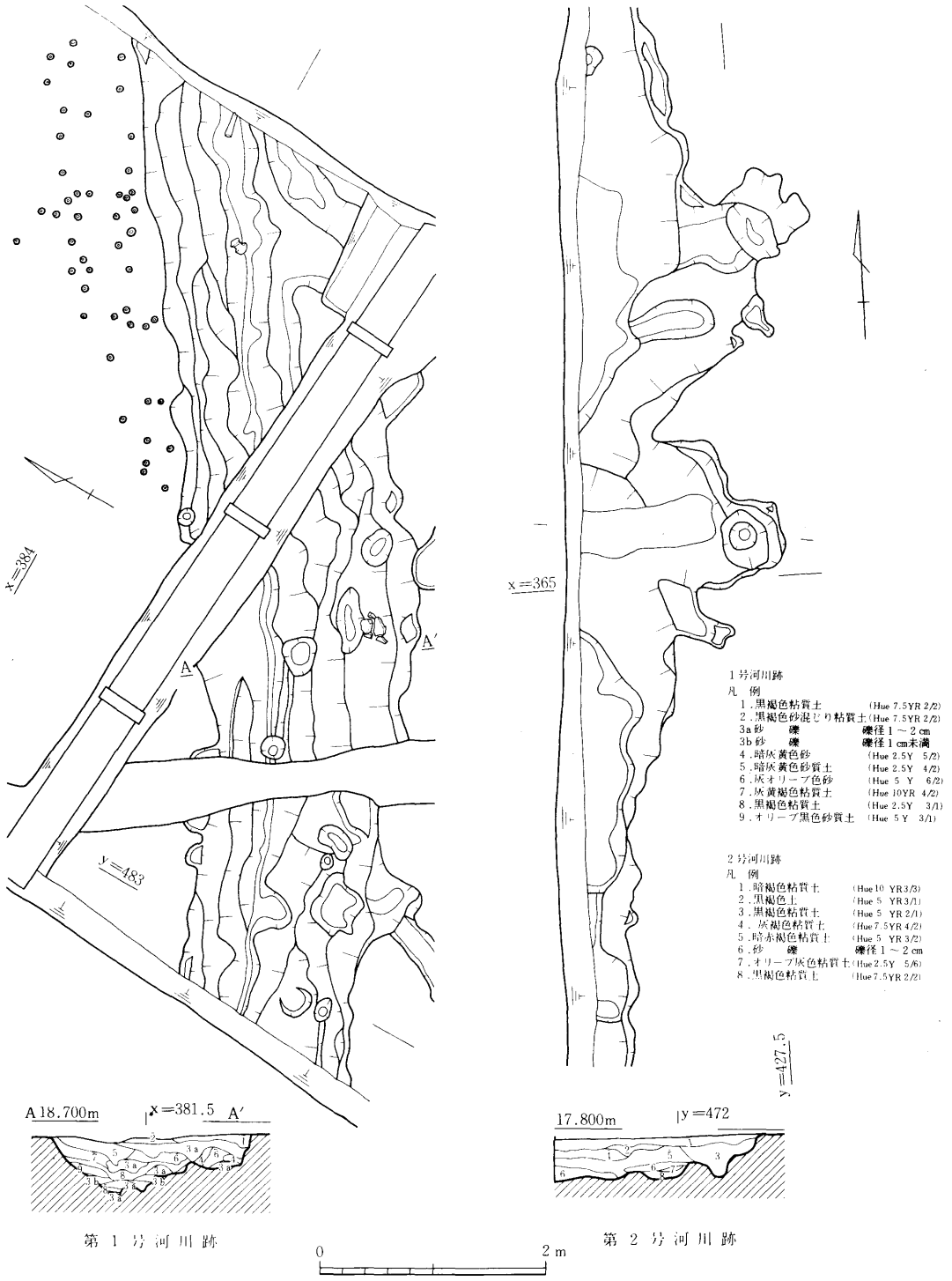


Fig. 31 第1・2号河川跡実測図

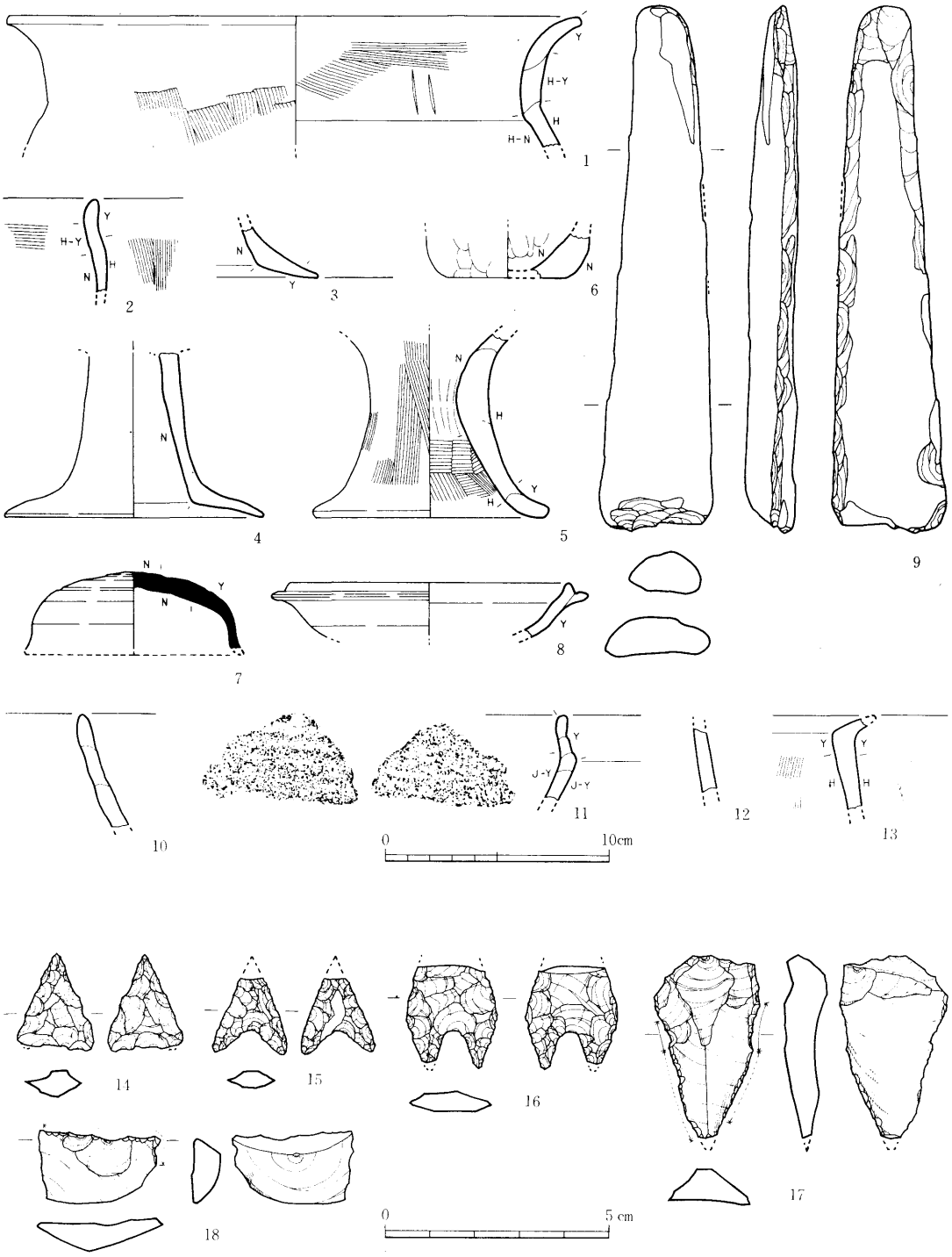


Fig. 32 第1・2号河川跡出土遺物実測図

考えられる。

出土遺物（Fig. 32, PL. 20･23･24）

土器（1～8）

1～5は土師器。1・2は甕。1は頸部内面にわずかに稜をもち、口縁部は外湾しながら中位付近でやや強く開く。口縁部内外面の横ナデは荒く刷毛目が残る。2は小形の甕で、しまりのない頸部から直立する短い口縁部をもつ。口縁端部は丸い。3・4は高坏脚部で、裾部内面は接地せず、斜下方に開く。3は脚柱部から屈曲せず裾部にいたる。4は脚柱部が比較的長く、裾部で強く屈曲しやや内湾ぎみに開く。5は支脚で口縁部を欠損する。裾部の開きは短く、裾部付近の刷毛目は荒い。内面と外面は異なる刷毛工具を用いる。6は手捏土器の底部で、埦状のものであろう。内外面には指頭圧痕が顕著に残る。7は須恵器短頸壺の蓋。天井部から体部にゆるやかに下降し、口縁端部は短く外反するものと思われる。天井部はヘラ切り放しののち若干ナデている。体部には重ね焼きの痕跡が残る。8は須恵器模倣土師器の坏身。立ちあがりは断面三角形で、上方に短く開く。立ちあがりと蓋受け部の境はわずかに窪む。

石器（9・14・17）

9は片刃の打製石斧。緑簾石石英片岩を石材としていることから剝落が著しい。加工は比較的荒く、特に裏面側の頭部は大きな剝離面によって構成されている。断面形は扁平な楕円形で、頭部にむかうにつれて丸みをおびる。頭部幅2.3cm、刃部幅5.0cm。14は石鏃で平基無茎式。正裏両面とも比較的大きな剝離面によって構成される。加工は粗雑で断面形は菱形状を呈する。17は加工痕のある剝片で、下端部を欠損する。縦長剝片を素材とし、正面の左右両側縁上半には裏面側からノッチ状の二次加工を施す。正面上半中央部には上端部の一枚の剝離面を打面として加撃が行われ、素材の高まりが除去されている。また、裏面側は2枚の剝離面によってネガティブバルブが除去される。

第2号河川跡（Fig. 31, PL. 14(2)）

調査区西端部で検出した。北から南に貫流するが、右岸側は調査区外にあたるため、確認していない。検出した流路長は約15mで、幅1.8m以上、検出面からの深さ約45cmの規模をもつ。検出面の標高は約18.60m。川床は起伏に富み、北半部は流路がかなり乱れている。

埋積土は川床に約5～10cmの砂礫層が堆積している以外はすべて粘質土である。規模、位置関係、出土遺物から第1号河川跡と同一河川の可能性があるが、本稿では区分して報

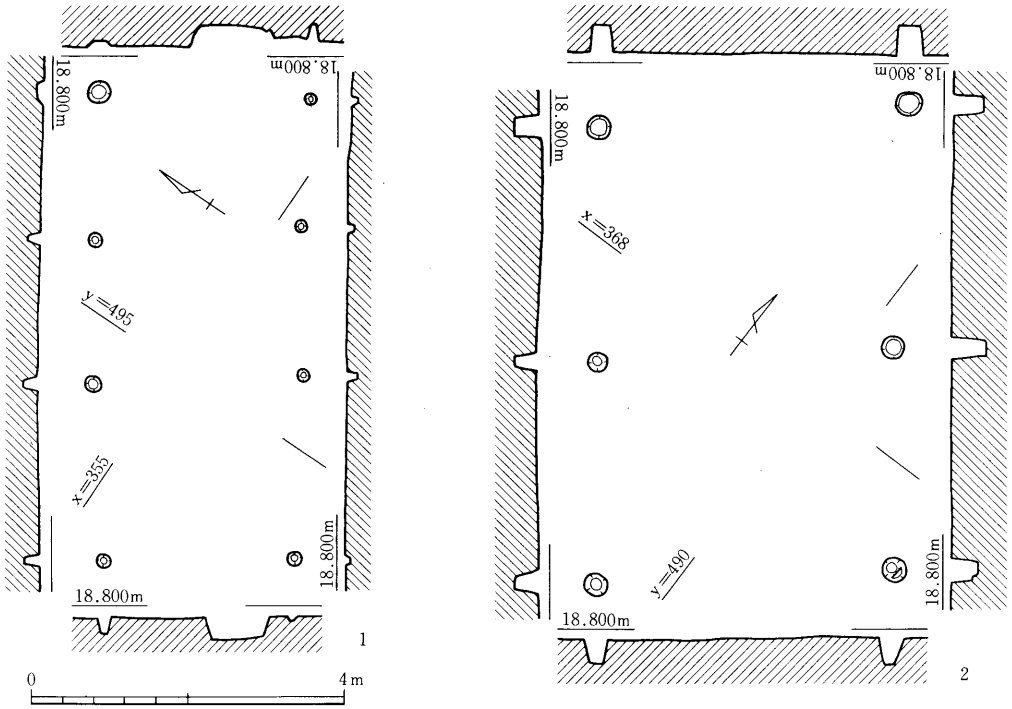


Fig. 33 掘立柱建物跡実測図

告する。

出土遺物には縄文土器深鉢、浅鉢、土師器甕、石鏃があるが、第1号河川跡と比べて量的には少ない。第1号河川跡同様、縄文時代の遺物包含層を削って流れているため、一部時期の遡る遺物が含まれるが、おおむね5～6世紀代に機能していたものと考えられる。

出土遺物（Fig. 32, PL. 20･23）

土器（10～13）

10・11は粗製の縄文土器深鉢。10は直線的に内傾する口縁部をもち、端部は尖る。12は粗製の浅鉢。口縁部は直線的に短く内傾し、胴部との境にはわずかに稜をもつ。13は土師器甕で、「L」字状に短く外反する口縁部をもつ。

石器（15・16・18）

15・16は凹基無茎式の石鏃。15は先端部から脚端部まで直線的に開く。脚端部は尖る。抉りの深さは5㎜で、基部から全長の約¼まである。16は脚部が外方に開かず、直立する。端部は尖る。先端部、脚部の片方を欠損する。抉りは深く、抉り部幅10㎜、抉りの深さは8㎜である。抉りの最深部は一枚の大きな剝離面によって構成される。裏面上半中央部には素材面を残す。18は使用痕のある剝片。素材は打面に自然面を残す横長剝片で、

正面、右側縁部上端部に細かな剝落痕が認められる。

掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡

(Fig. 33－1, PL. 15(1))

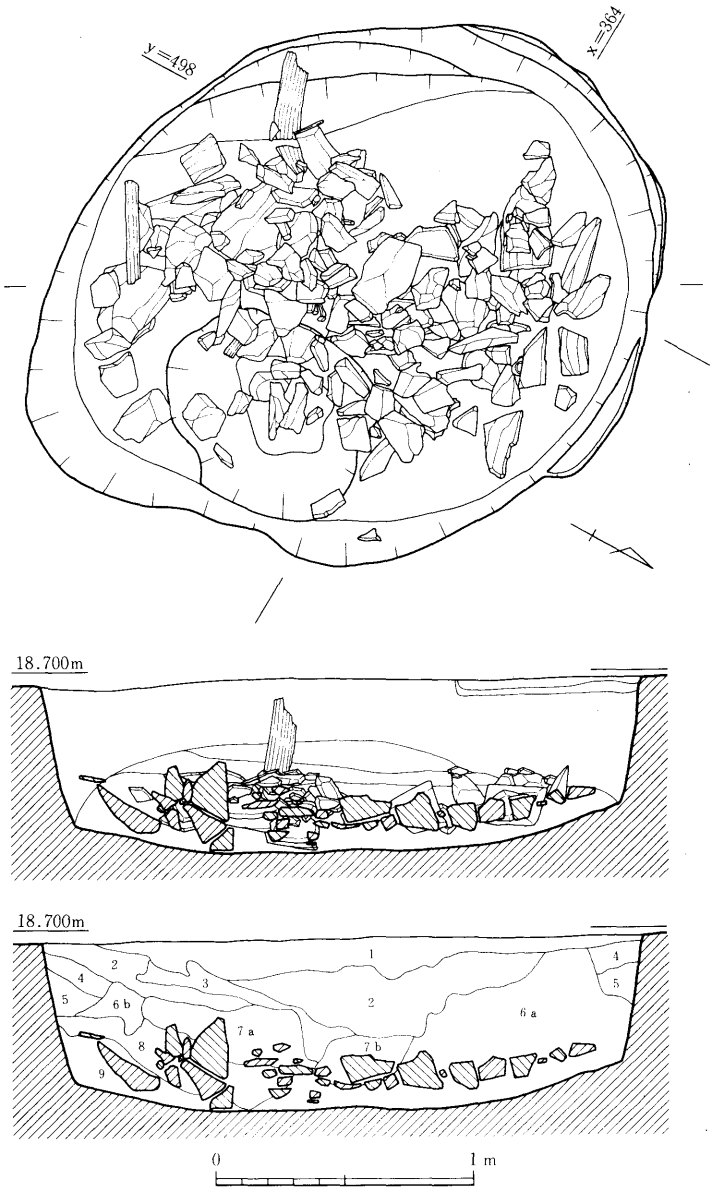
調査区南東部で検出した身舎1間×3間の建物跡である。棟方向に平行に現代の暗渠が走る。検出面の標高は約18.65～18.70m。北隅を起点として、桁行長6.0m、梁行長2.8mの規模をもつ。棟方向は北東－南西で、N－54°－E。桁方向の柱間距離は平均約2mで、柱穴の上面径は15～20cm、深さは20cmのものが多い。柱穴の埋土はオリーブ褐色粘質土(Hue2.5Y 4/4)。

出土遺物はないが、第2号井戸に近接して位置することから17世紀頃のものと思われる。

第2号掘立柱建物跡

(Fig. 33－2, PL. 15(2))

調査区の中央部付近で検出した身舎1間×2間の建物跡である。検出面



凡　例
1　オリーブ褐色土　(Hue 2.5Y 4/4)
2　暗オリーブ褐色土(Hue 2.5Y 3/3)木炭をブロックで含む
3　暗灰黄色砂礫　(Hue 2.5Y 4/2)
4　黒褐色粘質土　(Hue 2.5Y 3/1)木炭を含む
5　オリーブ灰色粘土(Hue 10 Y 5/2)
6a　オリーブ黒色砂礫(Hue 7.5Y 3/2)
6b　灰オリーブ色砂礫(Hue 5 Y 4/2)
7a　暗オリーブ色粘土(Hue 5 Y 4/3)
7b　オリーブ黒色粘土(Hue 7.5Y 3/1)
8　オリーブ黒色粘土(Hue 7.5Y 3/2)
9　オリーブ黒色礫　(Hue 7.5Y 3/2)

Fig. 34　第1号井戸実測図

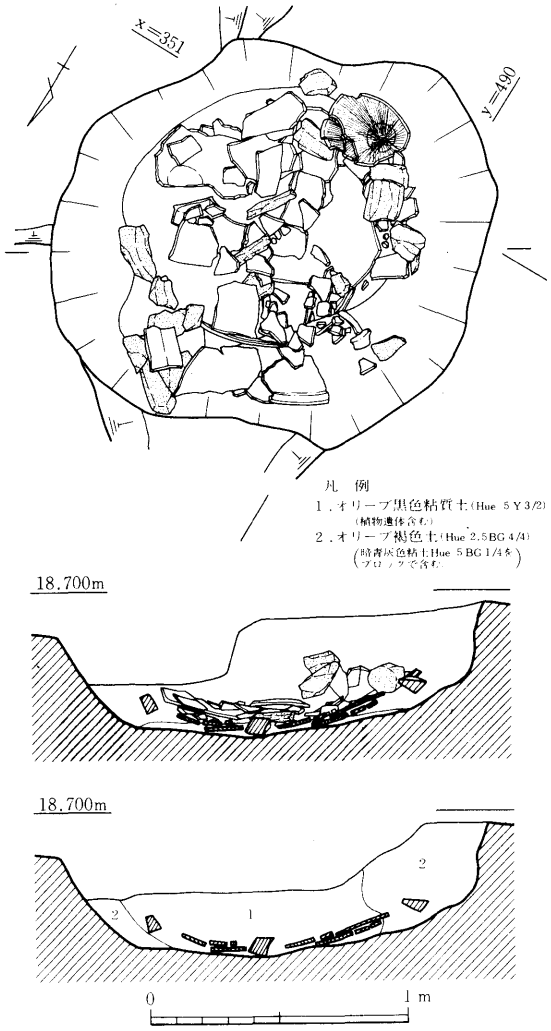


Fig. 35　第2号井戸実測図

の標高は約18.70m。北隅を起点として、桁行長6.0m、梁行長4.2mの規模をもつ。棟方向は北西－南東で、N－36°－W。桁方向の柱間距離は平均約3.1mで、柱穴の上面径は20～30cm、深さは30～40cm。柱穴の埋土はオリーブ褐色粘質土(Hue2.5Y 4/4)。

出土遺物はないが、第1号井戸に近接して位置することから17世紀頃のものであろう。

井戸

第1号井戸（Fig. 34, PL. 16(1)）

調査区東半の中央部付近に位置し、谷状の落込みの埋土上面が検出面である。平面形態は円形に近い楕円形で、上面径2.5×2m、底面径2.2×1.5mの規模をもつ。壁面は底面から急傾斜に立ち上がる。底面は西から東に下降しており、東端部では底面から深さ約10cmの円形状の落ち込みが認められる。検出面からの深さは最浅部で約35cm、最深部で約75cmである。底面には多数の自然石が散乱している。検出面の標高は約18.65m。

出土遺物には陶器鉢、椀のほか曲物底板、棒状木製品、篦状竹製品および植物遺体がある。17世紀代。

出土遺物（Fig. 36･37, PL. 20･24）

土器（Fig. 36－1・2）

1は口縁部外面が玉縁状に肥厚する鉢で、端部は口禿である。2は二段状の高台をもつ椀で、高台側面より上位に施釉する。内面見込みの一部に自然釉がかかる。高台側面には3個の円錐トチが付着する。

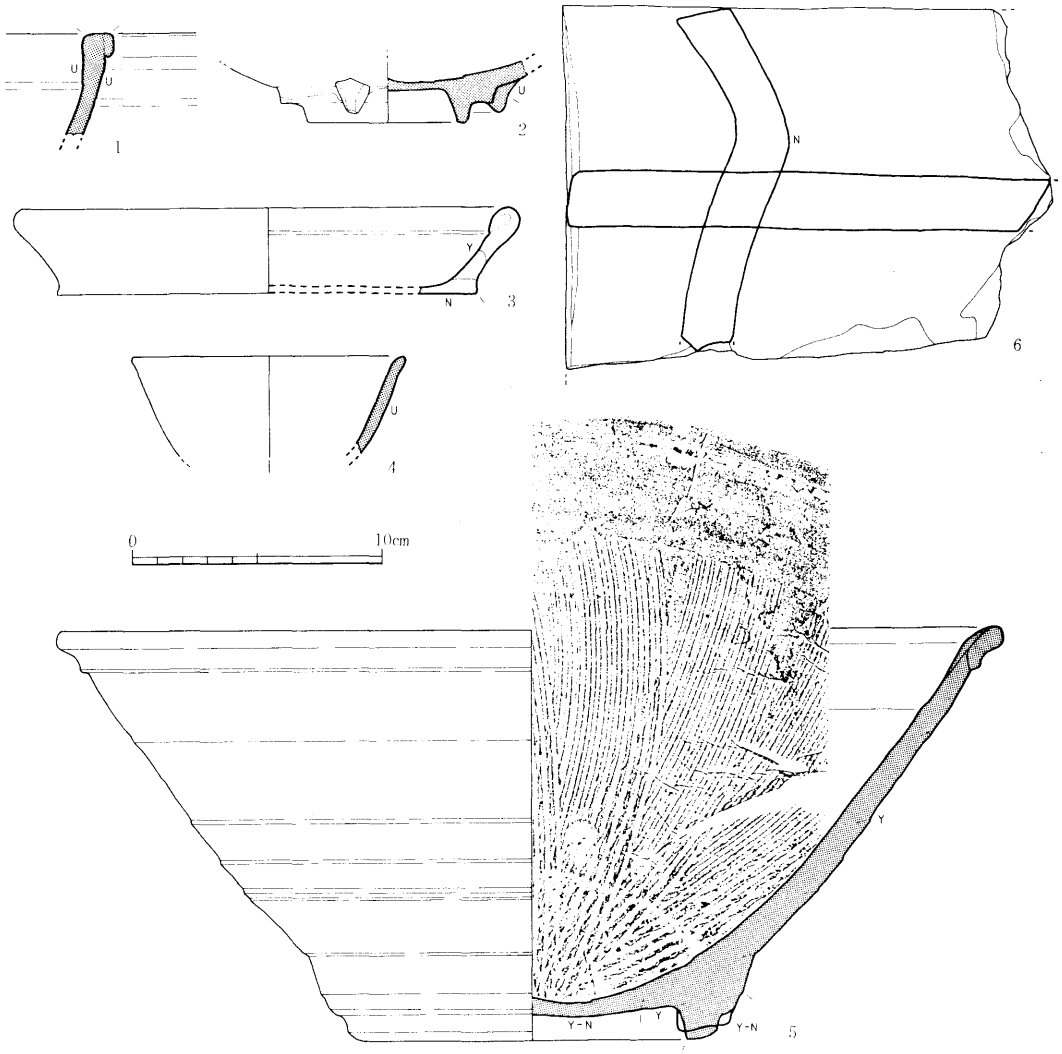


Fig. 36 井戸出土遺物実測図（1・2－第1号井戸　3～6－第2号井戸）

木・竹製品（Fig. 37）

1は楕円形曲物の底板で、下半部を欠損する。横木どりで、側板をあてるために、周縁の内側を一段低くつくり出す。目釘穴は認められない。2は棒状木製品。農工具の柄の可能性があるが、下半部を欠損するため明かでない。両側縁は面取り状に加工し、断面形は頭部が扁平な楕円形、中位以下が楕円形を呈する。頭部への敲打痕はない。縦木どり。3、4は竹製で同一品と考えられるが、接合しなかった。3は頭部に目釘穴をもち、上端に紐ずれと思われる横方向の擦過が残る。左側面は火熱を受け煤が付着する。4は上端部に

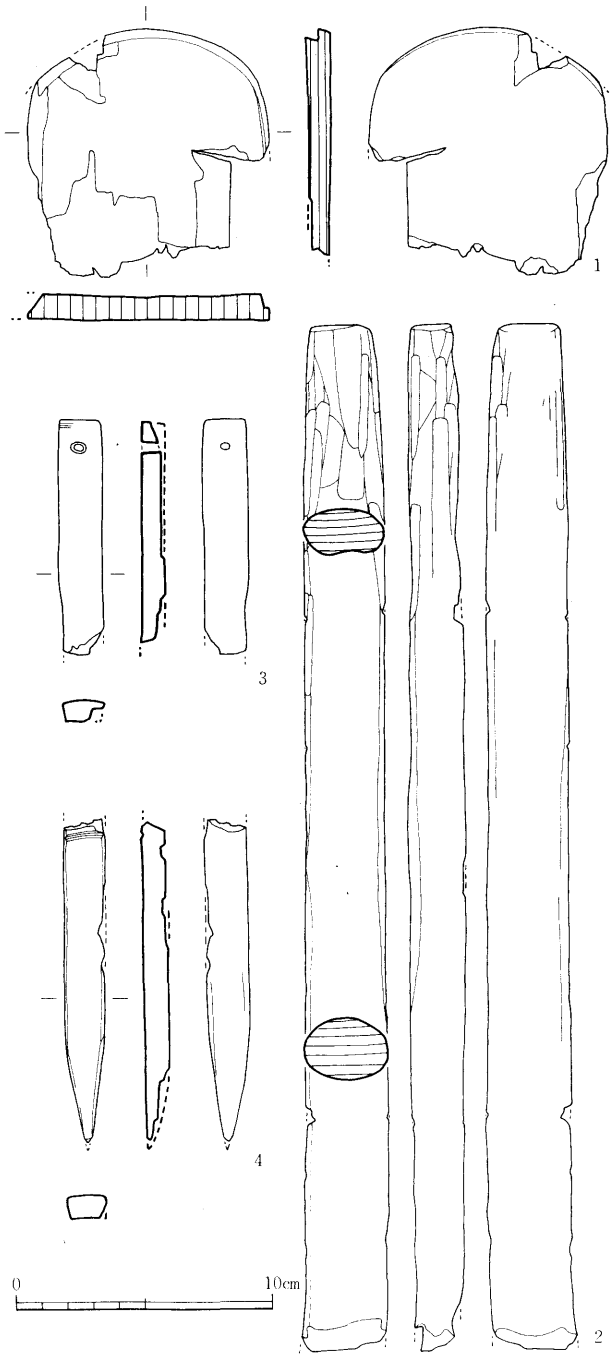


Fig. 37 第1号井戸出土遺物実測図

節をもち、下端部は左右両側面および裏面を加工し、尖らせる。二点とも左右両側面を面取りし、正面は素材面を残す。

第2号井戸

(Fig. 35, PL. 16(2))

調査区南端の中央部付近に位置し、第1号井戸同様、谷状の落ち込みの埋土上面が検出面である。本学統合移転前の水田に伴う暗渠によって東半部を若干削平されている。平面形態は円形に近く、上面径1.5～1.8m、底面径0.9～1.2mの規模をもつ。壁面は底面から緩やかに立ち上がり、断面形は擂鉢状を呈する。検出面からの深さは約50cmである。底面には自然石とともに土師質土器の甕一個体分が投げ込まれている。検出面の標高は約18.65m。出土遺物には土師質土器盤・甕、磁器埦、陶器擂鉢および植物遺体がある。17世紀前半。

出土遺物 (Fig. 36－3～6、Fig. 38, PL. 20・25)

3は土師質土器の盤で、口縁端部を内側に巻き込み肥厚させる。4は磁器埦で、口縁端部がわずかに外反する。5は陶器擂鉢。口縁部は短く外反し、内面には12本単

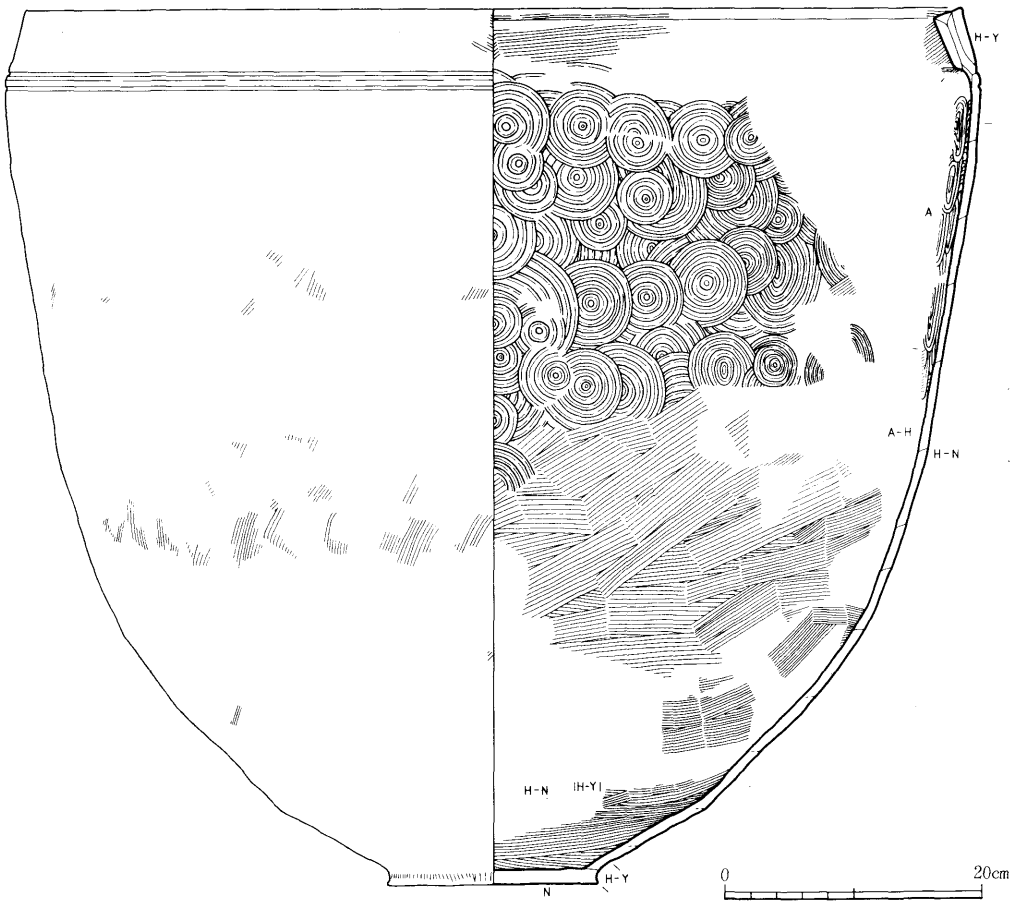


Fig. 38 第2号井戸出土遺物実測図

位の櫛歯描き上げを重ねながら左方向に施す。畳付きは無施釉で、一箇所を指頭による指圧によって切り高台状に窪ませる。底部と体部の境付近の内面には重ね焼き時の放れ砂が付着する。6は桟瓦で葺足長は不明。凹面は縦方向、凸面は横方向ナデ。前・側端部は縁に沿ってナデる。金雲母を多く含む。

Fig. 38は土師質土器の大甕。口縁部は肥厚し、直線的に内傾する。端部は平坦。頸部外面には二条の浅いヘラ描き沈線を施し、内面には段をもつ。幅約5～6cmの粘土帯を輪積み成形するが、法量にくらべて器壁が薄い。胴部から頸部はタタキによる調整で、内面上半部には同心円の当て具痕がそのまま残るが、下半部はそののち横、斜め刷毛を施す。外面は刷毛目ののちに荒いナデが行われており、タタキの種類は明かでない。他に寛永通宝1枚（Fig. 43－1）がある。

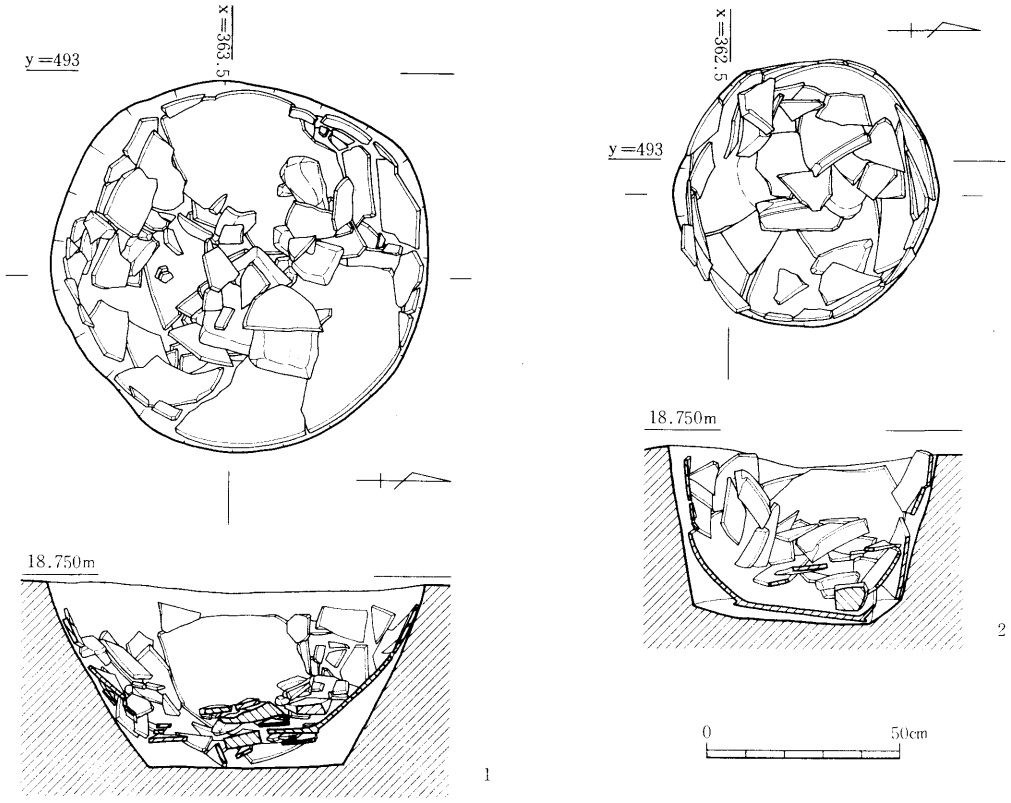


Fig. 39 第2・3号埋甕土壙実測図

埋甕土壙

試掘調査時とあわせて3基検出したが、後世の削平によって下半部しか残存しない。いずれも単独で存在し、土壙を共有することはない。

第1号埋甕（Fig. 40－1・2，PL. 21）

試掘調査時に出土したもので、出土地点から第2・3号埋甕土壙の南に近接して存在したものと思われる。

1・2は土師質土器で、同一個体であろう。1は口縁部で外湾しながら内傾し、端部は肥厚する。頸部には一条の浅いヘラ描き沈線がめぐる。頸部以下はタタキによる調整で、内面は同心円の当て具痕がそのまま残るが、外面はそののち横方向のミガキを施す。2は底部で、内底面は周縁に沿って円形に刷毛目が施される。

第2号埋甕土壙（Fig. 39－1・Fig. 40－3，PL. 17(1)・25）

調査区中央部よりやや東で検出した。平面形態は円形で、上面径約95cm、深さは検出面から48cmを残す。甕は底面から若干上位に据えられている。内部には自然石が落ち込んで

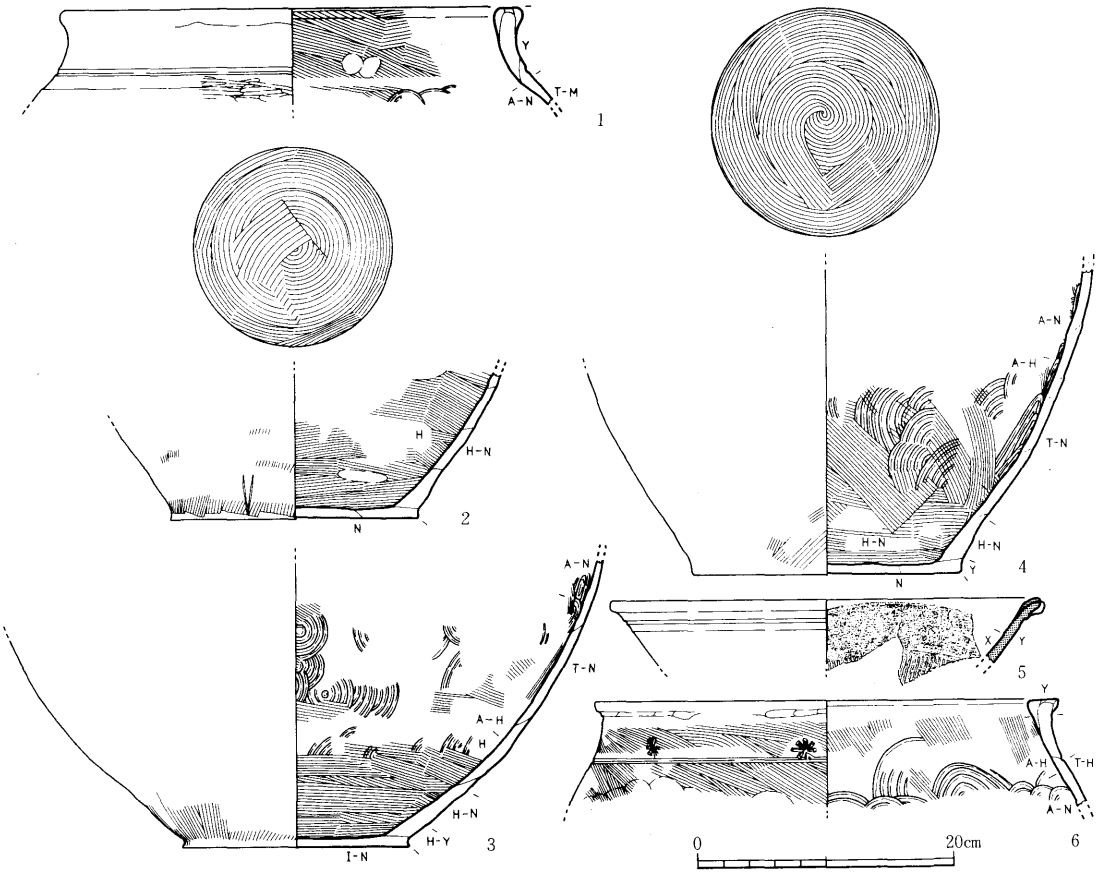


Fig. 40 第2・3号埋甕および出土遺物実測図

おり、口縁部は認められない。検出面の標高は約18.75m。埋土はオリーブ褐色粘質土（Hue 2.5Y 4/4）。甕は土師質で、胴部はタタキによる調整で、内面には同心円の当て具痕がそのまま残るが、底部付近はそののち横刷毛目を施す。外面は縦刷毛目ののちさらに荒いナデが行われる。内底面の調整は第1号埋甕と同様で、外底面は板目圧痕が残る。

第3号埋甕土壙（Fig. 39－2・40－4～6，PL. 17(2)・21・25）

第2号埋甕土壙の約1m西で検出した。平面形態は円形で、上面径約70cm、深さは検出面から48cmを残す。甕はほぼ底面に据えられており、内部には口縁部が落ち込んでいる。検出面の標高は約18.75m。埋土はオリーブ褐色粘質土（Hue 2.5Y 4/4）。4・6が埋甕で、土師質。4は胴部が底部から比較的急に立ち上がる。内外面の調整は第2号埋甕と同様であるが、外底面には板目圧痕は認められない。6は第1号埋甕の口縁部と器形、調整ともほぼ同様であるが、口縁端部は面をもち、外面に菊花のスタンプ文を施文する。5は内部

から出土した陶器擂鉢。口縁部は短く緩やかに外反し、指押えによって注口部を作り出す。

溝

2条検出した。後世の削平が著しく、部分的にしか検出できなかった。出土遺物もなく時期は明らかでない。

第1号溝（Fig. 29）

調査区北端部をほぼ南北に走り、第4号竪穴住居跡を切っている。検出した長さは約7mである。幅約10～15cm、検出面からの深さ約4cmを残す。検出面の標高は約18.60m。出土遺物はない。

第3号溝（Fig. 29）

調査区中央部を北西－南東に走る。検出した長さは約3mで、幅約15～20cm、検出面からの深さ約2～4cm。検出面の標高は約18.65m。出土遺物には石鏃がある(Fig. 41－12)。

暗渠（Fig. 29）

8条を検出した。本学統合移転前に開かれていた水田に伴うもので、内部から古墳時代から江戸時代の遺物が出土した。

暗渠出土遺物（Fig. 41－1～11・13・14, PL. 21・22・25）

1は土師器甕。頸部内面に稜をもたず、口縁部は外湾しながら短く緩やかに外反する。2は須恵器の高坏。坏部は浅く、内湾しながら開き、上半部でやや急に立ち上がる。内面には重ね焼きの痕跡がみられる。短脚の裾部は断面鳥嘴状となる。3～6・14は土師質土器。3・4は火舎。3は口縁端部が短く内傾し、内面には沈線状の段をもつ。外面には菊花のスタンプ文を施文する。4は獣足の支足をもつ底部で、足数は破片のため不明。外底面には板目圧痕が認められる。いずれも内外面には煤が付着する。5・6は盤。5は直線的に開く体部を底部側面に貼付する。口縁端部は内巻き気味に直立し、やや肥厚する。14は甕。口縁部は肥厚して直立し、端部は面取り状に平坦。頸部外面にはヘラ描きの浅い二条の沈線が巡る。内外面の調整は第2号井戸出土のものと同様である。7～10は陶器。7は鉢で、口縁部は玉縁状に肥厚し、端部は口禿となる。8は備前系の擂鉢。内面には14本を単位とする櫛歯描き上げを重ねながら右方向に施す。低い削り出し高台で、畳付は狭い。体部上半、外底面および畳付には煤が付着し、火災による投棄を思わせる。9～11は染付埦。口縁部に二条、体部下半に一条の圏線が巡り、その間に粗雑な唐草文を絵付している。ほぼ全面に貫入がみられ、狭い畳付は無施釉。10は高台外面脇にも一条の圏線が巡る。11

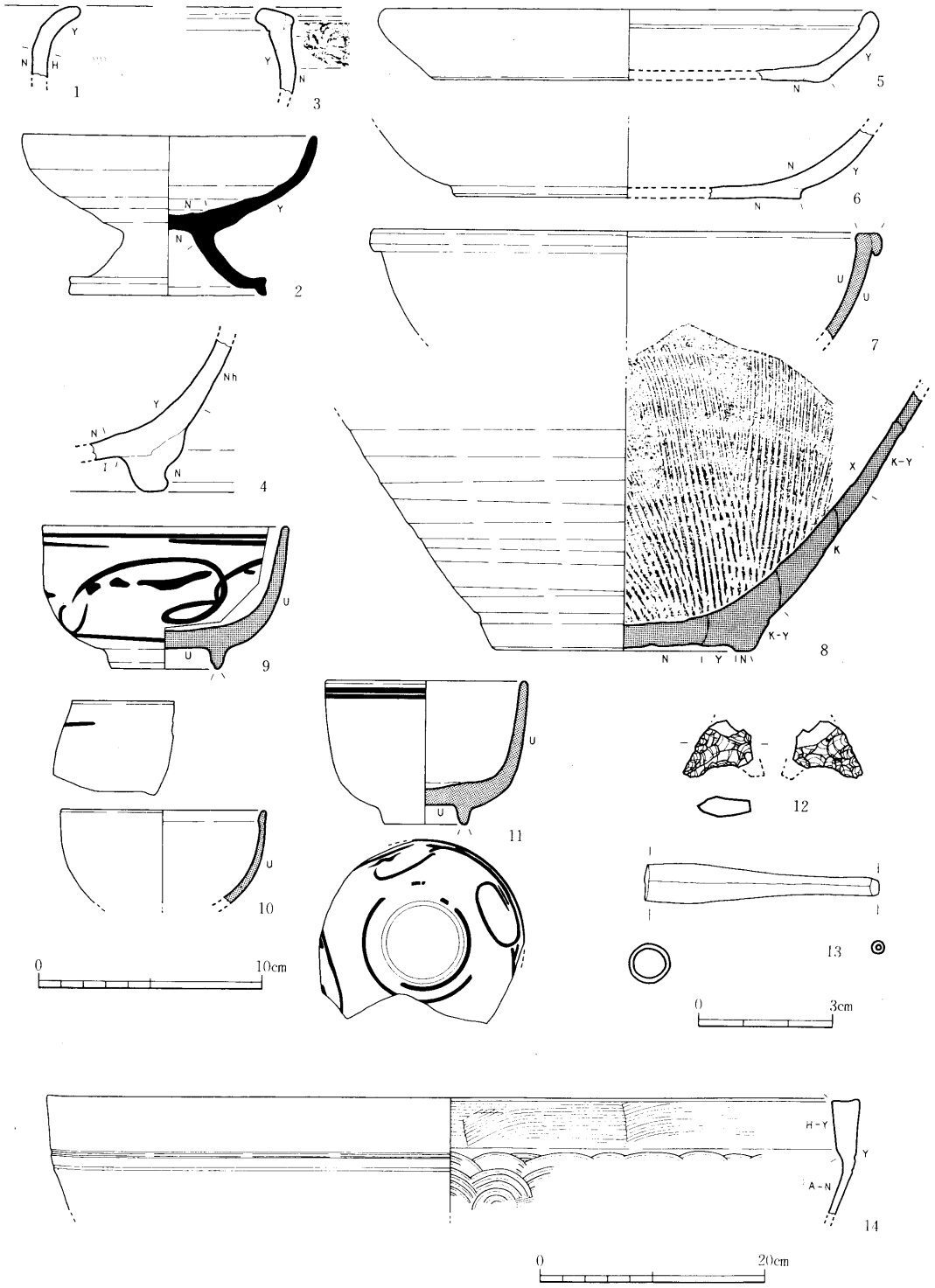


Fig. 41 溝・暗渠出土遺物実測図

Tab. 3 土壙一覧表

土壙番号	規模(cm)			平面形態	埋土色調	備考
	長軸	短軸	深さ			
SK 1	152	62	2	楕円形	褐色粘質土 (7.5YR 4/6)	
SK 2	70	48	3	不整楕円形	〃	SD 1 を切る
SK 3	70	46	8	楕円形	黒褐色粘質土 (2.5Y 3/2)	
SK 4	94	38	3	〃	オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/4)	
SK 5	114	70	4	不整楕円形	〃	NR 1 を切る
SK 6	198	68	5	不整形	〃	
SK 7	100	74	2	〃	黒褐色粘質土 (2.5Y 3/2)	
SK 8	76	46	3	〃	〃	
SK 9	84	76	3	楕円形	褐色粘質土 (7.5YR 4/6)	土師器
SK10	166	108	4	不整形	オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/4)	
SK11	222	84	2	不整楕円形	黒褐色粘質土 (2.5Y 3/2)	
SK12	92	44	9	楕円形	オリーブ褐色粘質土 (2.5Y 4/4)	
SK13	168	166	3	方形or長方形	〃	

は口縁部外面に圏線状の絵付を施す。呉須は9が暗オリーブ灰色 (Hue 5 GY 4/1)、10が暗青灰色 (Hue 5 PB 4/1)、11がオリーブ灰色 (Hue 10Y 4/2) である。13は煙管の吸口。一枚の板を折り曲げ、肩をもたない。真鍮製。Fig.43－2は寛永通宝。第5号暗渠出土。1・13は第2号暗渠、3・5・9は第3号暗渠、4は第4号暗渠でその他は第8号暗渠出土。

土壙 (Fig. 29)

13基検出した。埋土はオリーブ褐色粘質土 (Hue 2.5Y 4/4) のもの (第4～6・10・12・13号土壙)、黒褐色粘質土 (Hue 2.5Y 3/2) のもの (第3・7・8・11号土壙)、褐色粘質土 (Hue 7.5YR 4/6) のもの (第1・2・9号土壙) の三種がみられる。平面形態は楕円形に近いもの (第1・3・4・12号土壙)、方形のもの (第9・13号土壙)、不整形のもの (第2・5～8・10・11号土壙) がある。オリーブ褐色粘質土の埋土をもつものは調査区北半部に集中する。規模は最大の第13号土壙で長短両辺とも、170cm以上、最小の第8号土壙で長軸約76cm、短軸約46cmである。検出面からの深さは2～5cmのものが多く、残りの最も良い第12号土壙でも9cmを残すに過ぎない。

出土遺物はほとんどなく、わずかに第13号土壙から古墳時代の土師器が出土した。埋土の色調からすべて古墳時代以降のものであろう。

第4・5層出土遺物 (Fig. 42－1～9・11・12, PL. 22・24)

Fig. 42 第4・5層およびその他の出土遺物実測図

各層から土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器が出土した。古墳時代から江戸時代にかけての各時代のものが混在する。1は陶器の壺。口縁部は外湾しながら直立し、端部を斜上下の両方に拡張させる。端部は平坦で、ヘラミガキを行う。口縁部外面には菊花のスタンプ文を施文する。4層出土。

Fig. 43 出土銭貨拓影（1－第2号井戸　2－第5号暗渠　3－第5層）

Tab. 4 出土遺物観察表

法量(　)は復原値

No	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	焼成	備考
落し穴 (Fig. 22)						
1	縄文土器		①にぶい黄橙色(10YR5/3) ②黒褐色(5YR3/1)	良	良好	
河川跡 (Fig. 23)						
1	縄文土器 深鉢or浅鉢		赤褐色(5YR4/8)	良	良好	
2	縄文土器 深鉢or浅鉢		灰褐色(5YR5/2)	不良	精良	
3	縄文土器 深鉢or浅鉢		①橙色(2.5YR6/8) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	良	良	胎土に結晶片岩を多く含む
4	縄文土器 深鉢or浅鉢		黄灰色(2.5Y5/1)	不良	良好	
5	縄文土器 深鉢or浅鉢		①灰色(5Y4/1) ②橙色(5YR6/8)	不良	精良	
6	縄文土器 深鉢or浅鉢		黒褐色(7.5YR3/1)	不良	良	
7	縄文土器 深鉢or浅鉢		橙色(5YR6/8)	良	良好	
8	縄文土・器浅鉢		①橙色(7.5YR6/8) ②浅黄色(2.5Y7/3)	不良	良好	波状口縁
9	縄文土器	② (3.0)	①淡黄色(5Y8/3) ②灰白色(2.5Y8/2)	不良	良	
10	縄文土器	② (6.4)	灰白色(2.5Y8/2)	良	良好	
谷状遺構 (Fig. 25)						
1	縄文土器甕		淡黄色(2.5Y8/3)	やや不良	やや不良	外面に煤付着
2	縄文土器甕		①灰白色(7.5Y8/1) ②黒褐色(10YR3/1)	不良	良	突帯の下位に穿孔
3	縄文土器甕		①にぶい褐色(7.5YR5/4) ②浅黄色(2.5Y7/3)	不良	不良	
4	縄文土器甕		①淡黄色(2.5Y8/3) ②褐灰色(7.5YR5/1)	不良	良好	
5	縄文土器甕		灰白色(2.5Y8/2)	やや不良	良	
6	縄文土器浅鉢	② 3.4	浅黄色(2.5Y8/4)	不良	良好	
7	縄文土器甕or深鉢	② (7.5)	①橙色(2.5YR6/8) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	不良	良好	
8	縄文土器甕or深鉢	② (7.8)	①淡黄色(2.5Y8/3) ②灰褐色(5YR5/2)	不良	良	
9	縄文土器甕or深鉢	② (8.6)	淡黄色 (2.5Y8/3)	不良	良	
10	土師器甕		褐色 (7.5YR4/3)	やや不良	良	
11	土師器高坏		黄色 (2.5Y8/6)	良好	やや不良	
12	須恵器甕		①青灰色(10BG6/1) ②灰白色(N7/0)	やや不良	良好	
第6層 (Fig. 27)						
1	縄文土器深鉢	① (43.4)	①白灰色(5Y7/2) ②褐色(7.5YR4/3)	不良	不良	
2	縄文土器深鉢		①白灰色(10YR7/1) ②灰褐色(7.5YR4/2)	やや不良	良好	
3	縄文土器深鉢		①褐灰色(7.5YR5/1) ②黒色(5Y2/1)	良好	精良	外面に煤付着
4	縄文土器深鉢		①にぶい赤褐色(5YR4/3) ②灰色(5YR5/1)	良好	良好	
5	縄文土器深鉢		①浅黄橙色(10YR8/3) ②にぶい赤褐色(5YR4/4)	不良	良	
6	縄文土器深鉢		①褐灰色(10YR6/1) ②灰白色(2.5Y8/2)	良好	良好	外面に煤付着
7	縄文土器浅鉢		明赤褐色(5YR5/6)	良好	良好	
8	縄文土器浅鉢		明赤褐色(5YR5/6)	良好	良好	
9	縄文土器浅鉢		①橙色(10YR6/8) ②灰白色(2.5Y7/1)	不良	不良	

法量(　)は復原値

No	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	焼成	備考
10	縄文土器浅鉢		灰黄色 (2.5Y7/2)	不良	良	
13	縄文土器	② (9.1)	①にぶい黄橙色(10YR5/3) ②淡黄色(2.5Y8/4)	良好	良	
14	縄文土器	② 7.2	①黒色(7.5YR5/1) ②褐灰色(5Y2/1)	不良	精良	
15	縄文土器	② (10.1)	①褐色(7.5YR4/6) ②黒褐色(2.5Y3/1)	不良	不良	胎土に結晶片岩を多く含む
第7層 (Fig. 27)						
11	縄文土器	② 7.0	赤灰色 (2.5YR5/1)	良好	良	
12	縄文土器	② 7.4	浅黄色 (2.5Y7/3)	良好	良好	胎土に結晶片岩を多く含む
河川跡 (Fig. 32)						
1	土師器甕	① (25.4)	①にぶい橙色(2.5YR6/4) ②にぶい橙色(5YR6/4)	良好	良好	
2	土師器甕		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	不良	良好	
3	土師器高坏		にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良好	良好	
4	土師器高坏	② (11.4)	淡黄色 (2.5Y8/3)	精良	良好	
5	土師器支脚	② 10.2	淡黄色 (2.5Y8/3)	不良	良好	
6	土師器手捏土器	② 10.6	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや不良	良好	
7	須恵器短頸壺蓋		①灰白色(N8/0) ②灰白色(N7/0)	精良	良好	体部外面に重ね焼きの痕跡
8	須恵器模倣土師器 坏身	① 12.3	①灰白色(10Y7/1) ②暗青灰色(5B3/1)	精良	良好	
10	縄文土器深鉢		①にぶい橙色(10YR6/3) ②褐灰色(10YR4/1)	良好	良好	
11	縄文土器深鉢		①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②灰黄色(2.5Y7/2)	やや不良	良好	
12	縄文土器浅鉢		①灰白色(10YR7/1) ②褐灰色(7.5YR6/1)	良好	良好	
13	土師器甕		①にぶい橙色(5YR6/4) ②浅黄橙色(10YR8/4)	良好	やや良好	
第1号井戸 (Fig. 36)						
1	施釉陶器鉢		素地－褐灰色(10YR6/1) 釉－黒褐色(7.5YR2/2)	良好	良好	口禿
2	陶器埦	② 6.2	素地－にぶい黄橙色(10YR7/3) 釉－暗赤褐色(2.5YR3/4)	やや不良	良好	円錐トチ付着
3	土師質土器盤	① 19.4	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好	良好	
4	磁器埦	① 11.0	素地－灰白色(5Y7/1) 釉－オリーブ褐色(2.5Y4/6)	良好	良好	
5	陶器擂鉢	① 37.6	素地－赤色(10R5/8) 釉－暗赤褐色(7.5Y3/2)	精良	良好	底部内面に重ね焼きの離れ砂付着
第2号井戸 (Fig. 38)						
1	土師質土器甕	① 73.0	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	良好	良好	
埋甕土壙 (Fig. 40)						
1	土師質土器甕	① 35.6	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	精良	良好	
2	土師質土器甕	② 19.6	①橙色(2.5YR7/6) ②淡橙色(5YR8/4)	良好	良好	
3	土師質土器甕	② 17.8	にぶい橙色 (5YR6/4)	良	良好	
4	土師質土器甕	② 21.0	橙色 (7.5YR7/6)	良好	良好	
5	陶器擂鉢	① 33.4	素地－赤色(7.5R4/6) 釉－赤黒色(10R2/1)	良好	良好	
6	土師質土器甕	① 39.4	灰白色 (7.5YR8/2)	良好	良好	
暗渠 (Fig. 41)						
1	土師質土器甕		灰褐色 (7.5YR5/2)	良好	良好	

法量（　）は復原値

No	器種	法量（cm） （①口径②底径③器高）	色調 （①外面②内面）	胎土	焼成	備考
2	須恵器高坏	① 13.0 ② 8.8 ③ 7.1	明青灰色（10BY7/1）	良好	良	
3	土師質土器火舎		にぶい橙色（7.5YR7/4）	良好	良好	口縁部内外面に煤付着
4	土師質土器火舎		①淡橙色（5YR8/4） ②にぶい橙色（7.5YR6/4）	良好	良好	外底面に板目圧痕
5	土師質土器盤	① 21.8 ② (17.2) ③ 3.1	①浅黄橙色（7.5YR8/3） ②灰白色（10YR8/2）	良好	良好	
6	土師質土器盤	② (7.7)	にぶい橙色（5YR7/3）	良好	良好	
7	施釉陶器鉢	① 22.4	素地－にぶい橙色（2.5YR6/4） 釉－明赤褐色（5YR3/3）	やや不良	やや不良	口禿
8	陶器擂鉢	② 11.4	赤色（10R4/6）	良好	やや不良	
9	陶器埦	① 11.0 ② 4.8 ③ 6.3	素地－灰白色（N7/1） 釉－オリーブ灰色（2.5GY6/1）	良好	良好	
10	陶器埦	① (8.8) ② 3.6 ③ 6.3	素地－灰色（7.5Y5/1） 釉－緑灰色（5G6/1）	良好	良好	
11	磁器埦	① (9.0)	素地－灰白色（10Y4/2） 釉－明緑灰色（7.5GY8/1）	良好	良好	
14	土師質土器甕	① (72.4)	①浅黄橙色（7.5YR8/4） ②橙色（7.5YR7/6）	良好	良好	
4層（Fig. 42）						
1	陶器壺	① (19.0)	にぶい橙色（5YR7/3）	良好	良好	
5層（Fig. 42）						
2	土師器埦	② (6.0)	①淡黄色（2.5Y8/3） ②淡黄橙色（10YR8/3）	精良	良好	
3	須恵器坏身	① (12.6)	青灰色（10BY6/1）	不良	良好	
4	須恵器坏身	② (8.8)	青灰色（10BY6/1）	やや不良	良好	
5	須恵器坏身	② (8.0)	青灰色（5B6/1）	良好	良好	
6	須恵質土器坏	② (4.4)	①灰白色（7.5Y7/1） ②灰色（N4/0）	良好	良好	
7	施釉陶器鉢	① (28.4)	素地－にぶい橙色（2.5YR6/4） 釉－明赤灰色（5YR3/3）	良好	良好	
8	陶器埦	① (8.9)	素地－灰色（7.5Y6/1） 釉－灰白色（5GY8/1）	良好	良好	
9	土師質土器鼎脚		淡黄色（5Y8/3）	良好	不良	
表採（Fig. 42）						
10	須恵器坏蓋	① (8.8)	①暗青灰色（10BG7/1） ②暗青灰色（5PB4/1）	良好	良好	

（　）は現存値

No	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質	備考
落し穴（Fig. 22）							
2	剝片	(2.9)	2.5	1.05	4.2	黒曜石	
谷状遺構（Fig. 25）							
13	磨製石斧	(4.5)	(3.95)	(1.95)	44.0	泥岩ホルンフェルス	頭部
14	砥石	4.7	4.4	3.8	108.9	角閃石安山岩質結晶凝灰岩	
15	石鏃	1.85	1.5	0.85	0.6	石英片岩	
16	石鏃	1.65	1.5	0.55	0.8	黒曜石（姫島産）	
17	石鏃	1.1	1.9	0.4	0.4	黒曜石	
18	石鏃	1.0	1.1	0.3	0.2	石英片岩	
19	加工痕のある剝片	2.7	1.2	0.65	1.4	黒曜石	
20	加工痕のある剝片	(2.7)	1.3	0.6	2.3	無斑晶安山岩	

（　）は現存値

No	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質	備考
21	加工痕のある剥片	2.15	1.4	0.65	1.2	石英片岩	
22	加工痕のある剥片	(1.9)	(1.9)	(0.5)	1.9	石英片岩	
23	加工痕のある剥片	8.0	1.8	0.4	0.3	石英片岩	
24	加工痕のある剥片	(2.85)	2.2	0.65	2.7	黒曜石	
25	使用痕のある剥片	4.1	2.3	0.9	4.9	黒曜石	
26	石核	3.55	3.25	1.75	16.4	チャート？	
6層（Fig. 28）							
1	石鏃				0.6	黒曜石（姫島産）	
2	石匙	(3.55)	(2.25)	0.75	4.1	黒曜石（姫島産）	横形
3	使用痕のある剥片	(3.75)	(2.65)	0.6	4.4	チャート	
4	磨製石斧	(20.5)	(7.0)	(3.95)	682.7	緑泥石片岩	接合資料
5	石核	3.60	2.45	1.60	8.9	黒曜石	
河川跡（Fig. 32）							
9	打製石斧	23.4	5.4	1.9	272.1	緑簾石石英片岩	
14	石鏃	2.1	1.65	0.55	1.2	石英片岩	
15	石鏃	1.65	1.6	0.35	0.5	石英片岩	
16	石鏃	(2.25)	(2.0)	(0.45)	1.7	無斑晶安山岩	
17	加工痕のある剥片	(4.0)	2.35	0.7	5.5	黒曜石	
18	加工痕のある剥片	(2.65)	1.6	0.6	1.8	黒曜石（姫島産）	
第3号溝（Fig. 41）							
12	石鏃	(1.25)	(1.55)	(0.4)	0.4	黒曜石	
5層（Fig. 42）							
11	磨製石斧	(7.6)	2.5	1.1	30.3	角閃石石英片岩	
12	打製石斧	(11.5)	(6.3)	(1.2)	94.2	緑泥石石英片岩	
耕作土（Fig. 42）							
13	打製石斧	(10.95)	7.4	1.4	148.9	緑簾石石英片岩	

（　）は現存値

No	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	材質	備考
第1号井戸（Fig. 37）						
1	楕円形曲物	(9.5)	(9.4)	1.0		底板
2	棒状木製品	39.9	3.2	1.9		
3	箆状木製品	(9.2)	(1.8)	1.0		目釘穴
4	箆状木製品	(12.4)	(1.8)	1.0		

（　）は現存値

No	器種	最大長（cm）	最大径（cm）	最小径（cm）	備考
暗渠（Fig. 41）					
13	煙管	5.2	0.9	0.25	吸口

2～9・11・12は5層出土。2は土師器埦。糸切り底で内面ヘラミガキ。3～5は須恵器の坏身。3は直線的に開く口縁部をもち、端部は丸い。4・5は高台をもたない底部。6は須恵質土器の坏身底部。外面には墨書がみられるが、判読できない。7・8は陶器。7は備前系の擂鉢。わずかに内傾する口縁部をもち、端部外面には断面三角形の突帯を貼付し、肥厚させる。8は肥前系の埦で、口縁部は直線的に立ち上がる。絵付はみられない。9は土師質土器の鼎脚部。11は小形の磨製石斧で、刃部幅が頭部幅よりやや広い。頭部に敲打痕が認められる。断面形は楕円形。12は打製石斧。正裏両面に成形時の荒い剥離痕が残るが、正面の左右両側縁の二次加工は比較的丁寧である。刃部は尖る。他に5層からは寛永通宝1枚（Fig. 43－3）がある。

その他の遺物（Fig. 42－10・13, PL. 22・24）

10は須恵器の坏蓋で、出土状況不明。体部から口縁部には直線的に移行する。かえりは短く、口縁部以下にわずかに突出する。13は第2層（耕作土）から出土した打製石斧。扁平な板石を素材とし、正裏両面中央部の素材面と自然面との区別は困難である。正裏両面の左側縁、下縁の二次加工は比較的丁寧である。刃部はあまり尖らず、やや面をもつ。各剥離面には階段状の剥離痕がめだつ。

4　小　結

(1)　遺構と遺物について

1）縄文時代

縄文時代の遺構には河川跡、落し穴、溝がある。県内では縄文時代の遺跡の調査そのものの調査例が少なく、しかも沿岸部に集中しており、その実態は必ずしも明らかではない。また、遺構は早期に遡る可能性のある竪穴住居状の遺構[6]のほか土壙[7]、河川跡[8]、ドングリ等のアク抜き用の貯蔵穴[9]などが検出されているにすぎず、貴重な検出例となった。

河川跡は幅約29m以上の規模をもち、蛇行しながら北東から南西に走行する。遺構の性格からやや時期幅をもつ遺物が含まれていることも考えられるが、河川跡の上位に堆積する第6層から口縁部下および胴部の屈曲部に突帯状の肥厚帯をもち、口縁部から頸部の内外面にやや規則的な横条痕を施す大形の粗製深鉢が出土している。岩田Ⅳ類[10]・月崎上層Ⅲ式[11]に相当し、晩期中頃に位置づけられるが、肥厚帯には刻み目をもたず、突帯文出現の前段階のものと考えられ、晩期中頃でも新しい要素をもつものである。河川跡の遺物には口縁部内面に段をもつものや、口縁端部が丸く、内面を横ナデによってにぶく段状に作り出す波状口縁の粗製浅鉢が含まれており、岩田Ⅳ類・月崎上層Ⅲ式に相当するものであろう。

層序的にも6層の土器より遡るものであるが、器形、調整のわかる資料がきわめて少なく、県内での編年が充分行われていない現状では大きく晩期中頃の時期を与えておきたい。

吉田構内では縄文時代の遺構は二箇所で検出されている。いずれも晩期のものである。遺跡保存地区の西方では、今回検出した河川跡と直交する幅約60mの河川跡1条が確認されている[12]が、距離的にやや離れており、相関関係は明かでない。また、養護学校敷地では晩期中頃の土壙1基が確認されている。

山口盆地では本学の南西約1～1.5kmに所在する西遺跡で埋甕、河川跡[13]、小路遺跡で土壙、溝状遺構[14]、また、椹野川右岸では木崎遺跡で土壙[15]の報告例がある。時期的には晩期中頃（岩田Ⅳ類・月崎上層Ⅲ式）から終末（岩田Ⅴ類[16]・月崎上層Ⅳ式[17]）のもので、それ以前の遺構は検出されていない。松尾征二氏は小路遺跡周辺の段丘および段丘堆積物の分析から、小路層下部と命名したこれらの遺構を掘り込む層にアカホヤ火山灰に由来する、淡褐色を呈するバブル型の平板状やXY状の火山ガラスがかなり含まれていることを明らかにした[18]。同層は本学構内では晩期中頃でも新しい要素をもつ遺物を包含することから[19]、小路層下部は二次堆積物で、その堆積時期は縄文時代前期から晩期中頃にあたる。したがって、盆地内では、従来、弥生時代以降の検出面とされていた同層から検出される縄文時代の遺構は、上記の遺跡にみられるように、遡っても晩期中頃までであろう。なお、河川跡は同層の堆積過程で、一時期地表面であった段階に機能していたもの理解できる。

次に、調査区のほぼ中央部で検出面された小土壙について述べておきたい。土壙は晩期中頃の河川跡の右岸に位置し、土壙端と川岸の距離は約70cmときわめて近接して掘り込まれている。平面形態は隅丸長方形で、長軸105cm、短軸78cm、深さ25cmの規模をもち、長軸は河川跡と直交している。底面には深さ58cmの円形のピットがあり、板石状の自然石が縦位に詰められている。

吉田構内では他に、今回の検出地点の北東約270mに位置する大学会館敷地で、ほぼ同じ平面形態、規模、構造をもつ土壙の検出例（SK2・3）がある[20]。SK2は長軸114cm、短軸70cm、深さ38cmの規模をもち、SK3は暗渠に切られているため平面の規模は明かでないが、深さは34cmである。2基の土壙は長軸方向を同じくし、約5m間隔で並列しており、いずれもピット内への詰め石はない。幅約16m以上の谷の谷頭付近に立地し、報告の段階では谷の緩斜面から出土した遺物から、埋没の時期を少なくとも古墳時代前期としたが、その下位にはまだ厚さ約80cmの堆積層が存在すること、谷の埋積土内から縄文早期のものと思われる石鏃が出土していることから、谷の開いていた時期は縄文時代に遡る可

能性がある。先に記した小路遺跡でも類例が認められる。第71号土壙がそれで、長軸119cm、短軸62cm、深さ10cmの規模をもち、縄文時代晩期のものと考えられている。

以上のように、縄文時代に属すると考えられる底面にピットをもつ小土壙は県内で4例ある。同じ構造をもつ土壙の検出例は東日本で多く、近隣では鳥取県青木遺跡[21]、岡山県谷尻遺跡[22]、福岡県下原遺跡[23]、門田遺跡[24]、佐賀県六本黒木遺跡[25]などで報告例があり、落し穴と考えられている。県内の4例もこれに当たると思われるが、解消すべき問題点がある。

まず、第一に深さがあまりないこと、すなわち構造上の問題点である。SK2・3および第71号土壙が、後世の削平のよって上面を大きく削られていること、教養部の例が小路層下部の堆積過程で浸食、人為的な地表の改変を受けたことが考えられることから、4基の土壙の深さは掘削の時点での深さを示すものではない。むしろ平面の形態・規模、構造の顕著な類似性、つまり構造上の規格性が強調されるべきであろう。

第二に落し穴として機能する環境にあったかどうか、すなわち立地上の問題点である。教養部の例が河川跡、SK2・3が谷のすぐそばに存在することは、必ずしも偶然の所産とは考えられず、水呑場あるいはヌタ場を求めて集まる小動物捕獲のために、意識的に選択された場所であったものと思われる。また、県内の4例は落し穴の周辺を広範囲に調査したものではなく、1基のみの検出例が単独では存在しない落し穴の否定材料とはならない。その意味からも、SK2・3の並列状況はまさに落し穴としての機能をもつものであろう。

なお、遺構ではないが、調査区中央部では「U」字形に、南西および南東に開く浅い谷状の落ち込みを検出した。出土遺物は須恵器、土師器を若干含むが、大半が岩田Ⅴ類・月崎上層Ⅳ式に対比される突帯文土器を中心とする晩期終末のものである。縄文時代晩期終末の一時期に谷状の落ち込みが埋積し、埋まりきらなかった窪みに古墳時代の遺物が混入したものと考えられる。

また、今回の調査の成果として特筆すべきは晩期の遺物包含層を確認したことであろう。本学構内にとどまらず、県内でのこの時期の遺物は、遺構に伴うものを含めても多くはなく、編年上の課題となっているとともに縄文社会の復元に大きな障害となっている。これを機に、今後、沖積低地での晩期さらにはそれを遡る遺物包含層、遺構の検出例が増加するものと思われる。

2）弥生時代から江戸時代

弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居跡4基、古墳時代の河川跡、江戸時代の井戸2基、

埋甕土壙３基、掘立柱建物跡２棟のほか、土壙13基、溝２条、柱穴多数がある。

竪穴住居跡は４基検出した。後世の削平によって壁面は最も残りのよい第３号竪穴住居跡でも５cmを残すに過ぎない。第４号竪穴住居跡は二重に巡る壁溝をもち、建て替えが想定される。規模はいずれも小さく、主柱配置は明かでない。出土遺物はないが、埋土の色調、椹野川流域における竪穴住居跡の平面形態、規模の変遷および切り合い関係から、第２号竪穴住居跡が弥生時代中期から後期、第３・４号竪穴住居跡が弥生時代後期から古墳時代、第１号竪穴住居跡が古墳時代のものと考えられる。４基とも遺跡保存地区の竪穴住居跡と同時期で、弥生時代中期から古墳時代にかけて、吉田構内南西部から中央部付近に大規模な集落が存在していたことを窮わせる。近年、遺跡保存地区における集落の内容が次第に明かになっており、吉田構内での集落の時期的な立地、展開過程を解明する貴重な資料となった。

河川跡は古墳時代のものを２条検出した。このうち第１号河川跡は、幅約２ｍの規模をもち、北東－南西に走行する。第２号河川跡と同一のものかもしれないが、調査区外にあたるため確認していない。出土遺物、埋積土の状況から、５～６世紀代の少なくとも２時期の流路が存在する。この時期の河川跡は今回の調査地域の南約130ｍに位置する教育学部実験実習棟敷地[26]、北東約150ｍに位置する図書館増築地[27]でそれぞれ１条が検出されているが、これらとは流路方向が異なり、集落立地、規模を考えるうえで注目されよう。

近世の集落関連遺構には掘立柱建物跡、井戸、埋甕土壙がある。

掘立柱建物跡は身舎１間×３間（第１号掘立柱建物跡）、１間×２間（第２号掘立柱建物跡）のものの２棟がある。いずれも規模は小さい。他にも同時期のものと思われる柱穴が調査区内ほぼ全面に存在するが、復原できなかった。出土遺物はなく、時期比定は困難であるが、検出面の上位に堆積する５層から17世紀代の遺物が出土していること、両建物のそれぞれに近接して、この時期の井戸が存在することから17世紀前半ののものと考えられる。２基の井戸はいずれも素掘りと思われるが、第１号井戸の底面には自然石が散乱しており、廃絶時に石組みが抜かれた可能性がある。埋甕土壙は少なくとも２基並列しており、土壙は共有しない。両建物は棟方向がほぼ直交し、井戸、埋甕土壙を付設する屋敷内の一連の建物として集落を構成していたものと考えられる。吉田構内では、中世以降の集落は環濠内に井戸をもつ室町時代の建物跡が知られている[28]が、近世の建物跡の検出例は少なく、中世から近世にかけての屋敷構造、集落および構成員の性格を知る上で興味深い。

遺物として着目しておきたいものに、まず、第1号河川跡から出土した須恵器模倣土師器がある。吉田構内では、図書館増築地で出土した7世紀初頭の坏蓋についで2例目であり、製作工人集団の性格、動態を知るうえでの基礎的な資料である。また、墨書のある須恵質土器は小破片のため明確な時期、墨書の判読はできないが、筆跡、字形から遡っても鎌倉時代以降のものであるという[29]。この時期、吉田構内周辺地域は「恒富保」の一部に編入されており[30]、鎌倉幕府から地頭職として任官した父平子重経[31]から「恒富保」を分割相続した四男重継は恒富氏と称している。13世紀には恒富氏は本家の恒富氏と分家の吉田氏の両家に分かれ、地頭領主として成長したが、両家の居館跡は現在のところ明かでなく、物的資料も乏しい。しかし、本構内では今回の調査地点の北東約270mに位置する大学会館敷地で、12～13世紀の畿内系瓦器に加え、在地の一般集落を卓越する量の輸入陶磁器が出土しており[32]、今回の文字資料とあわせて居館関連施設の存在を傍証するものとして注目される。また、第1～3号埋甕土壙の土師質土器の甕は、口縁部の形状から時期的にやや古い要素をもつが、第2号井戸出土のもの、大学会館前庭部敷地のDトレンチ4・5号土壙出土品[33]に類例が認められる。口縁部の形状、胴部から頸部にかけての内外面のタタキによる調整など強い規格性をもち、山口県防府市に所在する佐野焼の系統[34]と考えられる。

(2) 埋蔵文化財の遺存状況と今後の方針

埋蔵文化財資料館運営委員会は調査終了後、埋蔵文化財資料館から調査結果の報告を受け、現地の視察を行うと共に、その後の取り扱いについて協議した。

同委員会は竪穴住居跡をはじめとして、新営予定地内における弥生時代以降の遺構が、後世の削平によって遺存度がよくないこと、遺構の分布密度も遺跡保存地区などとくらべて希薄であること、また、計画建物の候補地を他に求めることが困難であることなどから、調査結果を記録保存することで合意した。

しかし、縄文時代の遺物包含層が弥生時代以降の遺構の検出面であることが確認され、同じ色調、組成をもつ堆積層が吉田構内ではかなり広範囲に検出されること、また、吉田構内ではこれまでほとんど検出されていない縄文時代の遺構が存在し、しかも、弥生時代以降の遺構の検出面より下位の堆積層に掘り込まれている点を重視し、今後、縄文時代の集落関連遺構の精査が必要であると結論づけた。

注

[注]

1）a　河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報　Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料資料館、1986年）。

b　河村吉行「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報　Ⅵ』、山口大学埋蔵文化財資料資料館、1987年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料資料館「中央図書館増築予定地Ｍ－16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報　Ⅱ』、1985）。

3）湖見浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」（『広島大学文学部紀要』第18号、広島大学文学部、1960年）。

4）潮見浩「月崎遺跡」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。

5）a　前掲注　1）ａに同じ。

b　河村吉行「古墳時代における竪穴住居の各属性について」（『山口大学構内遺跡調査研究年報　Ⅵ』、山口大学埋蔵文化財資料資料館、1987年）。以下、竪穴住居跡の平面形態、規模による時期決定は上記の文献による。

6）1988年に山口県旧石器文化研究会の調査によって、宇部市長桝遺跡第二地点で検出されている。

7）a　建設省山口工事事務所・山口県教育委員会「木崎遺跡」（『朝田墳墓群・木崎遺跡』、山口県埋蔵文化財調査報告第32集、1976年）。

b　山口県教育委員会・山陽工業株式会社「奥正権寺遺跡」（『奥正権寺遺跡　Ⅰ』、山口県埋蔵文化財調査報告第77集、1984年）など。

8）a　山口市教育委員会『小路遺跡』（山口市埋蔵文化財調査報告第27集、1988年）。

b　山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（山口大学、1976年）など。

9）平生町教育委員会『岩田遺跡』（1974年）。

10）前掲注　3）に同じ。

11）前掲注　4）に同じ。

12）前掲注　8）ｂに同じ。

13）山口市教育委員会『西遺跡』（山口市埋蔵文化財調査報告第21集、1986年）。

14）前掲注　8）ａに同じ。

15）前掲注　7）ａに同じ。

16）前掲注　3）に同じ。

17）前掲注　4）に同じ。

18）松尾征二「小路遺跡周辺の第四系」（『小路遺跡』、山口市埋蔵文化財調査報告第27集、山口市教育委員会、1988年）。

19）今回の調査ではＢ－Ｃ壁およびＣ－Ｄ壁の一部を深掘し、土壌サンプルを採取している。現在、火山灰の同定作業を進めており、分析終了後に報告する予定である。

20）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

21）a　青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書　Ⅰ』（1976年）。

b　青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書　Ⅱ』（1977年）。

c　青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書　Ⅲ』（1978年）。

22）岡山県文化財保護協会『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査６』（1976年）。

23）福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第７集』（1978年）。

24）福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告２』（1983年）。

25）西田和己・岩長政博「六本黒木遺跡」（『大門西遺跡』、佐賀県文化財調査報告書第51集、1980年）。

26）山口大学埋蔵文化財資料資料館「教育学部構内Ｊ－19・20区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

27）前掲注　2）に同じ。

28）山口大学埋蔵文化財資料資料館「昭和54・55度調査の概要」（『山口大学構内遺跡調査研究年報　Ⅰ』、1982年）。

29) 教養部教授木村忠夫先生に御教示を得た。
30) 内田伸・石川卓美「山口市」(『山口県の地名』、日本歴史地名体系、1980年)。平清水八幡宮の徳治3年(1308年)の神主職譲状、廃寺高蔵寺の応永21年(1414年)の鐘銘から吉田の地が恒富保の一部であったことが推定されている。
31)『三浦家文書』に建久8年(1197年)、平子重経が恒富保の地頭職に任ぜられた記載がある。
32) 前掲注 20)に同じ。
33) 前掲注 1) aに同じ。
34) 山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書－窯業－』(山口県埋蔵文化財調査報告書第74集、1983年)。

第4章　小串構内医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査

1　調査区周辺の地形

小串(こぐし)構内（医学部キャンパス）は山口県南西部、宇部市大字小串1144番地に在り、霜降(しもふり)岳東麓に源を発し宇部港に注ぐ真締(まじめ)川の中流域右岸に位置する。流域に遺跡は少なく、周辺の低位丘陵上・段丘上に弥生時代の北迫遺跡、南側遺跡等を若干見るだけである。宇部市域の地理的環境ならびに歴史的環境については、当調査研究年報のⅢ・Ⅳで詳細に述べてあるのでここでは割愛したい。

2　調査に至る経緯と調査方法

(1)　調査に至る経緯と調査目的

調査対象地区は、医学部附属病院の病棟新営予定地、約2200㎡である。小串構内では昭和58年以降の調査によって、現在まで部分的にではあるが、近・現代所産と考えられる遺構、また旧石器時代・中世・近世などの遺物が発見されている。[1)] 埋蔵文化財資料館では、昭和62年度の医学部事業計画案のなかに病棟新営が盛り込まれた時点で、新営工事に際しては何らかの調査が必要であろうとの判断をしていた。

昭和62年12月17日、医学部より病棟新営の工事計画を受けた資料館は、既往調査の結果を参考に遺構・遺物の遺存状況把握のための試掘調査を行うこととした。ところが、既設埋設物が多くあり、土層堆積状況も全く不明であったため、トレンチ設定に困難を極めた。この試掘調査は今後の取り扱い上、非常に重要な位置を占めること、また、より効率的な試掘調査の実施から、まず、昭和63年1月19日に病棟新営予定地

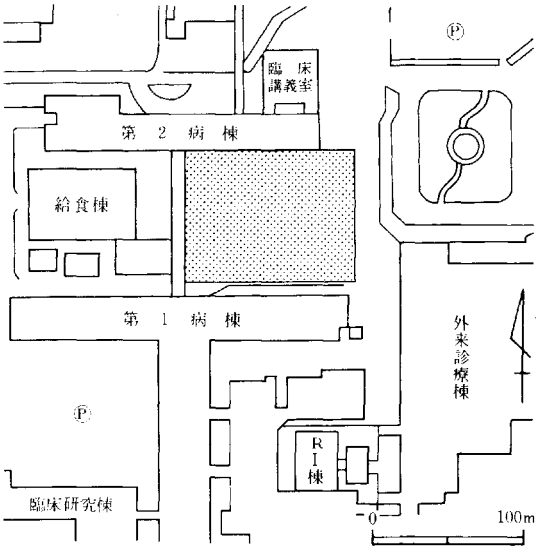


Fig. 44　病棟新営地位置図

の北西部と南東部の二個所を試し掘りした（Fig. 45)。

その結果、遺構・遺物の発見はできなかったが、旧石器時代から近・現代の遺物を含む灰オリーブ色粘土層の堆積を確認し、丘陵を形成すると思われる山土を初めて検出した。併せて埋設物の残存状況、埋め土の厚さの確認をおこなった。灰オリーブ色粘土の堆積は新営予定地全域で予想されたが、遺物の出土量は必ずしも多くなく、遺構存在の可能性も低いと思われ、予定地全域の調査は不必要であろうとの予測ができた。しかし、試し掘りの面積が少ないこともあり、試掘調査の結果を待ち、最終の判断を下すこととした。

試掘調査は、遺構・遺物の有無、先に検出した旧丘陵の連なりの把握を目的とし、昭和63年２月15日から３月４日にかけて実施した。

この結果、資料館では今後の工事に際して、一部の地域については綿密な立会調査が必要であること、他の地域については調査の必要はないとの結論を出し、埋蔵文化財資料館運営委員会において了承された。綿密な立会調査が必要とされた約300㎡部分については、昭和63年６月に約２週間の日程で調査を実施しており、年報Ⅷにて報告する予定である。

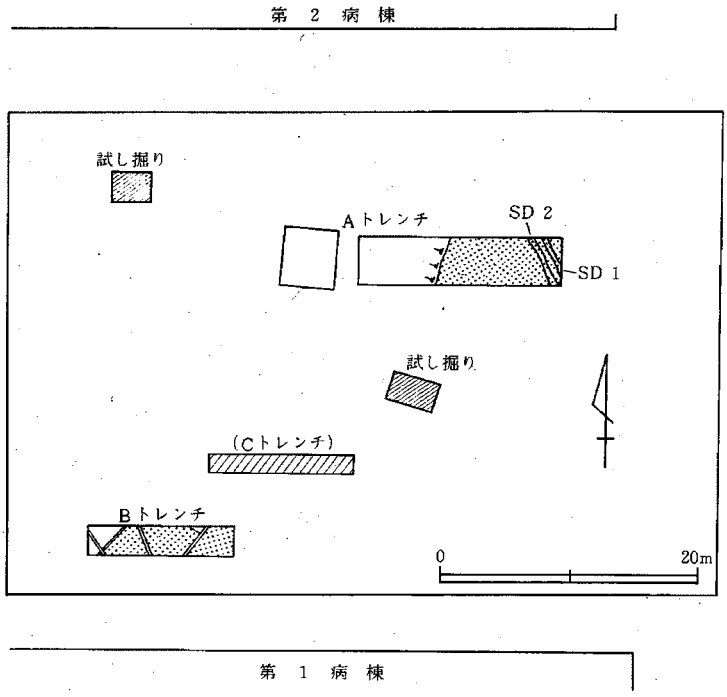


Fig. 45 トレンチの位置と遺構分布図

(2) 調査方法

旧丘陵の把握に主眼を置き、東西方向３本のトレンチを設定した(Fig.45)が、うち一つは地表下35cmで非常に硬いアスファルトに当たり、掘削を断念している。よって、A・B二箇所のトレンチ調査となった。表土より下位は手掘りによる分層発掘をおこなった。Aトレンチでは遺構・遺物こそ希薄であったが、初めて黄橙色粘質土の遺物包含層を確認し、Bトレンチでも、初めて確認した砂層の遺物包含層から多くの石器類が出土した。

3　層　位

(1)　Aトレンチの土層

Aトレンチは、病棟新営予定地の北東部に長さ19m×幅4mで設定した。既設配管のため、A西とA東の2区に分かれた。A西・A東の西側半分は、現地表面下1.9m以上の攪乱を受けており、実際の調査はA東の東部のみとなった。

調査前の地表面はほぼ水平で、海抜標高2.6～2.7mを計る。地表面から1.2～1.7mまでの深さに近・現代の埋め土がある。1.5m程で近・現代の旧耕作土が見られ、床土をはさんで1.4～1.9mの間に灰色土を見る。ここでは若干の土器片が見られ、遺物包含層であることを確認した。またこの層を掘り込んだ2条の溝を検出した。その直下1.3～2.1mのあいだに、既往調査で旧石器時代～近・現代までの遺物を含むことが確認されている灰オリーブ色土が堆積している。以下、二枚の砂利層をはさみ、1.6～2.2mの深さで丘陵を形成すると思われる山土を検出した。Aトレンチ内を見る限り東へ下降することが分かった。

土層の堆積は以下の通りである。(Fig. 46参照)。

第1層　埋め土

第2層　黒褐色土　よくしまり、粘性をもつ。0.1cm以下の石英を若含む。旧耕作土。

第3層　暗灰黄色土　よくしまる。粘性はない。0.2cm以下の石英を含む。床土。

第4層　灰色土　かたくしまり、若干粘性をもつ。0.3cm以下の石英を含む。包含層。

第5層　暗オリーブ灰色土　かたくしまり、粘性をもつ。0.2cm程度の石英を若干含む。包含層。

第6層　暗緑灰色土　砂利層である。0.1cm～0.3cm程度の石英を多く含む。

第7層　灰オリーブ色土　礫層である。2.0～0.3cmの円礫チャートを含む。

第8層　黄褐色土　よくしまり、若干の粘性をもつ。不純物は含まない。山土。

(2)　Bトレンチの土層

Bトレンチは、病棟新営予定地の南西部に、長さ11m×幅2.5mで設定した。ところが既設の配管・基礎などのため、未完掘の部分が出た（Fig. 45参照)。土層の堆積は、調査前の地表面がアスファルトで、その海抜標高は2.4mである。まず、1.0～1.1mの深さまでが、近・現代の埋め土である。以下、約20cmの間に近・現代のものと考えられる旧耕作土を二枚、それと床土を確認した。そして1.3～1.5mの間に、灰オリーブ色土・オリーブ

灰色土、黄褐色土、暗オリーブ色土・灰オリーブ色土という三枚の層が堆積している。このうち、上部二層はAトレンチ内でも見られるが、第7層目に当たる暗オリーブ色土・灰オリーブ色土の堆積は、Bトレンチにおいてのみ確認したものである。なお、これらは全て遺物を含む層である。そして、1.4～1.8mの深さで灰色を呈する砂層の堆積を見た。これには、多くの石器類が包含されており、その直下、1.8～1.9m以上の深さでも、緑灰色を呈する砂層が堆積し、自然木等の出土を見ている（Fig. 46参照）。土層の堆積は、

第1層　埋め土

第2層　オリーブ黒色土　きめ細かで粘性を持つ。0.1cm以下の石英を若干含む。旧耕作土(上層)。

第3層　オリーブ黒色土　上層との違いはこちらがしまりが強いことである。旧耕作土(下層)。

第4層　オリーブ黒色土・オリーブ色土　若干粘性あるが全体にパサパサ。0.1cm～0.2cm程度の石英、0.1cm程度の黒ウンモを含む。床土。

第5層　オリーブ色土・オリーブ灰色土　若干粘性あるが全体にパサパサ。0.1cm程度の石英・黒ウンモを含む。包含層。

第6層　黄褐色土　若干粘性あるが全体にパサパサ。0.1cm程度の石英を多量に含む。包含層。

第7層　灰オリーブ色土　若干粘性あるが全体にパサパサ。0.1cm～0.2cm程度の石英を多量に含む。また、粘性をもち、0.1cm～0.3cm程度の石英、特に0.3cm程度の石英を多量に含む部分がある。包含層。

第8層　灰色土　砂層であるが、部分的に粘性をもつ。0.1cm～0.3cm程度の石英を多量に含む。包含層。

第9層　緑灰色土　砂層である。0.1cm～0.3cm程度の石英を多量に含む。包含層。

であり、両トレンチの土層は以下のように対比される。

Aトレンチ		Bトレンチ	Aトレンチ		Bトレンチ
1	←→	1	5	←→	6
2	←→	2	7	→×	
	→	3	8	→×	
3	←→	4	×	←—	7
4	←→	5	×	←—	8
			×	←—	9

A．Bトレンチの土層対比

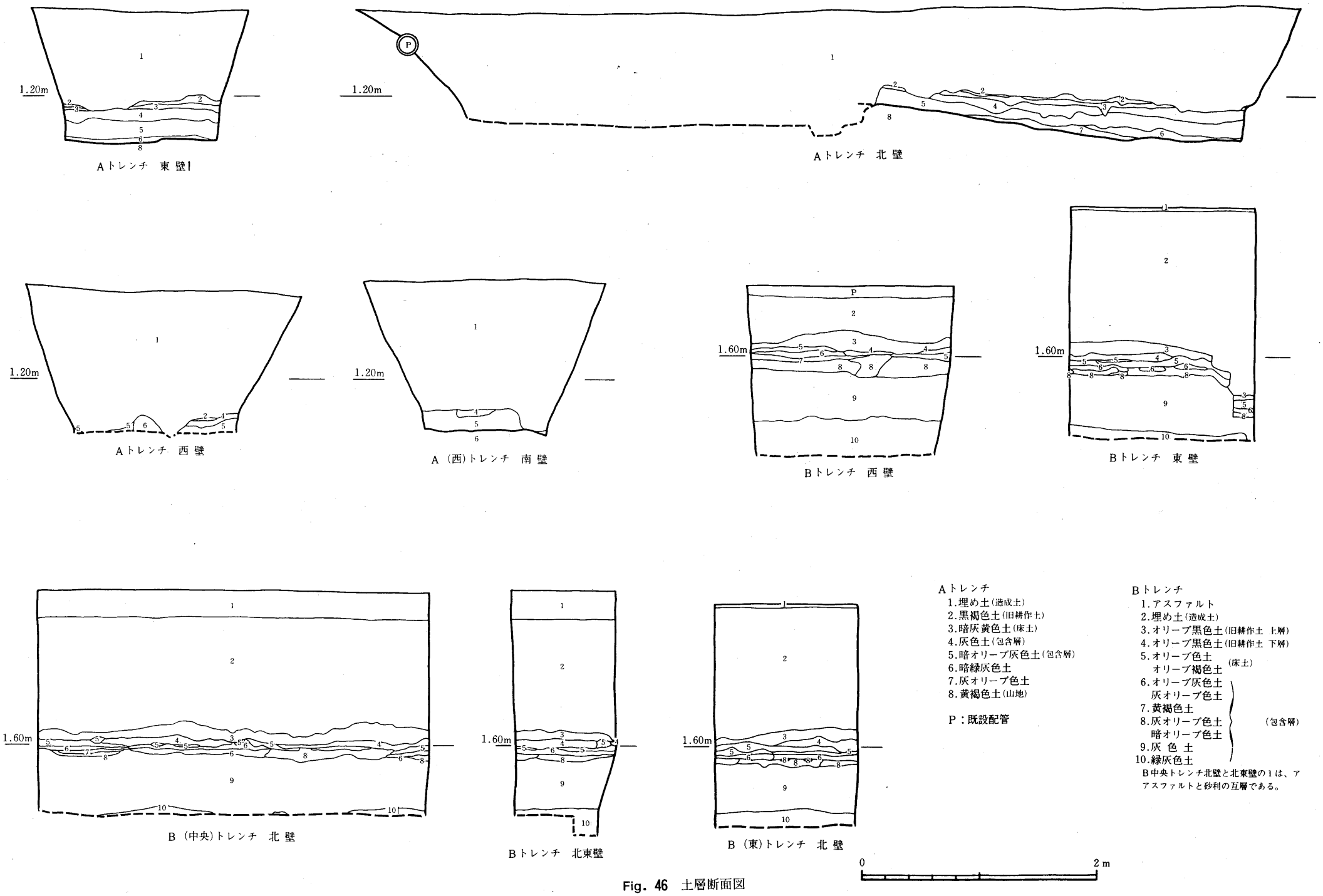

Aトレンチ 東壁1
Aトレンチ 北壁
Aトレンチ 西壁
A (西)トレンチ 南壁
Bトレンチ 西壁
Bトレンチ 東壁
B (中央)トレンチ 北壁
Bトレンチ 北東壁
B (東)トレンチ 北壁
1.20m
1.60m
P
0
2 m
Aトレンチ
1.埋め土(造成土)
2.黒褐色土(旧耕作土)
3.暗灰黄色土(床土)
4.灰色土(包含層)
5.暗オリーブ灰色土(包含層)
6.暗緑灰色土
7.灰オリーブ色土
8.黄褐色土(山地)
P：既設配管
Bトレンチ
1.アスファルト
2.埋め土(造成土)
3.オリーブ黒色土(旧耕作土 上層)
4.オリーブ黒色土(旧耕作土 下層)
5.オリーブ色土
オリーブ褐色土 (床土)
6.オリーブ灰色土
灰オリーブ色土
7.黄褐色土
8.灰オリーブ色土
暗オリーブ色土
9.灰 色 土
10.緑灰色土
(包含層)
B中央トレンチ北壁と北東壁の1は、アアスファルトと砂利の互層である。

Fig. 46 土層断面図

4　遺構・遺物

(1)　Aトレンチの遺構・遺物

これまで小串構内では、近・現代よりも古い遺構の発見はなく、検出された2条の溝も埋土の状況から、近・現代の所産と考えられる。両者は15～40cmの間隔でほぼ並列しており、北西－南東方向に流路をもつ。SD1は幅15～35cmで、長さ2.2m以上。検出面からの深さは、2.7cm～4cmを計る。溝底は平で、埋土から石英製の縦長剥片が1点出土した。SD2は幅20～45cm、長さ2.8m以上。検出面からの深さは、約4cmである。溝底は平で、出土遺物はない。両者とも上部の削平が大きいと考えられる。出土遺物にはこの剥片のほかに削器・二次加工剥片、擂鉢と考えられる土師質土器・須恵質土器の二細片がある。(Tab.　5参照)。なお、削器については、小結（2）考察の項も参照されたい。

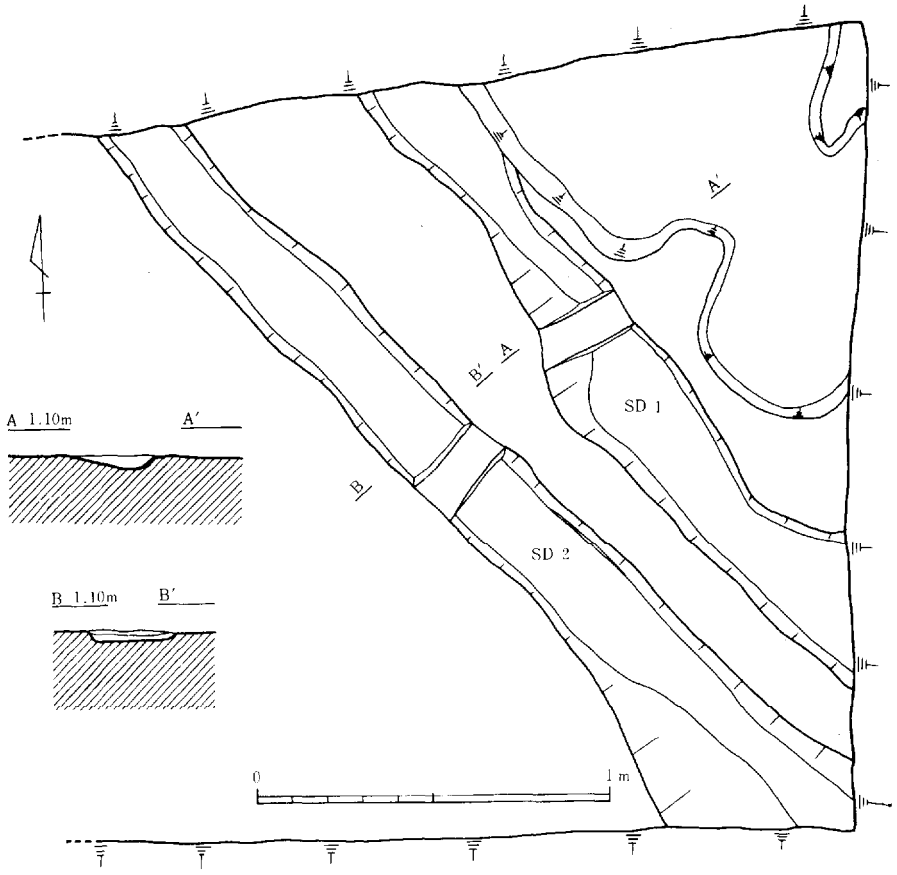


Fig. 47　Aトレンチ　第1・2号溝実測図

(2) Bトレンチの遺構・遺物

遺構の発見はない。出土遺物は、旧耕作土（上・下層）・床土から、土師器・土師質土器・須恵器・須恵質土器・陶器・磁器・瓦の各破片、石器では細石刃核等、また灰オリーブ色土から、土師器・土師質土器・須恵質土器・陶器・磁器の各破片、そして石器類の包含層である灰色の砂層から、木片・ナイフ形石器・削器・加工痕のある剥片・剥片・礫等が出土した。各遺物の属性についてはTab. 5を参照して頂きたい。

5 小　結

(1) 埋蔵文化財の遺存状況と今後の方針

調査面積は病棟新営予定地、2200㎡の内の約100㎡で、その1/20である。遺構は2条の溝のみで上部は削平を受けていた。人為的痕跡は攪乱による消失が高いと思われた。遺物もこの攪乱によって同一層に数時期のものが混在している状況であった。調査地点による土層の相違が大きく、今回初めて確認した土層がある。しかし、調査面積の少なさもあってこれらの堆積面の把握、またその成因・時期等の詳細は今後に待つところとなった。ただ、旧地形は病棟新営予定地内、大きく北東から南西への下降が確認され、南西側には石器類を含む灰色粘質土が堆積していると思われる。すなわち、給食棟、第一病棟方向周辺の掘削時には、事前に十分な調査が必要とされる。また、他の地域の遺構の有無は当調査結果からは言及できず、遺物を含め良好に保存されていることも考えられる。土層堆積範囲・その状況も未だ不明瞭であり、面的に網羅する上でも、まず、データーの収集が望まれる。

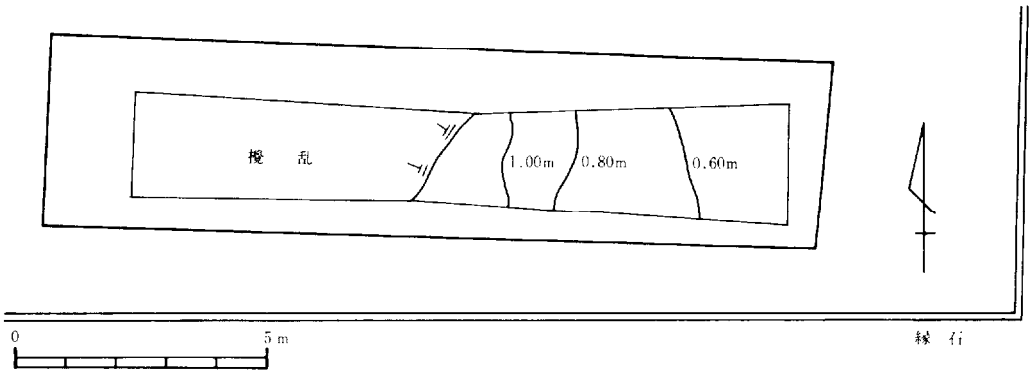


Fig. 48　Aトレンチ 旧丘陵の地形

(2) 考察

ここで、Bトレンチ第9層灰色砂層出土の遺物について見ておきたい。

20点近くの石器類・それに若干の自然木等が見つかった。所属時期については本層が二次堆積と考えられる為、層位からの時期決定はできない。しかし、時期を代表できる石器として、ナイフ形石器以外見られないこと、土器類がないこと、また、石器類の石材・形態などから、大部分を旧石器時代の所産と考えておきたい。以下、遺物説明を行う。

42はナイフ形石器である。縦長剥片の一側縁～基部にかけてブランティングを施す。これは全て腹面側からで、素材の打面部は切られているものの、形状はあまり変更させない。ブランティングの細かさ、小形の素材、使用石材という点において、県内でも異質なものといえよう。

9はスクレイパー（削器）である。素材の形状は不明である。図中、一側辺に大きめの剥離を施す。対辺には、使用によるものかと思われる微細な剥落痕が整然と認められる。素材面と考えられる剥離面からは、規則的な打撃方向を決定し得ない。なお、先端部については積極的に意識した加工は見受けられない。

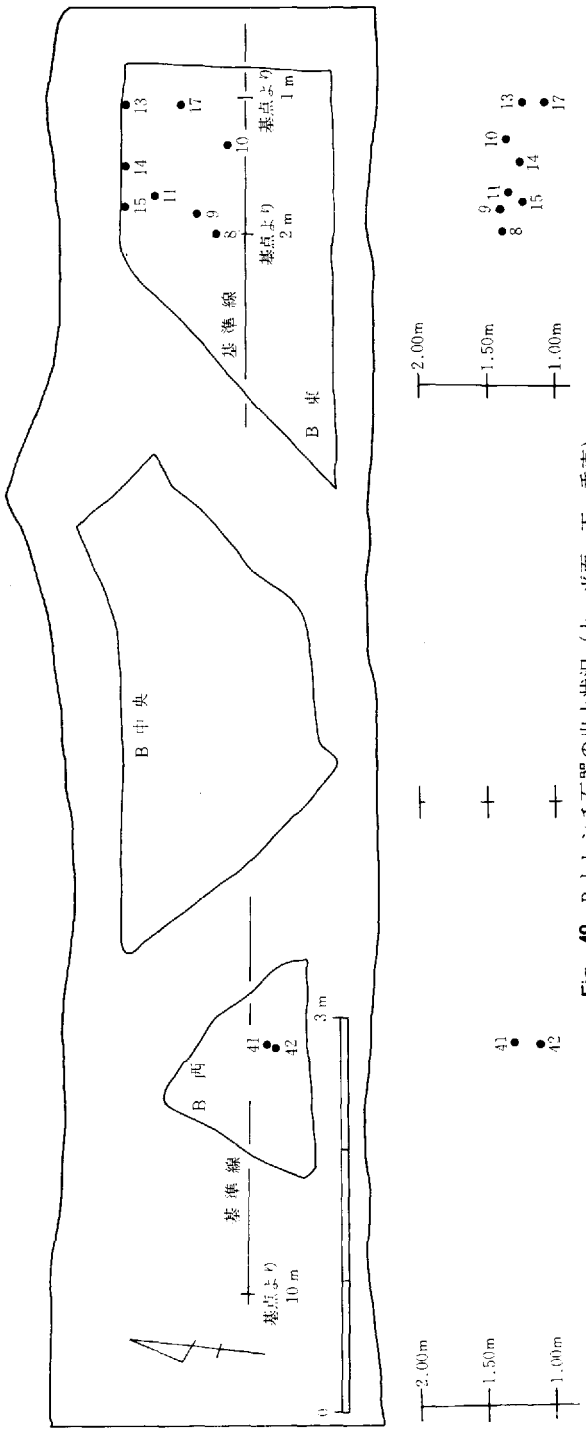


Fig. 49 Bトレンチ石器の出土状況（上・平面、下・垂直）

4は二次加工のある剥片である。打面部はない。リタッチによって切られているものと思われる。素材形状はおそらく縦長であろう。厚手のもので原礫面を大きく残す。背面相当面は多方向の剥離面で構成される。

22はナイフ形石器である。縦長剥片素材で、その一側縁と基部に整然と綿密なブランティングが腹面側から施される。打面・バルブは取り除かれている。しかし、素材の形状はあまり変更させない。背面には対向した剥離が存在し、両設打面石核の存在が考え得る。刃部には刃こぼれ状の微細な剥落痕が若干見られる。最先端部欠損。

15は削器である。素材は角柱状を呈するもので、その一側辺にリタッチを整然と施す。原礫面も残している。なお、素材の打面部もよく分からず、剥離の方向など実測図にはあえて記したところが多い。

10は使用痕のある剥片である。縦長剥片の一側辺に使用時によるものか、微細な剥落痕が連続的ではないが観察できる。原礫面が残存し、打面部も原礫面である。

18は複剥離打面をもつ縦長の剥片である。打点を残す。片側辺には、原礫面を残す。17は平坦打面をもつ不定形の剥片で片側辺を欠損する。

26は礫である。表面は黒色・橙色を呈し、表面には凸凹を見る。焼け礫か？

以下、第9層以外出土の遺物・Aトレンチ内の遺物について述べたい。

1はSD1出土の小形の剥片である。打面・打点は残らない。片側辺は欠損であるが、下端に原礫面を残す。時期帰属は不明である。

19は両面磨きが入るものと考えられ、側面は磨滅している。帰属時期・器種不明。

8は原形の⅛程度と思われる。残存部は原礫面で覆われる。表面は多少のローリングを受けているが、当時のものかは判断しかねる。敲石片か？

4は細石刃核である。正面形は円錐形。4枚の細石刃剥離痕を見る。ただし、左側2枚についてはあまり明瞭でない。打面は調整打面で、一枚の大剥離面を打面としている。石核の調整は入念であるが、原礫面をも残す。剥離角は直角に近い。野岳・休場型。

7は欠損が多く、詳細不明。若干磨いているようでもあるが、単なるローリングか？

30は削器である。縦長剥片の一側辺に粗い加工を施す。対辺には原礫面を残す。打面も原礫面からなる。腹面側辺の剥離は、リタッチの際か、あるいは使用による痕であろう。

以上、使用石材には、チャート・メノウがその半数を占めるものの、外に多くの石材がある。このことは、宇部台地遺跡群の在り方と類似するかのようであり、[2] 一遺跡での主要

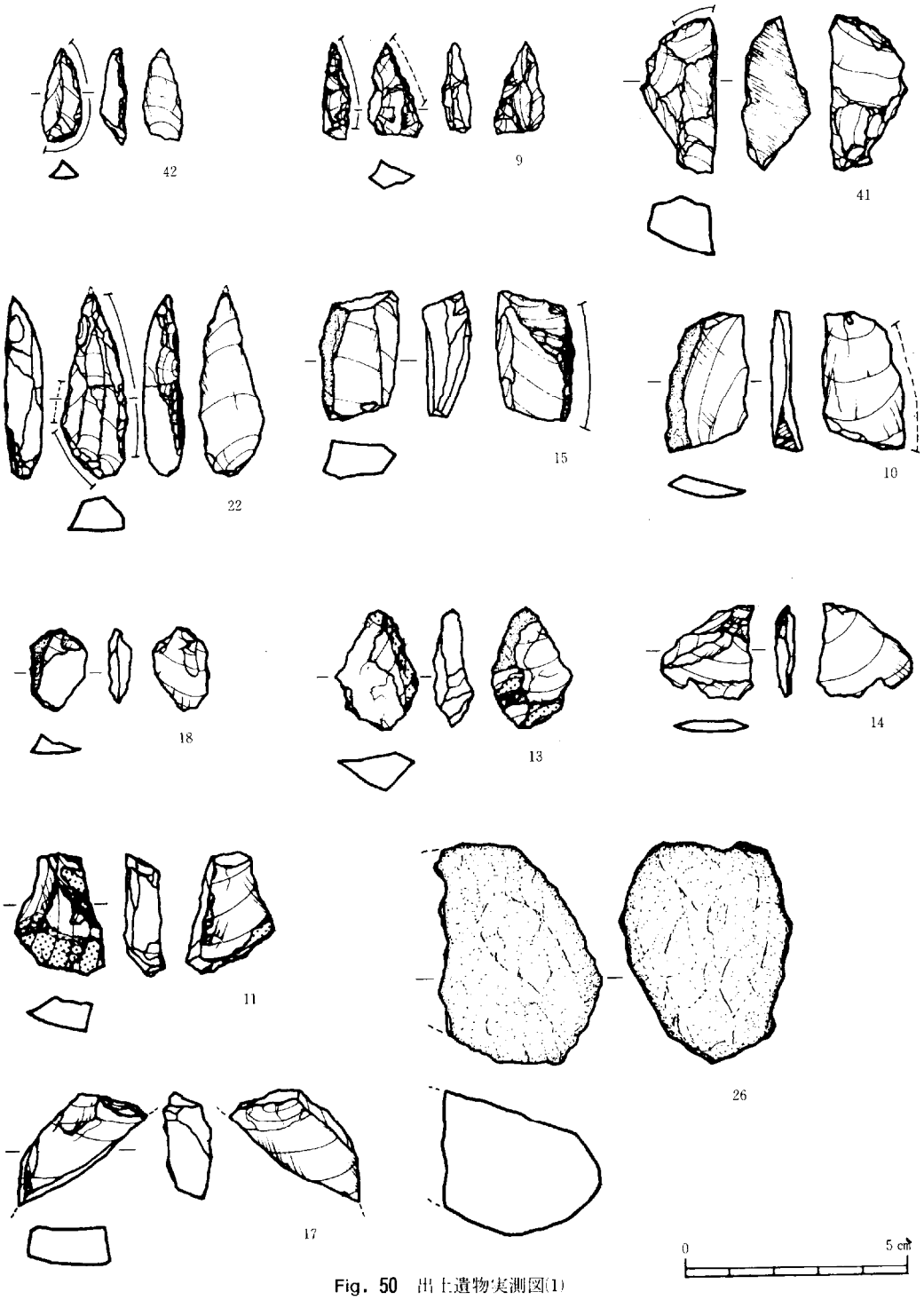


Fig. 50 出土遺物実測図(1)

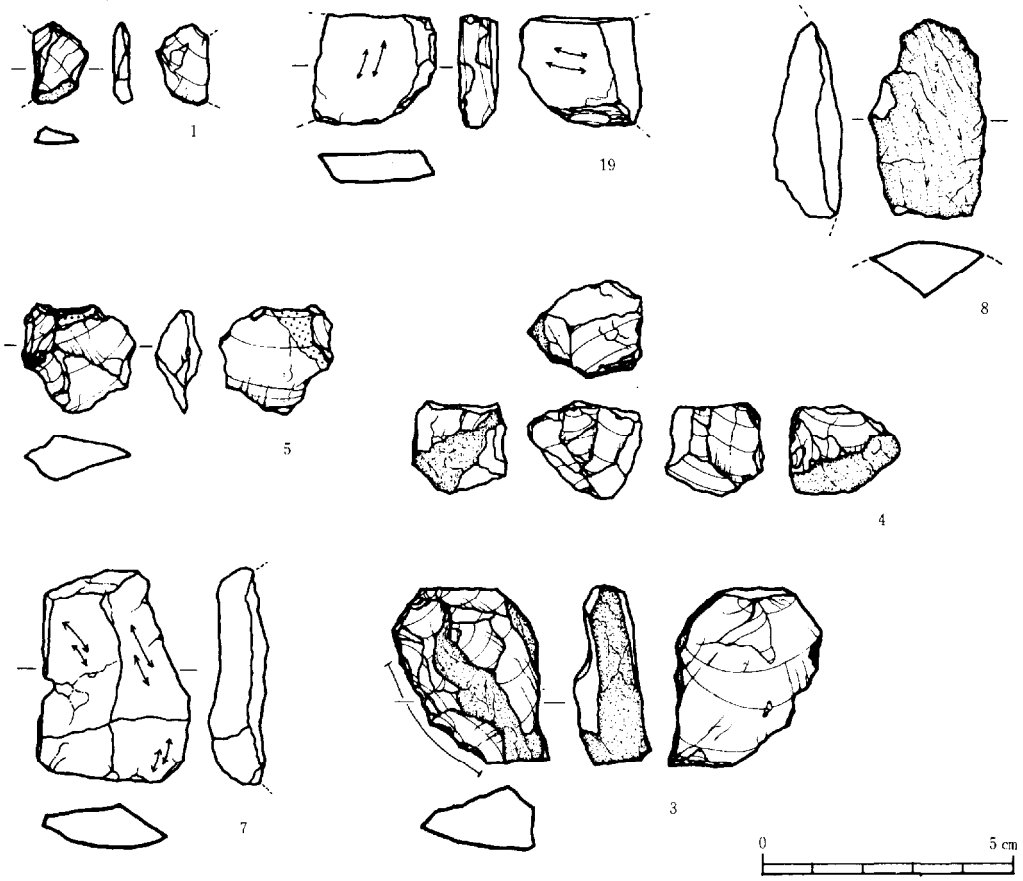


Fig. 51 出土遺物実測図（2）

石材という点では、チャート・メノウ類が今回それに相当しよう。[3]

宇部台地の遺跡群では、ナイフ形石器文化期と細石器文化期とを石材の面から概観すると、細石器文化期の、黒曜石の多さは目につくところである。[4] これは一概に、黒曜石以外の石材の減少とは結びつかないが、今回出土した特に灰色砂層の石器群は、石材の面からは宇部台地におけるナイフ形石器文化期の一般的な様相を示しているかのようにもとれる。

剥片剥離・調整法については、まず2点のナイフ形石器は縦長剥片素材である。両者とも二側縁加工で、素材の変更度は小さい。使用石材を除くと大きさで異なるものの、素材・調整法は類似する。大形の方は強いてあげるならば、南方遺跡に類似品を見るが、[5] 宇部台地の遺跡群にあっても数は少ないものである。また、剥片類の背面剥離面からは、主要剥離面の打撃方向に対し、ほぼ同じ面と、約90°ずれる面とを持つものが多く、4～5枚で構成される。ナイフ形石器については対向する剥離面を含んでおり、両設打面石核の存

在が推測できる。ここでは器種による剥離法の違いが指摘できるが、当石器群の詳細な剥片剥離法を追及するには資料が少なすぎよう。

打面については調整打面は少ない。原礫面打面は多い。打面調整の有無イコール定形的な剥片剥離技術の有無という一元的な考え方は成立しないが、打面の作出、調整の過程が単純であることは、より発達した形での剥片剥離法の存在を考えにくくしている。ただ、打面調整については、打面調整を含む調整技術を持ち合わせていない場合、また石材においても左右される場合もあろう。宇部台地の遺跡群で少なくとも打面調整の技術は見られるので、今回の資料は石材に影響されたものと考えておきたい。

チャート・メノウ製の石器類を見てみると、縦長剥片素材の削器一点を除き、外はやや横長の不定形剥片である。原礫面を側面に残すものが多く、全体的に小振りであり、拳大円礫状の原石が利用されたとの推測が可能である。当調査区を含め、宇部台地の遺跡群で案外普遍的な玻璃質安山岩は大分県姫島で産出する。一般に知られる黒曜石とは生成時に関するものか、概括的ながらその在り方が対照的で黒曜石は露頭として、玻璃質安山岩は拳大の円礫として場所を違えて存在している。[6] この玻璃質安山岩の在り方は、チャート・メノウ類の多用性を考えるに示唆するとこがなかろうか。旧石器時代、宇部台地遺跡群のほか、姫島周辺地域での姫島産黒曜石の利用度が少ないことは原石の在り方が選択行為に十分影響していたと考えたい。すなわち、当遺跡を含む宇部台地遺跡群におけるチャート・メノウ類の多用性は、それが地元で豊富に採れることに加えて、石器原材の形・大きさに選択行為が働いているものとして捉えておきたい。

〔注〕

1）山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ～Ⅵ』（1985～1987年）所収。

2）山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(1)～(9)」（『古代文化』第35巻～41巻、1983～1989年）。

3）富樫孝志「雨乞台遺跡の使用石材について」（『山口県雨乞台遺跡の発掘調査』、山口大学人文学部考古学研究室研究報告　第5集、1988年）。外に2）の文献。

4）2）、3）の文献、実見による。

5）山口県旧石器文化研究会「宇部台地における旧石器時代遺跡(5)－南方遺跡　その(1)－」（『古代文化』第38巻9号、1986年）。

6）清水宗昭「姫島産の黒曜石とガラス質安山岩の分布について」（『賀川光夫先生還暦記念論集』1982年）。実見による。

Tab. 5　出土遺物観察表

No	器種	石質	出土位置 (Grid)	出土層位	北↔南 (cm)	東→西 (cm)	出土高 (m)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	打面の形状 形態	打面の形状 傾き	原礫面の有無	接合関係	備考
1	剥片	チャート	A東	SD1 埋土内				1.6	1.0	0.4	0.5			○		
2	二次加工のある剥片	チャート	A東	4				1.8	1.4	0.5	1.7	単剥離	ほぼ水平	?		風化のため詳細不明
3	削器	チャート	A東	5				3.5	3.1	1.5	14.1	原礫面	腹面へ鋭角	○		
4	細石刃核	チャート	B東	4				石核高 1.9	石核幅 2.3	石核厚 1.9	8.0	複剥離	ほぼ水平	○		野岳・休場型
5	剥片	チャート	B東	4				2.1	2.2	0.9	2.8					
6	二次加工のある剥片	蛇紋岩	B東	3				2.2	2.7	0.5	2.8					
7	砥石?	石英斑岩	B東	4				4.3	3.0	1.0	12.3			○		
8	敲石?	石英安山岩質溶結凝灰岩	B東	8	N24.0	205.0	1.424	3.9	2.3	1.3	10.4			○		
9	削器	黒曜石	B東	8	N37.0	185.0	1.463	3.1	1.2	0.6	1.0					
10	剥片	チャート	B東	8	N13.0	134.0	1.367	3.1	2.8	0.5	3.1	単剥離	水平	○		
11	剥片	チャート	B東	8	N68.0	172.0	1.368	2.7	1.9	0.7	3.6	単剥離	腹面へ鋭角	○		
12	剥片	蛇紋岩?	B東	8	N52.0	138.0	1.315	1.6	1.8	0.8	2.9					
13	剥片	メノウ	B東	8	N98.0	106.0	1.266	2.7	1.8	0.7	2.8			○		
14	剥片	チャート	B東	8	N99.0	150.0	1.278	2.1	2.0	0.5	0.9					
15	削器	玉髄	B東	8	N98.0	180.0	1.243	2.8	1.8	1.1	5.9			○		
16	剥片	チャート	B東	8	0	236.0	1.304	2.5	3.0	1.0	6.3	複剥離	ほぼ水平	○		
17	剥片	姫島産黒曜石	B東	8	S48.0	106.0	1.084	2.5	2.9	0.9	5.3	複剥離	腹面へ鋭角			
18	剥片	チャート	B東	8				1.9	1.3	0.4	0.9	複剥離	水平			
19	不明	細粒砂岩	B東	8				2.2	2.4	0.6	4.5					
20	剥片	蛇紋岩?	B東	8				1.6	1.2	0.5	1.0					
21	剥片	チャート	B中央	8				1.1	1.2	0.5	0.6					器種?

No	器種	石質	出土位置(Grid)	出土層位	北↔南(cm)	東→西(cm)	出土高(m)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	打面の形状 形態	打面の形状 傾き	原礫面の有無	接合関係	備考
22	ナイフ形石器	玻璃質安山岩	B中央	8				4.1	1.5	0.7	4.0					
23	剥片	蛇紋岩?	B中央	8	N66.0	410.0	1.064	1.9	1.3	0.4	1.0	単剥離	腹面へ鋭角			
24	剥片	蛇紋岩?	B中央	8	N74.0	544.0	1.121	3.2	2.6	0.7	1.6					
25	剥片	蛇紋岩?	B中央	8	S24.0	583.5	1.124	2.1	0.8	0.4	0.7					
26	礫	安山岩	B中央	8				4.9	3.7	3.2	72.0			○		
27	剥片	チャート	B中央	8				1.9	1.6	0.7	2.2					
28	剥片	蛇紋岩?	B中央	8				2.5	1.2	0.4	1.7					
29	剥片	蛇紋岩?	B中央	8				2.1	0.8	0.4	0.7					
30	剥片	蛇紋岩?	B中央	8				1.1	1.1	0.5	0.4	単剥離	背面へ鋭角			
31	剥片	蛇紋岩?	B中央	8				1.1	1.8	0.6	1.1					
32	剥片	蛇紋岩?	B中央	8				1.2	1.3	0.4	0.9	複剥離	ほぼ水平			
33	剥片	蛇紋岩?	B中央	8				1.5	1.0	0.4	0.6					
34	剥片	蛇紋岩?	B中央	8				1.1	0.6	0.2	0.2					
35	剥片	蛇紋岩?	B中央	8				1.0	1.0	0.7	0.6					
36	剥片	蛇紋岩?	B西	8	S44.0	900.0	1.480	2.0	1.0	0.7	1.5					
37	剥片	蛇紋岩?	B西	8	S27.0	896.0	1.489	2.3	1.5	0.9	3.0	単剥離	水平	○		
38	剥片	蛇紋岩?	B西	8	S13.0	893.0	1.508	2.9	1.1	0.6	2.1			○		
39	剥片	蛇紋岩?	B西	8	S 3.0	896.0	1.514	1.7	2.2	0.9	4.3	複剥離				
40	剥片	チャート	B西	8	S 4.0	793.0	1.431	1.9	2.3	0.4	1.9			○		
41	剥片	水晶	B西	8	N 7.0	810.0	1.303	3.4	1.7	1.6	7.6					
42	ナイフ形石器	蛇紋岩?	B西	8	S16.0	811.0	1.109	3.1	0.9	0.5	0.8					

No	器種	石質	出土位置(Grid)	出土層位	北↔南(cm)	東→西(cm)	出土高(m)	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	打面の形状 形態	打面の形状 傾き	原礫面の有無	接合関係	備考
43	二次加工のある剥片	蛇紋岩?	B西	8	S23.0	782.0	1.108	1.5	1.1	0.7	1.0					
44	剥片	蛇紋岩?	B西	8				1.3	2.2	1.1	3.0	複剥離	水平			
45	二次加工のある剥片	蛇紋岩?		表採				2.6	2.8	0.9	8.6			○		
46	サメの歯		B西	8				2.0	1.9	0.4						

No	器種 器形	出土位置	出土層位	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 雲母	胎土 砂礫	胎土 その他	色調 外面(素地)	色調 内面(釉)	残存程度	形態・成形・調整等の特徴
1	土師質土器 擂鉢	A東	4	極小 a~d						暗青灰色 (5B 3/1)	灰白色 (10YR 8/2)	不明	
2	須恵質土器	A東	4	極小 a~c						灰白色 (5Y 7/1)	灰白色 (5Y 7/1)	不明	
3	土師器	B中央	2	極小 a~b		極小 a		極小 a		にぶい橙色(7.5YR 7/4) 灰黄色(2.5Y 7/2)		不明	片面に回転ユビナデ。
4	磁器	B中央	2							(明オリーブ灰色) (2.5GY 7/1)	(透明) (内面?茶がかった透明)	不明	内面には回転ユビナデ。外面に施釉、貫入あり。内面にも施釉?
5	・瓦	B中央	2			極小 a~b		極小 a~b		灰色 (7.5Y 4/1)	不明	不明	
6	陶器	B中央	2					極小 a~b		にぶい橙色 (5YR 6/4)	不明	不明	外面に回転ユビナデ、底面にユビナデが見られる。高台貼り付け。ロクロ切り離し方法は不明。
7	須恵器	B中央	2	極小 a~c						灰白色 (5Y 7/1)	(緑・灰色を呈する透明)	不明	外面に回転ユビナデ。内・外面に施釉、貫入はない。外面には白色を呈する釉が棒状になって残り、また鉄分が付着する。
8	陶器	B中央	2							(明褐灰色) (5YR 7/2)	(黄・茶色)	不明	
9	磁器	B中央	2							(灰白色) (N 8/0)	(透明)	不明	染付。内・外面に青色の呉須で施文。内面に施釉、貫入はない。
10	陶器	B西	2					極小 a		(灰白色) (5Y 6/1)	(暗赤褐色がかった透明)	不明	内面施釉。外面釉欠きとり。
11	磁器	B西	2							(灰白色) (5Y 6/1)	(白色)	不明	内・外面に施釉、貫入あり。
12	陶器	B西	2							にぶい赤褐色 (2.5YR 4/3)	褐灰色 (10YR 4/1)	不明	
13	磁器	B西	2							(白色)	(透明)	不明	口縁部片。染付。内面に2条の沈線。内・外面に施釉、貫入はない。

No	器種 器形	出土位置	出土層位	胎土						色調		残存程度	形態・成形・調整等の特徴
				石英	長石	角閃石	雲母	砂礫	その他	外面（素地）	内面（釉）		
14	須恵質土器	B東	3							不明	灰色 (7.5Y 6/1)	不明	
15	瓦	B東	3					極小 a～b		灰色 (N 4/0)	灰色 (N 4/0)	不明	
16	瓦	B東	3							灰色 (N 4/0)	灰色 (N 4/0)	不明	
17	瓦 (瓦質土器か)	B東	3			極小 a				灰白色(7.5Y 7/1) 片面不明		不明	
18	磁器	B東	3							(灰白色) (7.5Y 8/1)	(透明)	不明	内・外面に施釉、貫入はない。
19	磁器	B東	3							(白色)	(透明)	不明	口縁部片。染付。内面に雷文を挟んで上・下に各々2条の圏線を見る。外面は2条の圏線と施文を見る。内・外面に施釉、貫入も見る。
20	土師器	B中央	3	極小 a～c			極小 a金			にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	にぶい橙色 (7.5YR 7/4)	不明	内面？にユビナデ。
21	瓦	B中央	3							黒灰色	黒灰色	不明	
22	須恵器 蓋	B中央	3	極小 a			極小 a金		極小 c	暗灰色 (N 3/0)	褐色 (7.5YR 4/3)	不明	口縁部片。内・外面とも回転ナデ。6c中頃？
23	土師器	B西	3	極小 a～d	極小 a～b				極小 a	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	にぶい黄橙色 (10YR 7/4)	不明	
24	土師器	B西	3	極小 a～d	極小 a～b					橙色 (7.5YR 7/6)	橙色 (7.5YR 7/6)	不明	内・外面にナデ？
25	陶器	B西	3		極小 a～c					(にぶい橙色) (7.5YR 6/4)	内面－(黒色) 外面－(灰白色)	不明	外面はナデ？。内面と外面の一部に施釉する。
26	磁器	B西	3							(灰白色) (10Y 8/1)	(透明)	不明	染付。内面に2条の圏線と文様を施す。内・外面に施釉、貫入はない。
27	瓦	B西	3	極小 a～b					小 a	灰色 (5Y 5/1)	灰色 (5Y 5/1)	不明	
28	瓦	B西	3	極小 a～d					極小 a～b	灰色 (7.5Y 5/1)	黒色	不明	
29	土師質土器	B東	4	極小 a～d					極小 a	灰色 (7.5Y 5/1)	にぶい橙色 (7.5YR 5/4)	不明	
30	瓦質土器 擂鉢	B東	4	極小a～ d～小a						灰色 (N 6/0)	灰色 (N 6/0)	不明	口縁部片。内面には工具によるナデ。条線は見られないが、傾きに口縁部のかえり具合を総合して、古い段階のものと考えられる。口唇部はコビナデ。
31	磁器	B東	5						極小 a	(灰黄色) (2.5Y 6/2)	外面－(黒褐色) (5YR 2/1)	不明	口縁部片。内・外面に施釉、貫入はない。
32	磁器	B東	5							灰色 (5Y 5/1)	外面(黒褐色を主体に黒入る) 内面(暗赤褐色を主体に黒入る)	不明	口縁部片。内・外面に施釉、貫入はない。
33	磁器	B東	5					極小 a		(灰白色) (10Y 8/1)	(透明)	不明	口縁部片。内・外面に施釉、貫入はない。
34	磁器	B東	5						極小 a	(灰白色) (10Y 7/1)	(若干青緑がかった透明)	不明	口縁部片。染付。内・外面に施釉、貫入あり。

No	器種 器形	出土位置	出土層位	胎土						色調		残存程度	形態・成形・調整等の特徴
				石英	長石	角閃石	雲母	砂礫	その他	外面（素地）	内面（釉）		
35	磁器	B中央	5							(灰白色) (7.5Y 8/2)	(透明)	不明	口縁部片。内・外面に施釉、貫入あり。口縁先端は丸みを帯びる。
36	磁器	B西	5							(灰白色) (7.5Y 7/1)	(若干灰色がかった透明)	不明	口縁部片。内・外面に施釉、貫入あり。口縁先端は丸みを帯びる。
37	瓦	B東	4							灰白色(5Y 8/1) 黒色(7.5Y 2/1)		不明	
38	土師質土器	B東	7	極小 a～b	極小 a	極小 a				灰色 (7.5Y 4/1)	浅黄橙色 (10YR 8/3)	不明	
39	土師器	B東	7	極小 a～d						にぶい黄橙色(10YR 7/4) 浅黄橙色(10YR 8/4)		不明	
40	土師器	B東	7							浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	浅黄橙色 (7.5YR 8/4)	不明	
41	須恵質土器？	B東	7	極小 a～d						不明	灰色 (5Y 5/1)	不明	内面ナデ。
42	瓦質土器	B中央	7	極小 a～d						灰色 (10Y 4/1)	にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	不明	
43	磁器	B東	7							(灰色) (5Y 5/1)	(茶がかった透明)	不明	内・外面に施釉。貫入はない。
44	土師質土器	B東	7	極小 a～d	極小 a～c					橙色 (10Y 5/6)	橙色 (10Y 5/6)	不明	片面にナデ。
45	陶器	B東	7					極小 a		(赤色) (10R 5/6)	(茶がかった透明)	不明	

※　空白欄は該当事項のないもの。但し、法量については、石器類では計測不可能なものの意味。

※　石器類について、その石材が蛇紋文？とあるものについては、現時点、その石材から石器として認定し難いものも見られる。

※　土器の胎土については、含まれる粒の大きさを、農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1976）に処って、便宜的に分類した。

極小－径1㎜以下

小　－径1～2㎜で、各々4段階、細かい方から順にa、b…とした。

※　石器群の出土位置については、No.8削器を例にとると、基準線より北へ24.0㎝、基準点から西へ205.0㎝の位置にあることを示す。

第５章　昭和62年度山口大学構内の立会調査

第１節　吉田構内の立会調査

１　教養部複合棟新営に伴う立会調査

調査地区　　吉田構内　Ｉ・Ｊ－16

調査期間　　昭和62年９月８日（Ａ地点）、昭和63年２月24日（Ｂ地点）、３月12・17日（Ｃ地点）

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約30m²

調査結果　　Ａ地点は樹木移植に伴うもので、工事基底面の現地表下約30cmまで構内造成に伴う埋め土が堆積し、顕著な遺構・遺物は認められなかった。Ｂ地点は給水管埋設に伴うもので、工事基底面の現地表下約80cmまで構内造成に伴う埋め土が堆積していた。工事に支障のない範囲内で部分的に深掘りを行った結果、埋め土はさらに14cmほどの厚さをもち、その直下に緑灰色礫混じり粘質土の地山が検出されたが、顕著な遺構・遺物は認められなかった。Ｃ地点は排水桝および側溝の新営に伴うもので、前者は現地表下約1.1ｍまで掘削した。現地表から厚さ約45cmの埋め土を除去した段階で、幅約30cm、深さ約9cmの溝状遺構を検出した。周辺は大きく攪乱を受けており、一部分しか残存していない。埋土は二層に分層され、上層は黒褐色粘質土（Hue 5 YR 2/1）、下層は黒褐色砂（Hue 2.5Y 5/3）である。出土遺物はなく時期は明かでない。後者は排水桝新営地点のすぐ南に位置するが、埋め土はわずか約14cmの厚さで、その直下が青灰色粘土の地山である。顕著な遺構・遺物は認められなかった。いずれも埋め土中に赤黒色粘質土（Hue 2.5YR 2/1）の遺物包含層がブロックで混入しており、土師器が出土した。耕作土が残存していないこと、遺構の遺存状況が極めて悪いことなどから、当該地域周辺での削平が比較的大規模に行われたことを窺わせる。

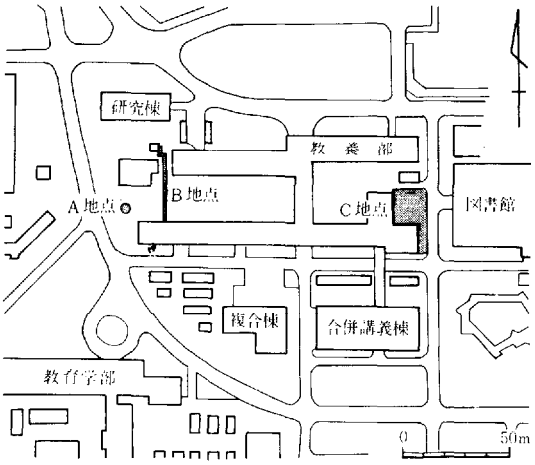


Fig. 52　調査区位置図

2　国際交流会館新営に伴う立会調査

調査地区　　吉田構内　M－23，N－22・23

調査期間　　昭和62年11月9～11日（A地点）、昭和63年3月28日（B地点）

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　A地点－150㎡　B地点－約45㎡

調査結果　　A地点は国際交流会館の基礎工事に伴い、基礎部分を除いた地域が現地表下約1.2mまで掘削された。同建物敷地では昭和61年度に試掘調査を実施しており、南半部で東から西へ走行する弥生時代から古墳時代の河川跡が検出されている[1)]。幅約19m以上の規模をもつが、左岸付近は未検出であったため立会調査を行った。現地表下約40～80cmの構内造成に伴う埋め土の下は、厚さ20～50cmの第2層：暗オリーブ色ないしは黄灰褐色土が堆積しており、東に向かうに連れて層厚を増す。北東部では認められない。その下が河川跡の堆積土で、第3層：青灰色および緑灰色の砂礫が厚さ40～50cmにわたって堆積している。調査区内では左岸からの落ち込みは検出されなかったが、B地点の調査結果から幅30m以上の規模をもち、学外に広がるものと推測される。前回の調査では弥生土器、須恵器が出土しているが、今回は出土遺物はない。

B地点はA地点の南東約10mに位置し、浄化槽の新営に伴い調査した。堆積層順、層厚はA地点とほぼ同様であるが、第2層は認められない。河川跡は全面で検出されたが、層厚は20～40cmと薄い。なお、河川跡の埋積土の下位には、層厚約60cmの無遺物層をはさんで、上位から青灰色、黄褐色の砂礫がそれぞれ約60～70cm、30～40cmの厚さで堆積している。青灰色砂礫で湧水する。出土遺物はないが、弥生時代以前の河川跡の可能性がある。

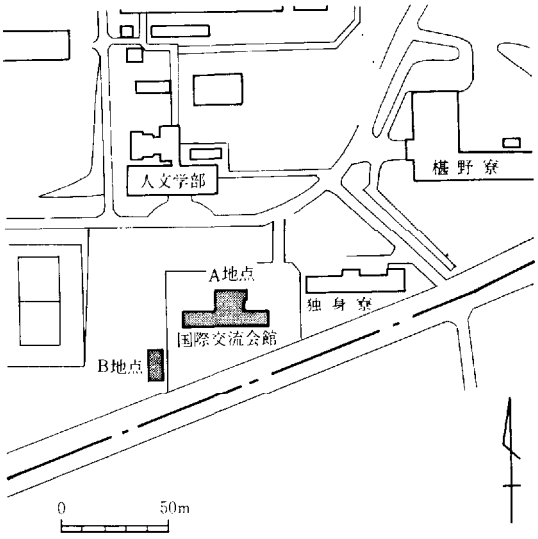


Fig. 53　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。

3　教育学部附属養護学校自転車置場移設に伴う立会調査

調査地区　　吉田構内　B－21

調査期間　　昭和62年11月20日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約1㎡

調査結果　　養護学校の敷地は施設整備の前段階で、昭和54年度に山口県および山口市教育委員会によって試掘調査が実施されている。体育館以北の約2300㎡の範囲には、平安時代から室町時代の掘立柱建物跡（棟数不明）のほか柱穴多数が検出されている。また、体育館のすぐ北側では、東西に走行する弥生時代から古墳時代の溝2条が検出されており、そのうちの1条は幅約4ｍの大規模なもので、約50ｍの流路長が確認されている。さらに、敷地の北端部での側溝工事に伴う調査では、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての多数の溝が検出されており、東・西両端部付近でも弥生時代から平安時代の遺物包含層の存在が報告されていることから、養護学校の敷地は遺構・遺物の遺存状態が比較的に良好な地域とされている。

今回の調査地点は、遺構が密に分布する体育館のすぐ北側に位置する。過去の調査では、施設整備前の水田耕作土上面から20～30㎝下位で遺構面が検出されている。自転車置場の基礎は現地表面から40㎝の掘削を必要とするものであり、工事による遺構への影響が危ぶまれたため立会調査を行った。しかし、基礎に並行して既設の排水管が埋設されており、調査範囲内は埋設管の工事によってすでに攪乱を受けていた。なお、埋め土には黒褐色粘質土がブロック状に混入しており、周辺での遺構ないしは遺物包含層の削平が行われていることを示唆する。

養護学校敷地内での調査は、これまでほとんどなされていないのが現状で、今後の調査によって集落構造、展開過程を明らかにする必要があろう。

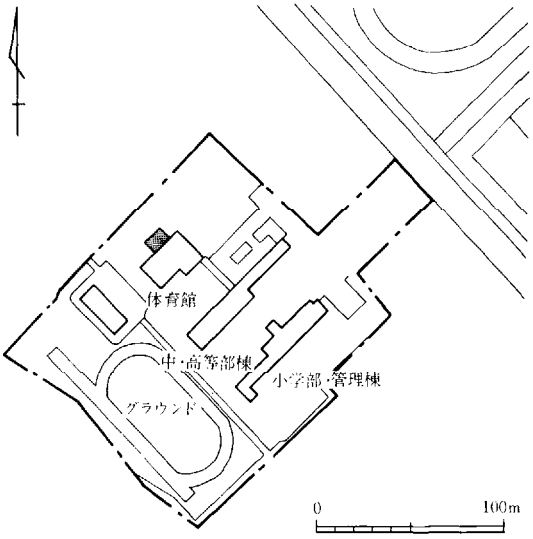


Fig. 54　調査区位置図

4　農学部附属農場Ｅ７圃場排水管埋設およびＥ６圃場進入路拡幅に伴う立会調査

調査地区　　吉田構内　Ｌ・Ｎ－12

調査期間　　昭和62年12月14日、昭和63年３月７～９日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　Ａ地点－約21㎡　Ｂ地点－約34㎡

調査結果　　排水管の埋設工事は幅70cm、長さ約30ｍの規模で、現地表面から約60cm掘削するものである（Ａ地点）。厚さ約20～30cmの耕作土の下には、上位から層厚約10～20cmの第２層：暗褐色粘質土（Hue 10YR 3/3）、約10～30cmの第３層：黒褐色粘質土（Hue 7.5YR 3/2）、約10cmの第４層：黒褐色粘土（Hue 10 YR 2/2）、約10cmの第５層：褐色粘質土（Hue 7.5YR 4/6）が堆積する（Fig. 56, PL. 32(1)）。遺物は第２層から弥生土器、歴史時代の土師器、第５層から弥生土器、須恵器、歴史時代の土師器、輸入陶磁器などが出土したが、いずれも小片で、大学会館敷地で検出した包含層と同一のものである[1]。なお、中央部付近では地山が認められ、柱穴を検出した。

Ｂ地点は農作業用機械の搬出入道路を確保するため、循環道路より一段高い飼料園を幅約２ｍ、長さ約17ｍにわたって現地表面から約1.5ｍ掘削するもので、調査地点の東に存在する丘陵の裾部に位置する。堆積層順は厚さ約5cmの腐植土の下位に、周辺の丘陵を削平した客土が厚さ約10cm堆積する。その下には、層厚約10cmの褐色土（Hue 10YR 4/4）が堆積しているが、遺物は包含していない。地山はその下位に堆積する丘陵の基盤である明黄褐色（Hue 10 YR 6/8）の山土で、土壙１基が検出された。

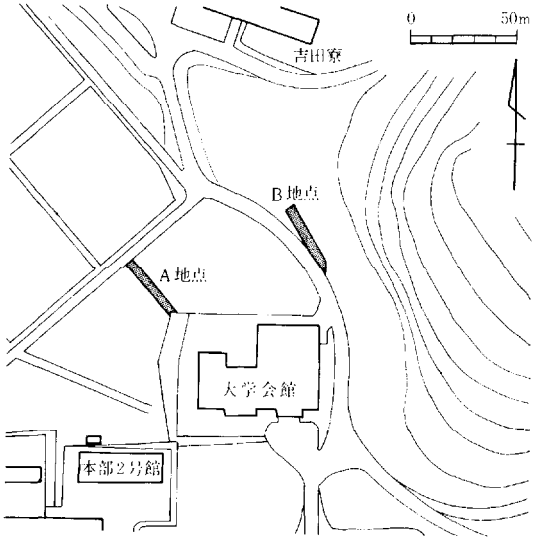


Fig. 55　調査区位置図

土壙（Fig. 57, PL. 32(2)）

後世の削平によって東端部しか残存していない。平面形態は円形もしくは楕円形と思われ、現存最大長は東西42cm、南北66cm

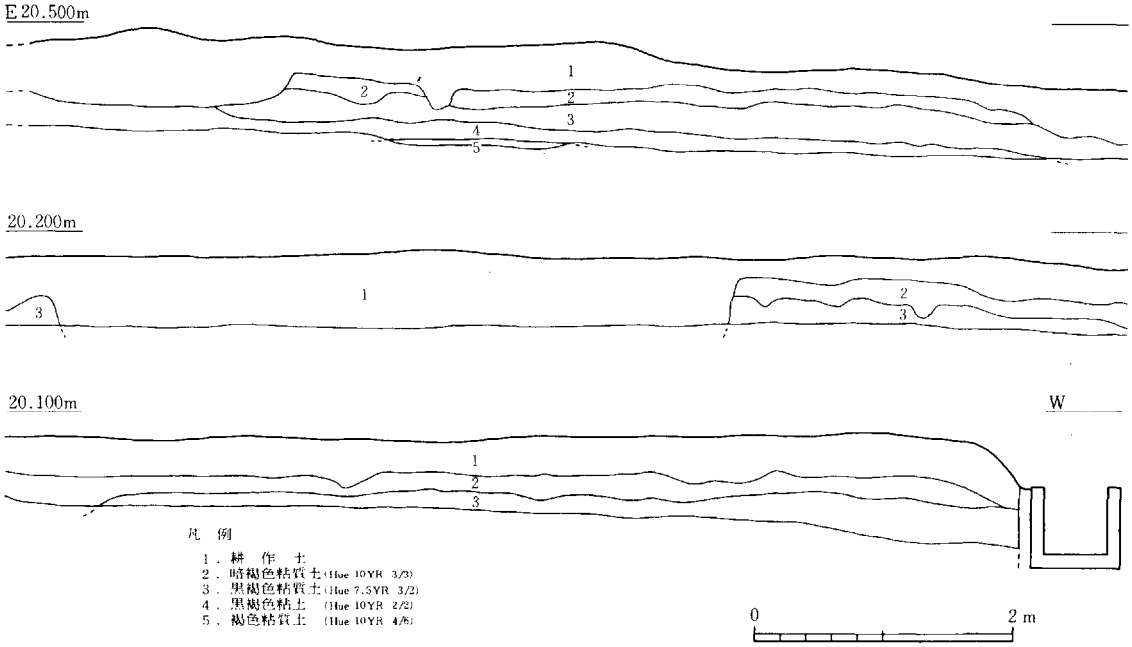


Fig. 56 A地点土層断面図

の規模をもち、深さは検出面から36cmである。検出面の標高は約22.0m。壁面は平坦な壙底から比較的緩やかに立ち上がる。埋積土は木炭を含む褐色土（Hue 10 YR 4/6）で、地山の土が所々に混在する。埋積土の最上層には扁平な板石が一枚が認められる。

出土遺物はないが、埋積土の色調から古代から中世のものと考えられる。遺存状態が極めて悪く、土壙の性格を知る手がかりは少ないが、平面形態、規模、立地から土壙墓もしくは火葬墓の可能性が考えられたため、土壙を各一試料採取し、全リン酸（P_2O_5）、全カルシウム（CaO）量の分析を山口県農業試験場に依頼した。1mmのふるいを通した土壙について、全リン酸はバ

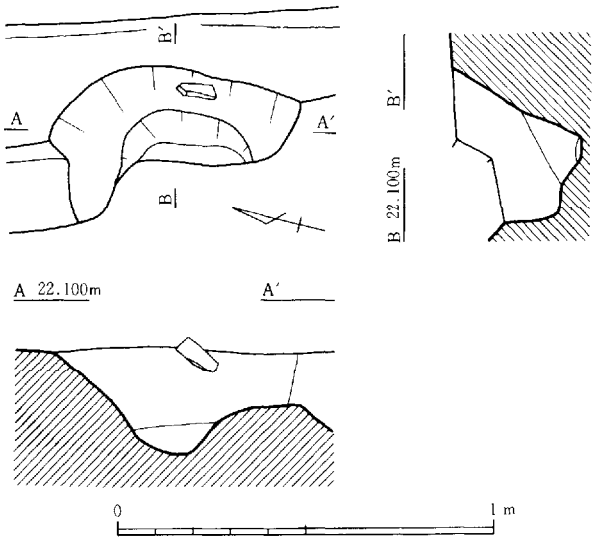


Fig. 57 B地点土壙実測図

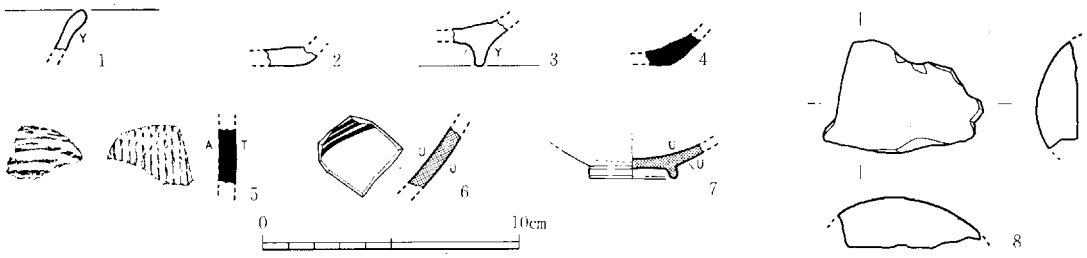


Fig. 58 A地点出土遺物実測図

Tab. 6 A地点出土遺物観察表

No	器種	法量 (cm) (①口径 ②器高 ③底径)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
1	土師器 坏		灰白色(2.5Y 8/2)	良好	良好	
2	土師器 坏		①灰白色(2.5Y 8/2) ②淡赤橙色(7.5Y 7/3)	やや不良	良好	
3	土師器 埦		①灰白色(2.5Y 8/2) ②褐灰色(10YR 6/1)	良好	良好	
4	須恵器 坏		灰白色(10Y 8/1)	不良	やや不良	
5	須恵器		青灰色(10BG 5/1)	精良	良好	
6	青磁 埦		素地－灰白色(7.5Y 8/1) 釉調－やや濁った透明	不良	良好	内外面に貫入あり
7	磁器 埦	③ 3.4	素地－浅黄橙色(10YR 8/3) 釉調－灰白色(5Y 7/1)で濁る			

ナドモリブデン酸比色法、全カルシウムは原子吸光光度法により定量した。

その結果、全リン酸は土壙内0.77mg／g、土壙外0.37mg／g、全カルシウムは土壙内1.16mg／g、土壙外0.90mg／gの分析値が得られた。試料数は少ないが、試料採取地の土壙は肥料による汚染がほとんどなく、土壙内外における両成分の分析値の開きは定量的に意味をもつものであり、土壙墓もしくは火葬墓の可能性を否定するものではないであろう。

出土遺物 (Fig. 58, PL.32(3))

1～3は土師器。1・2は坏。1は口縁端部がやや肥厚し外反する。2は底部で、外底面の凸凹からヘラ切りであろう。3は埦で断面長台形の高めの高台を貼付する。4・5は須恵器。4は坏で、底部と体部の境が不明瞭である。5は外面に平行タタキを施す中・大形品であろうが、器種は不明。6は青磁で、内面に片彫り文様を有する。内外に貫入がみられる。7は敲石もしくは磨石と思われるが、欠損が著しく詳細は不明。

[注]

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年)。

5　農学部植栽に伴う立会調査

調査地区　　吉田構内　N－17

調査期間　　昭和63年３月17日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約３㎡

調査結果　　工事は農学部の西側の庭園に樹木を移・植樹するものである。木数は４本で、径２ｍの範囲について、現地表面から80cmの掘削を必要とした。このうちの３本は、昭和47年に新営された同学部本館の建築工事や既設の汚・雨水管埋設工事の際、すでに掘削され、攪乱を受けている部分に植栽されるため、調査の対象から除外した。調査の結果、現地表面から70cmまでマサ土が厚く客土されており、その下位には構内造成に伴う埋め土が堆積している。顕著な遺構、遺物包含層は認められなかったが、埋め土内には遺物包含層と思われる、木炭を含む黒褐色粘質土がブロック状に混在している。出土遺物はない。

同学部本館周辺では、中央図書館増築[1]、中央ボイラー棟車止設置[2]に伴う調査などが散発的に行われているにすぎず、遺構、遺物包含層の埋存状況はほとんどわかっていない。前者では、三層に分層される層厚約95cmの遺物包含層が検出されており、弥生時代前期から鎌倉時代の遺物が出土している。中央図書館付近は地山が北から南に下降しており、同学部本館の西端部付近から中央広場にかけての地域にも、遺物包含層が広がっている可能性があり、今後の調査が期待される。

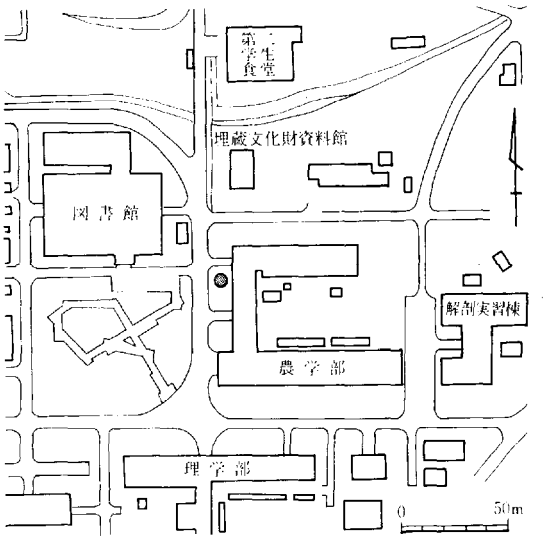


Fig. 59　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地Ｍ－16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「中央ボイラー棟車止設置に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

6　経済学部集水桝取設に伴う立会調査

調査地区　　吉田構内　K－20

調査期間　　昭和63年３月20日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約0.5㎡

調査結果　　集水桝の取設は、第二講義室棟周辺の舗装、U字溝・排水管取設工事および樹木の植栽等を行う環境整備の一環として計画された。なお、集水桝を除く各工事は、掘削規模が現地表面から10～25cmと浅く、過去の調査結果から、埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れがないことから、調査対象から除外した。取設地点は、昭和61年度に実施した同学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査[1)]D地点の南約30mに位置し、掘削規模は現地表面から50cmである。現地表面はD地点より約40～50cm高いが、D地点では40cm下位で、黒褐色粘質土の埋土をもつ柱穴が検出されており、本工事によって遺構が検出される可能性が十分考えられた。

層順は、現地表面から35cm下位まではマサ土で、その下には構内造成に伴う埋め土が客土されている。地山は検出されなかったが、両地点の現地表面の比高差から、遺構面はさらにその下位に存在するものと推察される。なお、埋め土中には、旧耕作土、遺物包含層と思われる木炭を含む茶褐色粘質土、および地山を形成する黄褐色粘質土がブロック状に混在しており、周辺で地山に達する削平が行われたことを窺わせる。遺物は出土していない。

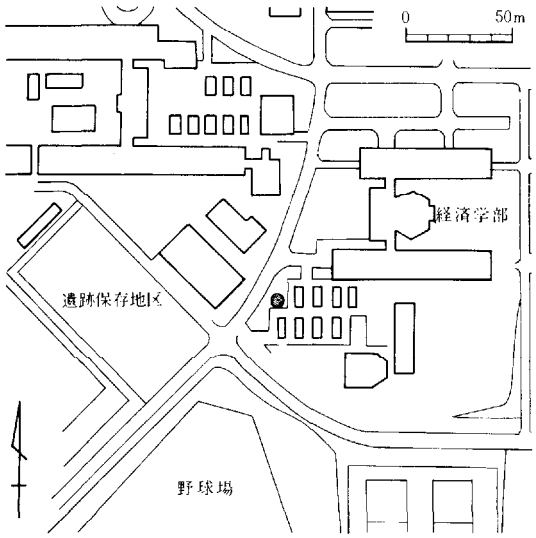


Fig. 60　調査区位置図

[注]

1）山口大学埋蔵文化財資料館「経済学部身体障害者用スロープ取設に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。

7　九田川改修に伴う立会調査

調査地区　　吉田構内　B・C－17

調査期間　　昭和62年10月20日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約20m²

調査結果　　九田川は吉田構内の北側を東から西に走行し、椹野川に合流する総延長距離約5.8kmの二級河川である。現在の河川は平均川幅7.1～4.9m、平均深さ1.4m、流水能力10.0m/秒で、30年確率の洪水流量19.6m/秒にくらべてはるかに河積が小さく、改修が必要とされていた。改修はテニスコート西側端から下流約4.2kmはすでに完了しており、引き続き、吉田構内に沿う流路長750mの範囲について昭和62年度から5ヶ年計画で実施するものである。昭和62年度は、テニスコート西側端から上流約20mについて、吉田構内側の左岸は幅約1m、現地表面から約5mの掘削を必要とした。テニスコートの存在する地域では、過去に二回の調査を行っている[1)]。その結果、現地表面から約1～1.4m下位で、弥生時代から古墳時代にかけてのものと思われる遺物包含層が検出されており、今回の改修工事によって遺物包含層が掘削される恐れが十分に考えられた。

調査は山口県埋蔵文化財センターが主体となり、埋蔵文化財資料館は吉田構内の遺跡との比較・検討資料蓄積のため、調査補助として参加した。その結果、工事範囲内は護岸用の石垣の裏込めで顕著な遺構、遺物包含層は検出されなかった。しかし、63年度以降はさらに吉田構内側への掘削幅が広がる計画であり、工事に伴う埋蔵文化財への慎重な対応が必要であろう。

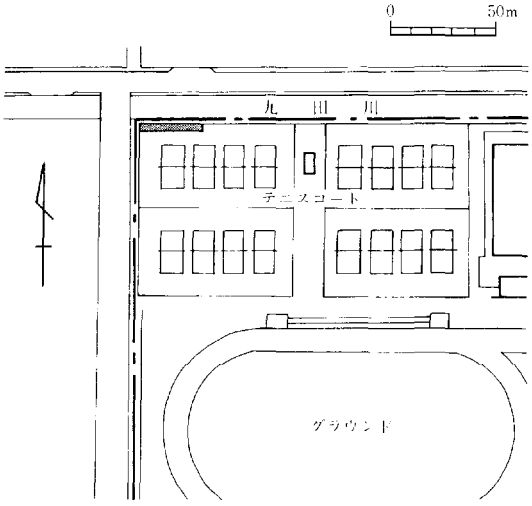


Fig. 61　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「学生部テニスコートフェンス改修に伴う立会・試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ・Ⅳ』、1985）。

第2節　小串構内の立会調査

医学部附属病院東駐車場改修に伴う立会調査

調査地区　　小串構内

調査期間　　昭和62年9月7日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約6㎡

調査結果　　本構内での駐車場の確保のため、アスファルト舗装、雨水管・集水桝の埋設、縁石の設置等の整備が計画された。整備地域は小串構内の北東部に位置し、昭和58年度に旧石器時代および室町時代の遺物が出土した、体育館敷地部分[1]の西に隣接している。遺物は耕作土、床土およびその下位の青黄灰色ないし青灰色粘土から出土したが、出土状況から、両層は二次堆積層であると考えられた。青黄灰色粘土は現地表面から約100～120cm下位に堆積している。

調査は掘削深度の最も深い集水桝について、20ヶ所の設置地域のうち6ヶ所を選定して、土層の堆積状況、遺物の有無を確かめた。掘削は現地表面から80～100cmである。第4地点を除いてすべて、構内造成に伴う埋め土で、工事基底面には耕作土が認められた。第4地点は集水桝と同時に水銀灯の設置も計画され、現地表面から140cm掘削した。

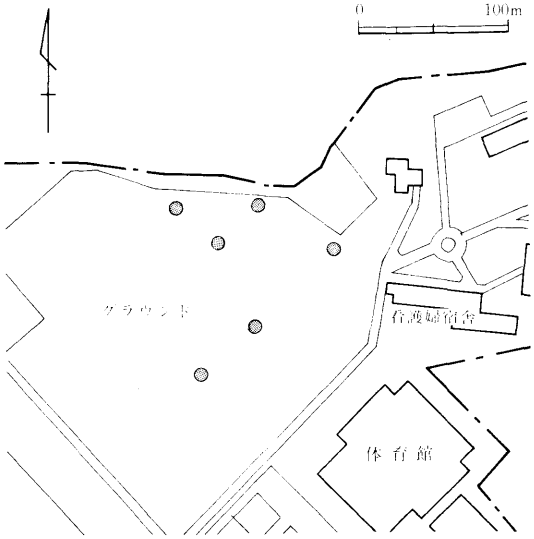


Fig. 62　調査区位置図

その結果、約100cm下位で層厚約30cmの耕作土が認められ、その下は緑灰色砂質土（Hue 5 G 5/1）が厚さ約10cm以上堆積していた。各地点とも出土遺物はない。なお、調査地域の北方には、北東から南西にのびる低丘陵が間近に迫っており、丘陵裾部の検出が、期待されたが、今回の調査では確認できなかった。

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（小串構内）医学部体育館新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

第3節　亀山構内の立会調査

教育学部附属幼稚園遊戯室拡張に伴う立会調査

調査地区　　亀山構内

調査期間　　昭和62年11月26日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約40㎡

調査結果　　亀山構内では過去に3件の調査を実施しているが、今回の調査地点は、昭和61年度に行った汚水排水管布設に伴う試掘調査[1]で設定した、幼稚園部分の第1、3トレンチの中間にあたる。第1トレンチでは、層厚約80cmの構内造成時の埋め土の下位に、弥生土器を含む遺物包含層が検出されている。層厚は40cm以上で、少なくとも三層に分層され、最下層は堆積状態、土壌の性質から遺構の埋土の可能性が指摘された。また、第3トレンチでは、現地表面約70cm下位で遺構と思われる二時期の掘り込みを検出した。切り合い関係にあり、新しいほうからは室町時代の土師器が出土した。しかし、調査面積が狭く、また、出土遺物も少ないため、明確な規模、時期等は明かにしえなかった。

工事は東端部に存在する既設のプールを撤去後、現地表面から約60cm掘削するもので遺物包含層あるいは遺構に達する可能性があったため立会調査を行った。しかし、工事基底面まで造成時の埋め土で、顕著な遺構、遺物包含層は検出されなかった。亀山構内では、これまでトレンチによる調査が行われているにすぎず、埋蔵文化財の調査はその緒についたばかりである。今後の調査によって遺構の分布状況、遺跡の性格・時期・展開過程、周辺遺跡との関連を明らかにする必要があろう。

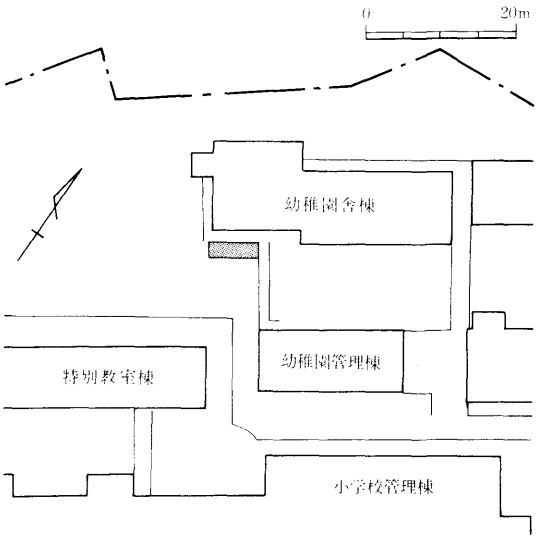


Fig. 63　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。

第4節　光構内の立会調査

教育学部附属光中学校グラウンド防球ネット設置に伴う立会調査

調査地区　　光構内

調査期間　　昭和63年3月28日

調査方法　　工事施工時における立会調査

調査面積　　約2 m²

調査結果　　工事地域は光構内の東端部、御手洗湾に接する附属中学校グラウンドの北縁部付近にあたる。調査の対象は総延長距離約120mの防球ネット設置に伴い、約10m間隔で埋設される15本の支柱部分で、掘削の規模は現地表から約3mである。工事は機械を使用して掘削し、土層の堆積状態を観察することが不可能であったため、館員による現地での立会調査にかえて、光附属学校係の長谷知之氏に掘削状況の写真撮影、出土遺物採取を依頼した。その結果、出土地点は明かでないが、黄褐色ないし黒褐色の砂層から土師器、歴史時代の土師器坏、陶器甕、瓦質土器鉢、瓦数点が出土した。

出土遺物（Fig. 65, PL. 32(3)）

1は土師器の坏。糸切り底で、内面の調整は粗雑。2は陶器の甕。口縁部は内側に強く屈曲し、外面には浅いヘラ描きの1条の沈線が巡る。瓦は丸瓦で凸面格子タタキののちナデ、凹面には布目痕が残る。1・2とも胎土、焼成良好。1は外面黒褐色（Hue 10YR 3/2）、内面にぶい褐色（Hue 7.5YR 6/3）。2は内外面橙色（Hue 5 YR 7/6）。瓦は内外面暗灰色（HueN 3/0）。

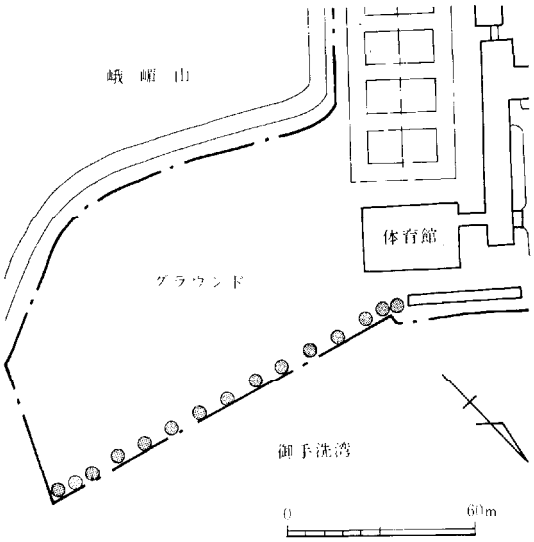


Fig. 64　調査区位置図

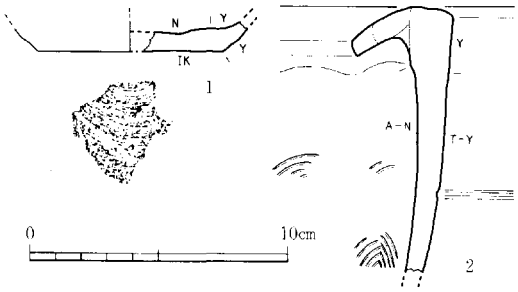


Fig. 65　出土遺物実測図

吉田遺跡の花粉分析

野　井　英　明*

はじめに

吉田遺跡は、山口大学吉田キャンパス内に埋存する旧石器時代から江戸時代にかけての遺跡である。今回、山口大学埋蔵文化財資料館によって、教養部複合棟敷地の発掘調査が行なわれ、それに伴って得られた土層試料の花粉分析を行なった。本論では、花粉分析の方法と意義について簡単な解説を行なったあと、本遺跡の花粉分析の結果について述べる。

花粉分析について

花粉分析は、堆積物中に含まれる花粉を抽出し、その組成などを調べる手段である。その対象は花粉のみにとどまらず、胞子や他の植物性微化石も含めることが多い。花粉は、母植物の属あるいは科のレベルにおいて特異的な形態を持ち、母植物の同定ができる。そのため花粉組成を明らかにすることによって、堆積物の堆積当時の植生を推定することが可能である。この点において、花粉分析は考古学研究の上でも重要な役割を果している。それらのうち、最も重要なものは農耕に関するものであろう。中村・畑中（1976）は、福岡市板付遺跡において^{14}C年代値が3,400年以上の地層から連続してイネの花粉を検出し、その当時から稲作が行なわれていたと推定した。また、中村（1981）は、日本各地の遺跡から採取した堆積物の花粉分析結果に基づいて、イネの花粉が連続して出現し始める時期を稲作の開始時期と考え、稲作の伝播にまで言及している。また、植生は、人為的、局地的なものを除けば、大きくは気候的環境によって決定されるものであるので、植生から気候を推定することができる。このように、花粉分析は、古環境、特に植生、気候の変遷史を解明する上において重要な手段の１つである。

考古学に関連の深い時代である日本の晩氷期以降の時代は、日本各地で多くの花粉分析結果が公表されており、花粉群変化が最も明らかにされている時代である。それに伴って、花粉群変化を区分する花粉帯の設定が多くの研究者によって試みられ、いくつかの区分が提出されている。それらのうち、現在最も一般的に使用されているのは、Tsukada（1963）による分帯である。それによると、晩氷期をＬ帯とし、後氷期以降の花粉群を４帯に区分し、下位から、ＲⅠ，ＲⅡ，ＲⅢa，ＲⅢb帯としている。ここでは、それらの細かな説明は

＊九州大学　理学部　地質学教室

行なわないが、三好（1983）による中国地方におえる各花粉帯の特徴的な花粉分類群の変遷（植生変遷）をTab. 7に示す。

花粉の大きさは、大部分が10～100μmである。この大きさは、砕屑物の粒径区分のシルトから細粒砂の区分に含まれるため、花粉は砕屑物とともに運搬され堆積する際には、シルトや細粒砂とほぼ同様な挙動を示す。したがって、花粉化石は大部分の堆積物（岩）に含まれるものの、シルトないし細粒砂（岩）に多く含まれる。また、花粉は還元状態の泥炭やシルト層中では保存されやすく、逆に空気にさらされやすい土壌などでは、酸化作用のために保存されにくい。これらのことから、試料としては、泥炭あるいは水中の還元的環境で堆積したシルトサイズ以下の堆積物であることが望ましい。

試料の採取は、壁面あるいは試錘試料から行なう。花粉組成変化を詳細に明らかにするためには、試料をできるだけ密な間隔で採取する必要がある。しかしながら、堆積物はふつう堆積当初の水流などによって堆積面が攪乱され、上下の堆積物がある程度混合していることが多い。したがって、堆積物の堆積環境を考慮して採取間隔を決定する心要があり、極端に密に採取しても無意味である。一般に、完新世の堆積物の場合には、10cm間隔で採取することが多い。また、花粉を含む堆積物はごくわずかの試料でも極めて多くの花粉を含むことがあるので、採取にあたっては、採取に用いる移植ゴテなどは1試料を採取する毎に水洗するなど、試料の汚染を防ぐ注意も必要である。

遺跡の試料を含む第四紀の試料から花粉を抽出するには、ＫＯＨ（水酸化カリウム）、ＨＦ（フッ化水素酸）によるアルカリ、酸処理に重液分離とアセトリシス処理を加えた以下の方法が一般に用いられている。

①KOH処理　1～2㎤の試料を50mℓポリエチレン製遠沈管に入れ、10％KOHを加えて沸騰している湯煎器中で攪拌しつつ10分間程度加熱する。その後、遠心分離器を用いて水洗を数回行なう。

②HF処理　①の処理が終わった試料に48％HFを加えて攪拌し、室温で無機物が溶解するまで放置する。遠心分離を行なってHFを捨て、温10％HCLによる洗浄後、水洗を数回行なう。

③重液分離　②の残渣を10mℓガラス製遠沈管に移しかえて、比重が1.8程度に調整した$Zncl_2$水溶液を加え十分に攪拌し混和させる。2000rpm程度の遠心分離を10分間行ない沈殿物と浮遊物を十分に分離させ、浮遊物をスポイドで10mℓガラス製遠沈管にとる。浮遊物をとった遠沈管に水を加えて重液の比重を下げて遠心分離を行ない、花粉を含んだ有機物を

Tab. 7　中国地方の晩氷期以降の植生変遷(三好、1983を一部改変)

現在の植生帯				暖温帯下部		暖温帯上部～冷温帯下部	
時代区分		年代(千年)	花粉帯	低地		山地	
完新世	後氷期	1.5	RⅢb	Pinus Lepidobalanus		Pinus Cryptomeria	Lepidobalanus
		4.0	RⅢa	Cyclobalanopsis Lepidobalanus	Castanopsis Carpinus	Cryptomeria Fagus	Lepidobalanus Cyclobalanopsis
		8.5	RⅡ	Cyclobalanopsis Lepidobalanus Tsuga Fagus	Castanopsis Podocarpus Abies Pinus	Cyclobalanopsis Lepidobalanus Fagus Lepidobalanus	Castanopsis Cryptomeria Abies Cryptomeria
		10.0	RⅠ	Lepidobalanus Carpinus	Celtis	Lepidobalanus Betula	Fagus
更新世	ウルム氷期	16.0	L	Lepidobalanus Fagus Pinus	Alnus	Pinus Betula Lepidobalanus	Picea

沈殿させる。その後、水洗を数回行なう。

④アセトリシス処理　③の処理が終わった試料に CH_3COOH を加え脱水する。残渣に $(CH_3CO)_2O$：H_2SO_4＝9：1の混酸を加え、湯煎器中で約5分間加熱する。遠心分離によって混酸を捨て、残渣を CH_3COOH で洗浄した後水洗を数回行なう。

⑤封入　④までの処理のあとの残渣をグリセリンゼリーで封入しプレパラートを作る。

観察・計数は、ふつう400倍の光学顕微鏡下で行なうが、必要に応じて1000倍を用いる。封入の際に花粉・胞子が不均一に分布していることがあるので、検鏡にあたっては必ずプレパラートの全面を観察し、封入された試料のすべてを同定しなければならない。同定は花粉・胞子の総数が500個以上になるように行なう。分析結果は、試料の単位体積あたりに含まれる各花粉・胞子の絶対量で表わすこともあるが、多くは、木本類あるいは木本類＋草本類を基数とする各花粉・胞子の出現頻度によって表わす。それらの値は、各分類群の構成比変化を理解しやすくするため、花粉ダイアグラムとよばれる図で表現することが多い。

分析結果と考察

今回花粉分析を行なったのは、教養部複合棟敷地のB壁とC壁から採取した36点の試料である（Fig. 66・67)。これらのうち、C壁から採取した試料は、すべて花粉・胞子とも

にまったく検出されないか、または極めて少ない。B壁から採取した試料も、1試料から抽出される花粉が数10個程度と少ないものがほとんどであるが、花粉が少ないものでも胞子を多く含むことが多い。今回は、花粉・胞子合わせて500個以上計数が可能であったものについて、花粉・胞子の合計を基数とする百分率でその結果を示した（Fig. 68・69）。（C壁の試料は、検出された花粉・胞子が極めて少ないので、ダイアグラムは作成しなかった。）

先に述べたように、今回分析を行なった試料からは、KYFB－2，19の2試料を除いて統計処理に十分な数の花粉は検出されず、また、多様性も低い。そのため、各花粉分類群

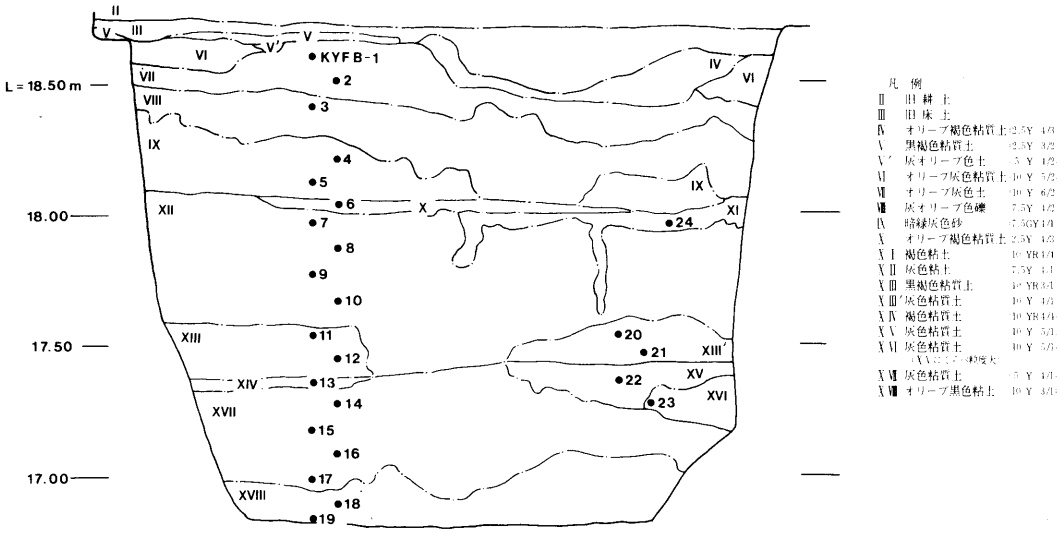


Fig. 66 B壁セクションおよび試料採取層準

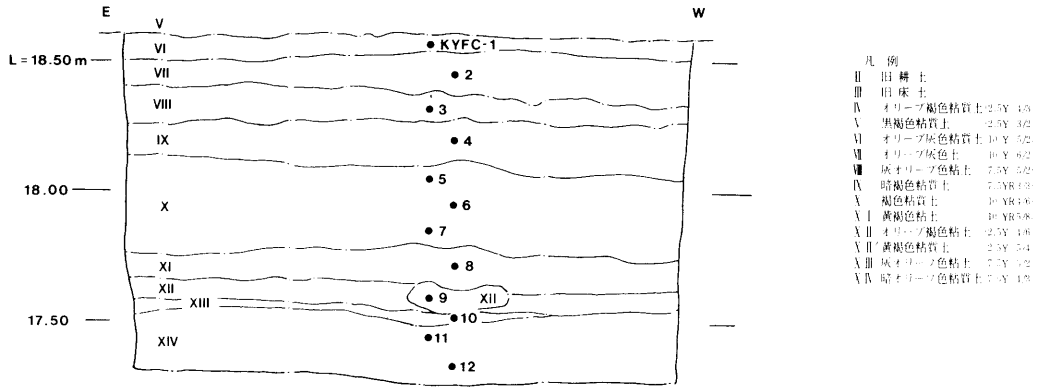


Fig. 67 C壁セクションおよび試料採取層準

のスペクトラの変化はなめらかではなく、植生変化を完全に反映しているとは考えにくい。しかしながら、植生変化の概略を把握するには十分であろう。

今回の花粉分析で検出された花粉分類群は以下のとおりである。*Pinus*（マツ属），*Abies*（モミ属），*Cyclobalanopsis*（アカガシ亜属），*Castanopsis*（シイ属），*Myrica*（ヤマモモ属），*Lepidobanus*（コナラ亜属），*Ulmus－Zelkova*（ニレ－ケヤキ属），*Alnus*（ハンノキ属），*Castanea*（クリ属），*Acer*（カエデ属），*Salix*（ヤナギ属），*Symplocos*（ハイノキ属），

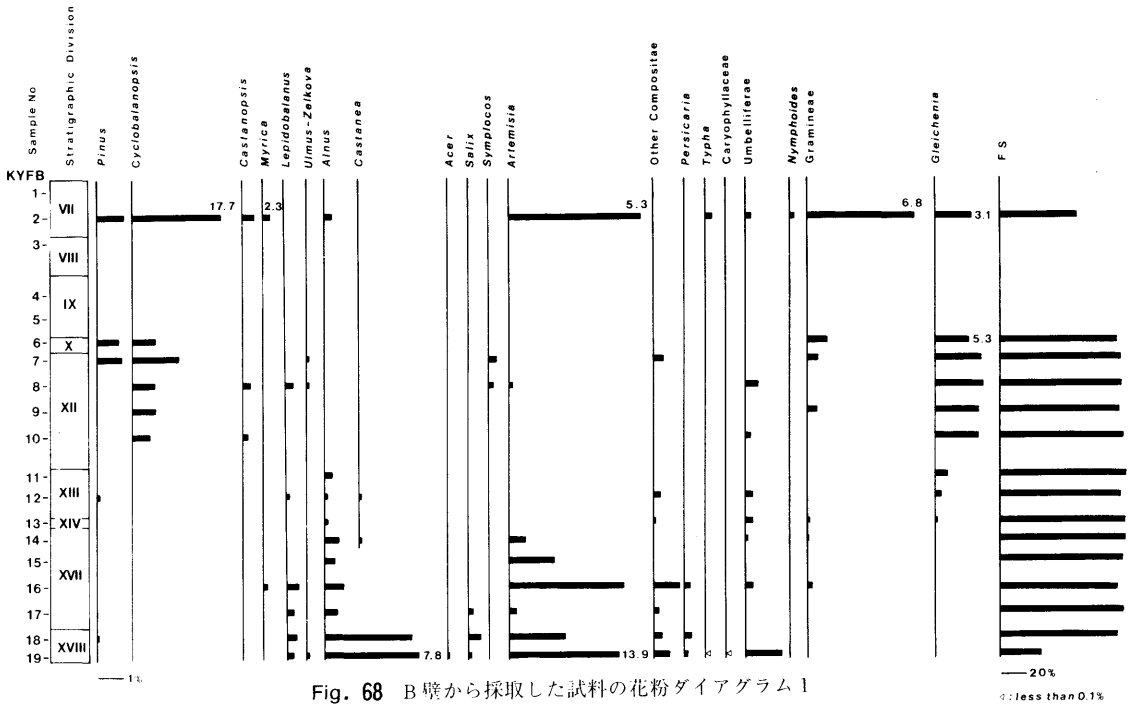


Fig. 68 B壁から採取した試料の花粉ダイアグラム1

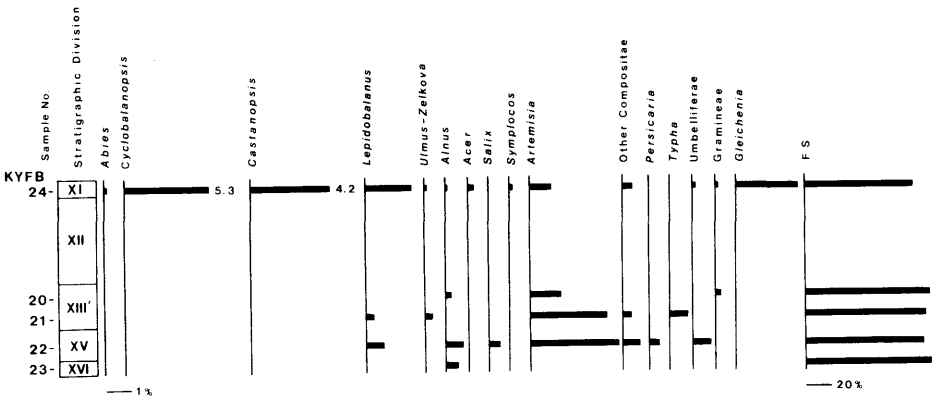


Fig. 69 B壁から採取した試料の花粉ダイアグラム2

Artemisia（ヨモギ属），Other Compositae（ヨモギ属以外のキク科），*Persicaria*（タデ属），*Typha*（ガマ属），Caryophyllaceae（ナデシコ科），Umbelliferae（セリ科），*Nymphoides*（アサザ属），Gramineae（イネ科），*Gleichenia*（ヒカゲノカズラ属），FS（シダ類胞子）。

花粉ダイアグラムから読み取れる本遺跡周辺の植生変化は、大きく２つの時期に区分される。それらは、XIII層からXVIII層（試料番号 KYFB－11～19、20～23）にかけての落葉広葉樹を主とする時期と、VII層からXII層（試料番号 KYFB－１～10、24）にかけての常緑広葉樹を主とする時期である（土層区分はＢ壁の区分による）。下部の落葉広葉樹を主とする時期は、木本花粉では *Lepidobalanus*、*Alnus* を主としており、当時の森林はこれらの樹種を中心として構成されていたと考えられる。*Artemisia*、Other Compositae、*Persicaria* などの草本類花粉も多く検出されることから、遺跡の周辺ではなんらかの形で森林が破壊されて荒地が形成されていたであろう。常緑広葉樹がほとんどみられないところから、この時期の気候は現在よりもやや冷涼であったと推定される。この時期の花粉群は、日本の後氷期以降の花粉帯であるＲＩまたはＲII帯の下部に対比されるであろう。上部の常緑広葉樹を主とする時期の植生は、*Cyclobalnopsis* を中心として *Castanopsis* を交えるいわゆる照葉樹林を主としていたと考えられる。VII層では、*Artemisia*、Other Compositae の草本花粉を多く含むことから、遺跡周辺は比較的乾燥した土地であったであろう。しかし、一方で *Typha*、*Nymphoides* などの水辺、水中植物の花粉がわずかづつではあるが検出される点を考慮すると、部分的には湿地あるいは池が存在していたと考えられる。XII層になって *Gleichenia*が急増し、*Cyclobanopsis* が高率になるところから、XIII層からXII層にかけての時期に気候の温暖化が推定され、この時期の気候は現在とほぼ同じかやや暖かかったであろう。この時期の花粉群は、日本の後氷期以降の花粉帯であるＲII帯の上部に対比される。

引　用　文　献

王好　教夫、1983：花粉分析学的研究よりみた中国地方の洪積世後期以降の植生変遷．日本植生史　中国，82－89，至文堂，東京．

中村　純，1981：花粉から分る稲作の苦闘．科学朝日，41，44－47．

中村　純・畑中　健一，1976：板付遺跡の花粉分析学的研究．福岡市埋蔵文化財調査報告書，35，29－46．

Tsukada, M., 1963：Umbrella pine, Sciadopitys verticillata：Past and Present distribution in Jnpan. Science, 142, 1680－1681.

山口大学構内出土の植物遺体

山口大学農学部　宇都宮　宏

教育学部附属教育実践研究指導センター、教養部複合棟及び医学部附属病院病棟の各新営予定地出土の植物遺体を観察・調査して、その植物名（数、状態）を明らかにし、その環境を考察した。

方　法

山口大学構内の教育学部附属教育実践研究指導センター、教養部複合棟、医学部附属病院病棟建設予定地の調査区域から取り上げた埋土は、まず水洗によって、土と植物遺体を丁寧に分離した。但し、植物遺体に付着して取れない微粒の土は、ブラシを使って除去した。水洗した植物遺体は、種子（堅果）、木片、樹皮及び葉身に分けた後に、肉眼あるいは解剖顕微鏡を使って観察（10～20倍）を行ったが、特に、木片については、木口、柾目、板目の切片を作成して、生物顕微鏡で鏡検（50～200倍）し、同定した。

観察結果

上記の山口大学構内の各建設予定地から出土した植物遺体は、種子（堅果）、木片、樹皮及び葉身片が出土したが、その植物の種類と出土数は以下の通りであった。

教育学部附属教育実践研究指導センター新営予定地からの植物遺体の観察・調査からは種子（堅果）から21種類、果皮からは1種類、樹皮から1種類、木片からは8種類の植物が認められた。種子（堅果）の中では、ハゼが最も多く、次いでヌルデ、スダジイの順であった。樹皮はミズナラに限られていたが、木片はアラカシが最も多く、次いでブナ、イヌブナ、コナラの順であった。

次に教養部複合棟新営予定地からの植物遺体からは、種子（堅果）から6種類、果皮・樹皮・葉身・葉鞘からは5種類の植物が出土した。種子の出土数はわずかであったが、アカマツの樹皮やトチノキの樹皮が比較的多く出土していた。

医学部附属病院病棟建設予定地からは、樹皮としてアラカシが出土した。

これらの出土した植物遺体の種子（堅果）、木片、樹皮及び葉片は還元状態や炭化状態での出土がごく少なく、比較的酸素の供給が可能な酸化状態下にあったように考えられる。

Tab. 8　山口大学構内出土の植物遺体

1．教育学部附属教育実践研究指導センター新営予定地
（1グリッド　河川跡　13層～27層）

出土植物名		数
(1) 種子（堅果）		
スダジイ	(Castanopsis cuspidata Schottky.)	307
クヌギ	(Quercus acutissima Carr.)	31
ヤブツバキ	(Camellia japonica L.)	3
ハシバミ	(Corylus heterophylla Fisch.)	22
コブシ	(Magnolia kobus DC.)	12
ヤマハゼ	(Rhus silvestris sieb.et Zucc.)	32
イヌガヤ	(Cephalotaxus harringtonia K.Koch.)	11
ナンキンハゼ	(Sapium sebiferum Roxb.)	16
ヌルデ	(Rhus chinensis Mill.)	447
ハゼ	(Rhus succedanea L.)	621
マテバシイ	(Pasania edulis Makino.)	1
ノブドウ	(Ampelopsis brevipedunculata Trautv.var.heterophylla.Thunb.)	34
イヌブナ	(Fagus japonica Maxim.)	24
ハンノキ	(Alnus japonica Steud.)	14
ホソバイヌタデ	(Polygonum trigocarpum Makino.)	9
ノグサ	(Schoerus apogon Roem. et Schult.)	16
コウモリカズラ	(Menisbermum dauricum DC.)	14
アラカシ	(Quercus glauca Thunb.)	71
ツブラジイ	(Castanopsis cuspidata Schottky.)	95
タブノキ	(Machilus thunbergii Sied. et. Zucc.)	18
バイカモ	(Batrachium niponicum Kitamura var. majorkitam.)	4
(2) 果皮		
クヌギ	(Quercus acutissima Carr.)	2
(3) 樹皮		
ミズナラ	(Quercus mongolica Fisch var.gross serrata Rehd.et Wils.)	198
(4) 木片		
アラカシ	(Quercus glauca Thunb.)	1164
イヌブナ	(Fagus japonica Maxim.)	755
サンゴジュ	(Viburnum awabuki K.Koch.)	1
ミズナラ	(Quercus mongolica Fisch ver.gross serrata Rehd et.Wils.)	373
ハウチワカエデ	(Acer japonicum Thunb.)	1
コナラ	(Quercus serrata Thunb.)	510
ハンノキ	(Alnus japonica Steud.)	298
ブナ	(Fagus creanata Blume.)	850

2．教養部複合棟新営予定地
（第1号井戸）

出　土　植　物　名		数
(1) 種子（堅果）		
クヌギ	(Quercus acutissima Carr.)	1
アベマキ	(Quercus variabilis Blume.)	3
ヤマハンノキ	(Alnus hirsuta Blume.)	1
サンショウ	(Zanthpxylum piperitum DC.)	3
ノグサ	(Schoerus apogon Roem. et Schult.)	2
オオトボシガラ	(Festuca subulata Bong. var japonica Hack.)	1
(2) 果皮・樹皮・葉身・葉蛸		
アベマキ	(Quercus variabilis Blume.)	4
アカマツ	(Pinus densiflora Sieb. et Zucc.)	55
トチノキ	(Aesculus turbinata Blume.)	24
モウソウチク	(Bambusa edulis Carr.)	3
コナラ（葉身）	(Quercus serrata Thunb.)	2

3．医学部附属病院病棟建設予定地
（Bトレンチ　第9層　緑灰色土中）

出　土　植　物　名		数
アラカシ（樹皮）	(Quercus glauca Thunb.)	2

考　察

1．　教育学部附属教育実践研究指導センター新営予定地

ぶな科植物は8種が認められる。落葉種は、クヌギ、イヌブナ、ミズナラ、コナラの4種類、常緑種は、スダジイ、アラカシ、マテバシイ、ツブラジイが出土しており、暖地性のぶな科植物が認められる。このほかには落葉樹のナンキンハゼ、ヌルデ、ハゼ、コウモリカズラ、そして落葉湿生（日陰）に適するハウチワカエデやハンノキもみられる。常緑樹としては、ヤブツバキ、イヌガヤもあり、照葉樹林樹が認められる。また河畔に自生するホソバイヌタデ、水中に自生するかやつりぐさ科のノグサもみられるところより、照

葉樹林と落葉樹林を混成した山林雑木林を構成しながら、付近は多湿の湿地状態である環境であったと推察される。

2．　教養部複合棟新営予定地

第1号井戸からの植物遺体は、種子（堅果）、果皮、樹皮、葉身（不完全）の状態で出土しているが、炭化している植物遺体は非常に少ない。中でもアカマツの樹皮片が多く、次いでトチノキの樹皮である。ぶな科植物はクヌギ、アベマキ、コナラの落葉樹に限られている。また山林中に自生するサンショウ、林内の多湿環境に自生するイネ科のオオトボシガラ、湿原野に自生がみられるノグサも出土しているところより、山林野の状態にありながら、多湿の土壌状態であり、水流の動きもある環境であったことが推察される。

参考文献

(1)　貴島恒夫・岡元省吾・林　昭三　1986. 原色木材大図鑑. 1-176. 保育社, 東京.
(2)　北村四郎・村田　源・小山纖夫　1968. 原色日本植物図鑑（下）. 69-421. 保育社, 東京.
(3)　北村四郎・村田　源　1969. 原色日本植物図鑑（中）. 1-348. 保育社, 東京.
(4)　北村四郎・岡元省吾　1970　原色日本植物図鑑. 1-250. 保育社, 東京.
(5)　北村四郎・村田　源・堀　　勝　1970. 原色日本植物図鑑. 2-264. 保育社, 東京.
(6)　牧野富太郎　1955　牧野日本植物図鑑. 654-661, 896-911. 北隆館, 東京.
(7)　島地　謙・伊東隆男　1986　図説木材組織. 1-163. 地球社, 東京・

墨で文字を書きこんだうつわ ―既刊の報告 補訂―

杉 原 和 恵

1 はじめに

最初におことわりしておく。本稿は、当館がすでに刊行した報告書[1]の記載を補足訂正するのが目的であり、おもに、年報Ⅴで報告した「冨（富）」の墨書のある須恵器[2]の*椀を、ここであらためて紹介するものである。（→実測図 Fig. 72、写真 PL. 33―(1)）

というのは、その報告の段階では、この椀は底の付近だけしかなく、その底も⅓が欠けており、当然ながら、底にある墨書の文字も、右下が一部欠けてしまっていた。口がないので、全体の形もわからなかった。ところがその後、欠けていた底の、まさにその残り⅓が、収蔵庫の整理中に、ひょっこり見つかったのである。しかも、発見地として、前述報告の調査地とは約100mも離れた別の場所の名が記されており、そこの調査は年報Ⅲですでに報告を完了[3]していた。報告するべきを漏らしてしまっていたわけである。さらに、年報Ⅴで報告した口の部分の破片が、新たに見つかった底の破片にぴたりとくっついたため、結局、この須恵器の底から口までのほぼ完全な形を知ることもできるようになった。

この椀が、文字を書きこんだ希少なものであることにくわえて、ひとつの椀の破片が、約100mも離れたところに分かれて埋まっていたという事実にも注目しなければならない。発見地周辺がその当時はどういう地形だったのか、遺物包含層*がどのように堆積したのか、などを考える手がかりである。今後の調査にも大いに役立つと思われるので、あわせて報告したい。

また、付属的に、墨で文字を書いた土器を研究するに際し、注意すべき点について、少々の私見を述べさせてもらった。

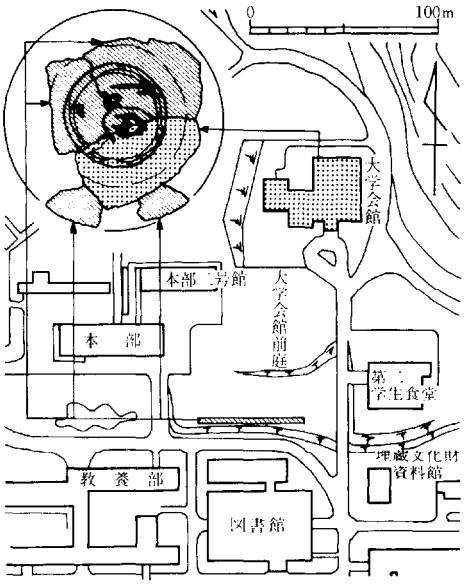


Fig. 70 「冨」の須恵器 発見場所

*須恵器…朝鮮伝来の灰色の硬い焼きもので、5世紀―10世紀に国産されていた。それまで日本になかった新しい技術（ロクロで作り、窯で焼く）を使ったので、元々作られていた素焼きの土師器（→109ページ補注）より格段に丈夫で精巧なものだった。

*遺物包含層…遺物（土器や石器など）を含んでいる地層。

2　墨書土器とは

墨で文字を書きこんだ土器（墨書土器）について、まずあらかじめ説明しておこう。[5] ただしここでは、律令時代と呼ばれる7～10世紀のものを中心に取り扱う。墨書土器の移り変わりは、律令による国家の民衆支配と決して無関係ではなかったと考えられている。[6]

文字（漢字）が日本人に使われたのは、今のところ5世紀の例を最古とする。[7] 6世紀には仏教が伝わり漢字の必要性を高めたし、[8] 7世紀初めの推古18年（610年）には、墨と紙の製法も伝えられ、[9] 文字が普及する条件は整ってきていた。事実、その翌推古19年からは、かの聖徳太子が、三経義疏、国史の編纂など、[10] 精力的な文筆活動を始めている。

とはいえ、当時、紙は貴重品。普段は「木簡」と呼ばれる木の板が、もっぱら紙のかわりに使われていた。しかし、これら昔の書物や木簡が、今に伝えられている例は少ない。文字を書きこんだ土器はそれを補うものとして、第三の書簡と言えるかもしれない。

いつ頃のもの？　最古の例[11]は今のところ、日本が唐の律令を採り入れた7世紀で、量のピークは8～9世紀頃にあり、10世紀以降には減ってゆくようである。これはおそらく、須恵器が釉薬をかけた陶器にかわり、漆器や中国産の磁器などが使われて、墨書できる材質のうつわが減ったこともあろうが、律令制の崩壊が大きく影響したものと思われる。ただし、土師器や、陶磁器の釉薬のかからないところを選んで書く例は、もちろんずっと後まで残り、むしろ山陽道ぞいでは、11世紀以降にそれらの墨書土器が増大する[12]傾向にある。

どこで使われたの？　墨書土器が発見される遺跡は、古代の役所や宮殿、寺など、やはり文字を知る人がたくさんいたと思われる特殊な遺跡が多い。しかし、関東・中部・東海など、当時「東国」と呼ばれていた地方では、9世紀以降の一般の集落遺跡から、墨書土器が多量に発見される例が最近ふえてきており、一概にそうとは言えなくなっている。

どんな文字が書いてあるの？　人名・地名やそれを省略したもの、神仏やまじないに関する文字、などが各遺跡に共通するおもなものである。ただ、文字はひとつの土器に1字、多くて2字が普通なので、意味の理解に苦しむことが多いのが欠点。役所跡や宮殿跡などでは、これらの文字のほかに、その土器の名前や中に入れる食物の名前、建物やそこに勤務する役職の名前、そして落書きや手習いなどが加わってバラエティーに富み（→次ページ写真）、さらに、ひとつの土器に記す文字数が多くなる傾向にある。

何がわかるの？　本当にその当時の人が書いた、生のままの文字や文章を知ることができる。それだけなら別に土器に書いたものでなくてもかまわないが、紙・木・布などが、長く埋まっているうちに土にかえり、たいていは今に姿を残さないことを考えれば、土器は

かなりの悪条件でも残るため、紙や木・布などより有利と言える。

また、土器は日常生活に欠かせぬ食器であり、書物や木簡などと違ってそう広範囲に持ち運ばれはしないので、発見された土器の性格や使用法が、即その遺跡の性格に結びつくことが多い。たとえば、掘り出された土器に書いてあった「志太厨*」「志太少領*」などの文字から、その場所が千年の昔、駿河国志太郡の役所であったとわかった（静岡県御子ケ谷遺跡）[13] というような例は、決して珍しくないのである。

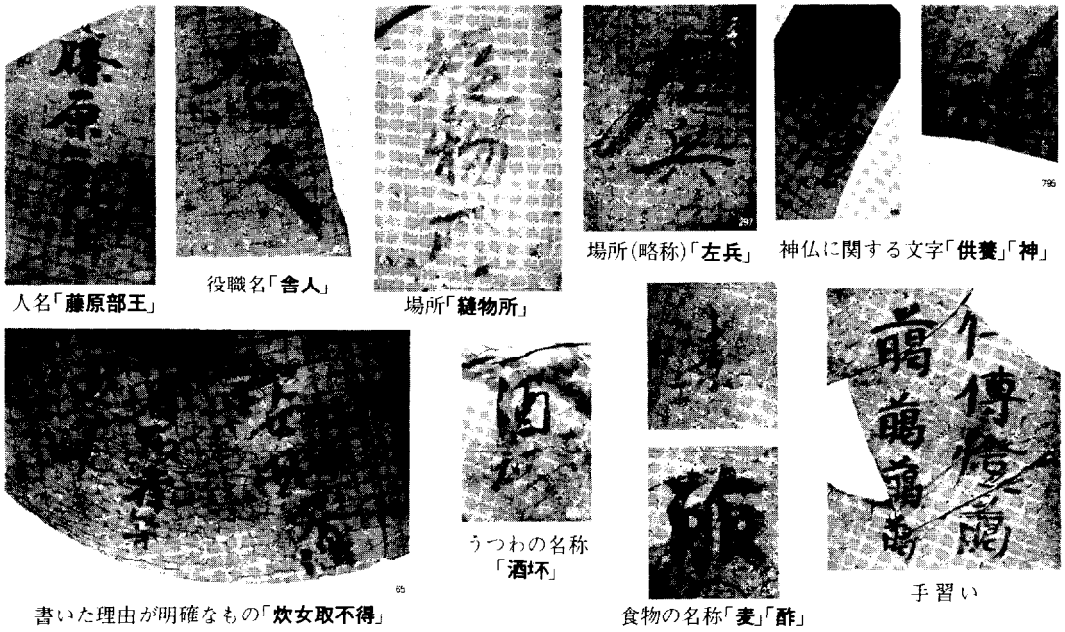
なぜ土器に文字を書いたの？何のメリットがあるの？ 確実にわかっているのは、「炊女取不得」（あなたがた、取ってはいけませんよ!!）などたいへん素直に書いたものである（奈良県平城宮跡）[14]。他に、小範囲の墨書土器を取り上げて、まじないに使ったとか、単に土器の整理のために書かれたとか、来客の接待や宴会に使われたらしい、などとされているが、全体の見通しにつながるものではない。第4章で、私の考えを述べてみたい。

*律令…「律」が刑法（してはいけないこと）、「令」がそれ以外の法（するべきこと）。唐の制度にならった。701年、大宝律令の制定によって完成。律令が国の基本法であった時代（大化の改新～平安時代、7世紀なかば～12世紀）を律令時代と呼ぶ。ただし本稿は、律令がすでに有名無実であった平安時代後半は含めない。

*土師器…縄文土器～弥生土器～土師器と旧来の伝統を守ってきた素焼きの土器も、須恵器の出現によって技術の改良を余儀なくされ、8世紀には土師器もロクロと窯を使って作るようになった。須恵器は、より保水性の高い陶器が出現したため平安時代で姿を消すが、土師器は改良を重ね、用途を変えながら、系譜を現在に伝える。

*厨 …厨房のこと。調理場や調理具の収納施設をさし、役人の食事や公的な宴会の準備なども行われた。

*少領…郡のトップクラス（郡司）の官職名で、大領・少領・主政・主帳（四等官）のうちの第二の地位。



人名「**藤原部王**」　役職名「**舎人**」　場所「**雑物所**」　場所(略称)「**左兵**」　神仏に関する文字「**供養**」「**神**」

書いた理由が明確なもの「**炊女取不得**」　うつわの名称「**酒坏**」　食物の名称「**麦**」「**酢**」　手習い

Fig. 71 さまざまな墨書文字（平城京）　注21)文献より転載、奈良国立文化財研究所許可済

3　「冨」の墨書須恵器　再報告

①　須恵器について

前置きが長くなってしまったが、最大の目的、吉田遺跡の「冨」の須恵器について、旧報告の訂正をかねて、あらためて紹介しよう。

当資料は高台のついた埦で、復原口径13.9cm（やや歪んでいるため、正確な数値とは言えない）、高台径は小さく6.6cm、器高は4.9cmである*。外面の底部と体部の境を強い回転押圧によって明確に凹ませ、体部はわりあい素直に外広がりに伸び、口縁の端を外側に曲げ、丸くおさめたものである。底は回転ヘラ切り*ののち未調整。高台は小さめで、断面は先細りするがほぼ四角形となり、底部の端に貼り付ける。が、貼り付け方は乱雑で、高台の歪みや傷なども一切調整せず、少々いびつな形になっている。

胎土（使われている粘土の質）は粗く、径3mm以下の砂粒をかなり含んで砂っぽいが、焼成（焼きぐあい）は良好。内・外底面部分の色調（青灰色：Hue 5 B 6/1）が、ちょうど円形に、他の部分（灰色：Hue 7.5Y 6/1）よりも暗くなっている。

高台径が小さいこと、高台の作りが雑なこと、また体部が上に伸びずにかなり斜めに傾いて伸びていることなどは、中村浩氏の大阪府和泉陶邑窯の須恵器編年*によれば、Ⅳ型式4段階（770～780年前後頃）にあたる特徴[15]であるが、陶邑編年も律令時代になると、山口県の須恵器には当てはまらないのが実情である。

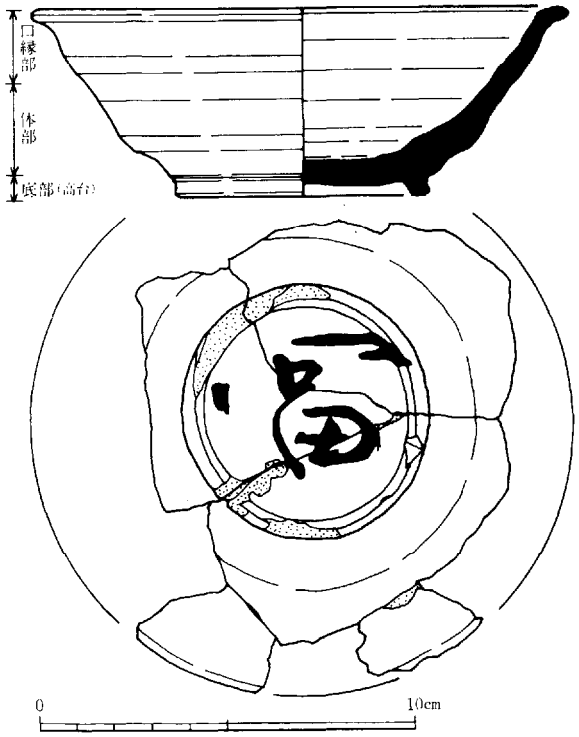


Fig. 72　「冨」の須恵器実測図

陶邑窯の操業期（5～8世紀）のうちでも前半期は、陶邑産の須恵器はほとんど専売特許のような形で広く流通し、その形が画一的であることにより、全国共通の基準とされている。山口県とて例外ではない。ただ、どこの地方でも、地元で須恵器が生産できるようになる6世紀以降については、地元産のものに特徴的な形とか、陶邑産と地元産との流通の違いなどがあるので、

その地方独自の基準を作り出さねばならない。その基準が、山口県ではまだ完全に定まってはおらず、よって特に律令時代の須恵器は、詳しい時期の推定ができないという現状なのである。事実、当吉田遺跡周辺にも、須恵器の窯が各世紀を通じてあり、地元産と陶邑産の須恵器が共存する時期があったことは、確かである（→下図）。特に、8・9世紀の陶窯[16]、百谷窯[17]は、吉田遺跡に近く、規模も大きい。

当地方の須恵器全体に共通する基準を、私が今見つけ出せれば問題はないのだが、残念ながらそれだけの器量も度胸もないので、この「冨」の須恵器のみに限って、いつの時期のものかを考えてみよう。

近年、奈良教育大学の三辻利一教授が、蛍光X線による土器の胎土分析*を精力的に行ない、その一環として当吉田遺跡に近い2遺跡（西遺跡と小路遺跡。→下図）で見つかった須恵器について、興味深い事実を明らかにした。それによると、5・6世紀、そして7世紀のある時期までの須恵器に使われている粘土は、すべて大阪の陶邑窯のものと一致するが、7世紀には地元山口の粘土を使った須恵器があらわれ、8・9世紀には逆に陶邑窯の粘土を使った須恵器が見あたらない[18]、というのである。小路遺跡では8世紀後半の須恵器に墨書があるのが確認されている（→115ページ表）が、この須恵器に使われた粘土も、地元のものという分析結果だった。つまり、8・9世紀、吉田遺跡周辺では、須恵器は地元産のもののみを使っていた可能性が高いと判断されたのである。

ということは、当然ながら、この「冨」の須恵器もおそらく地元産のものであり、大阪の陶邑の須恵器に照らしあわせて年代を断定することは、適当ではないということになる。

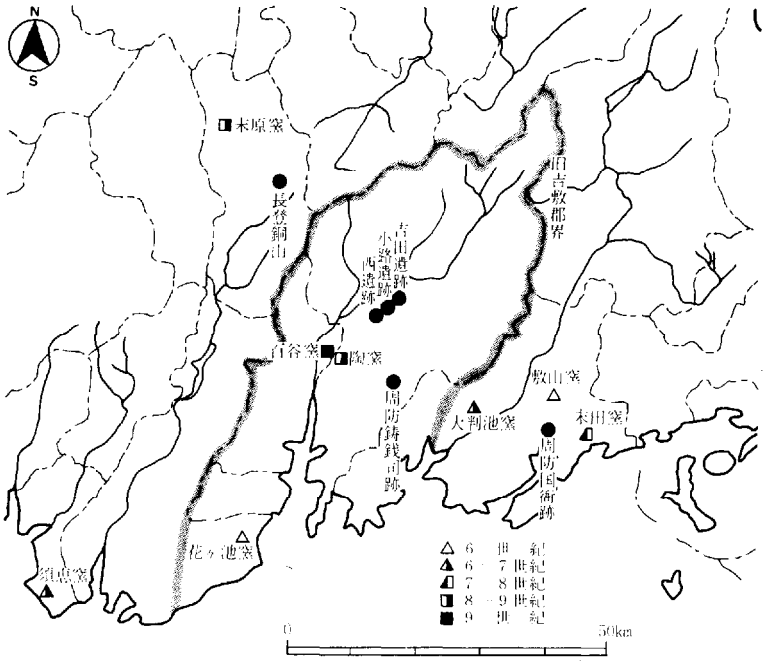


Fig. 73　吉田遺跡周辺の須恵器窯跡

「冨」の須恵器そのものの胎土分析を、機会を見てぜひお願いしてみたい。

地元のものとして考えると、口縁の端を外側に曲げるという特徴は、前述の百谷窯で焼かれた須恵器のなかによく見られることに気づく。百谷窯Ⅱ類Aという分類で、9世紀前半～中頃のものとされている。[19] だから即この窯の製品だと言えるわけではないが、うつわの特徴を語る時、口の部分が占めるウエイトは高く、あまり軽視することはできない。

ただ、文献（注16）に載る百谷窯のⅡ類Aの埦は体部に丸みがあり、「冨」の埦とはかなり形が違うので、当初はこの分類の中に含めるのはどうかと思っていたが、実際に百谷窯の須恵器を見せていただいたところ「冨」の埦に実にそっくりな形・胎土（焼き終わらずに生焼けの状態で廃棄されたものなので、焼成・色調は比較できないが、高台の雑な貼り付け方までそっくりだった）のものがあり、百谷窯の製品ではないかとの確信を深めた。

またもうひとつ、Ⅱ類Aの埦とするには体部があまりにも大きく斜めに傾きすぎているという疑問があるが、この埦の形は、高台さえ取り除いてしまえば、そのすぐあとのⅡ類Bの段階の坏（つき）*とたいへんよく似た形となる。このことから、「冨」の埦は、Ⅱ類AからⅡ類Bへの過渡期の段階か、むしろⅡ類Bの時期に入ってから作られたものと考えたい。

はなはだ貧弱な理由ではあるが、これらのことから、「冨」の埦は、9世紀の中頃～後半くらいの時期に、百谷窯またはそれと系列を同じくする窯で作られ、この吉田の地で文字を書きこみ使用されたものと思われる。

*口径、底径（高台径）、器高…須恵器は、専門の職人が大量生産するので、ある時期にひとつの窯で焼かれたものは、ほとんど規格が統一されている。そのため、これらの寸法は大きな手がかりになる。

*回転ヘラ切り…ロクロの上で土器の形を作ったあとは、そのロクロから土器を切り離すことが必要になる。その切り離し方のひとつで、土器の底になるところにヘラ状の道具をさしこみ、ロクロを回転させてぐるりと切り離す方法のことをいう。

*編年…考古学で、掘り出されたものがいつの時期のものかを決めるための手段。

同じ時代とわかっているものどうしや、明らかに時代の違うものどうしを観察してゆくと、同種類のものでも時代によって模様や形・作り方に特徴があり、それが少しずつ移り変わってゆくことがわかる。この移り変わりを順序だてて整理することが「編年」である。これは、あくまでも「AよりBが古く、BよりもさらにCが古い」というような順序（相対年代）を決めることである。土器は変化が表われやすいので特に有効であるが、たとえ信頼性の高い陶器の編年といえども、それだけでは実際の暦の上での年代（絶対年代）は決められない。

文献で存続期間がわかっている遺跡とか、いつ死んだかが確実な人の墓の中などから、たとえばBの土器が発見されると、そこで初めてBの絶対年代がわかる。変化の順序（編年）がA→B→Cならば、このBを基準にしてAやCの絶対年代も推定できる、という手順になる。（→例えば注19の周防鋳銭司の例のように）

*蛍光X線による土器の胎土分析…土器の中では須恵器についての研究が最も進んでいる。さまざまな成分どうしの総合的な対比によって、胎土に地域性のあることが確かめられている。山口県産の土器に使われている粘土は、特にK（カリウム）量が多い。

*　坏…ここでは、今で言う「お椀」のうち、高台があるものを埦、ないものを坏と呼ぶ。

② 墨書「冨」について

底の外面の高台内部をいっぱいに使い、一部高台にもはみ出して書かれている。文字は「冨」と読める（→PL. 34－(1)に実物大の写真）。

「冨」は「富」の異体字で、画数を省略したものである。千葉県八千代市北海道遺跡[20]、奈良県奈良市平城宮跡[21]、大阪府高槻市郡家今城遺跡[22]、京都府大宮町谷内遺跡[23]、富山県小杉町黒河尺目遺跡[24]などでも、同じ異体字を墨書した土器が見つかっており、本字の「富」よりもむしろこの異体字の方が一般的に使われていたと思われる（→写真 PL. 34）。

また書体等について人文学部の八木充教授に見ていただいたところ、書き慣れた筆跡でかなりの達筆であり、書風に地方性が感じられない（つまり田舎くさくない）、都風の文字だということであった。つけくわえるならば、9世紀の段階でそのような文字を書ける人物は、中央の役人や貴族にほぼ限られるとのことである。

なお付記しておくと、吉田遺跡では、墨書のある律令時代の土器は他にも1点見つかっている[25]。須恵器の蓋であるが、破片で、もともとの形を推定できず、また文字も上半分が欠けていて読めないので、「冨」の埒にくらべれば、引き出せる情報量は少なかった。

この「冨」の文字が何を表すのかをつきとめるために、まず、律令時代の当吉田遺跡はどのようであったのか[26]、についてふれておこう。第2章で述べたように、遺跡の性格によって、墨書の内容が違っているからである。

この吉田の地には、中央の律令政権に関係する、何らかの施設が存在したと考えられている。その理由は、付札（中央へ送る貢納品につける木簡。荷札の役目をする）、鈴（官位を示すためのベルトの飾り）、硯（それも須恵器のうつわを利用した仮の硯ではなく専用に作られた硯）など、一般の集落では当時使わなかったもの、また役人・貴族だけが持つことのできたものが、この吉田遺跡からは見つかっているからである[27]。ただ、この時期の遺構が見つかっていないので、これだけではまだ「○○という施設があった」という断定はできない。しかし施設の性格はわからなくても、役人または貴族・僧侶など、流麗な文字を書く相応の人物がこの吉田の地にいたことは、まず間違いのない事実であろう。

墨書土器は、第2章で、東国の集落遺跡から大量に見つかると書いたが、近畿以西のいわゆる「西国」では、役所跡や寺跡などの、中央との関連の深い遺跡のほかでは、今のところほとんど見つかっていない。山口県内（周防国・長門国）に限れば、律令時代の最重要道路で最も交通が頻繁だったはずの山陽道ぞいの要地にあるのに、なぜかこの時代の墨書土器の発見例が極端に少なく、当遺跡の2点のほかには防府市の周防国衙跡で6点、山

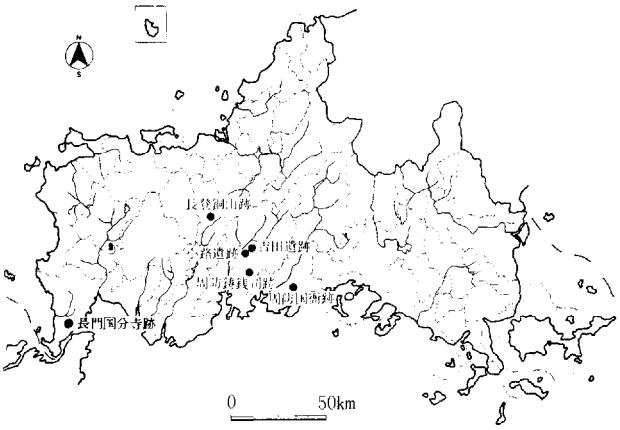


Fig. 74 律令時代の墨書土器が見つかった遺跡(山口県内)

口市小路遺跡[29]、山口市周防鋳銭司跡[30]、美東町長登銅山跡[31]、下関市長門国分寺跡[32]で各1点、発見されているのみである（→左図、次ページ。写真 PL. 34)。うち、小路遺跡を除いたすべての遺跡については、律令国家の出先機関があったことはほぼ疑いない。西国では、墨書土器も、中央との直接的な関係を示すものと考えてよさそうである。

また、墨書土器の量が少ない上にひとつの土器に書く文字の数も少ないことから、山陽道ぞいでは、その交通量のわりには文字の普及が意外に遅く、また土器に文字を書くという風習を、この地の人々が積極的には受け入れなかったものと考えられる。いかに国の出先機関の遺跡から発見されたとしても、当地方の土器に書かれた文字は、地名か人名の省略形、またはお守りやまじない的な性格をもつ可能性が高いと考えるべきであろう。

さて、「冨」の文字の示す意味であるが、一字のみを流麗な筆はこびで、しかも最も文字の保存に適した高台の内側に、大きく書くということからも、やはりその文字のとおり、「富」という願いをうつわに込めたものと考えるのが妥当だと思う。

ただ、注意しておかなければならないのが、中世この吉田の地に存在した「恒富保」[33]である。「保」は、平安時代以降国衙領において、「庄」とは別に、農民が自力で開発した土地に与えられた名称である。「恒富保」の名が文献に登場するのは鎌倉幕府が開かれた直後の建久8年（1197年）が初めてで、それ以前のことは明らかでない。[34]「ツネトミ保」または「ツネトミ」という地名が、須恵器の年代に見合う平安時代初めごろにはすでに存在し、かつ「恒富」の漢字が当てられていたとすれば、「冨」は「恒富」の省略である可能性も出てくる。

＊異体字…漢字で、同じ字ではあるが、標準と考えられている字とは違う形態のもの。

＊硯…墨書土器が見つかる東国の集落遺跡では、使われた硯はほとんどが転用硯（須恵器のうつわを硯として利用したもの）である。役所や寺では、転用硯にくわえて、専用に作られた硯（円面硯、風字硯、宝珠硯など）が使われている。吉田遺跡で見つかったのは、円面硯の破片。

＊遺構…埋蔵文化財（土に埋まっている文化財）のうち、穴や建物のあとなど、その場を動かせないものをいう。土器や石器など、その場を動かせるものは「遺物」という。それらが埋まっている場所が、「遺跡」である。

Tab. 9　律令時代の墨書土器一覧(山口県内)

遺跡名	所在地	出土地点・遺構など	墨書の器種と部位	墨書内容	時期	文献
周防国衙跡	防府市国衙字船所	昭和53年度調査(ID地区)	須恵器埦、底部外面(高台内)	「可」		注28)a
	防府市国衙字船所	昭和53年度調査(IG地区)SD 101	須恵器埦、底部外面(高台内)	欠損不明	不詳	(記述はなし)
	防府市国衙五丁目737-3番地	昭和56年度	須恵器蓋、天井部内面	「集」	8c初頭	注28)b
		第28次調査(GF地区)	須恵器坏、底部外面	「由」か	8c～9c初頭	
		SX 109下層	須恵器埦、底部外面(高台内)	「　」の重複か	8c～9c初頭	
	防府市国衙五丁目786番地	昭和61年度第45次調査(GH地区)井戸	須恵器埦、底部外面(高台内)	「国厨」	9c中葉～後半	未報告
周防鋳銭司跡	山口市鋳銭司字四辻大畠	昭和40年度調査東南隅地区6トレンチ溝	須恵器坏、体部外面1字 底部外面1字	欠損不明	9c中葉～後半	注30)
小路遺跡	山口市大字黒川小路	大溝Eトレンチ	須恵器埦、体部外面	欠損不明	8c後半	注29)
吉田遺跡	山口市大字吉田	M・N-13区とL・M-15区の包含層	須恵器埦、底部外面(高台内)	「冨」(富)	9c中葉～後半	本書
		T　21区河川跡	須恵器蓋、天井部外面	欠損不明(下端1月1)	8c後半か	注25)
長登銅山跡	美東郡美東町大字長登字大切	大切地区最下属の滓の堆積中より	須恵器蓋、天井部外面	「大家」	8c後半か	注31)未報告
長門国分寺跡	下関市長府宮の内町	西限推定地LX 120A	須恵器坏、体部外面	「美」(美)	8c前半	注32)

※高台のあるものを埦、ないものを坏とする。

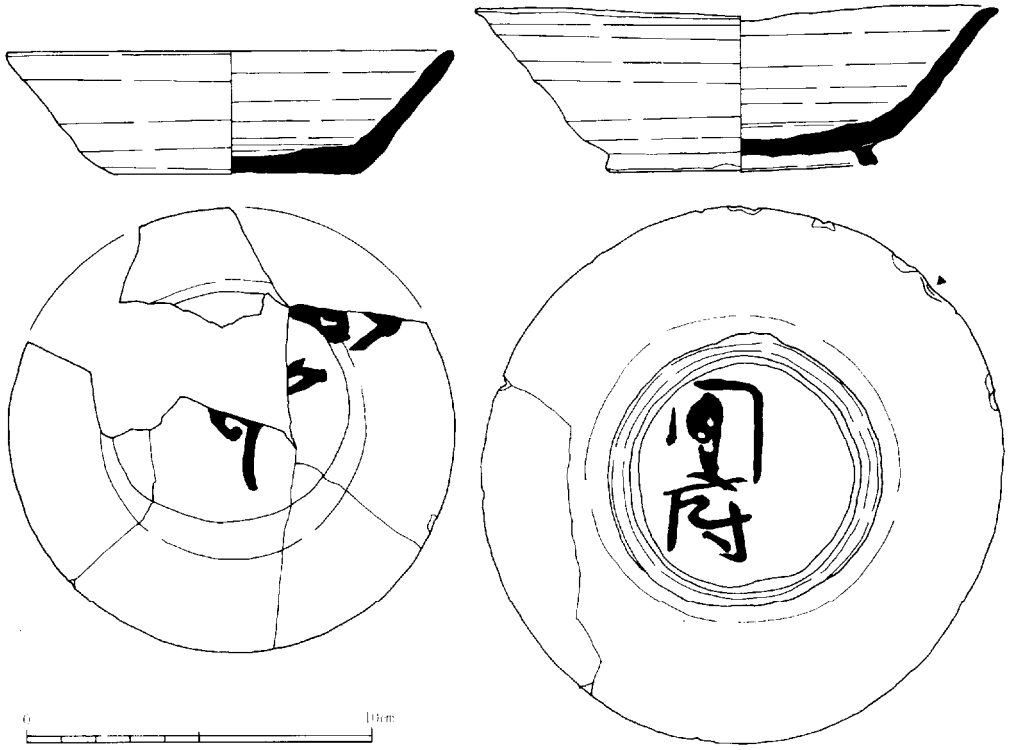


Fig. 75　律令時代の墨書土器　実測図　(左　周防鋳銭司跡　右　周防国衙跡)

③　地下の状況について

当資料館が、これまで大学会館周辺において行なった調査（→次ページ下）はかなりの件数になる。また資料的に不明確ではあるが、資料館設置以前にも、この地域は吉田遺跡調査団によって第Ⅰ地区と称され、大学統合移転に際して多くの調査が行なわれている。[35] これらの調査の結果からして、大学会館周辺は、学内でも遺跡保存地区周辺に次いで遺構密度の高い地域として注意されるようになった。

今回紹介した墨書土器は、大学会館敷地部分では黒色粘土層より、前庭部分では黒色・黒褐色系の粘質土層より見つかっている。直線距離にして100mも離れた場所にあった破片どうしがあまり磨滅もせずに発見され、ひとつに接合したという事実から、若干の色調、土質の違いはあれ、大学会館敷地のみならず、周辺を覆うこれらの遺物包含層全体が、同一成因によるものである可能性はすこぶる高いと思われる。事実、大学会館敷地部分では、この黒色粘土層は調査区の中の最も広い範囲を覆っていたことがわかっている。この膨大な量の遺物包含層はある場所から、いちどきに流れ込んできたということである。

ある場所――もともとこれらの遺物を使い、捨てた場所、または当時の遺構のあった所とは、どこだったのか。これまで積み重ねられた調査の成果をもとに、地形の旧状を復原してみた（→次ページ）。

既調査で判明している地盤のありかたから判断すると、現在農学部の花木園となっている丘陵は、もともとは大学会館部分を避けるように、第２学生食堂→大学会館前庭→本部管理棟の方向に裾野をのばしていたと考えられる。この裾野部分は台地状で、生活の場としては好適地。事実、これまでの調査で多くの遺構が発見されている。ただ、律令時代のものと断定できる遺構は少ないので、積極的な証拠にはならない。

しかし、土砂（遺物包含層）がいちどきに流されていく過程で、その中に含まれていた「冨」の須恵器が、大学会館敷地と前庭下段部南端との別方向に分かれてしまったという事実を重く見たい。この状況が可能になるのは、これらの遺物包含層の起原が、第２学生食堂敷地から前庭上段の東半部あたりにあった、と考えるのが、地形と土層の堆積状況からみて、最も自然であると思う。

学生食堂付近の台地は、平地を作るためすでにすっかり削られており、今後調査をしたところで、遺構の発見はあまり期待できないだろう。律令時代の吉田遺跡に、どのような施設があったのかは、おそらく今後も、遺構ではなく遺物から判断してゆくしかなさそうである。残念といわざるをえない。

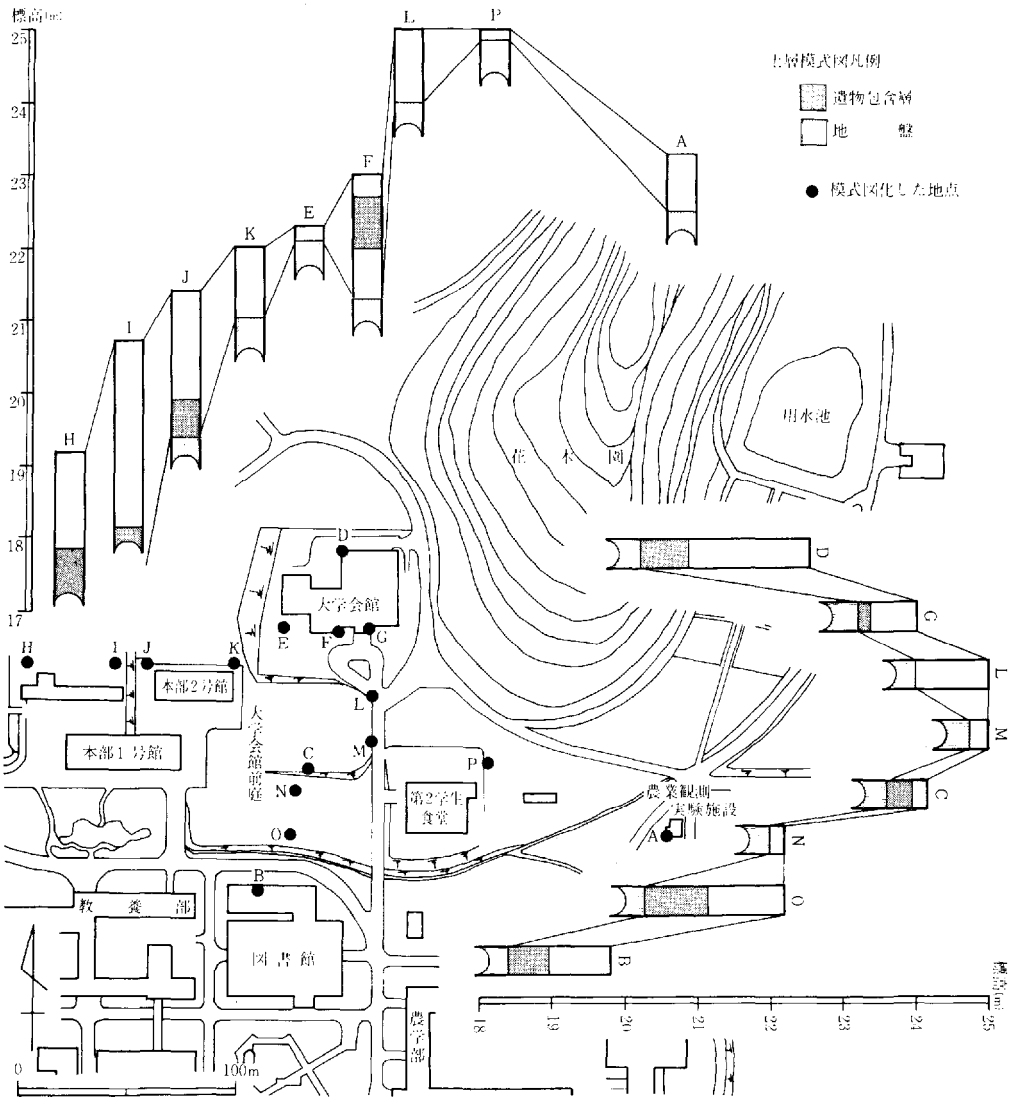


Fig. 76　大学会館周辺の地下の状況

各地点の土層模式図は、下記の調査によるもの。

A　　山口大学埋蔵文化財資料館「昭和54・55年度調査の概要」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年)。

B　　同上「中央図書館増築予定地M－16区の発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年)。

C　　同上「大学会館新営予定地M－14・15区の試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年)。

D～G　→注1）a報告。

H～K　同上「吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、1985年)。

L・M　同上「吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、1985年)。

N・O　→注1）b報告。

P　　同上「汚水排水管等総改修に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年)。

4　土器に文字を書いたわけ

土器に書いてある文字がいかに大きな情報源となるかについては、第2章で述べたとおりである。そのため最近、文字を集成・分類した論考[36]がふえているのは喜ぶべきことだが、墨書土器の発見例がふえるに従い、その分類はどんどん煩雑になるばかりで、基本的な原理や基準を見出すのは至難の業である。一方で、土器に文字を書くという行動自体を、当時の人がどのような意識で何のために行なったのか、ということ[37]をかえりみる人は少ない。精神分野の解明は考古学的にはむずかしい、と言ってしまえばそれまでだが、木簡や古文書などと同じく、文字を読解し、それを集成・分類するにとどめたままでよいだろうか。

土器にはあくまで「うつわ」という本職がある。文字を書くために最初からそれ専用に作られる、書物や木簡とは違う。つまり、土器は元来文字を書くためのものではないのだから、文字をわざわざ土器に書くからには、「この土器にこの文字を」という意志や必然性があると考えなければならない。文字を読解することにくわえて、文字とうつわとの関係を見ることが大切なのだ。墨書土器が遺跡の性格を表わす（→第2章）というのも、元を正せば、土器は日常食器であるからあまり移動しない、ということが前提なのだから。

文字を、わざわざ紙でない物体に書き込む場合、文字とその物体とは、何か特別な要因で結びついていると考えるべきである。一つの実例をあげてみよう。

私の友人のK嬢は、プロ野球読売巨人軍の中畑清選手の大ファンであるが、かつ彼女自身も並の男以上のソフトボール速球投手である。中畑氏のサイン会が近所で行なわれた時のこと、彼女は、ぜひ自分のグローブにサインを、と勇んで会場に出かけた（数日前から、彼女はかなりの興奮状態であった）。ところが営利主義のその会場の持ち主は、サイン用の色紙を売ろうと待ちかまえ、その色紙でないとサインはできないと言う。彼女はひるまず、強引にその場を突っ切り、めでたくグローブにサインしてもらっただけでなく、氏に親しく話しかけられ、握手までしてもらって、ほとんど放心状態とも言えるほどの有頂天であった。そのグローブを、彼女が以前にもまして愛用しているのは言うまでもない。

彼女にとっては、《野村克也のサイン》ではなく《中畑清のサイン》だからこそ、意味があった（ちなみに私は野村氏のほうがいい）。またそれを、《色紙》ではなく《自分のグローブ》に書いてもらったからこそ、彼女の喜びは大きかった。つまりは、《中畑清のサイン》が《自分のグローブ》に書かれたからこそ、彼女にとってサインの価値もグローブの価値もお互いに倍増したわけである。

これは、文字とうつわとの関係にもそのまま当てはまるだろう。文字を、紙や木簡では

なくわざわざうつわに書くからは、相応の理由があったはず。それを明らかにすれば、土器や文字にまつわるその時代の風俗や考え方も、より深く具体的になるに違いない。[38]

「酒坏」と書いた8世紀の土師器(→109ページ写真下段中央)が発見された。おそらく「酒坏」という呼び名の、酒を飲むためのうつわだろう。でもわざわざ土器にそう書いた理由は？よく似た形のうつわがほかにもあるから区別するためだろうか、それとも他の土器で酒を飲んじゃいけなかったんだろうか、それとも……という具合に、深く、具体的に。

ただ、このように個々の墨書土器について具体的な理由を考えても、立証はむずかしいし、ましてや墨書土器全体の見通しにはつながりにくいだろう。それを差し引いても、文字をわざわざ土器に書いた理由を考えることによって、文字を読解するのと同じくらい多くの情報が私たちにもたらされるという希望は、捨てがたいものである。

土器に文字を書いた理由となる、当時の思想をつかみたいと思っていたが、どうやら私の手に余る大仕事のようなので、せめてその指標となるよう、私なりに土器と文字との関係を整理したものを述べて、結びとしたい。結局は、次の三つのタイプに集約できる。

① **土器中心型：** 土器をまちがいなく使うために文字を利用したもの。特に文字でなくても、記号やしるしで用は足りる。上述の「酒坏」のような例。しかし、整理や区別のための、純粋に便宜的なものは少数で、②の効果を兼ねるものが多かったのではないか。

② **土器と文字との相乗効果型：** 文字を書きこむことによって、その土器に別の意味を持たせたり、価値を高めたりするものや、土器と文字とが合わさって、はじめてなんらかの意味をもつものなど。先述の《サイン入りグローブ》に代表されるような例。

③ **文字中心型：** 文字を書くために単に土器を紙がわりに利用したもの。土器と文字の間には、さしたる関係がない。[39]手習いや落書きの類。

おそらく、墨書土器のほとんどは、②に属するはずである。文字がまだ意志伝達の道具には至らず、何か意味のある記号やデザインにしかすぎないような場所では、この例が主体とならざるをえず、多分にまじない的な意味をもったのではなかろうか。多くの人が文字を扱いこなす場所では、当然一般集落とは文字に対する考え方が違うであろうが、「文字を土器に書き込むことによって、土器と文字とがお互いに付加価値をもつ、または用途が規制される」という図式は、不変のものと思う。

①③の例は、文字が普及している場所・文字を解する人がほとんどである場所でのみ、存在可能である。逆に、そのような人々がいる場所では土器の種類と量が豊富であったから、①③の例が生まれた、とも言えよう。

5　おわりに

「冨」の墨書須恵器を再報告し、ついでに、といってはなんだが、墨書土器研究の方向性について、なぜわざわざ土器に文字を書いたかという重要な疑問を解決するためには、文字の読解のみにとどまらず、文字と土器との相関に目を向けるべきだ、ということを述べたつもりである。K嬢のグローブに書かれた文字を見つけて、それを「中畑清」と解読し、「中畑清」がプロ野球選手であることをつきとめただけでは足りない。わざわざグローブに書いてある意味を考えてこそ、野球（ソフトボール）を愛し、かつ中畑選手を敬愛するK嬢の気持ちと努力が、報われようというものだ。

なお本稿の文章表現は、考古学の「専門用語」や「自明の理」に頼らずに、どこまで書けるか試みたものである。先学諸賢にはまどろっこしい表現が、多々あるものと承知しているが、その分、古代史になじみの薄い人には抵抗感の少ない文章になったと自負している。とはいえ、考古学用語なしで遺物や地層の堆積状況などを説明するというのは青息吐息のむずかしさで、専門語のぬるま湯にひたったまま、本質となるものの説明を巧みに避けて不勉強をごまかしてきた自分を、いまさらながら反省する破目におちいった。

学術用語を使わぬことに関しては、反対意見があって当然と思う。しかし、内容はさておいて、この文章を誰もが途中でくじけずに最後まで読み、理解してくれたなら、それを考古学にとってマイナスであると主張する人は、おそらく少ないだろう。

写真の転載にあたっては、奈良国立文化財研究所、㈶京都府埋蔵文化財調査研究センターにお願いし、ご了解を得た。富山県埋蔵文化財センター、高槻市教育委員会からは、了解の上にさらに写真のご提供をいただいた。

県内の墨書土器は、防府市教育委員会の吉瀬勝康氏、山口市教育委員会の古賀信幸氏、美東町教育委員会の岩本明央（あきなか）氏のお骨折りによって、直接見せていただくことができた。うち周防国衙跡の一部と長登銅山跡の資料はまだ正式に報告されていないが、特に便宜をはかっていただいた。百谷窯跡の須恵器も、小郡町公民館で見ることができた。周防鋳銭司跡の墨書土器の写真撮影は、小田村宏・古賀信幸両氏に全面的に助力いただいた。

文章表現については、同僚の木村元浩氏に助言をいただいたが、また、次の文献にたいへん勇気づけられた。やさしい文章を志す方は、ぜひご一読をお薦めする。

佐原眞「考古学をやさしくしよう」（『京都府埋蔵文化財論集』第1集－創立五周年記念誌－、㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター、1987年）。

ご厚情をお寄せいただいた上記の機関・諸氏に、深くお礼申し上げます。

［注］

1）a　山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

b　山口大学埋蔵文化財資料館「大学会館環境整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。なおこの調査は、「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（同書所収）に付随するものである。この試掘調査の報文と合わせて参照いただきたい。

2）前掲注1）b報告に記載のFig. 40－16（66ページ）が当資料の墨書された底部である。

3）→前掲注1）a報告。

4）前掲注1）b報告に記載のFig. 40－14（66ページ）が当資料の口縁の一部であったことが判明した。

5）墨書土器研究の概要がコンパクトに収まっていて、入手がたやすいものとして、次の書籍が便利。

雄山閣出版株式会社「季刊考古学」第18号―特集・考古学と出土文字―（1987年）。下記のような論考を所収。

斎藤忠「考古学資料と文字―墨書土器研究の意義―」、玉口時雄「文字資料研究の現状　墨書土器―」。

6）東国・北陸の集落遺跡での墨書土器の移り変わりは、律令体制の成立～改編～崩壊という流れの中で、漢字の意義や、村という組織自体のありかたが変わっていくことに関係するとされる。

a　長谷川厚「古代における文字資料研究の一試論　特に墨書土器を中心として―」（『史観』第104冊、早稲田大学史学会、1981年）。

b　吉岡康暢「墨書土器」（『東大寺領横江庄遺跡』、松任市教育委員会・石川考古学研究会、1983年）。

7）和歌山県橋本市隅田八幡宮蔵の「癸未年」（443年、一説に503年）の人物画像鏡に、「意柴沙加宮」という字がある。これが日本語を漢字で表わした最古の例とされる。漢字自体はずっと以前から日本に流入しているが（「漢委奴国王」の金印や「最初四年」銘の三角縁神獣鏡など）、日本語を書き表わしたものではなかった。

8）仏教信仰は文化国家の証であり、仏教を理解するには経典を読むことが必要だった。

百済の聖明王が仏像と経論を献じたこと（『元興寺縁起』『上宮聖徳法王帝説』では538年、『日本書紀』では552年）をもって、仏教の正式な伝来とするが、非公式には以前より伝わっていた。

9）高句麗の僧曇徴が、絵具や礦碾（製粉用の石臼）の製法とともに伝えたという（日本書紀）。

墨の歴史については、次の文献が簡便。

水野和雄「戦国時代の生活と経済―文房具　」（『季刊考古学』第26号、特集・戦国考古学のイメージ、1989年）。

10）611年に勝鬘経義疏、613年に維摩経義疏、615年に法華経義疏を著した（上宮聖徳太子伝補闕記）、620年には「天皇記及び国記、臣連伴造国造百八十部並びに公民等の本記」を録したとある（日本書紀）。

11）奈良県藤原京跡、伝承飛鳥板蓋宮跡からの出土例が、今のところ最古のものである。

12）山口県では陶磁器の底に書く例が多い。土師器の底（内外）に書いた例は、かなり特殊な使われ方をしたものばかりで、たとえば防府市の下右田遺跡では、室町時代の建物の棟持柱の穴に梵字を書き込んだ坏が9枚埋まっていたし、下関市の長門国分寺跡では、江戸時代の溝に、155枚もの人名（「光明皇后」「行基」「義降（大内義隆）」「洞春様（毛利元就）」など）を書いた坏が捨てられていた。儀式やまじない用と推定できる。

a　山口県教育委員会・日本道路公団・建設省山口工事事務所『山陽自動車道・防府バイパス　下右田遺跡第3次調査概報』（山口県文化財調査報告第46集、1979年）。

b　下関市教育委員会『長門国府』（長門国府周辺遺跡発掘調査報告Ⅳ、1980年）。

13）藤枝市都市開発公社・藤枝市教育委員会「志太郡衙跡（御子ケ谷遺跡・秋合遺跡）」（『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　奈良・平安時代編―』、1981年）。

14）奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告Ⅶ』（奈良国立文化財研究所学報第二十六冊、1976年）。

15）中村浩『和泉陶邑窯の研究』（柏書房、1985年）。

16）桑原邦彦・池田善文「防長地域の須恵器窯跡と編年研究」（『山口県の土師器・須恵器　集成と編年―』、周陽考古学研究所報3、1981年）。

17）→前掲注16）文献。

18）a　三辻利一「西遺跡出土土器の蛍光X線分析」（『西遺跡』、山口市埋蔵文化財調査報告第21集、山口市教育委員会、1986年）。

b　三辻利一「小路遺跡出土須恵器の蛍光X線分析」（『小路遺跡』、山口市埋蔵文化財調査報告第27集、山口市教育委員会、1988年）。

両遺跡とも山口大学敷地と同様、椹野川の左岸にあり、山口大学から直線距離にして西遺跡約2km、小路遺跡約1km。

19）a　前掲注16）文献。

b　山口市教育委員会『周防鋳銭司跡』（1978年）。

根拠は、周防鋳銭司跡（→注30）の第1次調査（昭和40年度）で、百谷窯Ⅱ類Aのすぐあとに作られたⅡ類Bの須恵器が、「宗□私印」の押捺ある粘土板と一緒に見つかっていること。「宗□」が、周防守と

鋳銭司長官を兼任していた安倍宗行をさすと考えられるので、その任期の貞観7年～10年（865～868）が、粘土板と百谷窯Ⅱ類Bの須恵器の年代の目安とされる。これから、百谷窯Ⅱ類Aがその直前、9世紀半～中頃という逆算ができる。

周防鋳銭司跡は、百谷窯からの距離も4km足らずと近く、おそらく百谷窯の須恵器の一大供給先であったろう。

20) 住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部、㈶千葉県文化財センター『八千代市北海道遺跡』（萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ、1985年）。
奈良・平安時代の住居全114軒のうち、48軒で墨書土器が発見され、うち18軒に「富」の文字が見られた。

21) 奈良国立文化財研究所『平城宮出土墨書土器集成1』（奈良国立文化財研究所30周年記念史料（史料第25冊）、1983年）。第32次調査で見つかったもの。

22) 高槻市教育委員会「郡家今城遺跡」（『嶋上郡衙他関連遺跡発掘調査概要・12』、高槻市文化財調査概要XⅡ、1988年）。

23) ㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター「谷内遺跡」（『考古展・第7回小さな展覧会 ―昭和62年度発掘調査の成果から―』、1988年）。

24) 富山県教育委員会「黒河尺目遺跡」（『都市計画街路　七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(5)』、1987年）。

25) 山口大学埋蔵文化財資料館「市道神郷1号線および問田神郷線の送水管埋設に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。遺物は山口市教育委員会に保管されている。

26) 当吉田遺跡の古代・中世については、次の文献をぜひお読みいただきたい。
森田孝一「周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相―吉田遺跡をめぐる諸問題―」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年）。

27) →前掲注1）a調査で発見。

28) 周防国の古代の役所跡。今の県庁。墨書土器が載るのは次の報告。調査は継続中で、未報告のものもある。
a　防府市教育委員会「周防国府跡昭和53年度発掘調査概報」（『防府市文化財調査年報』Ⅱ、1979年）。
b　防府市教育委員会「第28次調査（GF地区）」（『防府市文化財調査年報』Ⅵ、1984年）。

29) 明確な律令時代の遺構は、墨書土器を含んでいた大溝だけである。→前掲注18）b文献の本論。

30) 平安時代の国営の貨幣製造所。鋳銭司は、天長2年（825年）に長門国から周防国に移された。11世紀頃には実際の機能はなくなったとされている。→前掲注19）b文献。
ただし墨書土器は、土師器と報告されていたが、山口市文化財センターで見せていただいたところ、焼成の不十分な赤っぽい須恵器であり、文字は底面だけにではなく体部にも書かれていた。同様な色の須恵器は多く、第1次調査で土師器と報告されているものの中にはかなりの割合で須恵器が混じっていると思われる。

31) 奈良時代、東大寺の大仏を作るための銅は、この銅山から採掘したものであり、「長登」の地名は、銅を献上したほうびとして朝廷から賜った「奈良登」の名に由来すると伝えられる（文献a）。
1988年に至り、東大寺境内の調査で大仏の鋳造跡が発見され、その銅のカスの成分にはヒ素が多く、長登銅山産の銅に酷似するという分析結果が発表された（文献b）。さらに同年、長登銅山跡の試掘調査が行なわれ、銅のカスの堆積に混じって多量の奈良時代の土器が発見され、そのなかに「大家」の墨書須恵器があったわけである。造東大寺司が管轄するような施設があったと考えても決しておかしくない。
a　池田善文「美東町長登発見の須恵器について」（『塔ノ塚発掘調査報告書』、美東町文化財調査報告第1集、美東町教育委員会、1975年）。
b　池田善文「奈良の大仏と長登銅山」（『山口県地方史研究』第59号、山口県地方史学会、1988年）。

32) 天平13年（741年）の聖武天皇の発願により、諸国に造営された官寺のひとつ。墨書土器を含んでいた性格不明の溝状遺構は、この国分寺創建以前のものとされる。
神綱興産株式会社・下関市教育委員会『長門国分寺』（長門国府周辺遺跡発掘調査報告Ⅵ、1988年）。

33) →前掲注26）論文。

34) 平子重経が、吉敷郡の仁保庄と恒富保の地頭職を幕府から任命されたという記事（三浦文書）が最初である。

35) 特に、第2学生食堂建設時には、古墳時代を中心とする多数の遺構・遺物が発見され、律令時代の大溝もある。

36) おもなものは、前掲注5）文献の中で取り上げてあるので、そちらをご覧下さい。

37）→前掲注６）論考など。

38）木簡も、紙がかなり普及した鎌倉・室町時代には、紙の代用品としての意識が薄れて、紙とは明確に使い分けられるようになっていたらしい。材質としての木の長所が、木簡の記載内容や用途に影響したという。
水藤真「木に墨書すること―中世木簡の用例―」（『史学雑誌』第93編第11号、史学会、1984年）。
木のメリットは、持ち運びに便利なこと、耐久性があること、風雨にさらされても文字が消えないことなどで、そのため特に荷札や鑑札、立て札など、要するに不特定多数の人間に伝達したい時に使うことが多かったという。
『なぜ紙ではなく木に文字を書いたのか』という疑問の答えとして納得のいくものであるし、それを根拠にして、文書として現存している法令などが、どの地域・どの階層の人々にまで実際に伝達されたのか、という社会的な問題が、実は木の札（木簡）の発掘という考古学の手法を用いて立証できる、という考えにまで至っている。文字と木簡を見る視点として、墨書土器にそのまま当てはめることはできないが、たいへん興味深い。

39）むしろ、たわむれに文字を書き込むことは、うつわに死を与えることになり、書かれた時点でそのうつわはうつわとしての機能を失う、とする考え方もある。エッセイ的小文のため論証には乏しいが、示唆に富む。
水野正好「文字と器と―その交感の世界」（『盾列』８号、奈良大学考古学研究会、1982年）。

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

（設置）

第１条　山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

（資料館の業務）

第２条　資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

一　山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示および調査研究

二　山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行

三　その他埋蔵文化財に関する必要な業務

（運営委員会）

第３条　資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

２　委員会に関する規則は、別に定める。

（館長）

第４条　資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

２　館長の任期は２年とし、再任を妨げない。

３　館長は、資料館の業務を掌理する。

（調査員）

第５条　資料館には調査員若干名を置く。

２　調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

３　調査員は、資料館の業務を処理する。

（特別調査員）

第６条　埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

２　特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

（雑則）

第７条　この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

（趣旨）

第１条　この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第３条第２項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　委員会は次の事項を審議する。

一　山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。

二　資料館の管理運営に関すること。

三　資料館の整備充実に関すること。

四　資料館の運営に要する経費に関すること。

五　その他必要な事項

（組織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　資料館規則第４条第１項の館長

二　各学部および教養部の教官各１名

三　事務局長

２　前項第２号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

（任期）

第４条　前条第１項第２号の委員の任期は２年とし、再任を妨げない。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

２　委員長は委員会を招集し、その議長となる。

（幹事）

第６条　委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

（委員以外の出席）

第７条　委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

（事務）

第８条　委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

（雑則）

第９条　この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 10　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員

（昭和62・63年度）

部局名	氏名	官職	任期	備考
医学部	黄　基雄	教授	62. 4. 1～平元. 3.31	委員長・館長
人文学部	中村友博	助教授	62. 5.29～平元. 5.28	
教育学部	三浦　肇	教授	62. 4. 1～平元. 3.31	
経済学部	及川　順	教授	62. 4. 1～平元. 3.31	
理学部	村上清文	助手	62. 4. 1～平元. 3.31	
工学部	島　敏史	教授	62. 4. 1～平元. 3.31	
農学部	藤田則之	教授	62. 4. 1～平元. 3.31	
教養部	木村忠夫	教授	62. 4. 1～平元. 3.31	
事務局	大谷　巌	事務局長	60.12. 1～　63. 3.30	
	有地成光	事務局長	63. 4. 1～	

Tab. 11　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏名	官職	専攻科目等	備考
人文学部	中村友博	助教授	日本考古学	昭和62・63年度
教育学部	三浦　肇	教授	地理学	昭和62・63年度
理学部	松本徹夫	教授	岩石学	昭和62・63年度
農学部	勝本　謙	助教授	植物分類学	昭和62・63年度
工業短期大学部	池谷元伺	教授	年代測定	～昭和62年５月20日

山口大学構内の主な調査

Tab. 12　山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	旧調査地区名	構内地区割	地点	面積 (m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第Ⅰ地区A・B区	L・M・N－15	1	30？	弥生竪穴住居・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当 小野忠熙	①
	第Ⅱ地区家畜病院新営	S・T－19 R・S－20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器	〃	〃	
	第Ⅱ地区	P・Q－19・20	3			弥生土器、土師器	試掘	〃	
	第Ⅳ地区牛舎新営	S－10	4	300	弥生溝・土壙、古墳竪穴住居、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	事前	〃	
	第Ⅳ地区	S・T－9～13	5				試掘	〃	
昭和42年	第Ⅲ地区杭列区	E－20	6	1,100	杭列	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	事前	〃	
	第Ⅲ地区南区	G・H－22・23	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	〃	〃	
	第Ⅲ地区北区	I・J－20・21	8	1,400	竪穴住居、溝、土壙、柱穴		〃	〃	
	第Ⅲ地区東南区	H－23 I・J・K－24	9		弥生竪穴住居	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅲ地区野球場	I－22・23 J－21～23 K－22・23	10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	〃	
	第Ⅴ地区学生食堂	I・J－19・20	11		弥生溝、古墳土壙	弥生土器、土師器	事前	〃	
	第Ⅴ地区	H・I・J・K・L・M・N－18～20	12		河川跡、柱穴、土壙	弥生土器、土師器	試掘	調査担当 山口大学吉田遺跡調査団	
	第Ⅰ地区C区 大学本部新営	K・L－14	13	600	竪穴住居、溝、土壙	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	〃	
昭和44年	第Ⅴ地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	〃	
昭和46年	第Ⅰ地区D区第1地点	K－13	14		溝	弥生土器、木炭層	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第2地点	L－13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第3地点	L・M－13	16		竪穴住居、土壙、柱穴	土師器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第4地点	M・N－13	17		弥生竪穴住居、溝、土壙	弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第5地点	L－13	18		弥生溝	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第6地点	M－13	19		古墳竪穴住居、弥生溝	弥生土器、土師器、石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第7地点	M－13	20		溝	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区E区 第2学生食堂新営	N・O－15	21	900	弥生～古墳竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	事前	〃	
昭和50年	第Ⅱ地区					弥生土器	試掘	〃	
昭和51年	第Ⅲ地区				竪穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	〃		

文献①　山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概報』1976年

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和53年	人文学部校舎新営	M・N－21	22	180			試掘	調査担当　近藤喬一	未刊
	教育学部附属養護学校新営	A・B・C・D－20～24	23	400	溝、土壙	縄文土器 弥生土器	〃	山口大学埋蔵文化財資料館・山口市教育委員会	
昭和54年	理学部校舎新営	O－18・19	24	250			〃		
	農学部動物舎新営	P－18・19	25	380			〃		
	本部管理棟新営	L－14	26	740	溝、土壙、柱穴、中世井戸、土壙墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	事前		
昭和55年	経済学部校舎新営	K・L－21	27	70			〃		
	農学部農業観測実験施設新営	Q－15	28	50	溝、土壙		〃		
	本部	E・F－15・16 F－20・21 G・H－12・19	29				立会		
	農学部	L・M－12・13 N・O・P－10～12 P・Q－17・18	30				〃		
昭和56年	教育学部校舎新営	H－19	31	400	弥生竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		年報Ⅰ
	教育学部音楽棟新営	H－16	32	100	溝		〃		
	教育学部美術科・技術科実験実習棟新営	J－19・20	33	130	旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	〃		
	正門橋脚新営	H－11	34				立会		
	時計塔埋設	I－14	35				〃		
	本部構内擁壁	K－14	36				〃		
	教養部構内擁壁	I－16・17	37				〃	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J・K・L・M－15 M・N－16	38				〃		
	農学部中庭整備	O－17	39				〃		
	暖房施設改修	O－16	40				〃	工法等変更	
	学生部文化会車庫新営	L－8	41				〃	工法等変更	
	学生部馬場整備	M・N－8・9	42				〃		
昭和57年	附属図書館増築	M－16	43	600	弥生－古墳溝、土壙、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前		年報Ⅱ
	大学会館新営	M－14・15	44	130	弥生竪穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属養護学校プール新営	B－22	45	880			立会		
	放射性同位元素総合実験室排水桝新営	O－18	46	2			〃		
	教養部自転車置場昇降口新営	K・L－17	47	160			〃		
	教養部中庭環境整備	J・K－16	48				〃		
昭和58年	大学会館新営	M・N－13	49	2,000	古墳井戸、土壙、柱穴、中世井戸、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、瓦器、緑釉陶器、木簡、石器	事前		年報Ⅲ
	ラグビー場防球ネット新営	G・H－19	50	120	弥生溝、弥生～古墳竪穴住居、土壙	弥生土器、土師器、石製品	〃	竪穴住居は工法変更により現地保存	

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	理学部大学院校舎新営	M・N－20 O－19・20	51	410			立会		年報Ⅲ
	正門・南門二輪車置場および正門花壇新営	H・I－23 I－12・13 J－13	52	180			〃		
	学生部アーチェリー場的台・電柱設置	M－8	53	30			〃		
	学生部廐舎整備	L－7	54	2			〃		
	学生部野球場散水栓取設	J－21 K－22	55				〃		
	教養部環境整備	I－16・17 J・K－17 K・L－17・18	56	80			〃		
	学生部テニスコート改修	C－18 D－17 E－16	57	12			〃		
昭和59年	大学会館ケーブル布設	N－12・14	58	160	弥生土壙、柱穴	弥生土器	事前		
	大学会館排水管布設	K・L－13	59	180	弥生～中世遺物、包含層、古墳土壙、古代～中世土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	〃		
	学生部テニスコートフェンス改修	B－17・18 C－16～19 D－15～17 E－15・16	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		年報Ⅳ
	経済学部樹木移植	K－19～21	61	8			立会		
昭和60年	大学会館環境整備	L－14 L・M・N－15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生竪穴住居、貯蔵穴、土壙、古代～近世土壙、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶磁器、土製品、石斧、原石、鉄器、窯壁	試掘		年報Ⅴ
	経済学部環境整備（樹木移植）	K－21 L－20	63	5			立会		
	農学部附属農場飼料園排水溝修復整備	R－16～19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶磁器、鞘口、石器、鉄滓	〃		
	農学部附属農場農道改修	V－15・16	65	325			〃		
	教育学部前庭環境整備（樹木移植）	I・J－19・20	66	430			〃		
	中央ボイラー棟車止設置	O・P－16	67	2.5		須恵器	〃		
	大学会館環境整備（樹木移植）	L・M－15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、砥石、鉄滓	〃		
	交通標識設置	J－20, N－14 O－18	69	3			〃		
	農学部解部実習棟周辺環境整備（実験動物運動場設置）	P・Q－17・18	70	16			〃		
	理学部環境整備（藤棚設置）	N－20・21	71	4			〃		
	農学部附属家畜病院舗装	S・T－19	72	270			〃		
昭和61年	国際交流会館新営	N－22・23	73	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鉄鉋玉、加工痕のある剥片	試掘		年報Ⅵ
	山口銀行現金自動支払機設営（電線路埋設）	I・J－19・20	74	11	包含層（河川跡か）	弥生土器	立会		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和61年	農学部附属農場農道整備	S－20 U－19	75	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	立会	工法等変更	年報Ⅵ
	農学部附属農場農道交通規制（施錠ポール設置）	L－10 Q－15・16	76	2			〃		
	正門横（水田内）境界杭設置	I－10	77	0.25	包含層か		〃		
	経済学部環境整備（樹木移植・記念碑建立）	M－20	78	3			〃		
	吉田構内交通標識設置	H－23, J－9, P－22, S－20, W－16	79	3		須恵器	〃		
	市道神郷1号線および問田神郷線の送水管埋設		80	2,100	古墳・古代溝、古代河川跡、杭、弥生包含層	弥生土器、土師器、須恵器（墨書のあるもの含む）瓦質土器、製塩土器、石斧、板石	〃	山口市教育委員会・山口大学埋蔵文化財資料館	
	教養部自動販売機増設（屋根設置および観覧席移動）	K・L－18	81	3.5			〃		
	教養部身体障害者用スロープ取設	L－15・16	82	3			〃		
	経済学部散水栓取設	L・M－20	83	4			〃		
	吉田構内水泳プール改修等	E・F－16 H－15	84	26.5	包含層		〃		
	農学部附属農場水道管埋設	S－12	85	3			〃		
	吉田構内汚水排水管等総改修	M－18 O－15・16	86	15.5		土師質土器	〃		
	本部身体障害者用スロープ取設	L－14	87	12			〃		
	経済学部身体障害者用スロープ取設	K－20 L－18～20	88	88	弥生～古墳柱穴		〃	工法等変更	
	附属図書館荷物運搬用スロープ取設	L－16	89	8		弥生土器	〃		
	教養部37番教室改修	K－16	90	1			〃		
昭和62年	教育学部附属教育実践研究指導センター新営	K－18	91	240	土壙、柱穴、溝	ブランク・削器・植物遺体	事前		年報Ⅶ
	教養部複合棟新営	J・K－17・18	92	35	埋甕土壙、溝、柱穴	土師器・須恵器・土師質土器・石斧	試掘		
	教養部環境整備	I・J－16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		
	教養部複合棟新営	J・K－17・18	94	900	落し穴、河川跡、竪穴住居、土壙、溝、井戸、埋甕土壙、掘立柱建物跡、谷状遺構、柱穴	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、須恵質土器、陶磁器、石鍋、石斧、木製品	事前		
	九田川河川改修	B・C－17	95	20			立会	県教委・山大埋文	
	国際交流会館新営	M－23 N－22・23	96	195			〃		
	教育学部附属養護学校自転車置場移設	L・N－12	97	45			〃		
	農学部附属農場E7圃場排水管埋設及びE6圃場進入路拡幅	L・N－12	98	45	中世土壙墓か	弥生土器、土師器、須恵器、輸入白磁、国産磁器、敲石	〃		
	農学部植栽	N－17	99	3			〃		
	経済学部集水桝取設	K－20	100	0.5			〃		

小串構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積（m²）	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅲ
	医学部図書館新築		2				立会		
	医学部体育館新営		3	1			〃		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4	44	近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報Ⅳ
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	〃		
	医学部基幹整備（特高受変電設備）		6	28		動物遺体（貝殻）	試掘		
	医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営		7	38			〃		
昭和60年	医学部外来診療棟新営		8	409		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	〃		年報Ⅴ
	医学部基礎研究棟新営		9	11		近世陶器	〃		
	医学部看護婦宿舎改修		10	25		近世陶磁器	立会		
	医学部看護婦宿舎改修		11	20			〃		
	医学部環境整備（樹木移植）		12	40			〃		
	医学部附属病院外来診療棟新営		13	5			〃		
	医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備等（雨水桝埋設）		14	18			〃		
昭和62年	医学部附属病院東駐車場改修		15	6			〃		年報Ⅶ
	医学部附属病院棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器、細石刃核	試掘		

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積（m²）	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新営		1	70		須恵器	試掘		年報Ⅲ
	工学部図書館増築		2	70			〃		
昭和59年	工学部尾山宿舎排水管布設			20			立会		年報Ⅳ
昭和60年	工学部尾山宿舎擁壁取設等			65			〃		年報Ⅴ
	工学部受水槽総改修		3	1.5			〃		
昭和61年	工学部尾山宿舎排水管改修			6			〃		年報Ⅵ
	工学部身体障害者用スロープ取設		4	29			〃		
	情報処理センター（常盤センター）空調設備取設		5	30			〃		

亀山構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小・幼稚園運動場整備		1	60	古墳竪穴住居、溝状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報Ⅲ
昭和60年	教育学部附属山口小学校散水栓改修		2	1			立会		年報Ⅴ
	教育学部附属山口中学校球技コート整備		3	2			〃		
	教育学部附属幼稚園環境整備（樹木移植）		4	1			〃		
昭和61年	教育学部山口附属学校汚水排水管布設	幼稚園・小学校部分 中学校部分	5	57 20	中世土壙か 河川跡か 杭列	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土器質土器、陶磁器、不明鉄製品、石鏃、剥片、植物遺体	〃		年報Ⅵ
	教育学部附属山口小学校電.柱移設		6	0.5			〃		
昭和62年	教育学部附属幼稚園遊戯室拡張		7	40			〃		年報Ⅶ

光構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校自転車置場新営		1		近世－近代石垣	陶磁器、瓦質土器、瓦	試掘		年報Ⅲ
昭和59年	教育学部附属光小・中学校焼却場新営		2				立会		年報Ⅳ
昭和60年	教育学部附属光中学校外灯改修		3	1		土師器	〃		年報Ⅴ
昭和61年	教育学部附属光小学校創立記念事業（ブロンズ像建立）		4	2.5		土師器、須恵器	〃		年報Ⅵ
昭和62年	教育学部附属光中学校グラウンド防球ネット設置		.5	2		弥生土器、土師器、瓦質土器、土師質土器、瓦	〃		年報Ⅶ

その他の構内

調査年度	調査名	所在地	地点	面積（㎡）	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ボート艇庫合宿研修所整備	宇部市小野湖		0.5			立会		年報Ⅳ
	学生部ヨット艇庫合宿研修所整備	吉敷郡秋穂町					〃		
昭和60年	熊野荘給湯機器取設	山口市熊野町		7			〃		年報Ⅴ
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉		35	杭		〃		年報Ⅵ
	経済学部宿舎下水管改修	山口市旭通り 山口市水の上町		1 7		土師質土器 瓦	〃	6号宿舎 2号宿舎	

※　昭和41年以降、吉田構内においては工事に際し、随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の調査分については調査名をすべて把握しているわけではなく、注意されたい。

Summary

This report accounts the results of archaeological researches in fourteen in excavated areas located on campus in 1987.

As Appendix, it carries four papers, Radiocarbon Dating, Plant seed and Pollen analysis of the soil in Yosida campus, and "remains writing in ink".

Yamaguchi University Archaeological Museum was established as part of the crossfaculties public facilities of the University in 1978. We refer to a plan from the conference of the Management Committee first and gain appooval. We then carried out the reseach in relation to the construction work on campus. That's why our reserches are helpful to reconstruct the past society, environment and so on.

The current year we carried out researches as follow :

1 . Researches on the Yoshida campus

(1) Excavation in relation to the Practical Education Center at the Fuculty of Education

We found a pit, some post holes dating from the Yayoi to the Kofun period and two pits in the Edo period, and so on. In addition to these remains, We have been able to discover some stone implement made of obsidian from Hime island, Oita Prefecture. We have obtained a new evidence which was buried some layers containing artifact in the late Jomon period on the Yamaguchi basin. In the soil under this layering there were buried many remains of plants and seeds, it seemed that the river flowed in the eastern part. By plant seed analysis and pollen analysis of the soil, it is presumed to have been wet fields round here in those days.

(2) Excavation in relation to the construction of the new Lecture building at the Fuculty of Liberal Arts

we uncovered a river, pitfall some ditches in the late Jomon period and four dwelling pits, two rivers daiting from the Yayoi to the Kofun period, and also four constructions, two wells, three pits contained jar and so on. In this Prefecture, There is a precious case of excavation about the ruins in the Jomon period. Particularly a pitfall which exists along the river more than 29 meters in breadth, is valuable features to make clear environments and hunting pattern. In addition to these features we found artifacts in the late Jomon period, it will be possible to discover features and layers contained ones by results of volcanic ashes analysis.

Some constructions with wells and pits contained jar in the Edo period, is a good features to clarify to clarify the arrangment of the structure, the kind of village and organized ones. Furthermore it is worthy of notice to have discovered Haji ware imitated from Sue ware and ones with writing in ink.

(3) Examinations under construction

We found a ditch unknown to time as for examination under construction in relation to the laying drain pipes under ground on the Lecture buildings at the Faculty of Liberal Arts, two rivers from the Yayoi to the Kofun and before then in regard to the construction and laying the purifier on the International Hall. Espceially we uncovered a pit regarded as a grave by quantitative analysis of Phosphoric Acid and Calcium under repair on the University Farm.

2 . Researches on the Kogushi campus

(1) Soundings in relation to the construction of the new ward ar the University Hospital.

We found many stone implements such as knife tools, scrapers, flakes made of Obsidian, Chert, Tuff and so like in the Paleolithic, but could not find any pottery. These remains contained in the same soil tells us for the tecnique of production for stone implements in those days. Some layers contained such artifacts were distributed in south part, it was confirmed that these layers accumlated in the direction of southern area still more.

(2) Examinations under construction

We carried out the examination under construction in relation to the repair of the parking under University Hospital, we could not find any artifact.

3 . Researches on the Kameyama campus

As for an extension of the play room in the Kindergarden, we could not find any artifact.

4 . Researches on the Hikari campus

As for a extension under construction in relation to the repair of the net around the ground, we could not any artifact in the part. But, on the beach of Mitarai Bay in front of this campus we picked up many Haji wares, ceramic roof tiles and so on from the Kamakura to the Edo period.

Fig. 77 山口大学吉田構内地区割および調査区位置図

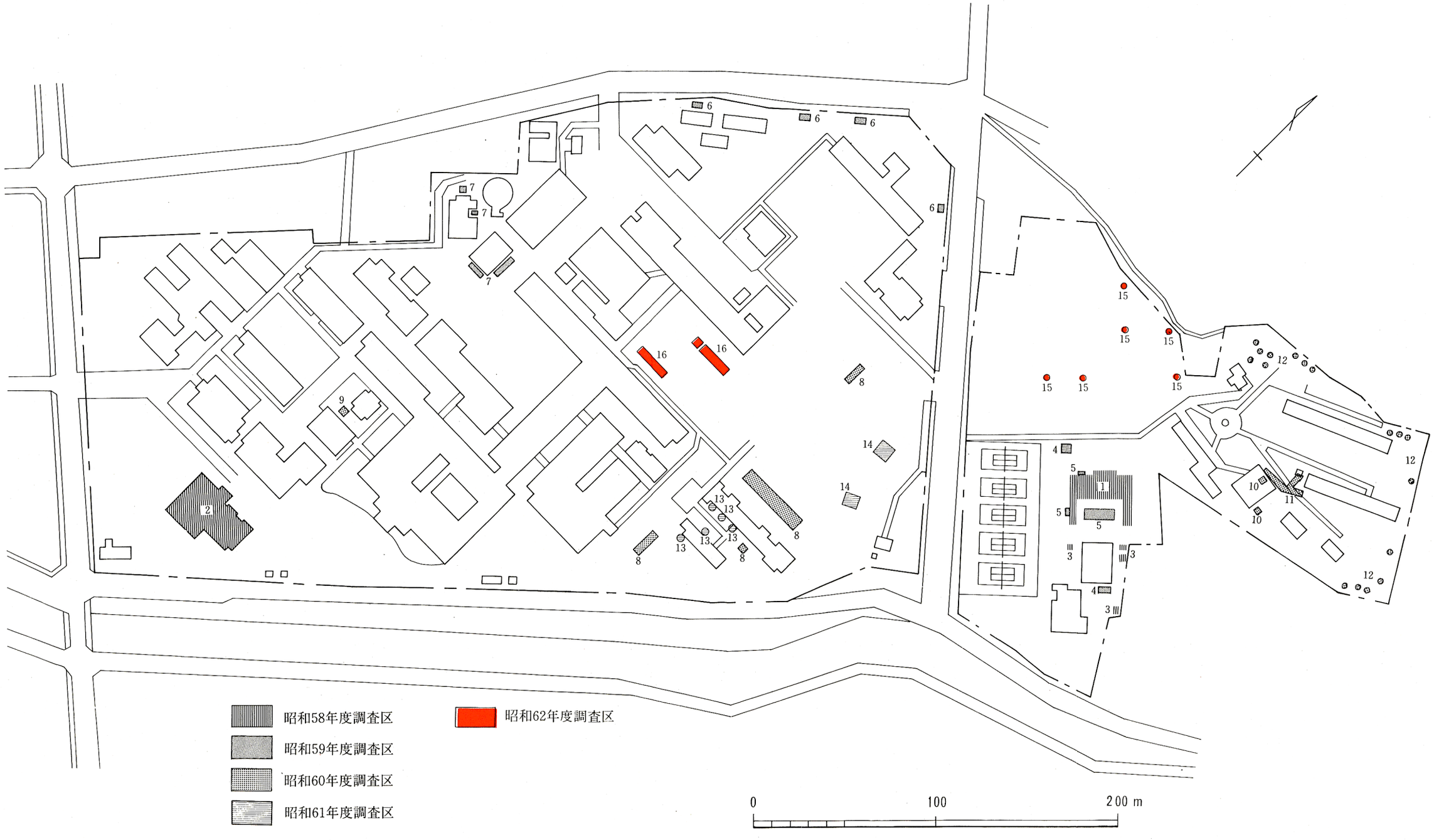


Fig. 78　山口大学小串構内調査区位置図

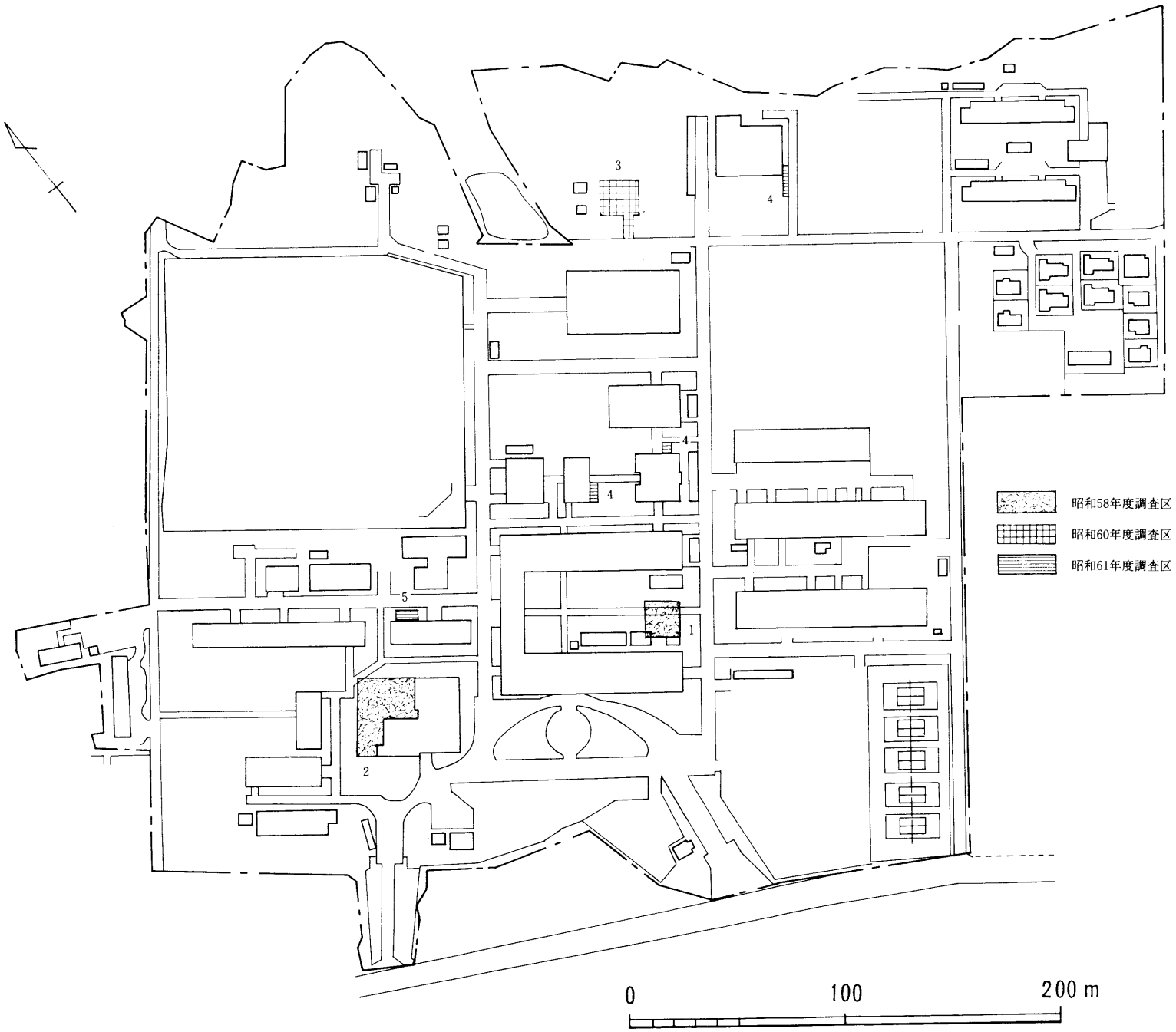


Fig. 79 山口大学常盤構内調査区位置図

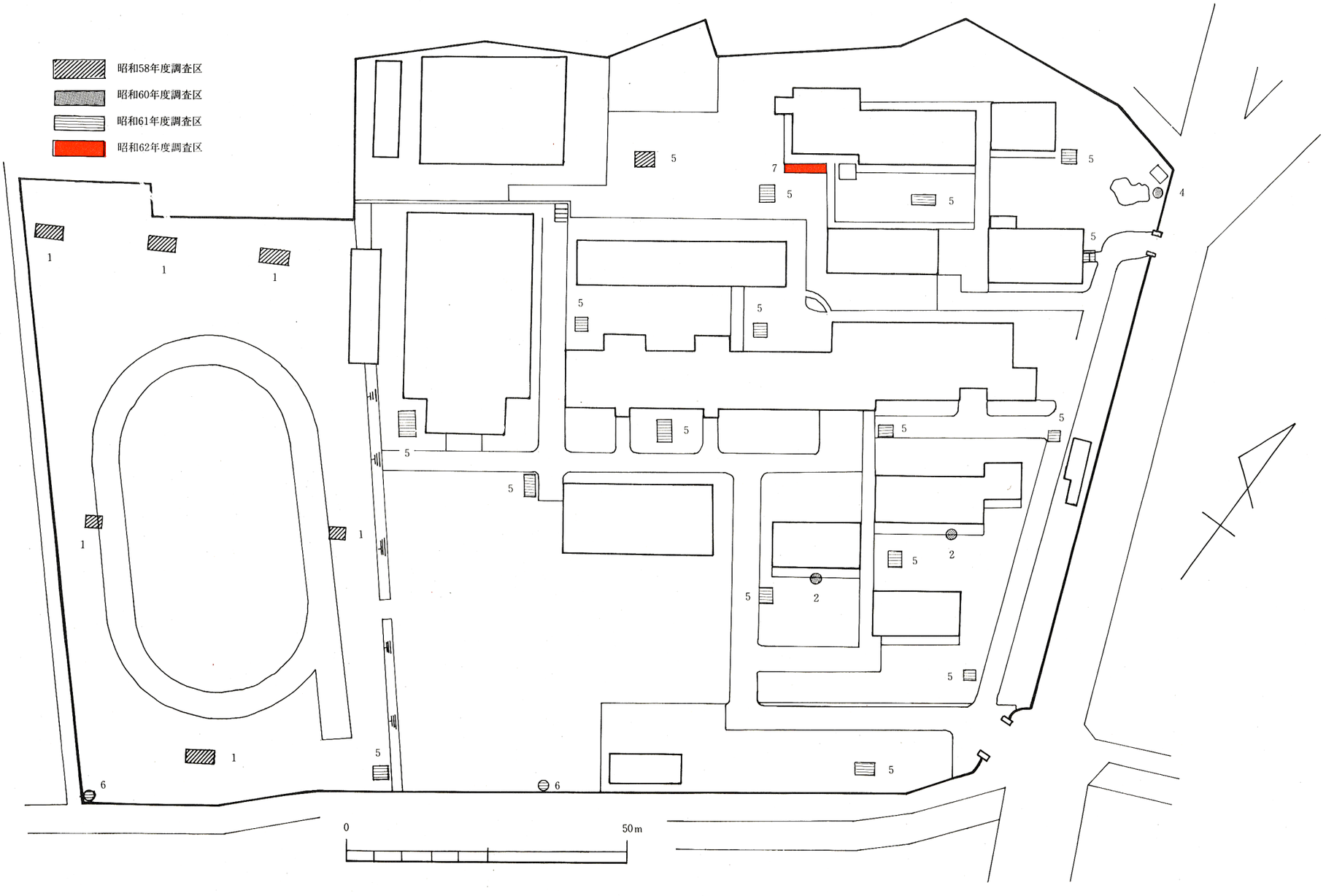


Fig. 80　山口大学亀山構内（幼稚園・小学校部分）調査区位置図

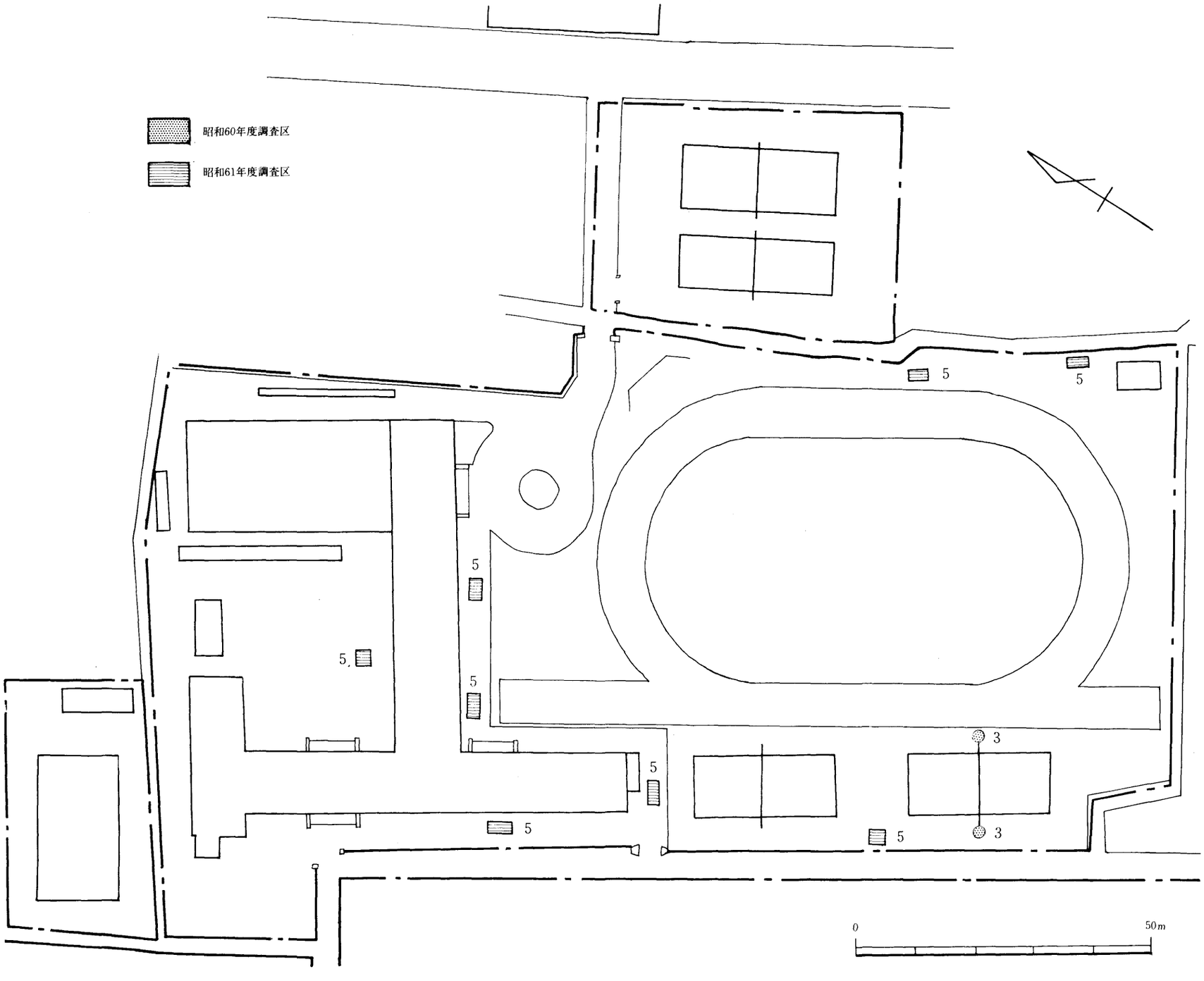


Fig. 81 山口大学亀山構内（中学校部分）調査区位置図

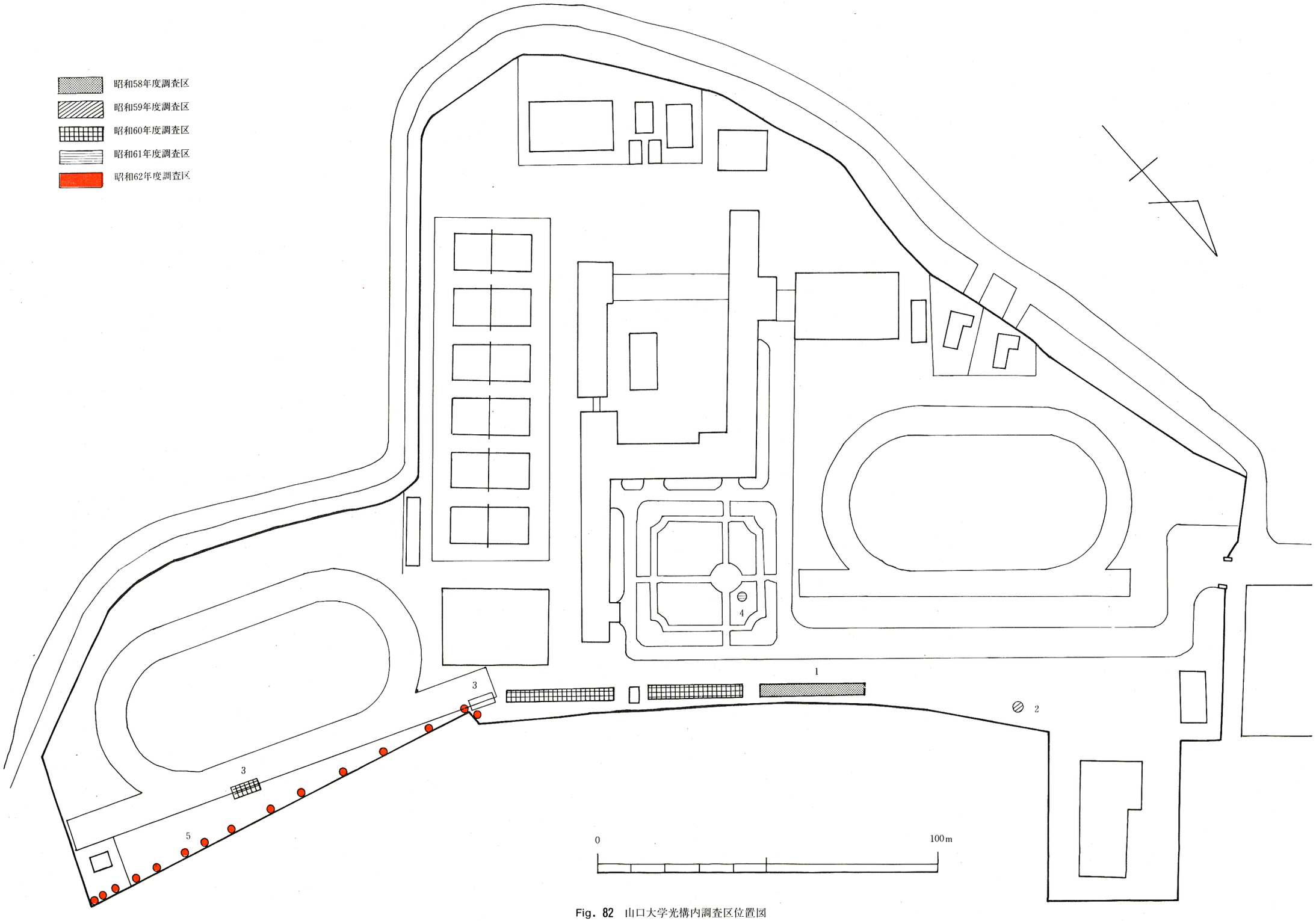


Fig. 82　山口大学光構内調査区位置図

Fig. 77 山口大学吉田構内地区割および調査区位置図

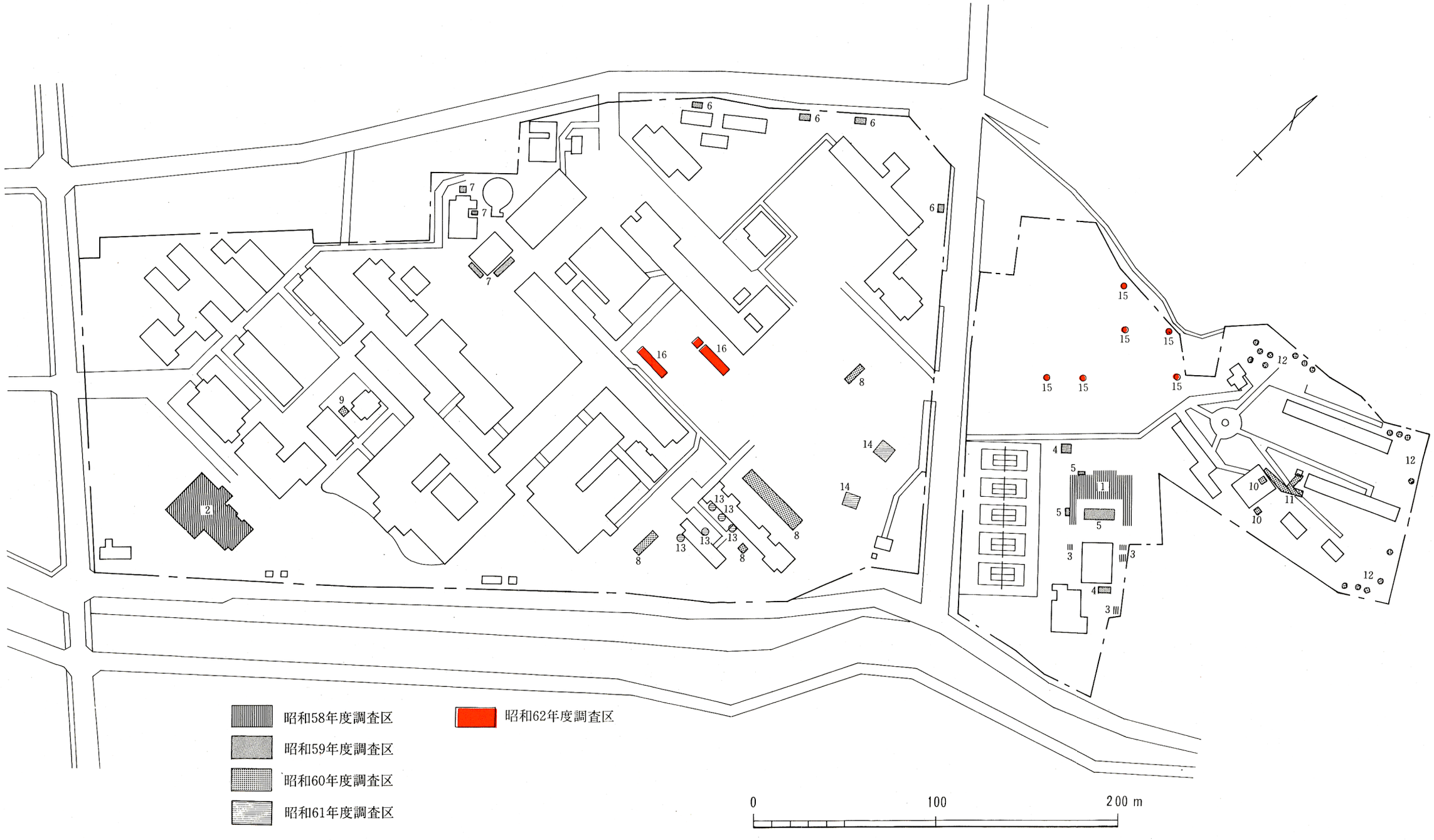


Fig. 78　山口大学小串構内調査区位置図

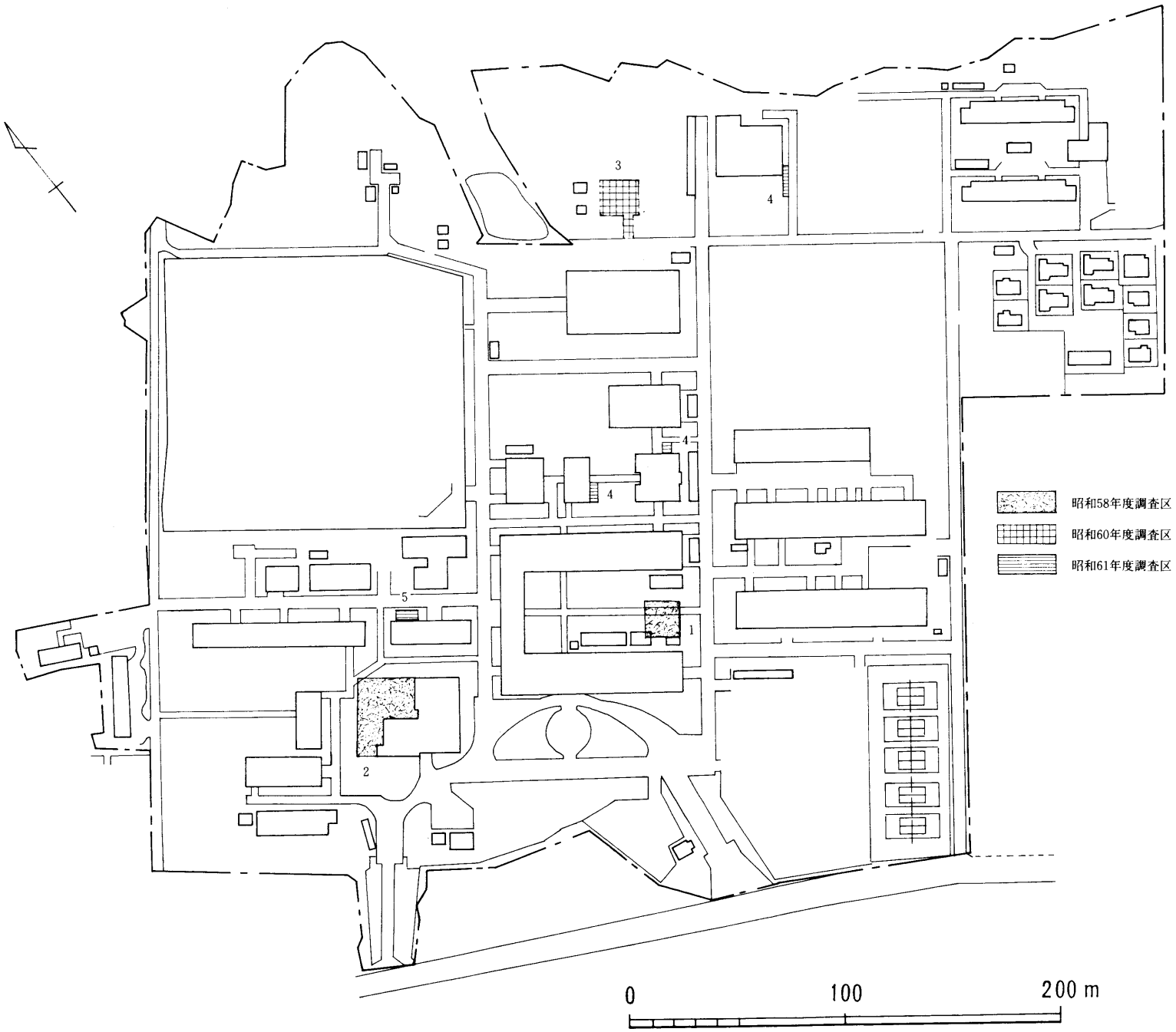


Fig. 79 山口大学常盤構内調査区位置図

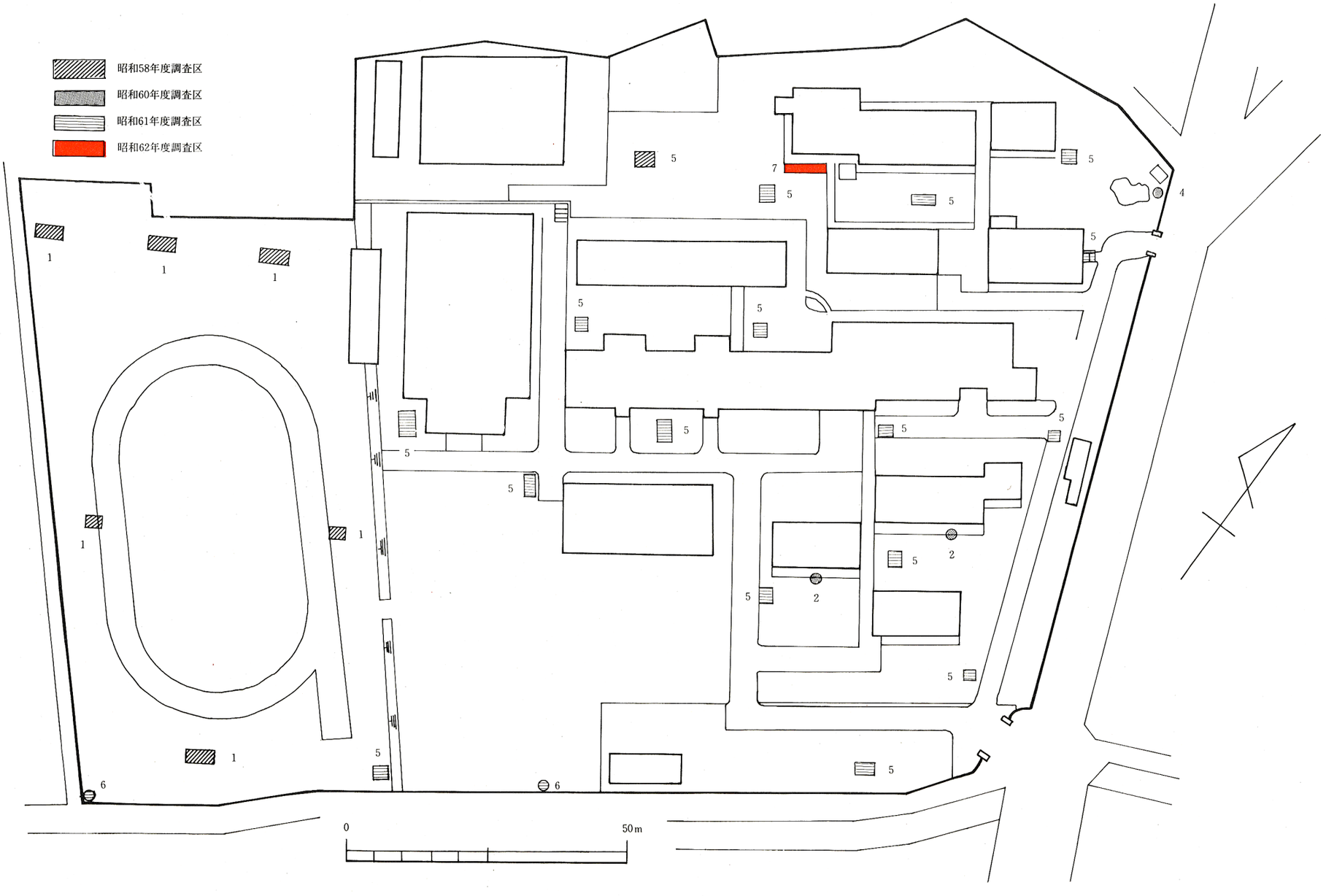


Fig. 80　山口大学亀山構内（幼稚園・小学校部分）調査区位置図

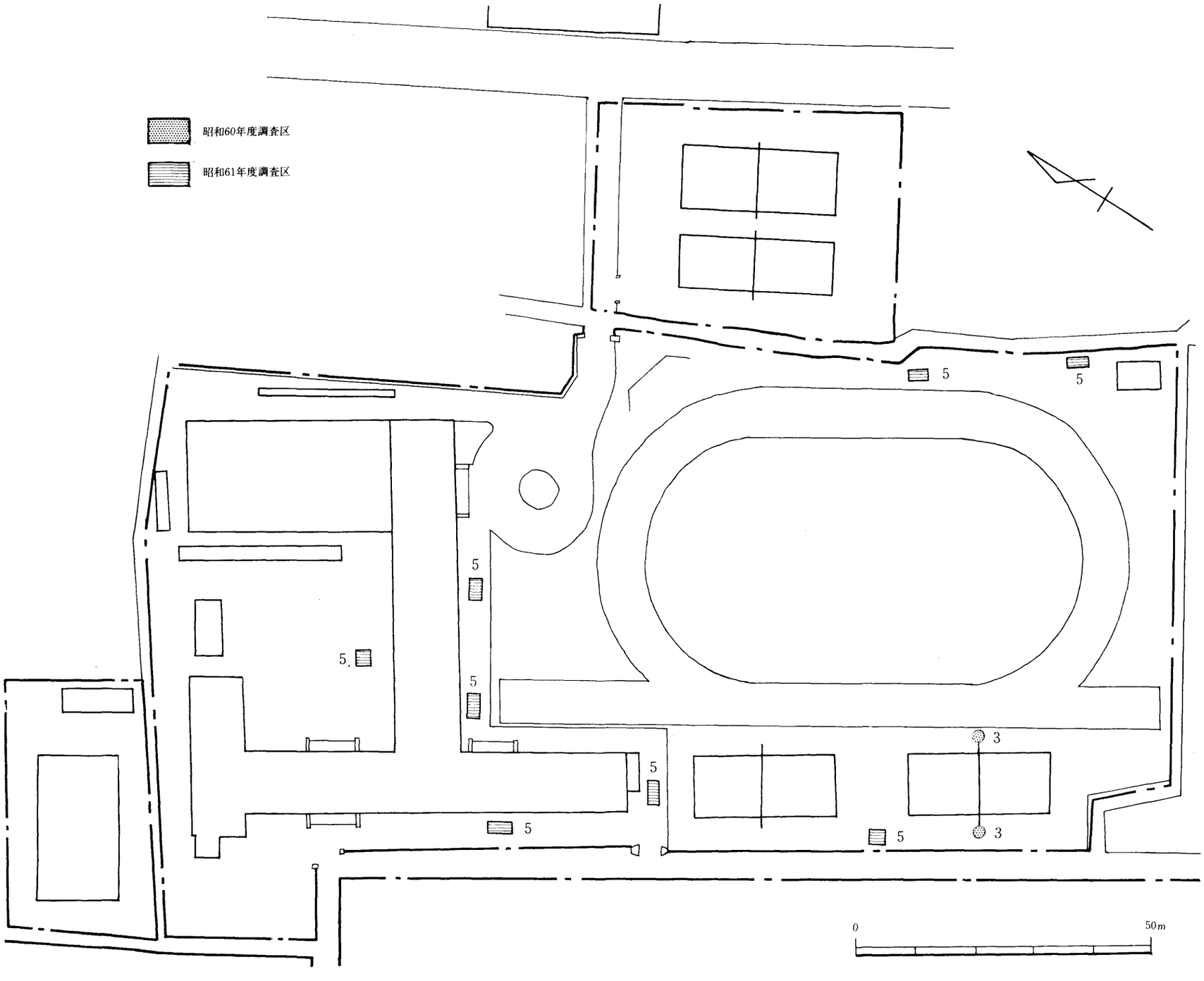


Fig. 81 山口大学亀山構内（中学校部分）調査区位置図

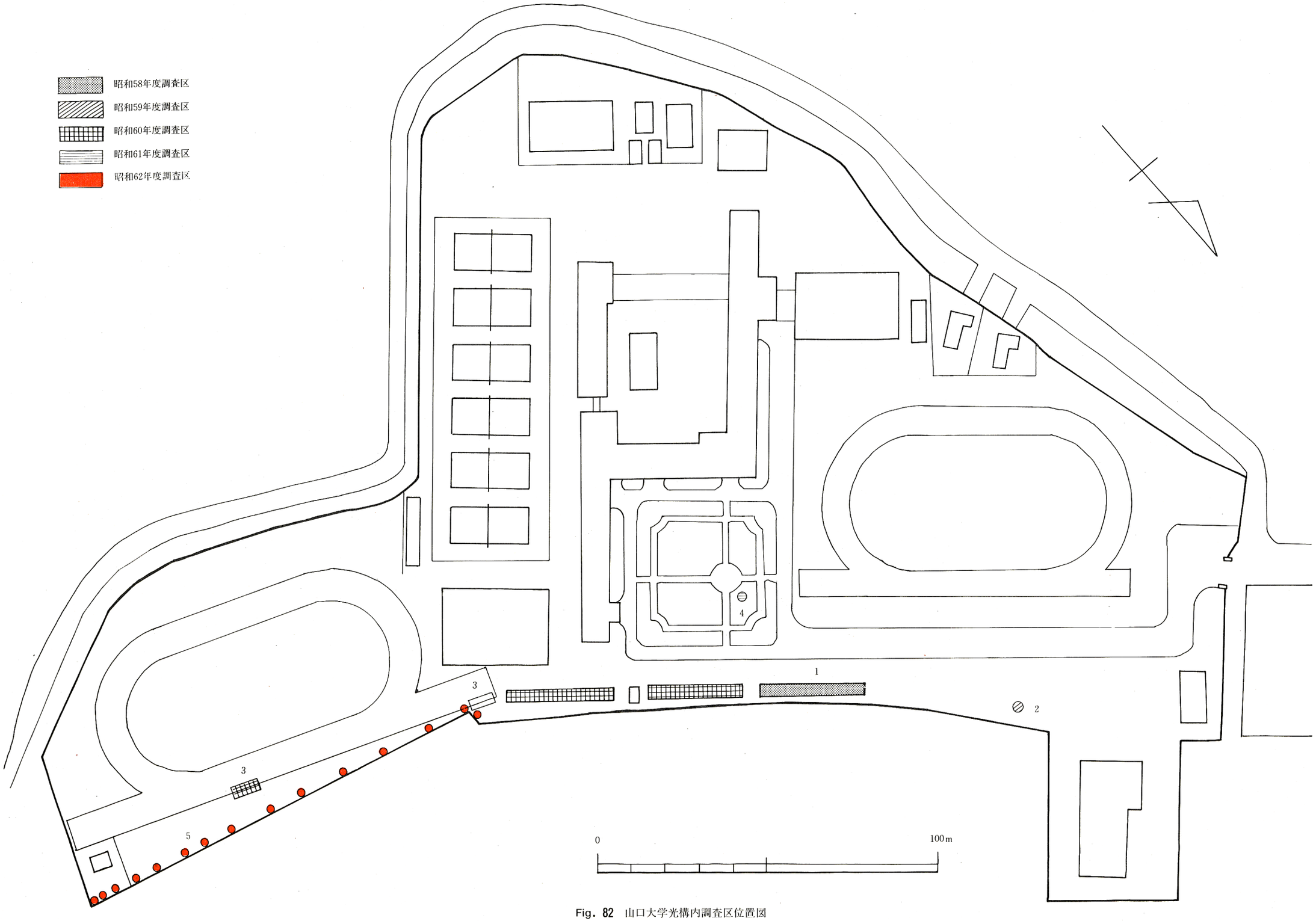
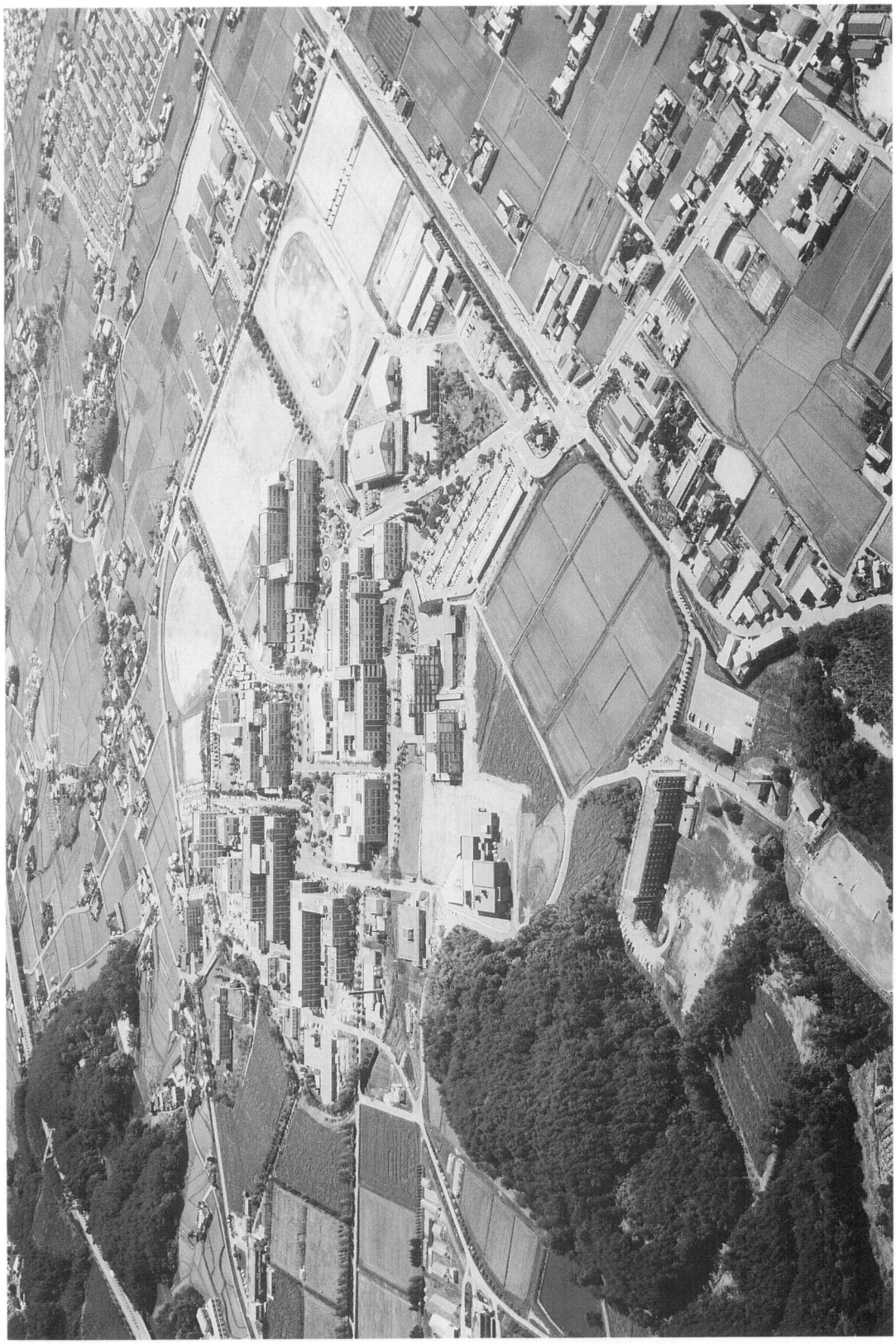


Fig. 82　山口大学光構内調査区位置図

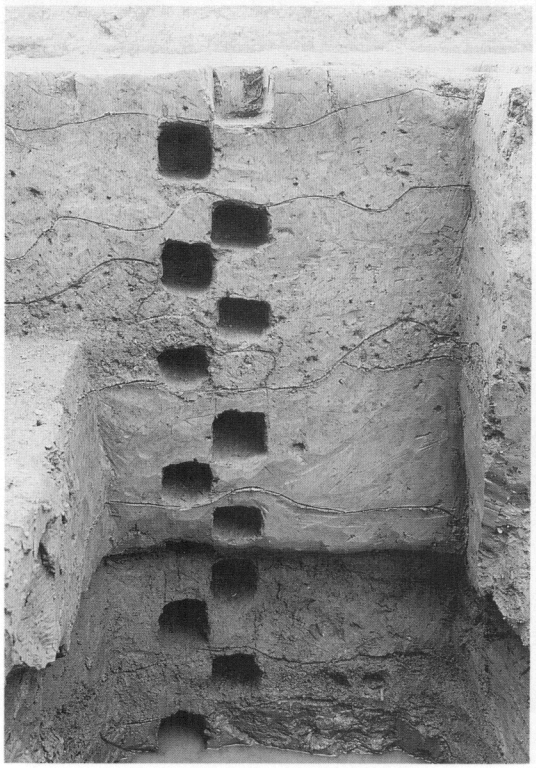
PLATES

PL. 1

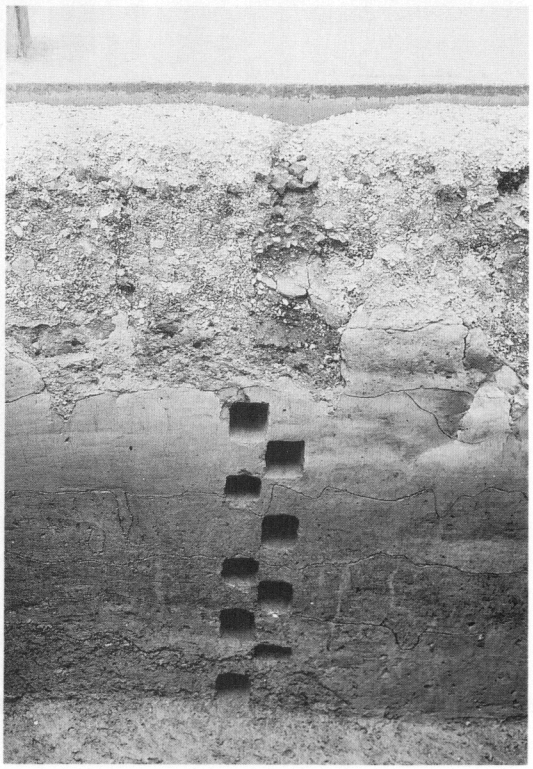


吉田構内全景（北西から）

(1) 調査区全景(東から)



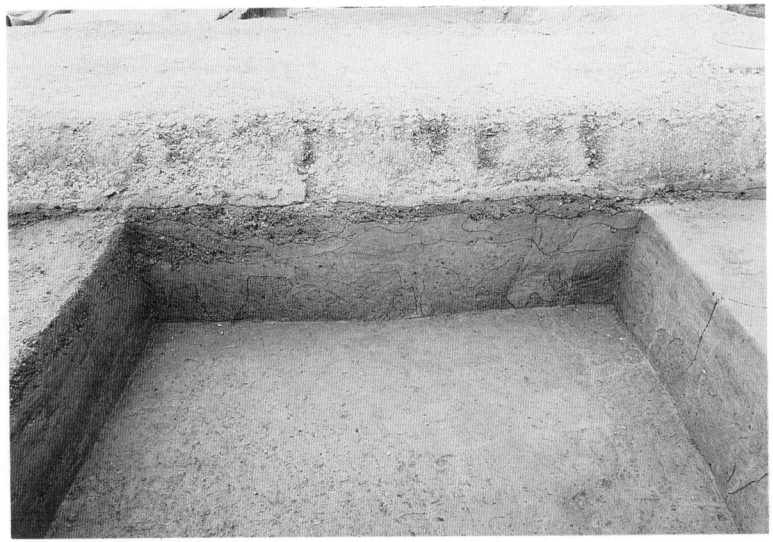
(2) 1グリッド北壁土層断面(南から)



(3) 4グリッド西壁土層断面(東から)

吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査(2)

(1) 2グリッド南壁土層断面(北から)



(2) 3グリッド南壁土層断面(北から)

(3) 1グリッド遺物出土状況全景(東から)

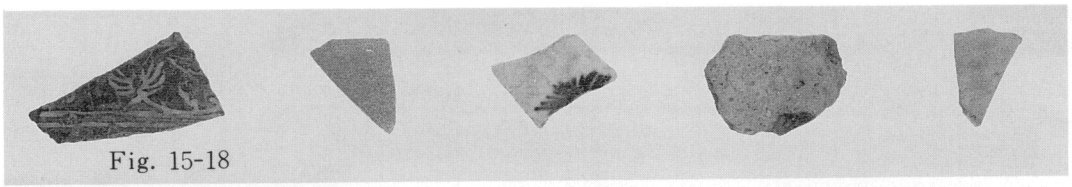
(4) 1グリッド遺物出土状況(南から)

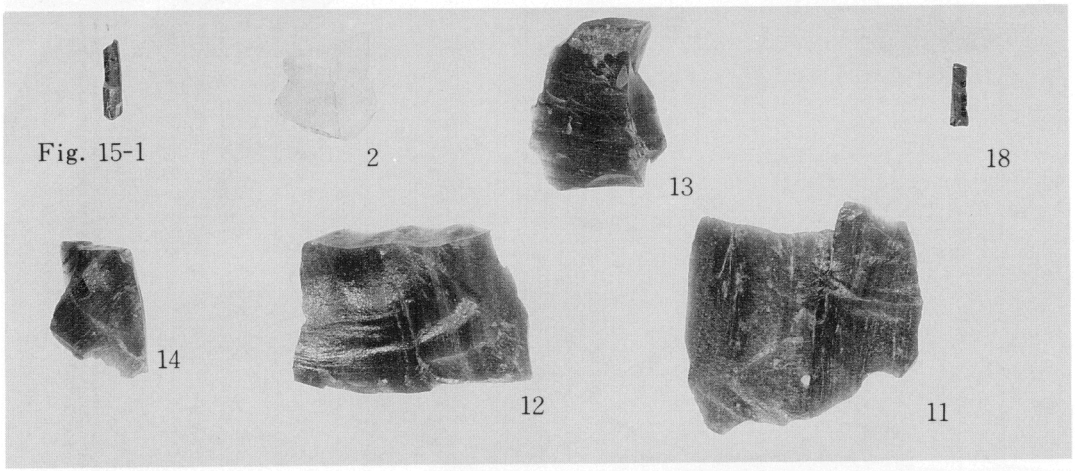
(1) 1グリッド植物遺体出土状況(西から)

(2) 1グリッド植物遺体出土状況(西から)

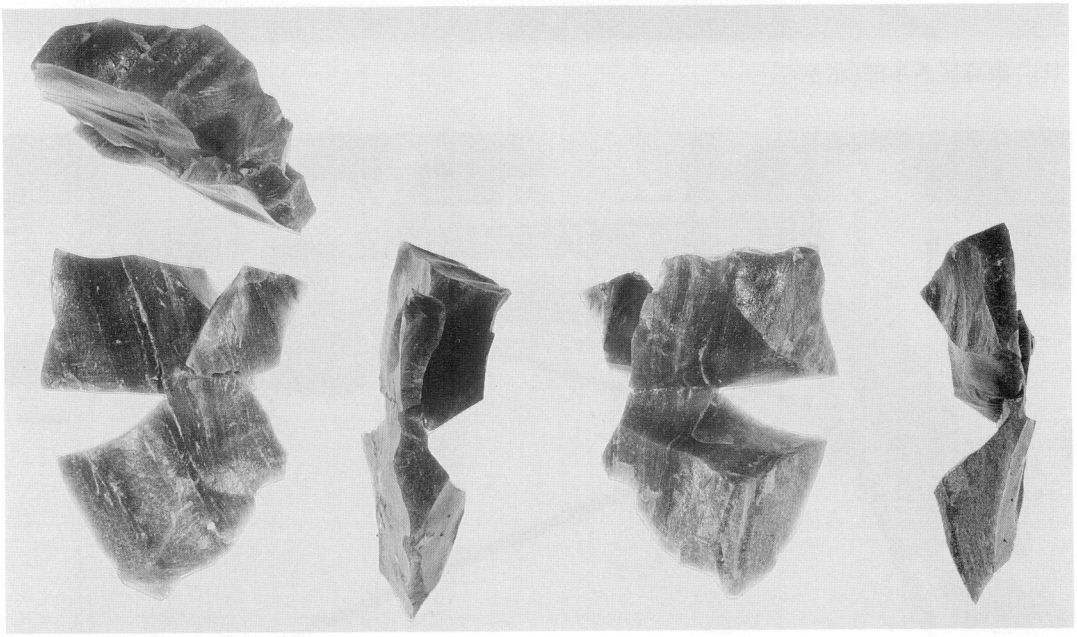
(3) 1グリッド植物遺体出土状況(西から)

(4) 調査風景



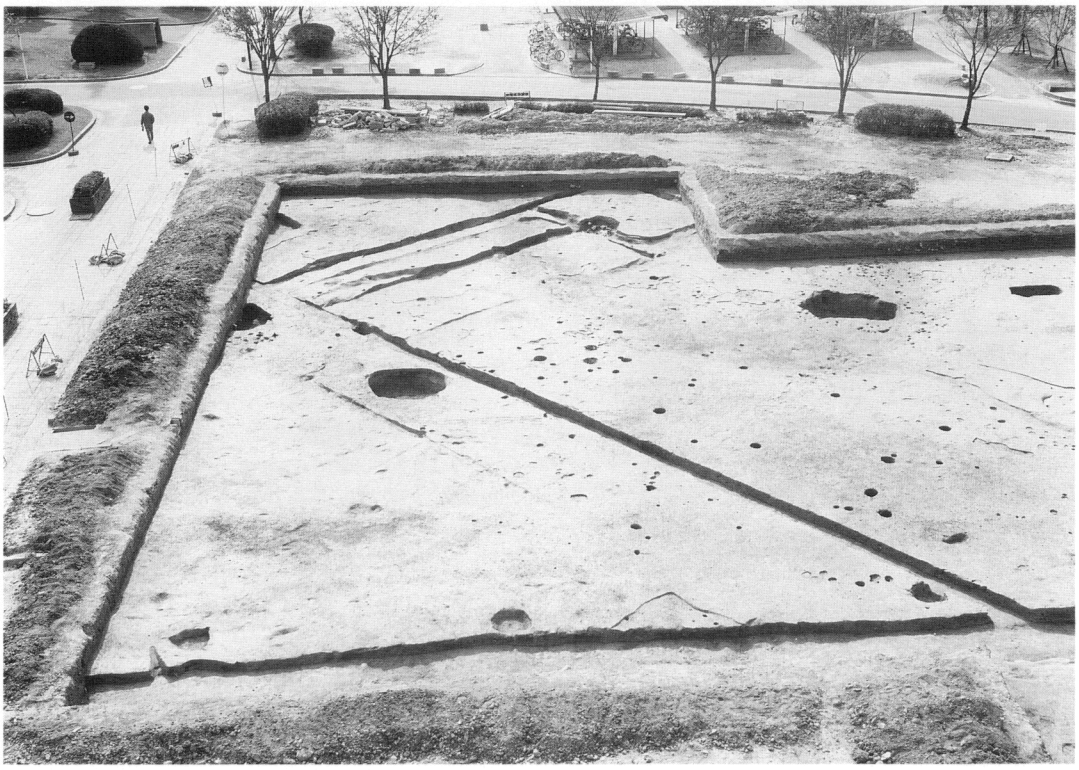


(1) 出 土 遺 物



(2) 接合資料(11+12+14)

(1) 調査区西半部(北から)

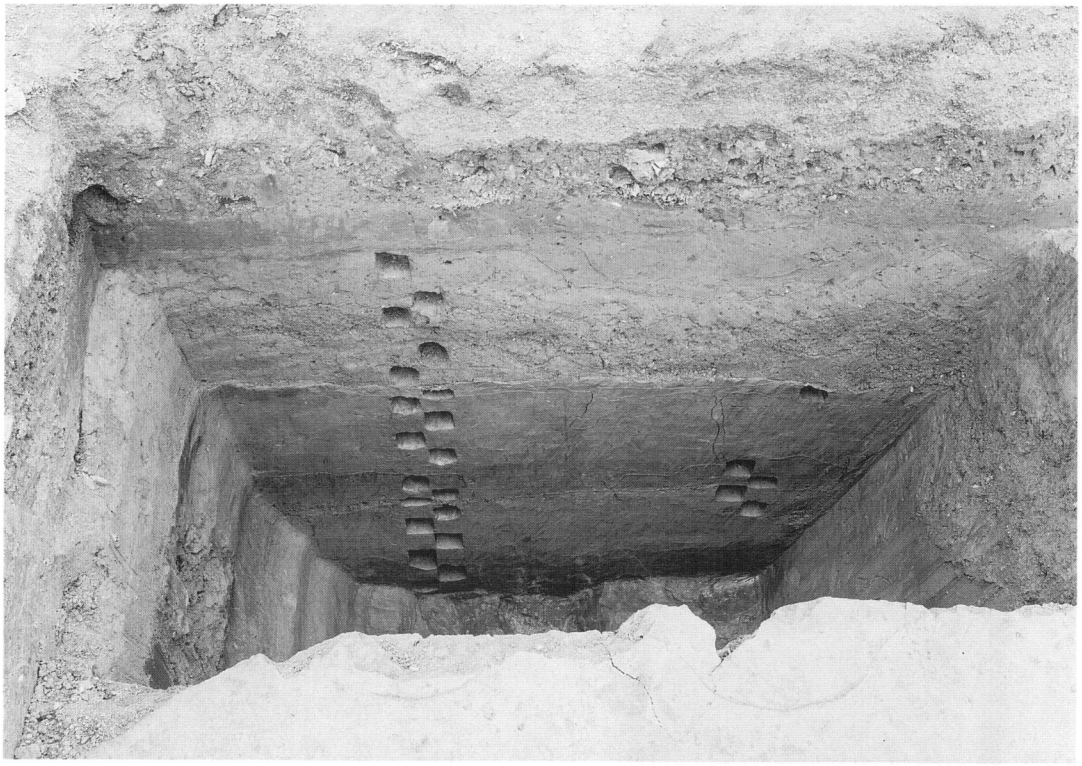


(2) 調査区東半部(北から)

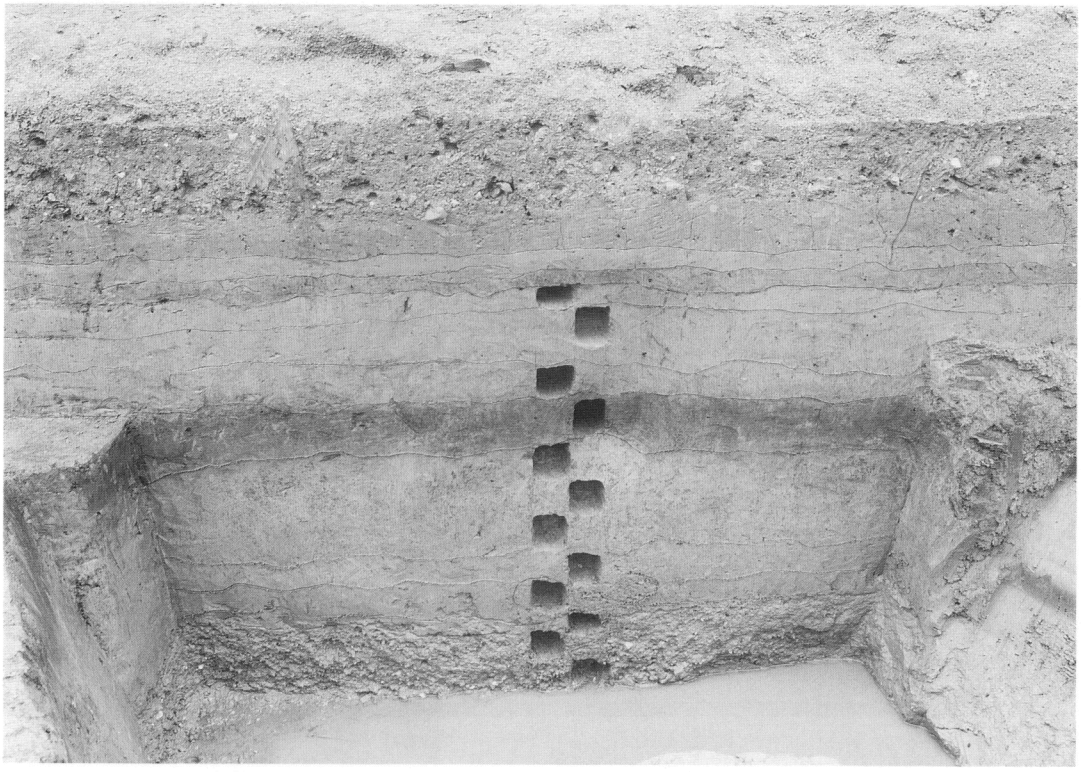
吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査(2)

(1) 調査区北端部(北から)

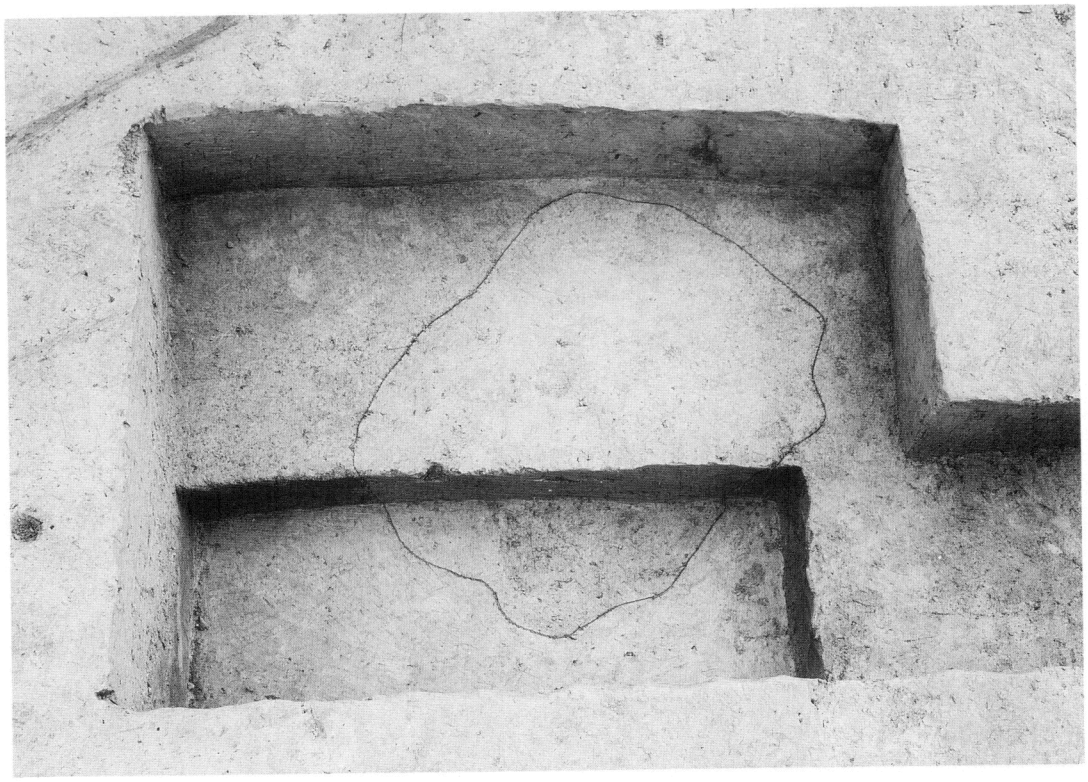
(2) Aトレンチ河川跡(西から)



(1)　A－B壁土層断面(東から)



(2)　C－D壁土層断面(北から)



(1) 落し穴検出状況(西から)

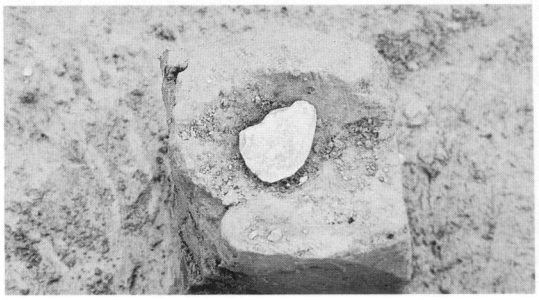
(2) 落し穴全景(西から)

(1)　Aトレンチ遺物出土状況(東から)

(2)　Aトレンチ遺物出土状況(東から)

(1) Bトレンチ全景(北から)

(2) Cトレンチ全景(西から)

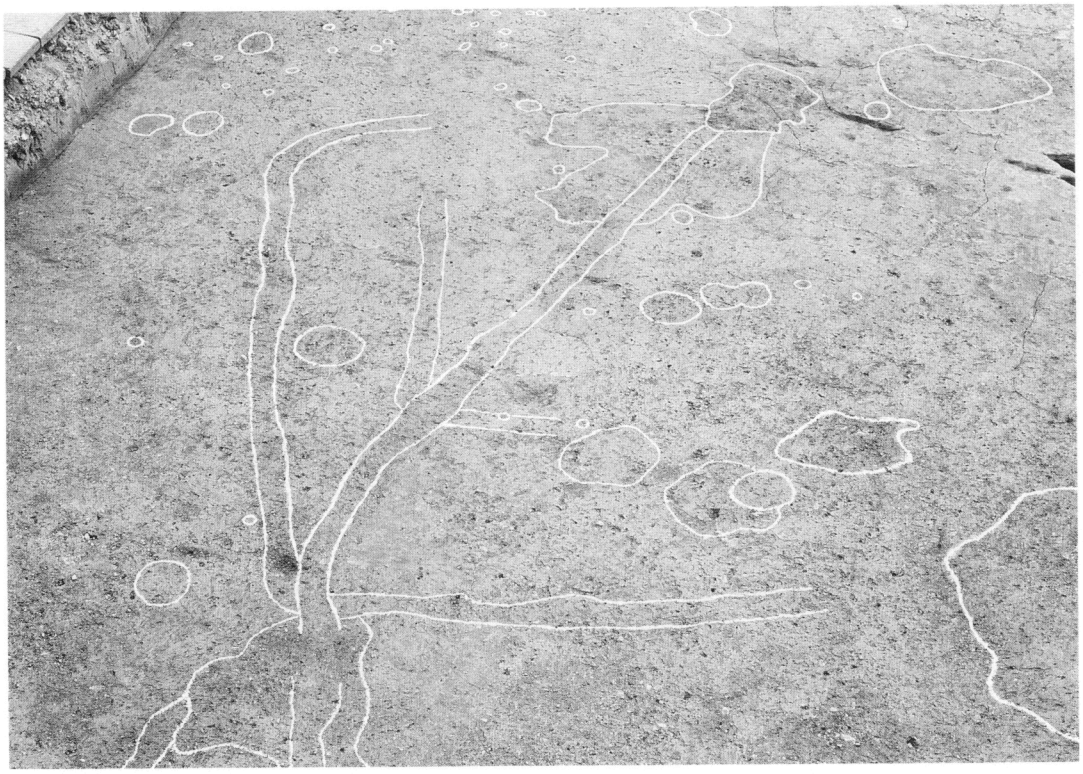


(3) Aトレンチ石斧出土状況(北から)

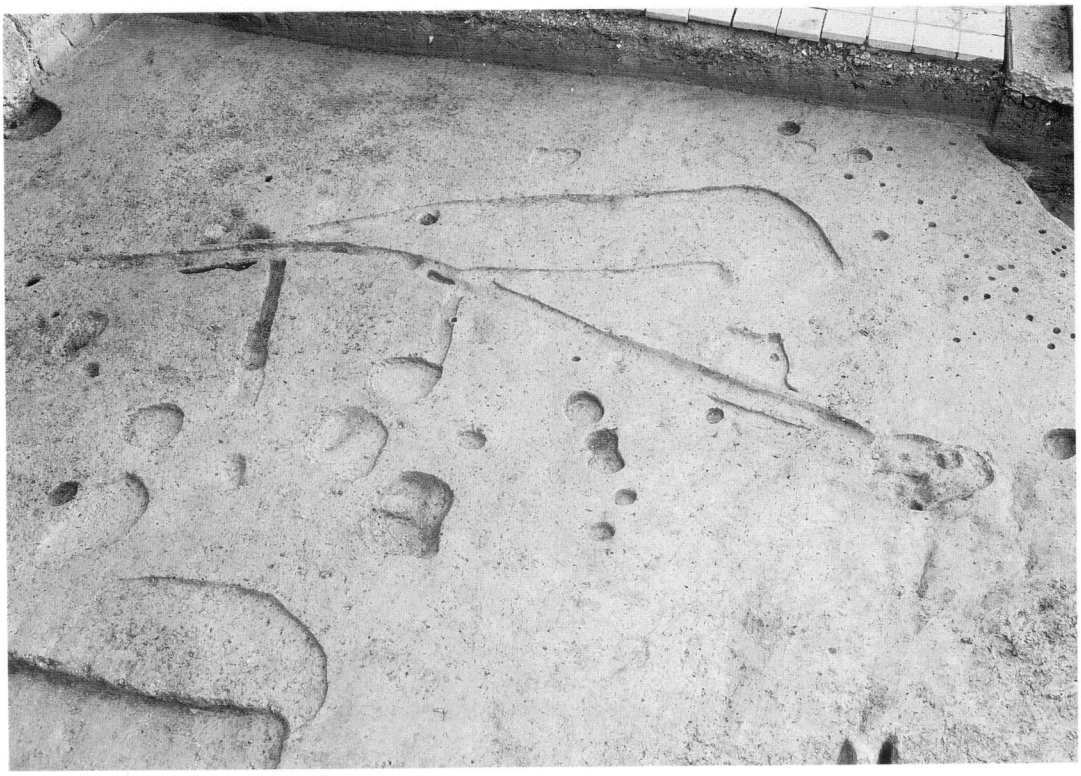
(4) 包含層石匙出土状況

(1) 第1～3号竪穴住居跡検出状況(北西から)

(2) 第1・3号竪穴住居跡(西から)

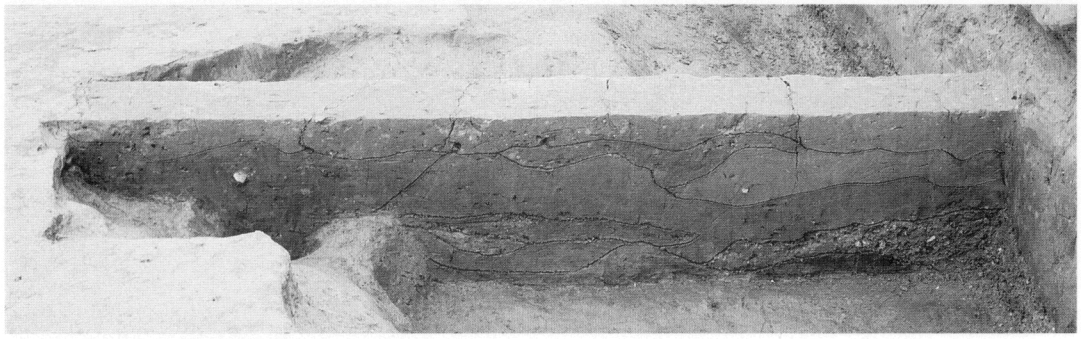


(1) 第4号竪穴住居跡検出状況(北から)



(2) 第4号竪穴住居跡(西から)

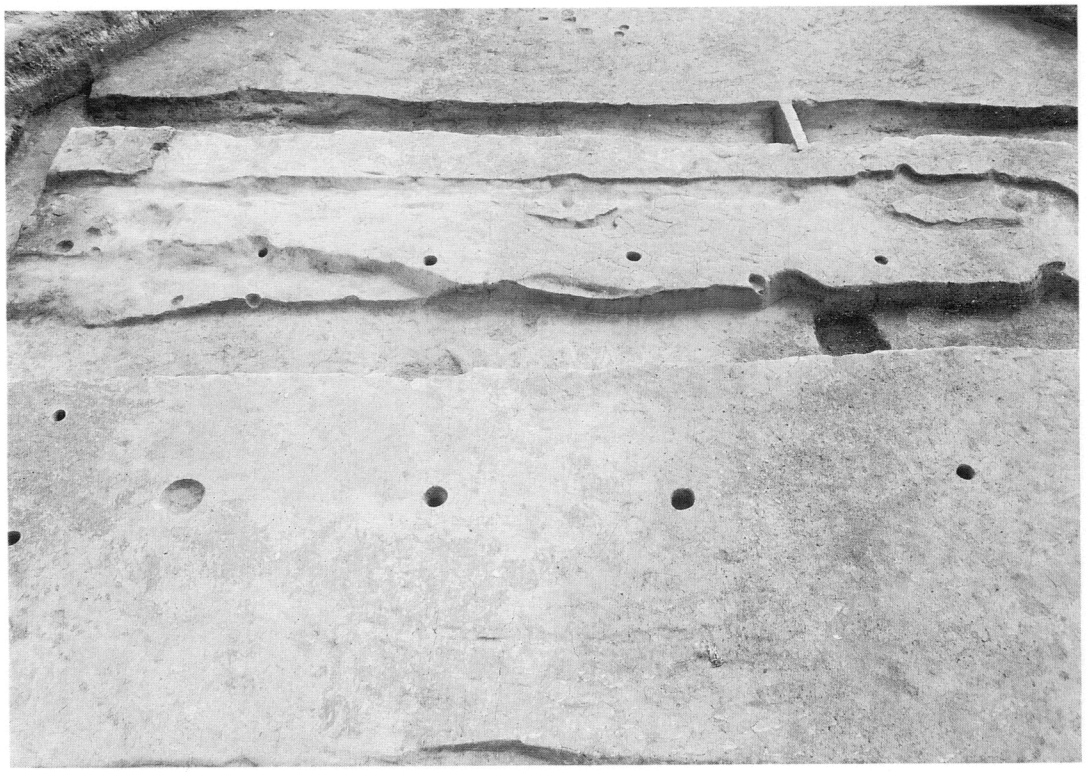
(1) 第1号河川跡土層断面(東から)



(2) 第2号河川跡土層断面(北から)

(3) 第1号河川跡石斧出土状況(南西から)

(4) 第2号河川跡石鏃出土状況(南から)

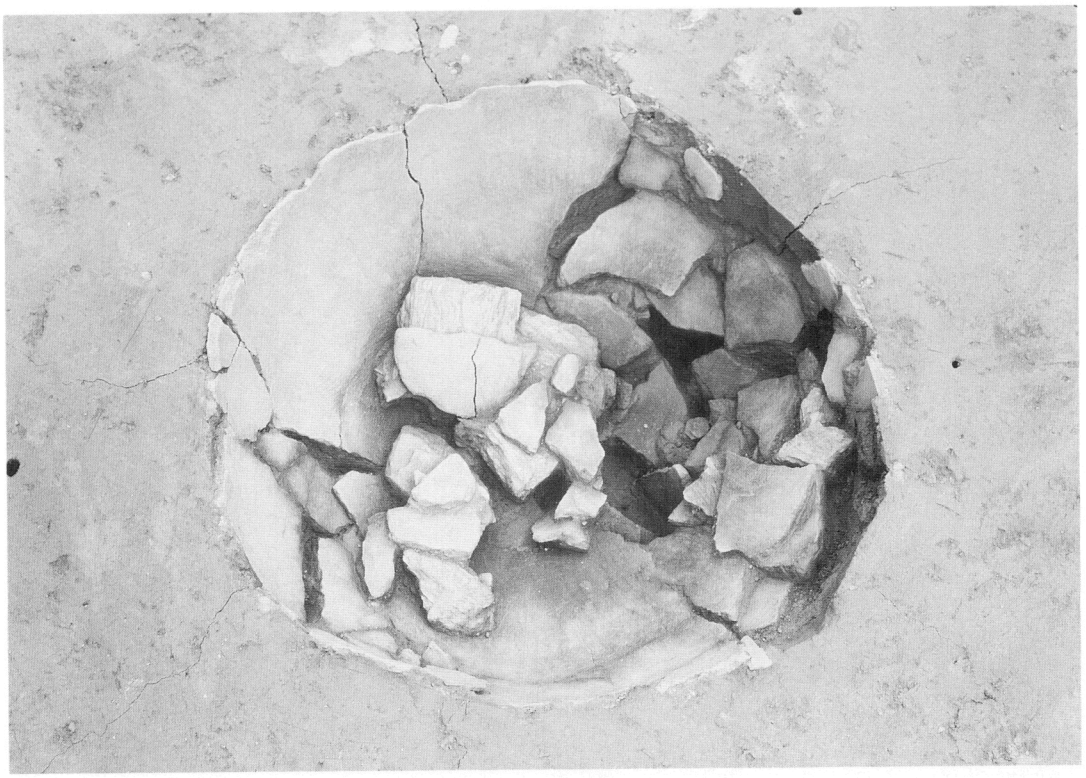


(1) 第1号掘立柱建物跡(北から)

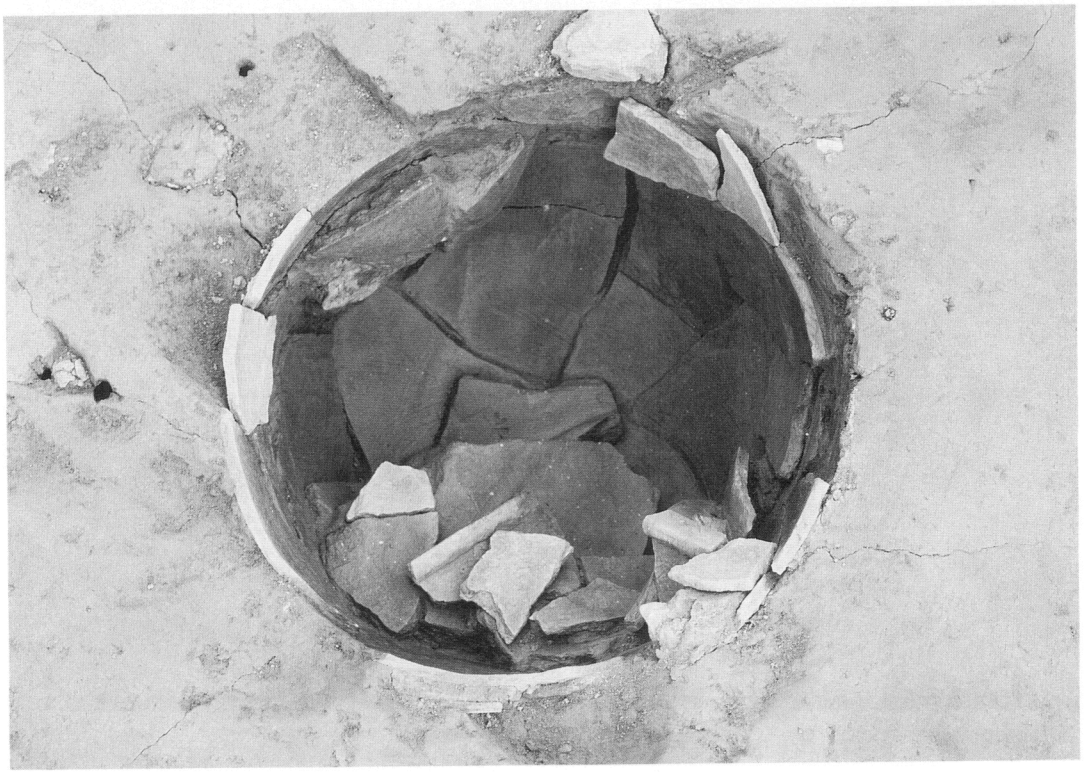
(2) 第2号掘立柱建物跡(西から)

(1) 第1号井戸(東から)

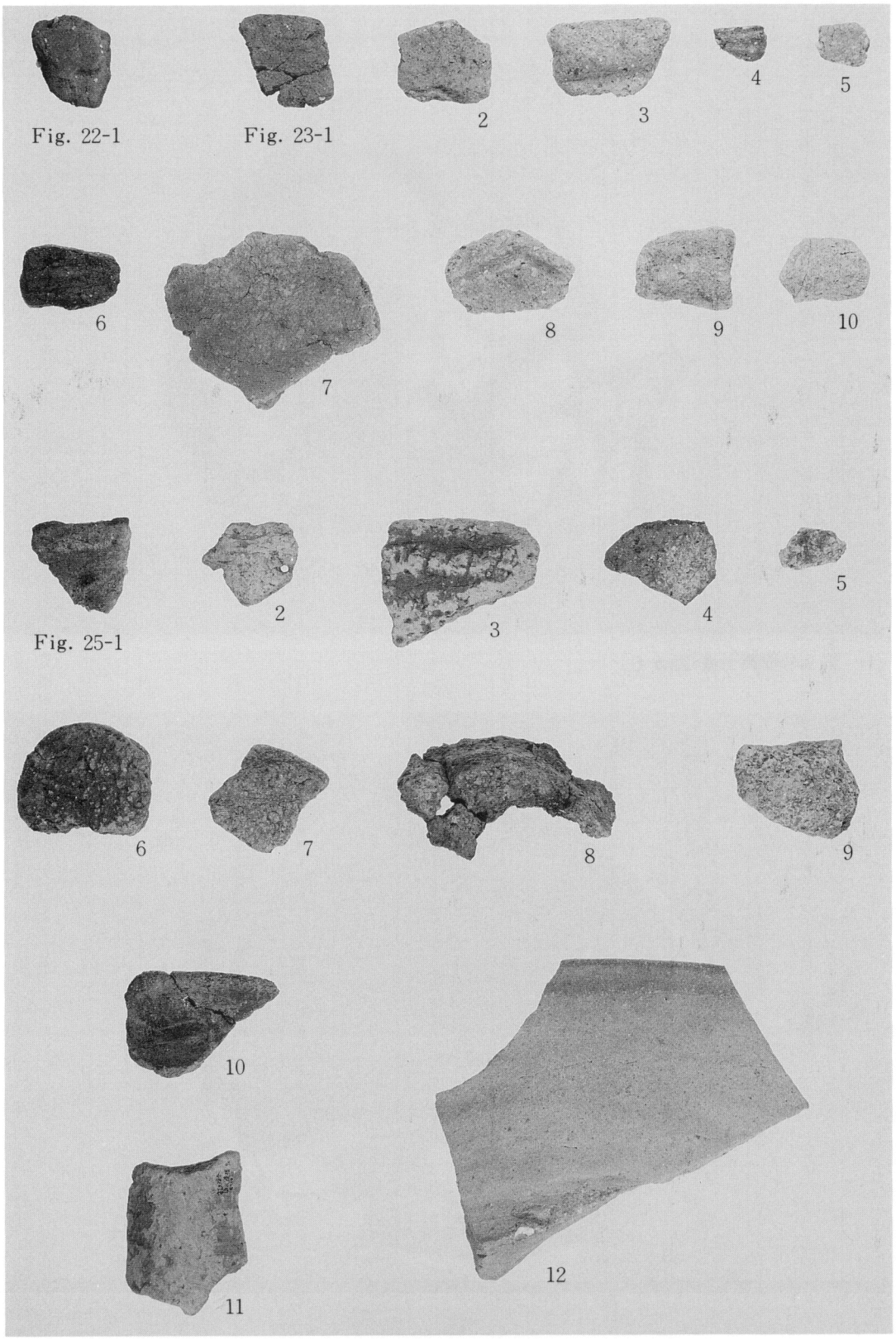
(2) 第2号井戸(東から)



(1) 第2号埋甕土壙(西から)



(2) 第3号埋甕土壙(西から)



出 土 遺 物 (1)

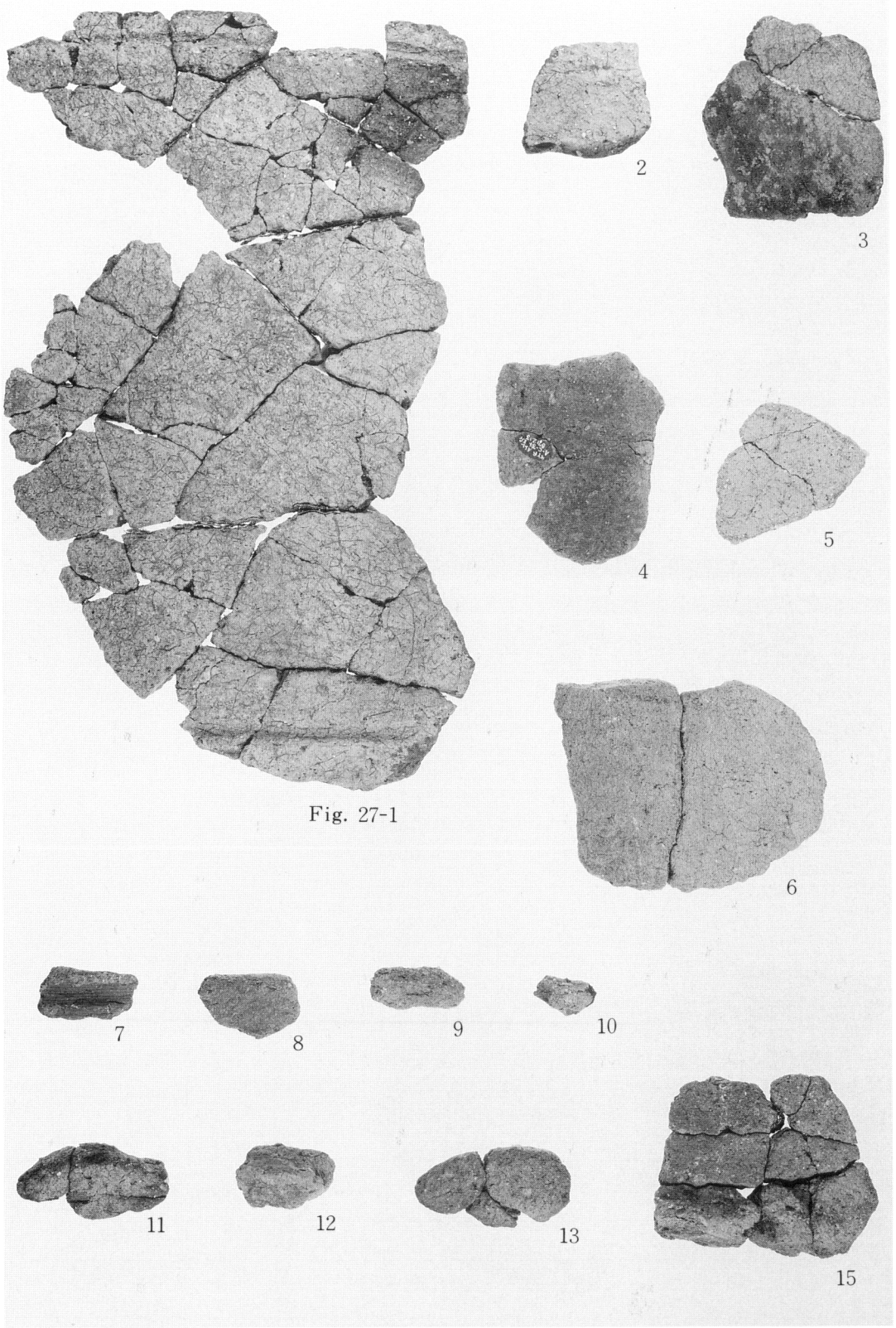
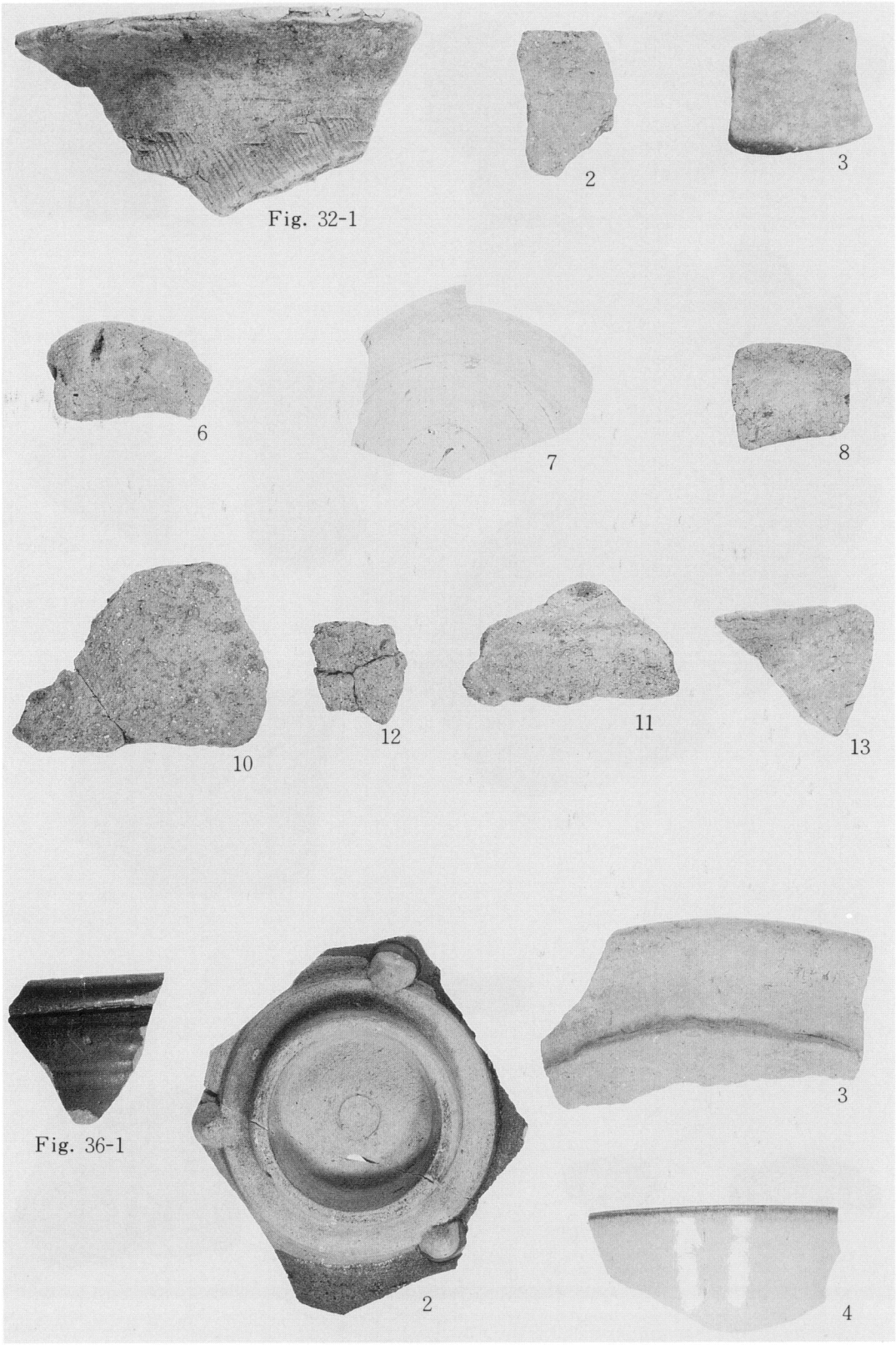
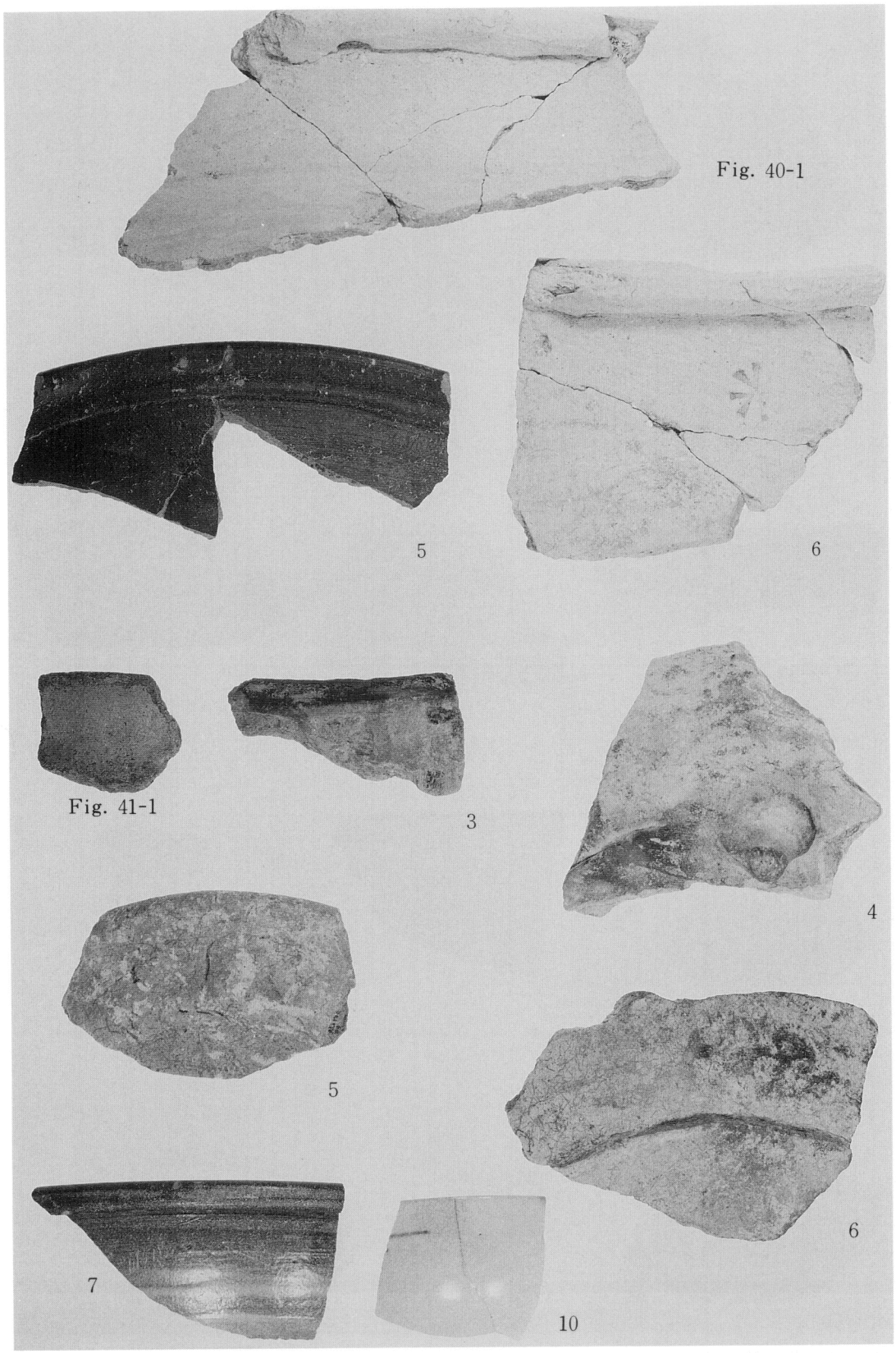


Fig. 27-1

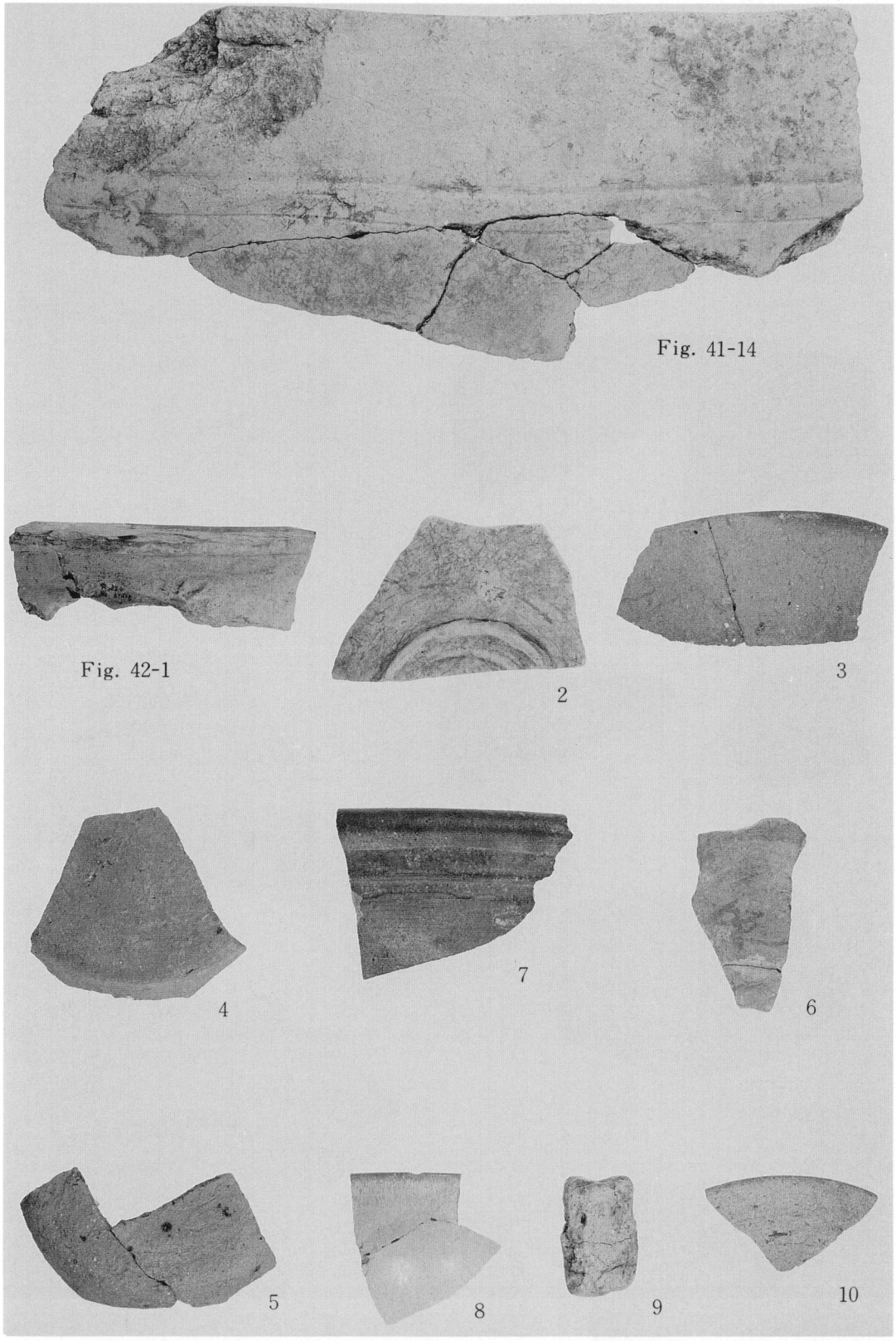
出 土 遺 物 (2)



出 土 遺 物 (3)



出 土 遺 物 (4)



出 土 遺 物 (5)

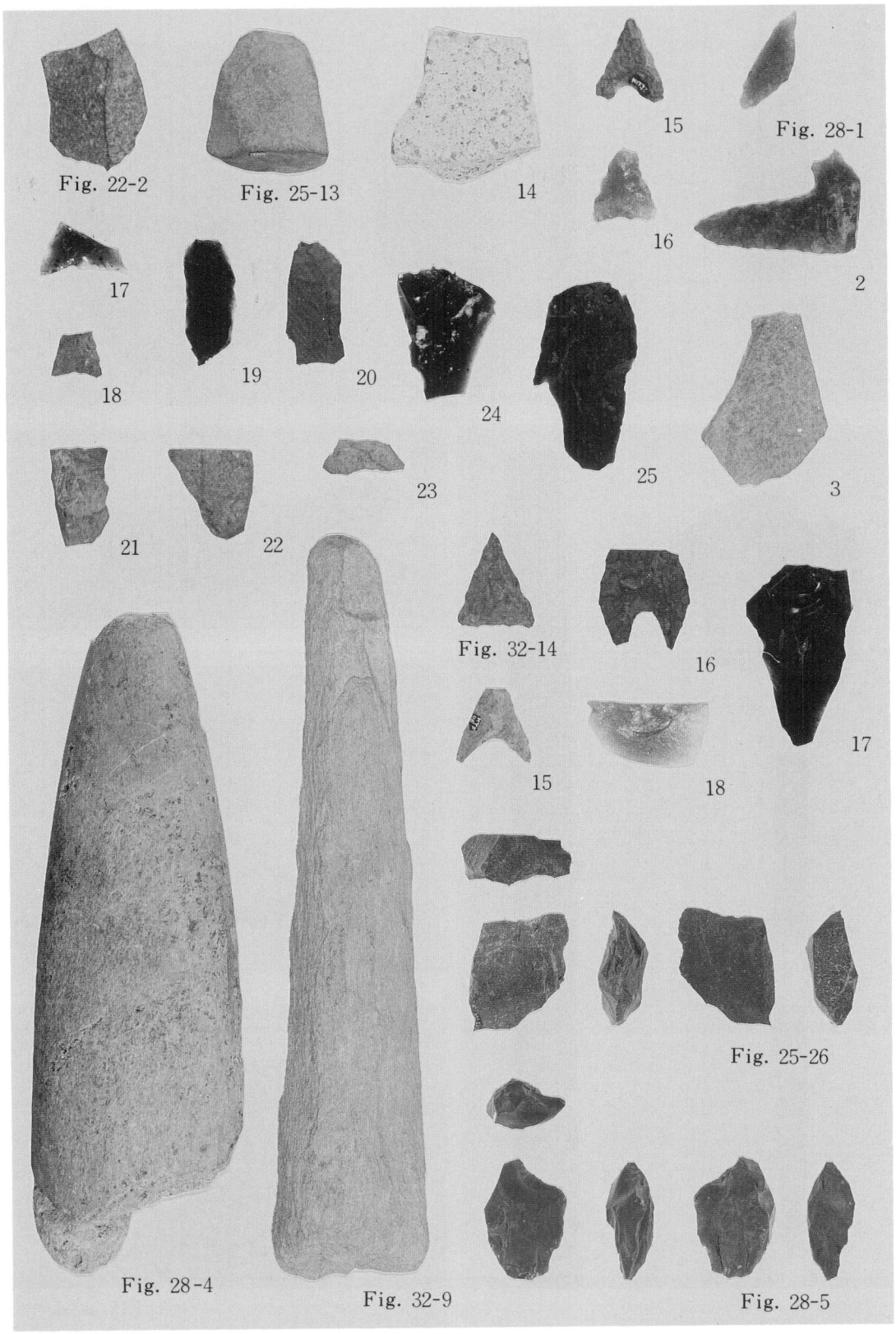
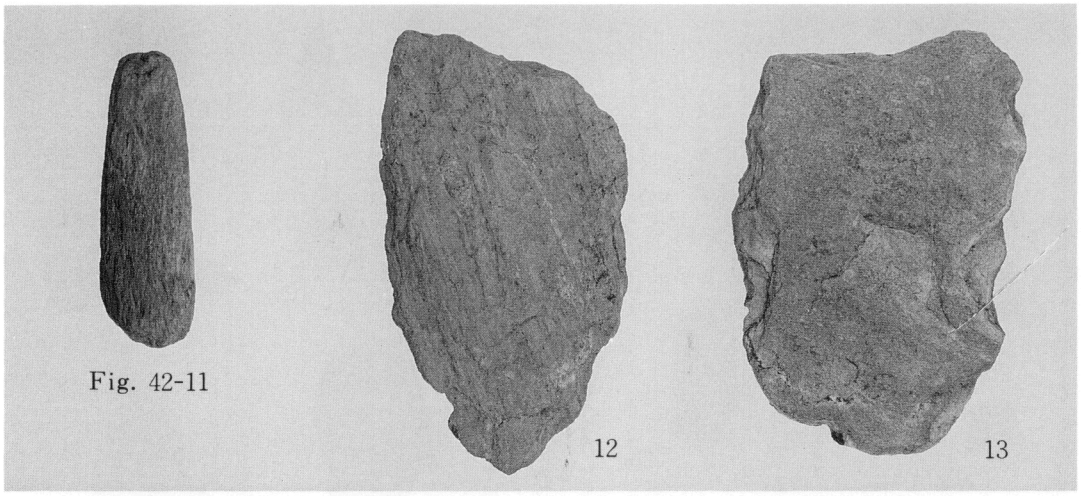
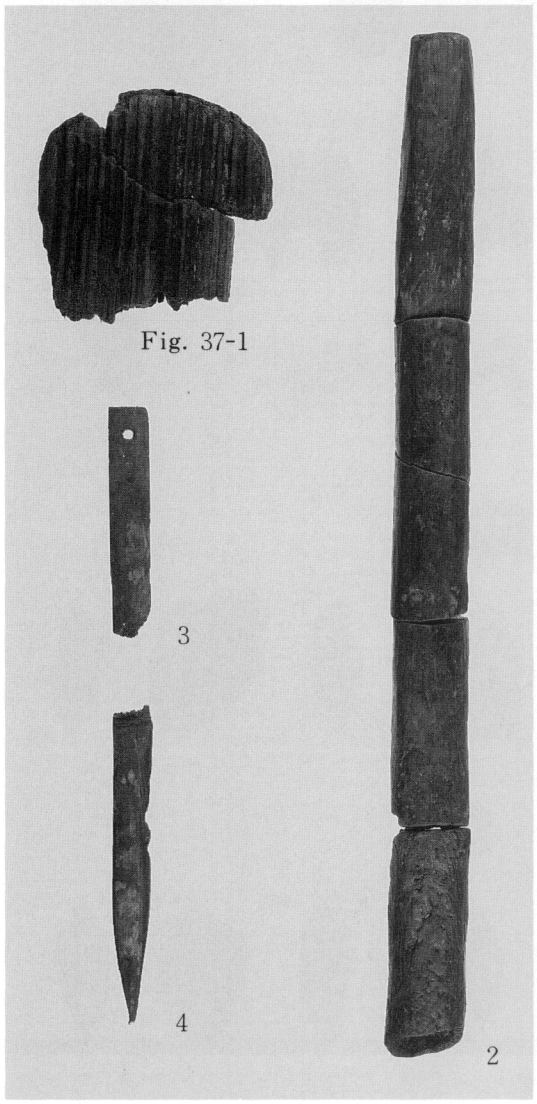
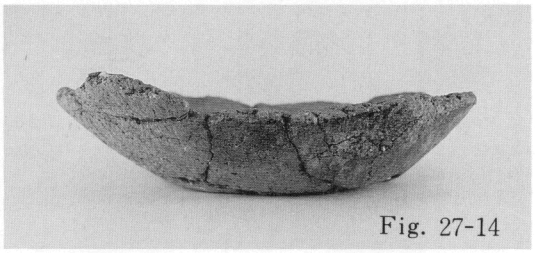


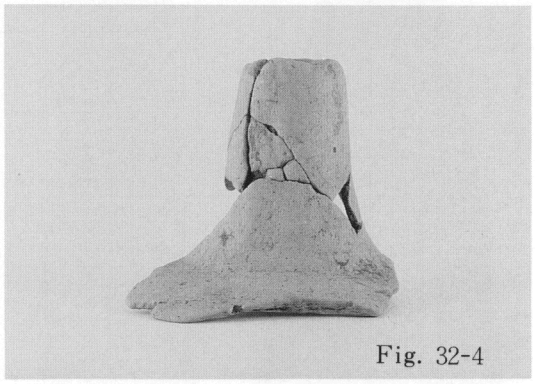
Fig. 22-2
Fig. 25-13
14
15
Fig. 28-1
16
2
17
18
19
20
24
25
3
23
21
22
Fig. 32-14
16
17
15
18
Fig. 25-26
Fig. 28-4
Fig. 32-9
Fig. 28-5

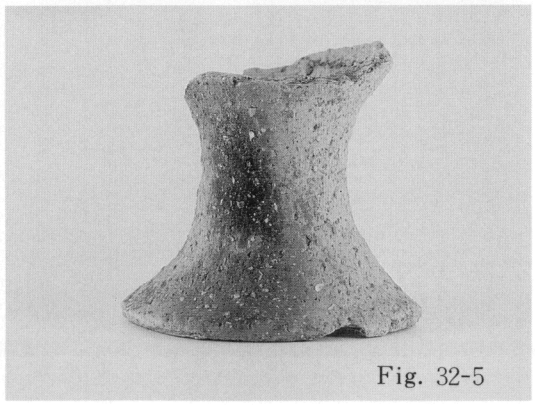
出 土 遺 物 (6)











出 土 遺 物 (7)

Fig. 36-5

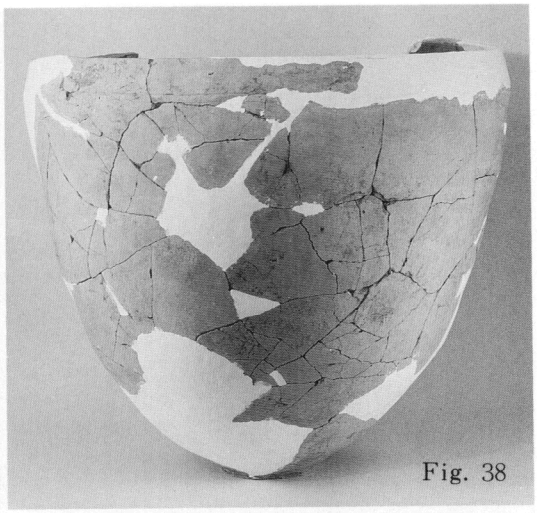


Fig. 38

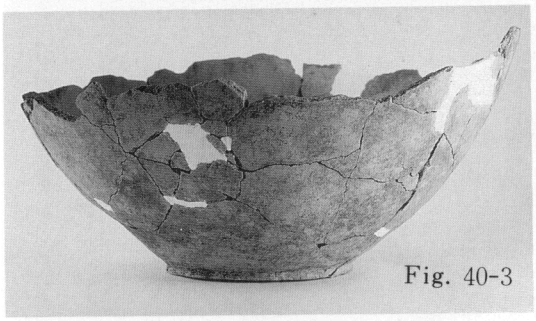


Fig. 40-3

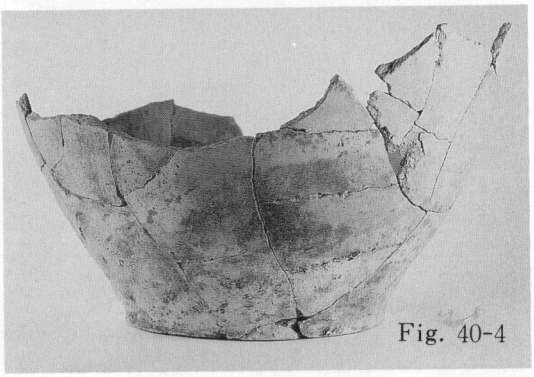


Fig. 40-4

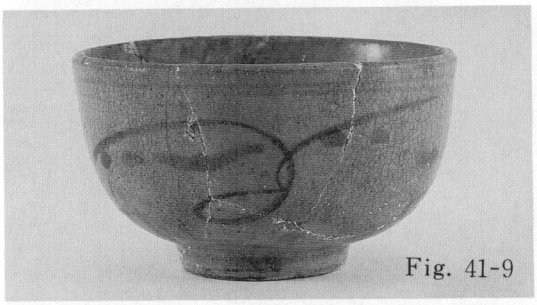


Fig. 41-9

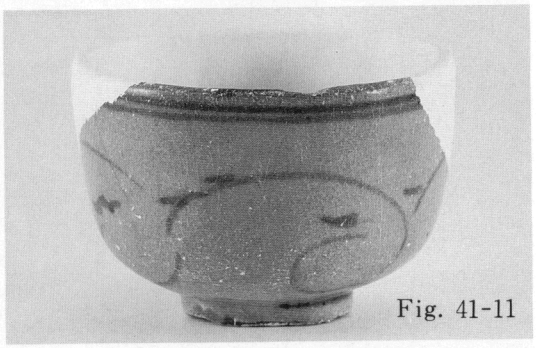
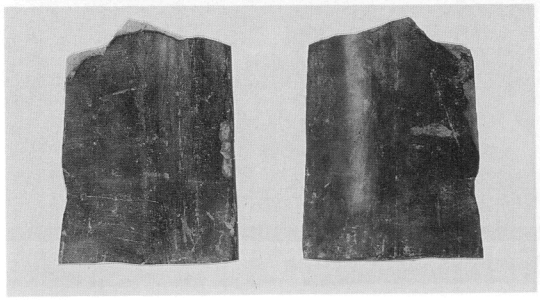


Fig. 41-11

Fig. 41-2



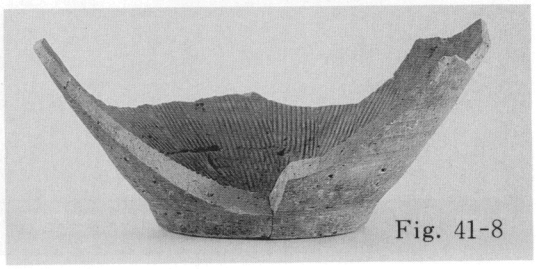


Fig. 41-8

出 土 遺 物 (8)

小串構内(医学部・医療技術短期大学部キャンパス)全景（南西から）

(1) Aトレンチ全景(西から)

(2) Bトレンチ全景(東から)

(1) Aトレンチ中央全景(西から)

(2) Aトレンチ北(東から)

(3) Aトレンチ北壁土層断面(南から)

(4) Bトレンチ東壁土層断面(西から)

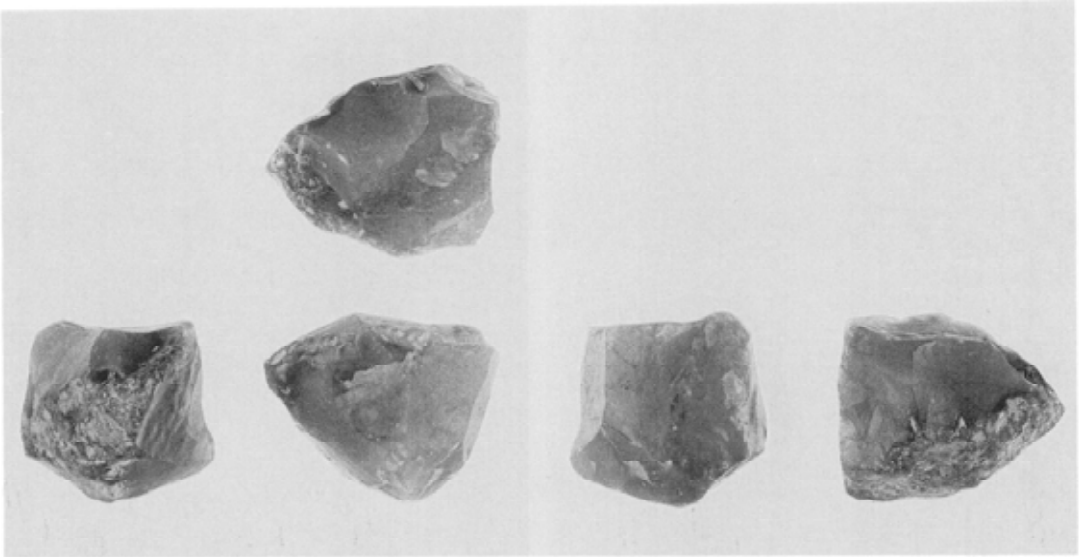
(1) Bトレンチ遺物出土状況全景(南から)

(2) Bトレンチ遺物出土状況(南から)

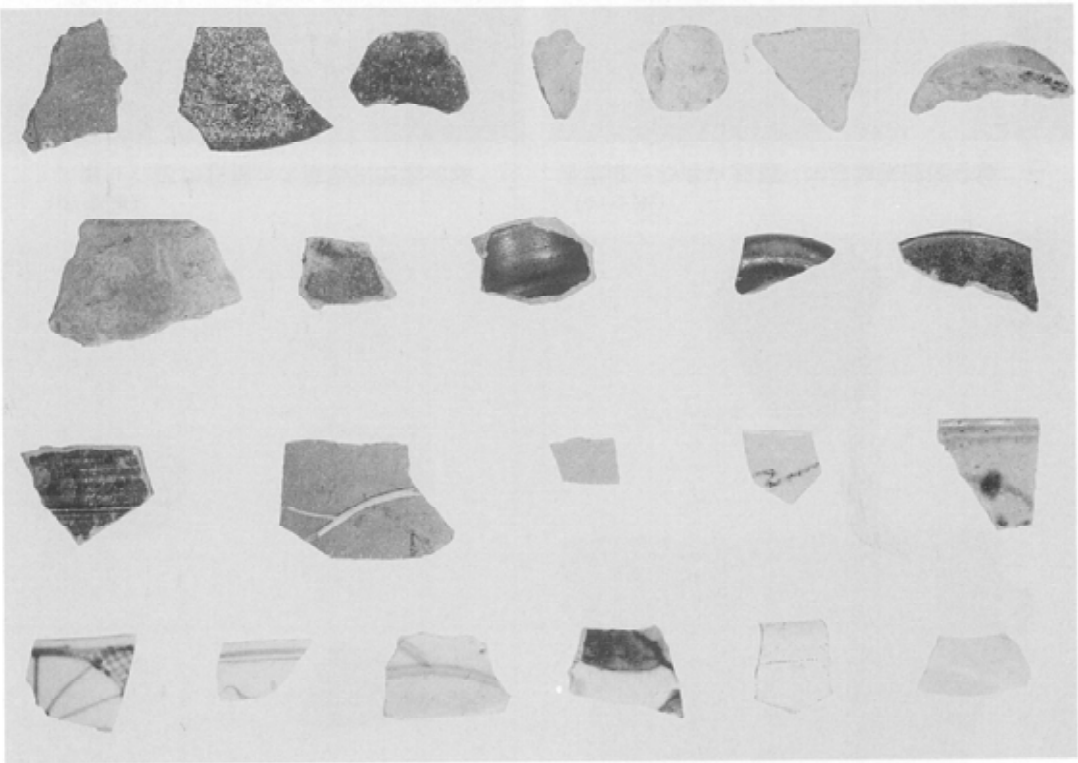
(3) Bトレンチ遺物出土状況(東から)

(1) 出土遺物(石器・表) Fig. 50・50

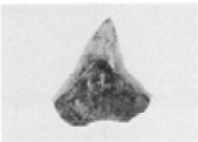
(2) 出土遺物(石器・裏)



(1) 出 土 遺 物(石器)



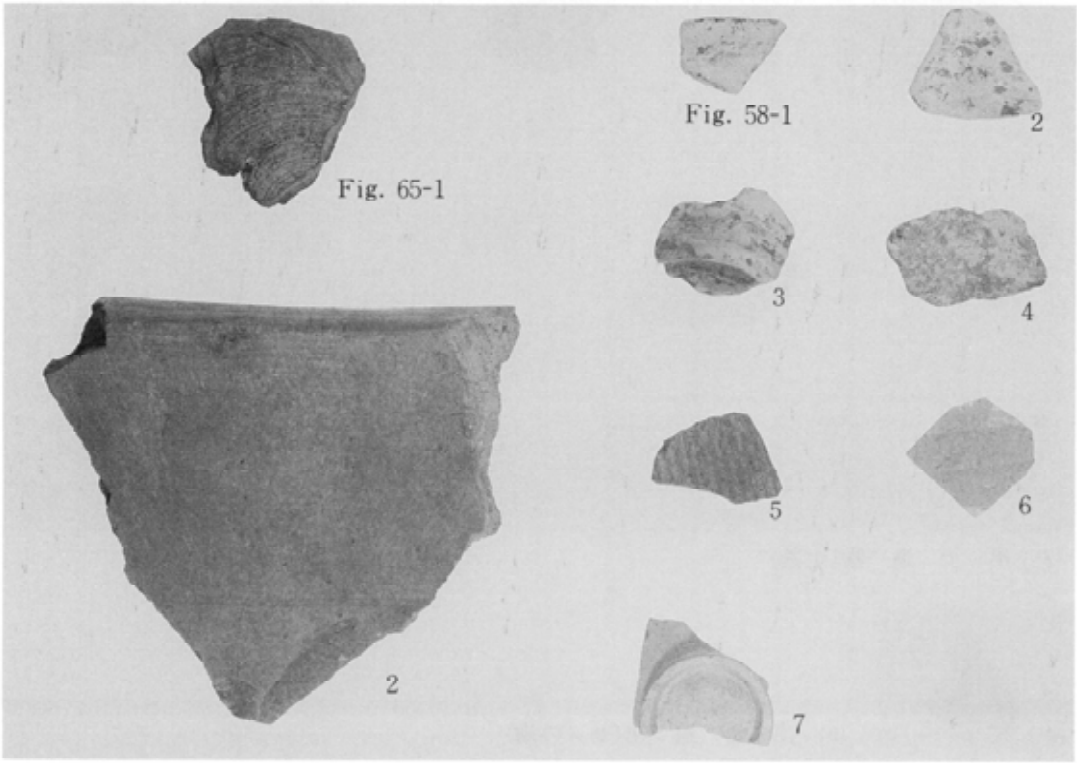
(2) 出 土 遺 物(土器)



(3) 出 土 遺 物(サメの歯)

(1) 農学部附属農場E7圃場A地点土層断面 (東から)

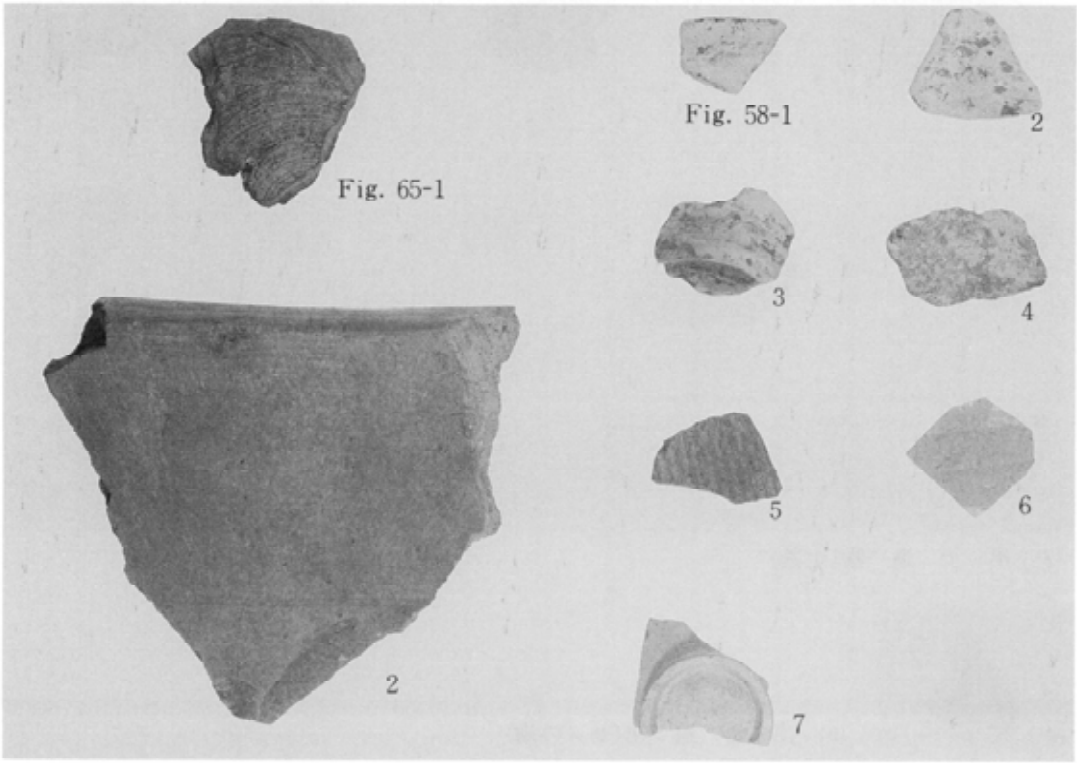
(2) 農学部附属農場E6圃場B地点土壙 (西から)



(3) 出 土 遺 物

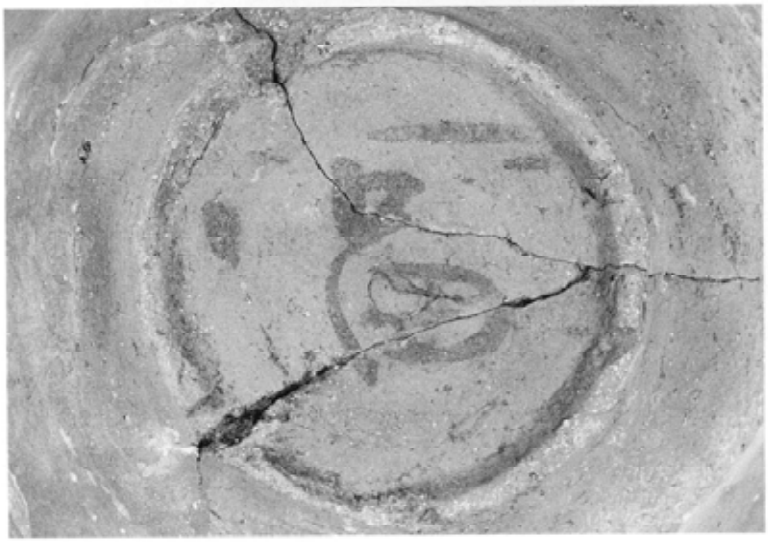
(1) 農学部附属農場E7圃場A地点土層断面 (東から)

(2) 農学部附属農場E6圃場B地点土壙 (西から)



(3) 出 土 遺 物

墨で文字を書きこんだうつわ(1)

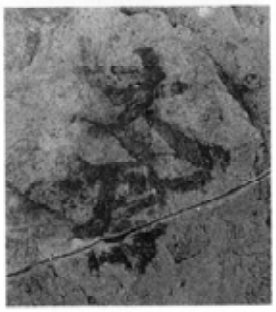


(1) 吉田遺跡の墨書土器「冨」

(2) 平城京跡「冨」
(奈良国立文化財研究所保管　掲載許可済)

(3) 郡家今城遺跡「冨」
(高槻市立埋蔵文化財調査センター保管)

(4) 谷内遺跡「冨」
(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター保管)



(5) 黒河尺目遺跡「大冨」
(富山県埋蔵文化財センター保管)

墨で文字を書きこんだうつわ(2)

(1) 周防国衙跡発見の墨書土器「国厨」(防府市教育委員会保管・未報告資料)

(2) 周防鋳銭司跡発見の墨書土器(山口市教育委員会保管)

山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ

平成元年３月

編集　山口大学埋蔵文化財資料館

発行　山口大学

〒753山口市大字吉田1677－１

印刷　桜プリント（企）

〒753山口市旭通り１－１－６

ARCHAEOLOGICAL RESEARCHES AND STUDIES AT YAMAGUCHI UNIVERSITY Vol. Ⅶ

CONTENTS

Chapter

Ⅰ General outline of the project on Yamaguchi University campus in 1987 ····· 1

Ⅱ Excavation in relation to the construction of the Practical Education Center at the Faculty of Education on the Yoshida campus ····· 5

Ⅲ Excavation in relation to the construction of the Lecture building at the Faculty of Liberal Arts on the Yoshida campus ·····23

Ⅳ Soudings in relation to the construction of the new ward at the University Hospital on the Kogushi campus ·····67

Ⅴ Examination under construction performed on the Yamaguchi University campus ·····85

Appendix Ⅰ

(1) Pollen analysis of the soil at the Yoshida site ·····97

(2) Plant seed analysis of the soil on the Yamaguchi University campus ····· 103

Appendix Ⅱ

Remains writing in ink ····· 107

The gist of researches and studies at Yamaguchi University

Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum ····· 124

Regulations of Yamaguchi University Archaeological Museum Management Committee ····· 125

Lists of Researches in Yamaguchi University ····· 127

Summary ····· 133

Published by

Yamaguchi University Archaeological Museum

Yamaguchi, 1988